

## 第9章 出土遺物

出土量は、瓦類（接合）10,553点（細片除）、うち男瓦1,727点、女瓦7,592点、その両者不明の細片1,077点、鏡瓦（接合後）6、字瓦（同前）12、土管様瓦（同前）10、有段男瓦1、道具瓦（接合後）35である。

古代の土器類は接合後39,596、うち土師器は33,168、須恵器は6,254、灰釉陶器98、三彩陶器72、同不明1、埴輪2、竈1であった。中世土・陶・磁器は接合後、軟質陶器8、中国青磁7、焼締陶器15であった。

このほか瓦塔7、塑像を含むスサ入粘土塊122点（約1.4kg）。金属関連では鉄製遺物（接合後）166、鉄滓72（椀形鉢津主体で流動滓はなし、12.4kg）、羽口22、炉壁6であった。銅製遺物は（接合後）3であった。以上、約51,000が当整理の遺物総量である。

出土遺物の扱いは、遺物の取り上げ認定が不確実であったため、各遺構において接合量の多い遺物を優先して図示した。廃棄時点にその遺構と直結したか否を調査記録（床面出土とか）と照合した。その結果は、個体番号に記号で示した。○は直結を、△は直結の認定を行ない難い場合に、記号なしは照合できなかった個体を示す。また接合関係を知る目的と、3種の調査区座標名称（名称の用い方で取り上げ時点の段階がわかる）および取り上げ時点の判断（床面とか埋没土とか）を明らかにする目的で、土器類、瓦類に付されている注記をそのまま記入した。そのことにより整理上認定された○・△印の意味がより確実となり、推奨できる場合とできない場合とが明確化することになる。

図版・写真図示の方法は、図版を優先して作成した。図版は遺構単位、遺物集中地点単位で纏め、第263図までがそれである。第264図以降は、遺跡の性格を示唆したり、種として稀少性の高い個体、遺物項で扱わないと挿入できる個所のない個体を集め第323図までに掲げた。遺物写真は遺構順を優先させたが瓦類は占める面積、重量が莫大であり、種別に分類し、一種3点以下に絞り、写真図版45～53まで一括して掲げた。各小間の隅に種名称を記入してある。稀少種の掲載は写真図版54から末尾の同62まであり、その順序配列は、写真図版中扉頁に順の説明を行なっているので併せて利用されたい。

各図版中に多くの補注を加えた。本来であれば、それに見合う本文頁を設けて記述するのが正しい志向であるが、報告書の作成は、編者の構成能力に直結するが、2年間の整理期間と現体制をもってすれば、復元遺物数約1,200点、頁数約350～400頁が作成しうる範囲であった。さらに多量の瓦類が加わることは集落遺跡整理の1.5倍の日数が必要で、さらに掘立柱建物跡の建物觀を構成する多大な労力などを考慮すると、細かな所見説明、解説を行うほどの余裕は当初から考え難かった。そのため整理過程で知ったり、判明した内容について、頁の余白に補注を多用した。

遺物図の表現法は当団歴史部会が作成した『歴史時代の遺物仕様書』に準拠して作成した。中軸の実線は直実測個体。1点鎖線は回転実測を示す。口縁部の定規線は、陶・磁器、須恵器に用い、同手描・形決線の手描は土師器、瓦類、埴輪、溶范型、坩埚・取瓶、石類、塑像、土管様遺物、瓦塔などである。表現は線画と点描画に分けられ、前者は本書中の大半の個体について、後者は立体表現を必要とする場合に用いた。線の意味は、第30・31図を用いて説明すると、18・21・22の土師器の場合、体部外面に細線の間が途切れている線は、横撫端部を示し、坏類の体部下半中位にゴミのような不整形黒点は成形時の型膚痕（木津博明「土師器坏の成形技法について」『上野国分寺・尼寺中間地城 IV』（当団）1990による型作を推定して）を示す。底面の1点鎖線は箇削痕を、もしくは指であっても削りの意図が考えられる場合に用いた。矢印は静止の状態での削りの方向である。須恵器の場合、輪轂部は横撫と同じ用法で、1点鎖線は削りで、矢印は回転状態の方向を指す。破線は、かくれ線もしくは推定線である。ケバは削り端部を示す。

次に第243図から第32図に図示した遺物種について触れたい。

**鎧瓦**—鎧瓦文様として十三宝塚鎧 A型と B型の2種を設定した。後者は男瓦裏面に付着する圧痕で鎧瓦ではない。同1A型の文様は目無し紋として製作した可能性もあるが不明確。両者は笠懸窓跡群製である。鎧瓦と男瓦の比率は6:1,727=1:287であるので、軒先を一般的な葺き方でなく、特殊に使用か。

**宇瓦**—文様として十三宝塚字1型・2型の2種を設定した。前者9点、後者2点の存在である。前者は笠懸窓跡群製で後者は胎土中に軽石と見える鉱物を含むため、陶土基盤の窯業生産域ではなく、洪積世粘土か同時代の二次堆積粘土を用いた生産域の製品で、他の熨斗瓦1類とも共通する。想定としては伊勢崎市権現山丘陵周辺か埼玉県北部の粘土が考えられ、第266図の意匠は群馬県的でない。

**男・女瓦**—両者は接合後で1,727:7,592=1:4.3である。この割合は過去の累積（拙稿「田端庵寺の推定」『田端遺跡』（当団）1988など）からすると過大ではない。男瓦は二枚作による個体と一枚作りの両者が存在するが、数値化には至らなかった。女瓦は接合の結果、四辺を成す素文の個体は1点もなく、大半について格子叩瓦の格子のない個所もしくは繩叩のよばない部分であると推定された。格子叩として数えあげられた接合前の実数は1,945点であり、その總てについて格子叩板の格子目を同範確認し、第273~279図を作成し、37種を抽出した。さらに埼玉県製とも考えられる須恵器大甕（第296図25）に付着していた格子叩女瓦片を1種加えた。繩目瓦は男瓦には、土管様の小形男瓦（第283図）2類の擦り消された下地に認められたのと、第272図の熨斗瓦2類にあり、絹状をなす。繩叩は第280図のように女瓦のみに単純叩を施し、破片数で271点が認められた。瓦類の大半は笠懸窓跡群製であるが、第281図中の刷毛目女瓦2点、第272図の熨斗瓦35点、第283図2類の9点が異質な胎土であった。瓦供給上における旧材再利用は格子叩のうち文字不明3型は、本遺跡瓦中にも改範前の状態から改範後の状態まで存在する。このほか格子叩「反」型・同文字不明1型・格子叩3型なども使用消耗に深化が認められ、瓦供給が短期一括納入とは思われない結果が得られた。また、出土個体量の少ない叩種は、十三宝塚遺跡に主体供給するための製作であったとは考え難く、旧材再利用について、漠としているが、行なわれたものと考えたい。文字瓦は佐位郡郷名叩銘佐位「佐・佐位・左」、雀部「雀」、美（茂）呂「茂」、測名「測」、反治「反？」を除くと第281図の「十」のみであり、笠懸窓跡群製に多い「三」「三」などが見当らない。その盛行期を少し過ぎたからであろう。

**塑像**—第282図1が如来像であれば小さいながら主尊像を、菩薩像であれば脇侍仏が、2・3を主尊像と考えれば如来像が想定され、その場合、螺髪は1体2種と、2体2種の組合せがありうる。主尊であれば、等身大以上と考えられ、1とは大きさが不揃いとなるため、2・3を主尊とする外、別に小三尊仏などが存在したとも考えられる。1・4・5などにスサを混入させる。1の耳たぶに珪化発泡を認めるため火中の塑像。

**熨斗瓦**・**土管様製品**—第272・283図に示した。各々1・2類に技法上、胎土上から区分を行なった。機能は両種とも決まった訳ではなく、特殊用法があったのかもしれない。繩絡状叩手法はこの種に限られる。

**瓦塔**—出土遺物の総てを実見した限りにおいて7点であった。群馬県内出土の瓦塔の中で、最も細かな表現手法の一例で、胎土は笠懸窓跡群製と考られ、各破片とも共通のため一個体であっても不思議ではない。形状は入母屋造の屋蓋部であり、壁面に相当する軸部は1点もなく、塔を示唆する個体もないため、壁部を木製とする扇子状の構造であったとも思える。6・7の裏面には薄くであるが赤色顔料が付着していたため成分の化学分析を試みたが、測定器能力と付着量が少ないと明確ではなかった。

**須恵器**—8世紀頃東毛地域の中で須恵器生産の主体を占めていた笠懸窓跡群製品はこのほか少なく、特殊な酸化・内面研磨・黒色処理の個体（第288図7など）も微弱であった。替って多いのは隣接県とした第295図の一群であり、9世紀には目立つて存在する。隣接県とは栃木県側も含めて考えたいのであるが、現状か

## 第5篇 検出された遺構と遺物（古代）

ら考えれば、埼玉県北部の末野窯跡製（第294図）が入り、第295図11・16のように体部上半を肥厚させた8・9世紀代の壺、13~15のように口縁部端を肥厚させた9世紀の壺などの特色は北武藏に類例が多いことから多くが埼玉県製と考えられる。栃木県側と比較するならば三瀬窯跡群中の北山、八幡窯跡などから出土した8世紀代の須恵器類は、底面の高台削出しなど群馬県側と共に通技法があり、器形状は笠懸窯跡群に近似の壺、壺が存在し、胎土は笠懸窯跡群製より、はるかにち密で一見して差異がある。今回の遺物中、そうした特徴は目立った形では認められず、栃木県製品は存在していても少ないと判断された。北武藏の大量産地である南北企窯跡群は、関東地方全体からみても一大生産地であり、十三宝塚遺跡出土の隣接県製品の主体供給元が同窯跡群にあるのではと思われるかもしれないが、彼地の一部には胎土中に海綿の化石という髪毛の何分の一かの細さの白色針状物質を含む一群があるが、その例は見当らなかった。それに替って髪毛よりも太く、5mm以下の長さの白色物質を含む胎土の一群が少量存在（遺物観察参照）し、それは近年、南北企窯跡群と末野窯跡群との間の地帯に類例があるという、そのため供給上の主体半径は南北企窯跡群まで達していないと推測される。県外からの須恵器は内容を把握するために抽出した2,078点のうち72%を占む。

土師器一「和名抄」によると佐位郡内に郷名として「反治」が見え、現在の伊勢崎市波志江にそれがあてられている。反治が仮りに土師に通るのであれば、土師器生産の係わりを考慮する必要がある。今回それを意識しながら整理したのであるが、この一群がそれを示すというような抽出は行なえなかった。傾向としては両毛製品よりも重みがあった。また藤岡市地域の生産と考えられる一群については当初より抽出を行ない136（接合後）を数え、土師器総量の0.41%があった。搬入の土師器数は、隣接県製と思える少数例は存在したが、西国からの搬入品は見当らなかった。

灰釉陶器一第300図が原始灰釉であるか否かは、明確な定義づけが先に必要で、別問題と考えたい。施釉と認められるのは光ヶ丘1・大原2窯など10世紀の製品で、集落の終末に近い頃と関連する。

三彩陶器一白土を化粧挿した唐三彩は認められず、白彩は明瞭でなかった。二彩と三彩の区分は褐釉が認められれば、三彩陶器として推定できるが綠彩しか確認できなかった場合も多く、それも褐釉の掛けられなかった個所の可能性もあるため、各々の彩色数にこだわって統てを三彩陶器にした訳ではない。当然二彩を含む可能性を有している。組合せは最少限の状態であるが第305図に示した。法具としてのまとまりが考えられる。

金銅押出仏・銅製品一三尊・五尊仏の脇侍が考えられ、厨子などに使用か。第306図に大きさの推定によれば18cm以上が推定された。保存処理していない状態でも金色は良く、鍍金に厚さを感じる。

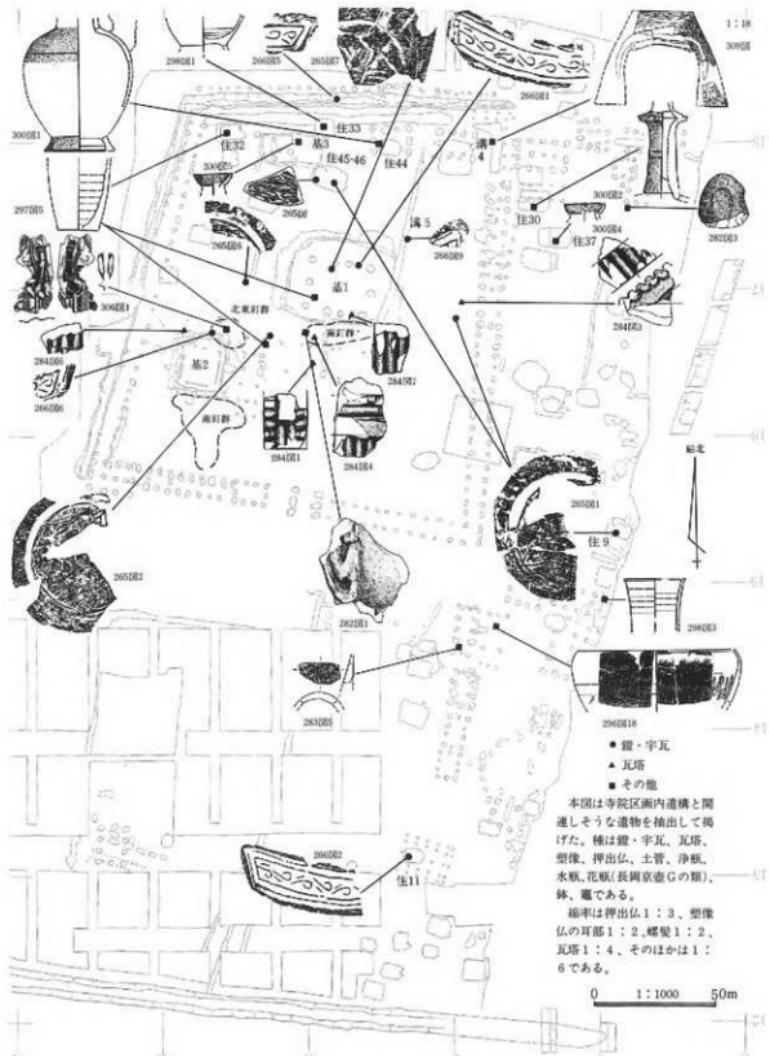
硯類一製品種硯の存在はなく、いずれも転用硯で、笠懸窯跡群製の須恵器が多用されている点は興味深い。比較的焼成が甘く、墨を磨る際に、適度な硬度が必要なためか、地元の焼物として賞て用いたのかは、赤色顔料付着の1~4を見ると笠懸製品は1点しかなく、適度な硬度が必要であったのかもしれない。赤色顔料は化学分析の結果、水銀反応が得られ、第6篇を参照されたい。

竈一土師質であり、地方形を呈し、釜でなく長臺と支脚を使っての用法が考えられた。

墨書き土器・漆・油煙付着土器一墨書き土器は第312・313図に集成を行なった。漆付着土器は工房としての示唆であり、17ライン以北の住居からの出土が多い。油煙付着は多くの住居跡で認められる。

暗文・計畫土器一西毛地城製の暗文土器はなく、東毛製品と考えられた。第316図5は焼成後の計畫で隣接県の製品。西毛製の暗文土器は伊勢崎市からの出土例があるので、当遺跡では使用が薄かったらしい。

金属器・金属製品生産関連一第317~323図にそれを示したが、溶浴型の存在が印象的で、釘類はかすがいが2点しかなく少ない。基壇1・2号周辺から釘類は多出し、残材整理場所が示唆された。



上図中で、住居跡から出土した個体は、三彩陶器片などと同様に、稀少である。美しいから、または必要性によって運び込まれたと考えられる。原位置かそれに近いと考えられるのは、基壇1号の柱穴内の出土と、基壇1号南町群の領域中もしくは近接の遺物、基壇2号の南町群・北東町群領域(図中破線)の中か近接の遺物である。そのため基壇1号に塑像仏耳部、瓦塔、基壇2号に押出仏が関連と考えうる。

第264図 寺跡関連遺物の分布



十三宝塚鏡1A型は、文様の起伏が浅く、1B型の改良前の状態で、まだ内区隔の墨界線が細い状態にある。この抽象文様5分の意匠は、上野国分寺式燈籠形式に属し、同類中でも文様、肉書きが偏平で、最終段階に近いことがわかる。そのため、8世紀中期でも終りに近い頃と考えられる。しかし、1A型の文様は、折射器を起こしても、やっと見える程度で、それも既減りによる浅い文様化とも思えないため、文様なしの意図も考える必要あり。

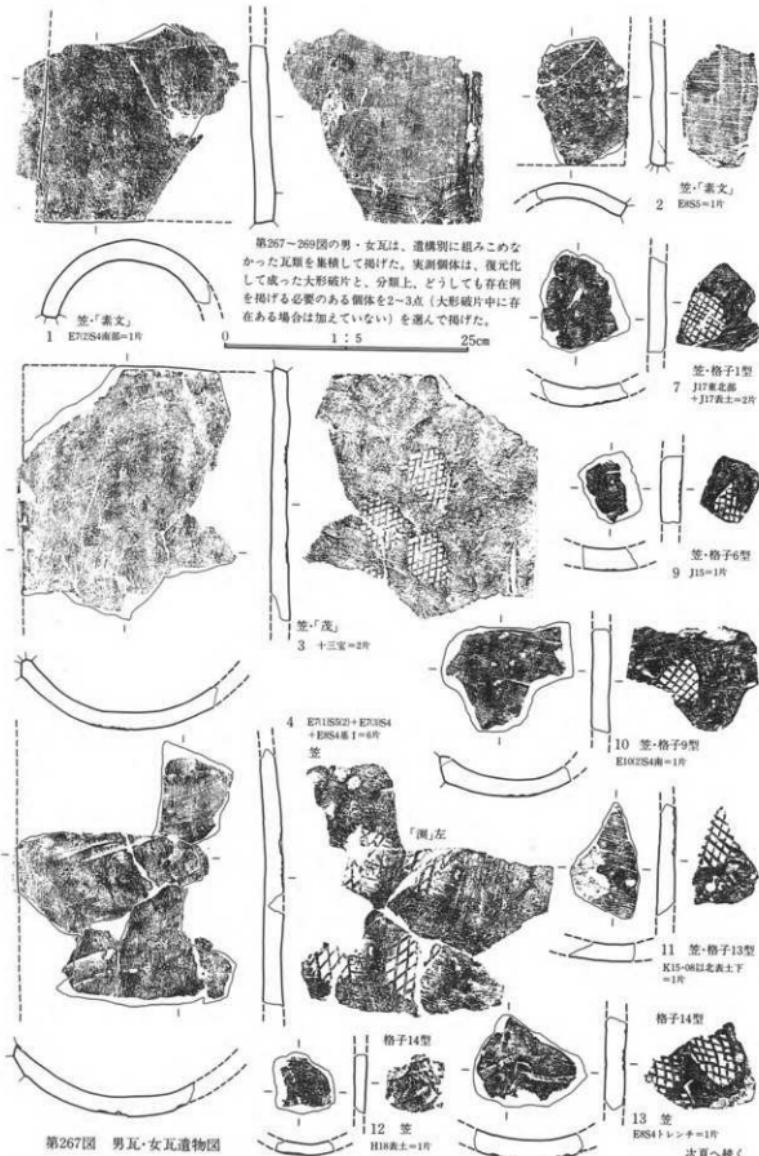
十三宝塚鏡1B型は、しっかりした文様で、1A型の改良型で、上野国分寺に同范底出例がある。同尼寺創建は、僧寺の創建よりも、わずか遅れる。本例は、8世紀後半で、短期間の製作。

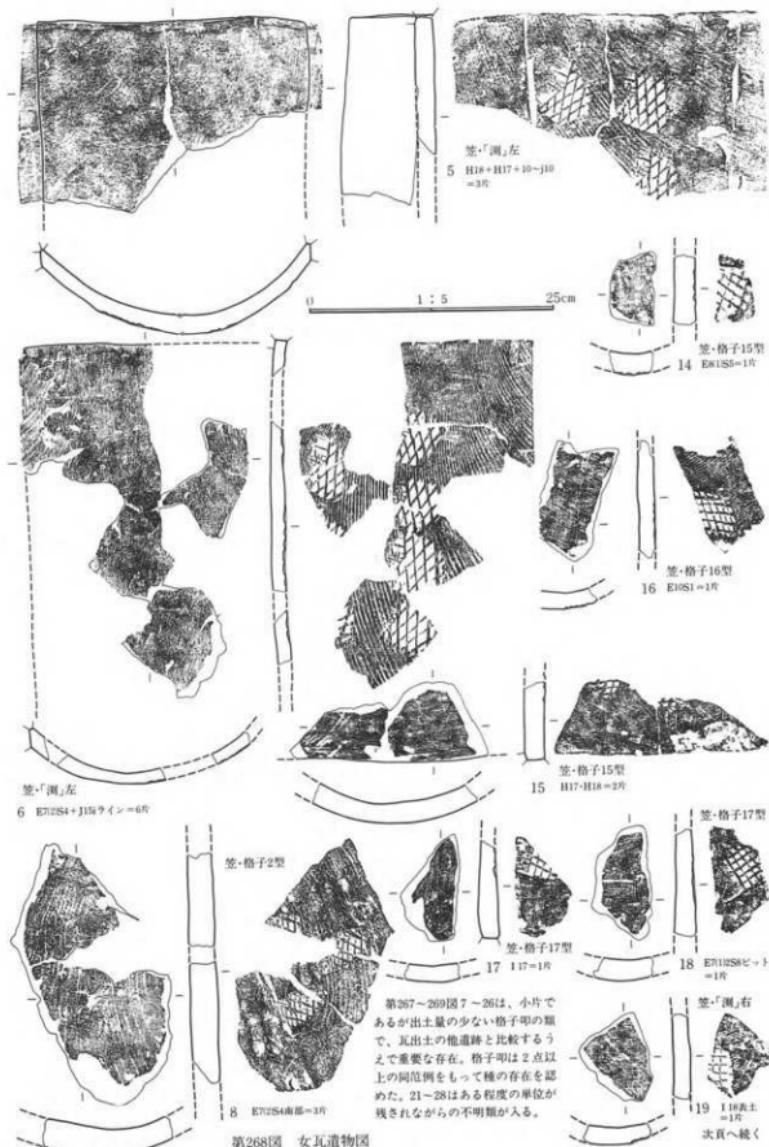
第265図 鏡瓦と関連遺物図(全個体集成)



第266図 宇瓦遺物図(全個体集成)

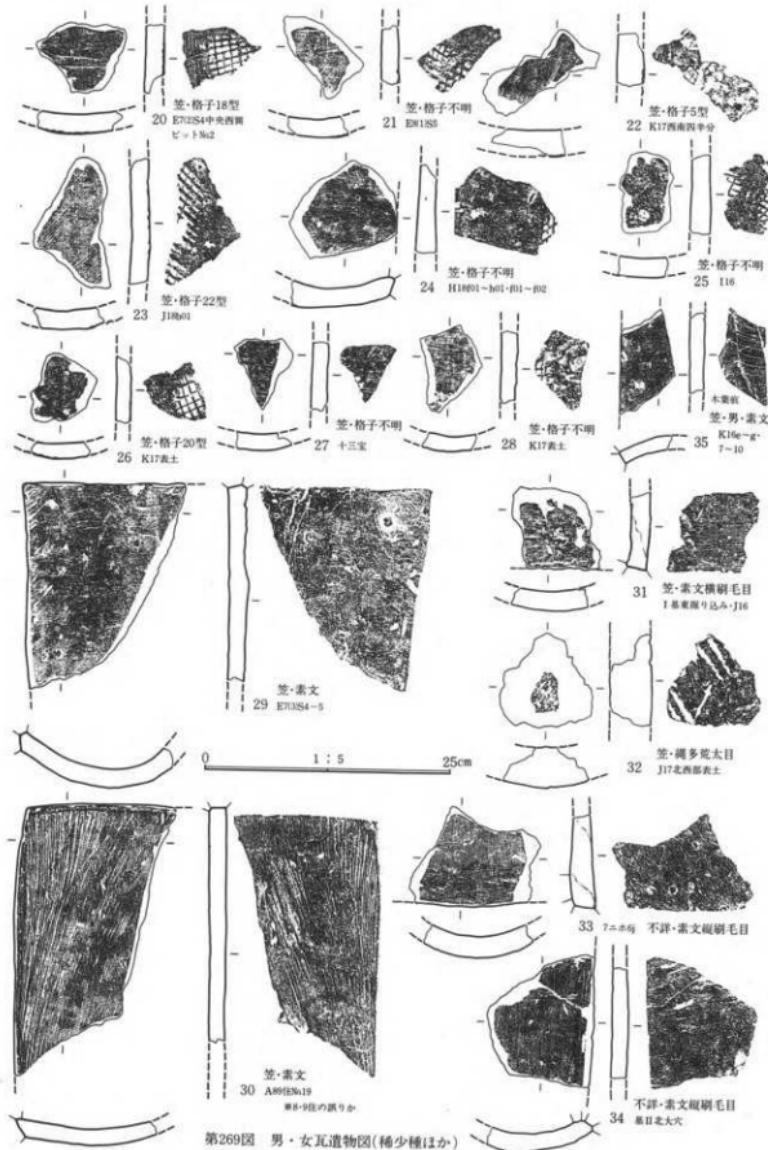
第5篇 検出された遺構と遺物（古代）

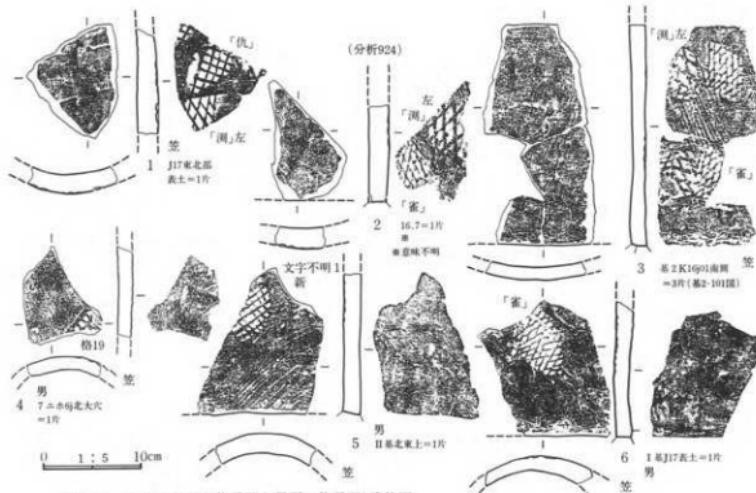




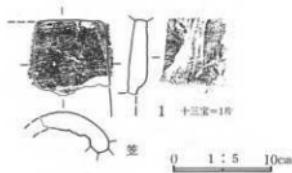
第268図 女瓦遺物図

第5篇 検出された遺構と遺物（古代）





第270図 特殊瓦(2種の格子印と男瓦に格子印)遺物図



第271図 特殊瓦(有段男瓦)遺物図



第272図 特殊瓦(道具瓦と共通胎土の瓦類)遺物図

第5篇 検出された遺構と遺物（古代）

遺構	% 総 片数 後 片数	標式例と観察摘要		遺構 % 総 片数 後 片数	標式例と観察摘要	
		1. 標式例	2. 合成像		3. 新例	4. 新例
十三宝塚格子叩「佐位」左型	60片(4.1%)・後46片(3.8%)					
十三宝塚格子叩「仇」型	61片(4.8%)・後68片(4.7%)					
十三宝塚格子叩「溝」型	31片(1.8%)・後23片(1.8%)					
十三宝塚格子叩「雀」型	10片(0.7%)・後79片(1.5%)					

第273図 格子叩種別一覧図

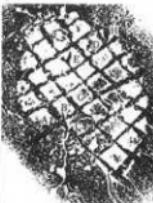
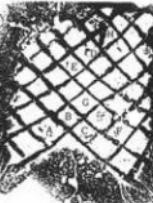
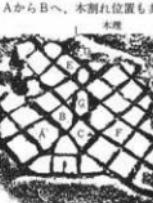
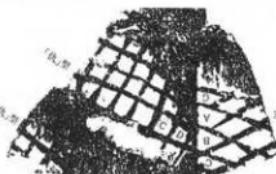
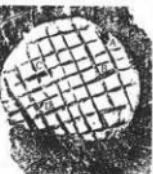
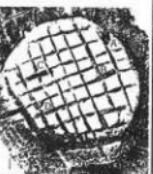
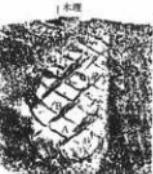
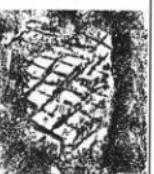
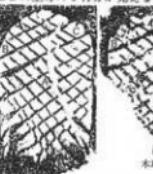
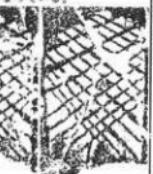
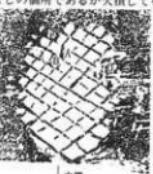
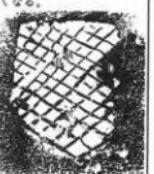
1 : 2

		標式例と観察摘要			
範種	%				
十三宝塚格子叩「反」か型	總88片 16.3%・後加片 3.9%	既説は「概報1」では「反」と解釈され、反治郷との関連が推定されている。	2. 合成像(古例)	1. 標式例(新例)	3. 新例
十三宝塚格子叩「人」か型	總11片 1.1%・後加片 1.8%	文字とするならば「人」、「入」左文字が考えられる。	2. 合成像(古例)	1. 標式例(土壤6-4)	3. 叩具推定図
十三宝塚格子叩文字不明1型	總89片 3.8%・後加片 4.8%	まず格子叩の範囲の分類と数量把握の意義は、生産地と消費地との関係(時間を含めて)、消費地相互の関係、瓦葺きの瓦室灘などを知ろうとする時、確実な形で捉えられるところに意義があり、将に、考古学的方法の根拠と言えるし、先史の勞によって証されるところでもある。	1. 標式例・古例(瓦番号8640)	2. 古例合成像	3. 標式例・新例(瓦番号3670)
十三宝塚格子叩文字不明2型	總89片 4.6%・後加片 3.1%	凡例、例説としては、格子叩は第272~278回まで6頁分を作成し、38型種を明らかにした。瓦总数1422点(総片除)のうち、女・男の種別が可能な個体は、女瓦826、男瓦1945点もあり、不明分が91点存在した。女瓦は墨文6006、格子1945、圓目272点があった。このうち素文の6006点を結合した結果、瓦の四面を成す個体は1例もない割りに、四面の破片が多くかった(素文の瓦の接合上の特徴は御部闕か、小口かに偏して接合され、それは各実測図を参照されたい)。そのため素文の瓦の大半は格子叩か圓印のよんてない個所の破片を見なされ、結果的に大半が格子叩瓦と類推された。233頁へ。	4. 新例合成像		

第274図 格子叩種別一覧図

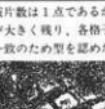
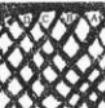
1:2

第5篇 検出された遺構と遺物（古代）

範 囲	%	標式例と観察摘要		範 囲	%	標式例と観察摘要		
		標式例	観察摘要			標式例	観察摘要	
十三宝塚格子叩文字不明3型	總26片 (12.1% ・接19片 (10.4%)	1. A(古范)標式例(基2-9) 	2. A(古范)合成像 	3. B(改范)標式例(1462) 	4. B(改范)合成像 	文字不明3 Bの既説は「概報Ⅱ」に、不確実とし、「日?」とある。卯の天地方向は90°異なり「日」ではない。古范直しはAからBへ、本割れ位置も共通し、Bに古范の面影は薄い。		
十三宝塚格子叩文字2種	5点 (接3片 (0.2% )	1. 「仇」「測」左型(270回1) 	2. 「測」「雀」型(左270回2, 右270回3, 同一側体か) 	分析924			卯文字2種は3点存在し、卯の2種は共存関係が示唆され、重要である。他の文字なし格子に2種は認められず、2種の文字入り卯の打込みは、製作時における卯板の急な持ち換えであり、意識の変遷の結果と考えられる(3種の崩字叩きが同時元に存在したことは、卯板1枚の表・裏に文字入格子目を刻んだ可能性は少ない)。文字入りは、それだけ意識されたのであろう。	
十三宝塚格子叩1型	總22片 (1.1% ・接22片 (1.5%)	1. 標式例(基2-163回) 	2. 合成像(新・古不間) 	十三宝塚格子叩2型	總28片 (1.4% ・接21片 (1.5%)	1. 標式例(基2-135) 	2. 合成像(新・古不間) 	存在量は多くない、円形と「概報Ⅱ」では類似、特徴的な形である。Aは左上に木割れ、目なし。Dも左上に木割れ。B・Cは下方の格子目が太くなり、他例も共通。
十三宝塚格子叩3型	總26片 (1.1% ・接19片 (1.3%)	1. 標式例(古例) 	2. 標式例(中間例) 	十三宝塚格子叩4型	總89片 (4.6% ・接66片 (4.6%)	1. 標式例(瓦番号3937) 	2. 合成像(新・古不間) 	古例から新例まで3点を掲げた。Aは木割れが発達し、目立つようになり、Bは小形の崩形となつてゆく。C中には木割れが上方にあり、格子目単位が小さくなる。3の新例ではBの上方の1行分が見えなくなっている。

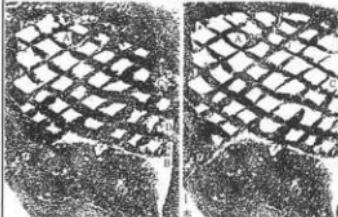
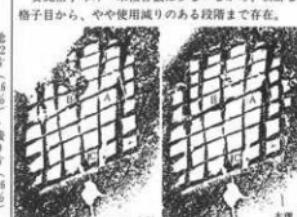
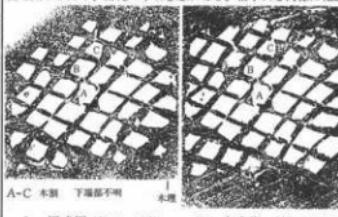
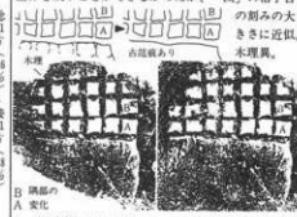
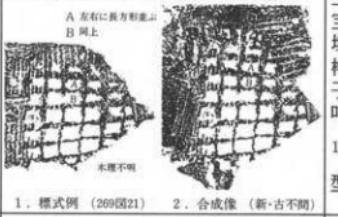
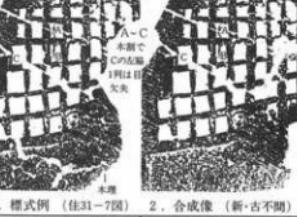
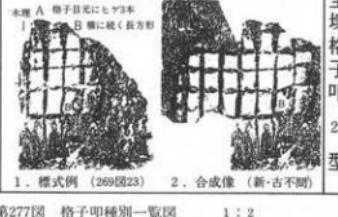
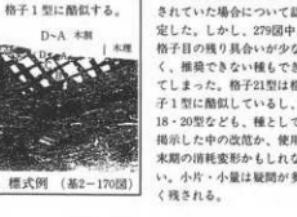
第275図 格子叩種別一覧図

1 : 2

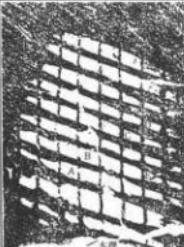
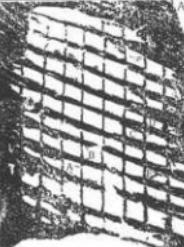
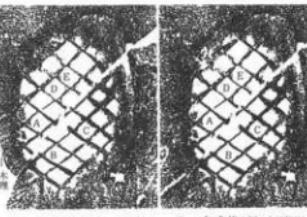
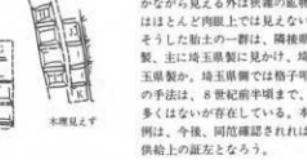
危種	%	標式例と観察摘要	危種	%	標式例と観察摘要	危種	%	標式例と観察摘要
十三宝塚格子叩型	5	 C 破部 A・B 小字目 D 木理  2. 合成像(新・古不問)	十三宝塚格子叩型	6	 A 木理 B 合成 C 木理 D 木理  1. 標式例(基1-50図)	十三宝塚格子叩型	7	 A 木理 B 木理 C 木理 D 木理  1. 標式例(基西北-5図)
十三宝塚格子叩型	8	 A・B・C 木理 D 木理 E 木理 F 木理  1. 標式例(基1-94図) 2. 合成像(新・古不問)	十三宝塚格子叩型	9	 A 木理 B 木理 C 木理 D 木理  1. 標式例(267図-10) 2. 合成像(新・古不問)	十三宝塚格子叩型	11	 A 木理 B 木理 C 木理 D 木理  1. 標式例(基2-57図) 2. 合成像(新・古不問)
十三宝塚格子叩型	10	 A 木理 B 木理 C 木理 D 木理  1. 標式例(基2-7図) 2. 合成像(新・古不問)	十三宝塚格子叩型	11	 A 木理 B 木理 C 木理 D 木理  1. 標式例(基2-57図) 2. 合成像(新・古不問)	十三宝塚格子叩型	13	 A 木理 B 木理 C 木理 D 木理  1. 標式例(基1-125図) 2. 合成像(新・古不問)
十三宝塚格子叩型	12	 A・C 木理 B 木理  1. 標式例(基1-52図) 2. 合成像(新・古不問)	十三宝塚格子叩型	13	 A 木理 B 木理 C 木理 D 木理  1. 標式例(基1-125図) 2. 合成像(新・古不問)			

第276図 格子叩種別一覧図

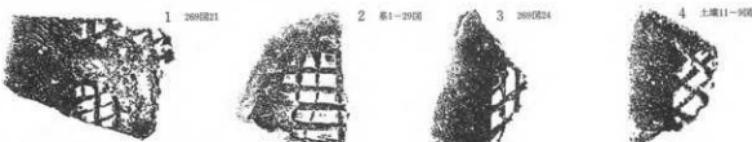
第5篇 検出された遺構と遺物(古代)

危種	%	標式例と観察摘要	危種	%	標式例と観察摘要
十三宝塚格子叩 型	21片 (1.1%) ・接合片 (1.1%)	使用減りのある叩であるが、消耗の中頃の頃か。A-D 	十三宝塚格子叩 型	12片 (0.6%) ・接合9片 (0.6%)	瓦格子叩片、未接合数は少ないながら、新鮮な格子目から、やや使用減りのある段階まで存在。 
十三宝塚格子叩 型	14片 (0.6%) ・接合8片 (0.6%)	1. 標式例 (基2-147回) 2. 合成像 (新・古不問) 	十三宝塚格子叩 型	11片 (0.5%) ・接合11片 (0.5%)	瓦格子叩片、未接合数は12点で小数。叩板は新鮮ではなく使用減りがあり、消耗の中頃を思わせる。格子14と同様に幅広。 
十三宝塚格子叩 型	15片 (0.6%) ・接合3片 (0.3%)	瓦格子叩片、未接合数は12点で小数。叩板は新鮮ではなく使用減りがあり、消耗の中頃を思わせる。格子14と同様に幅広。 	十三宝塚格子叩 型	2片 (0.1%) ・接合1片 (0.1%)	瓦格子叩片、未接合数は1点で極少。合成像は全体を成すことができなかったが、「測」の格子目きさに近似。 
十三宝塚格子叩 型	18片 (0.8%) ・接合3片 (0.3%)	瓦格子叩片、未接合数は3点で、極少。叩板は新鮮でなく、消耗はいちじるしい。しかし、木理は不明瞭で判別できない。数量少なく、叩板の先、元の判別不能。 	十三宝塚格子叩 型	2片 (0.1%) ・接合1片 (0.1%)	瓦格子叩片、接合後1点と、男耳1点があり、叩板は消耗し、末期を感じる。形は側部が直線的な大単位。 
十三宝塚格子叩 型	20片 (0.8%) ・接合4片 (0.3%)	瓦格子叩片、未接合数は4点で、極少である。叩板の木筋の発達は、ほとんど認められないが、消耗し、使用の中頃以降を感じさせる。刻み込みは浅い。格子目全体には破片量が少なく合成することができます。単位不詳である。 	十三宝塚格子叩 型	3片 (0.1%) ・接合3片 (0.1%)	1. 標式例 (佳31-7回) 2. 合成像 (新・古不問) 

第277図 格子叩種別一覧図

標式例と観察摘要		標式例と観察摘要	
面積 % 十三宝塚格子叩 型 15片 (0.8%) ・被14片 (1.0%) 22	 1. 標式例 (AO-2120)	A~D 未割 十三宝塚格子叩 型 3片 (0.2%) ・被3片 (0.2%) 23	 2. 合成像(新・古不間)
十三宝塚格子叩 型 1片・被1片 24	 (分析925) 1. 標式例 (寺東北-10)	十三宝塚格子叩 型 7片 (0.1%) ・被4片 (0.3%) 25	 A~E 未割 1. 標式例 (基2-156回) 2. 合成像(新・古不間)
十三宝塚格子叩 搬入1型 1片・被1片 25	 1. 標式例 (296回25)	十三宝塚格子叩 型 7片 (0.1%) ・被4片 (0.3%) 26	 搬入とは県外からの搬入という意味である。大張と瓦とは胎土に共通性があり、ともに二種の陶土を混ぜ合わせた構造割れ口に見える。白色遮光物がわずかながら見える外は灰褐色の鉢物はほとんど肉眼上では見えない。そうした胎土の一群は、隔壁聯繫、主に埼玉県製に見かけ、埼玉県製は埼玉県内では格子叩の手法は、8世紀前半頃まで、多くはないが存在している。本例は、今後、同窓確認されれば供給上の歴史となる。

第278図 格子叩種別一覧図



格子叩目の同窓関係を照合すると、最後にどうしても分別できない個体が残ってしまう。その理由の大半は細断のためであるが、それでもな、格子単位を多く残した中に、分類上、不明な一群ができてしまい、15点が生存する。15点について最終的に、細かに検討する余裕がなかったので、ここに特に、単位量の多い4点を掲げた。前出までの格子叩型に収まる可能性もある。

第279図 格子叩種別の不明類 1:2

標式例と観察摘要		標式例と観察摘要	
種 類	%	種 類	%
十三宝塚 繩單 叩 類	破 21 13% 接 18 13% %は女瓦全数からの割合	十三宝塚 繩多 叩 類	破 1 接 1 %も太い溝目の単位を抽出したが、どのような存在理由が明確でないが、1点のみ、太い溝目。
<p>群馬県の古瓦の中の溝目は、线条（ローラー）と叩（クラッカ）がある。当道跡例は、繩多類が筋状であるほか、叩である。上図は両側とも、上方が女瓦広端部で、叩は右列であり、主体は左列例のように、斜方向に急角度となる個体が圧倒的に多い。</p> <p>1. 標式例A(住7-1図)</p>		<p>最も太い溝目の単位を抽出したが、どのような存在理由が明確でないが、1点のみ、太い溝目。</p> <p>1. 標式例(269図32)</p>	
<p>2. 標式例B(基2-70図)</p>			
<p>群馬県の古瓦の中の溝目は、线条（ローラー）と叩（クラッカ）がある。当道跡例は、繩多類が筋状であるほか、叩である。上図は両側とも、上方が女瓦広端部で、叩は右列であり、主体は左列例のように、斜方向に急角度となる個体が圧倒的に多い。</p> <p>1. 標式例A(住7-1図)</p>		<p>筋状は40点存在。各々、粘土、色調は基通し、269図32が質火瓦形筋状なので、他片も同種類か。筋状技法は主に、西毛の作瓦技法。</p> <p>1. 標式例(272図2)</p>	

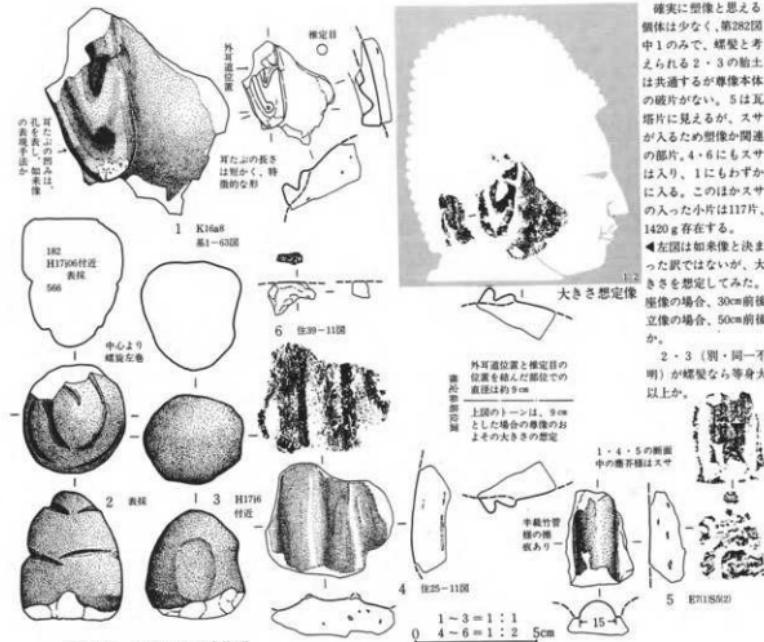
第280図 繩叩種別一覧図

1 : 2

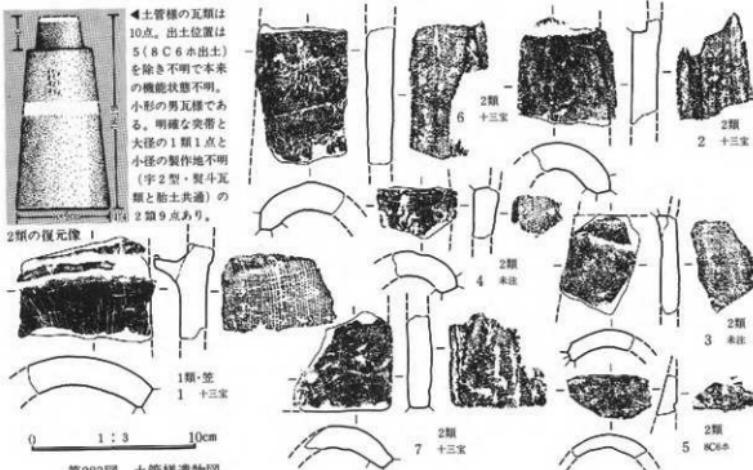


第281図 作瓦技法痕ほか

1 : 2



第282図 塑像と関連遺物図



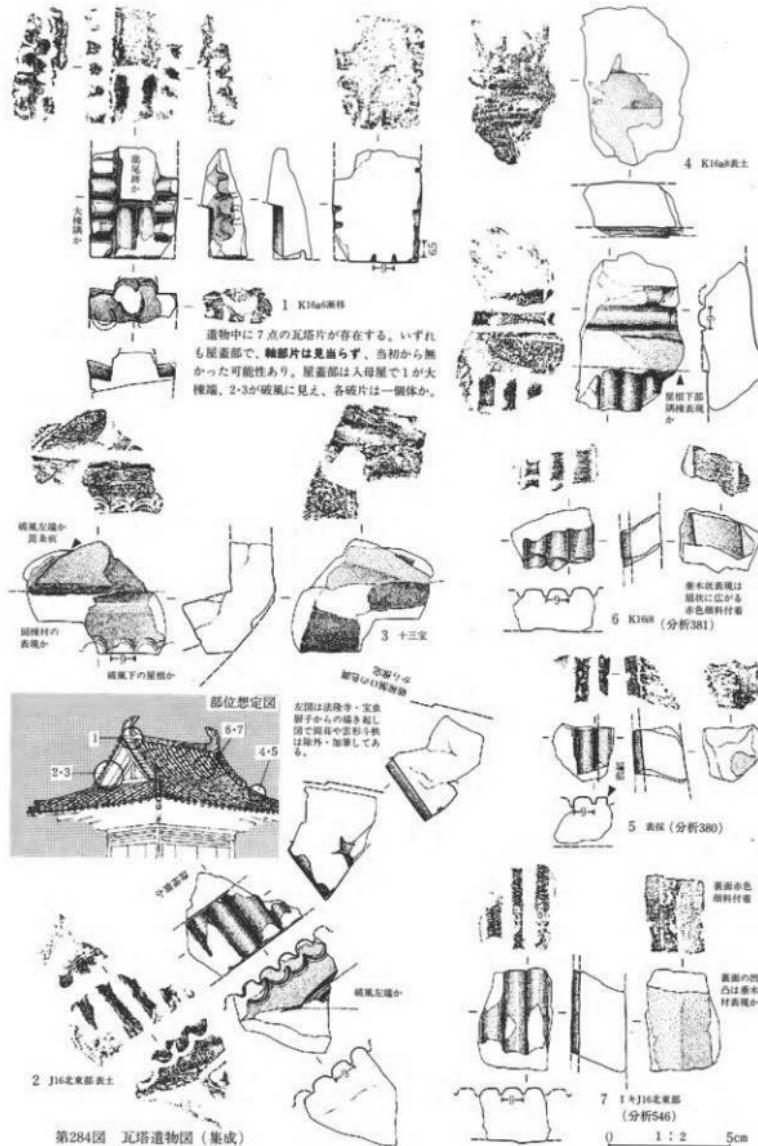
第283図 土管様遺物図

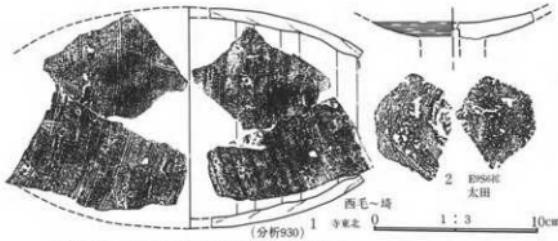
確實に塑像と思える個体は少なく、螺旋と考えられる2・3の胎土は共通するが尊像本体の破片がない。5は瓦塔片に見入るが、スサガ入るため塑像が関連の部片。4・6にもスサは入り、1にもわずかに入る。このほかスサの入った小片は117片、142g存在する。

◀左図は如来像と決まつた証ではないが、大きさを想定してみた。座像の場合、30cm前後、立像の場合、50cm前後か。

2・3(別・同一不明)が螺旋なら身丈以上か。

第5篇 検出された遺構と遺物（古代）





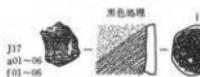
第285図 土器類遺物図(古墳時代須恵器例)

▲古墳時代の須恵器を2点掲げた。概報団に記載の19ライン以北にも28棟跡の古墳時代住居跡が報せられ、今回報告の対象地域は、その南端住居跡より約30mしか離れてない距離に北端部を置いているので、古墳時代遺物が出土しても不思議ではない。今回の対象地域に古墳時代住居跡の存在は2棟しか知られていない。

第285図に該当遺物を掲げたが、このほか少量、土師器を含め、破片個体がある。1の胎土は西毛~埼玉県製と考えられる櫛目施釉である。



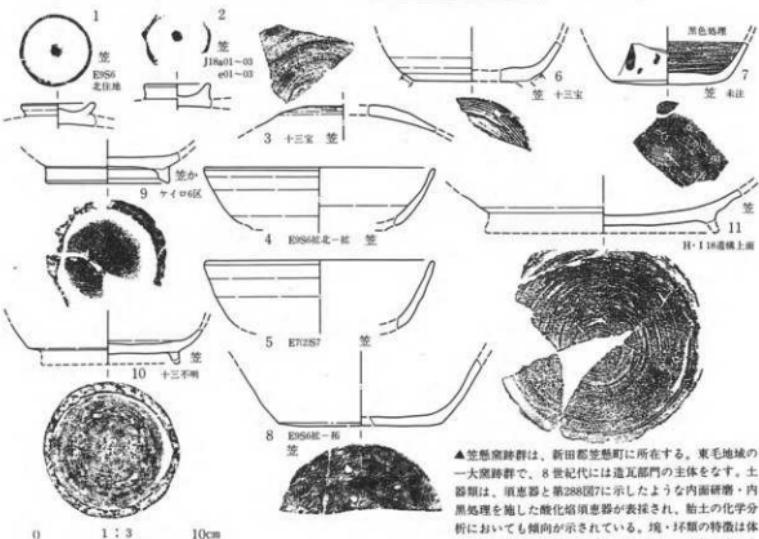
第286図 土器類遺物図(埴輪例)



第287図 土器類遺物図(再加工円形製品)

土器片を再加工し、円形に整形を施した製品は、これ一点であった。内黒、内面研磨を施した壺(推定笠懸窯群製の焼成焰須恵器)片の再加工である。機能は、いったい何に利用されたのだろう。

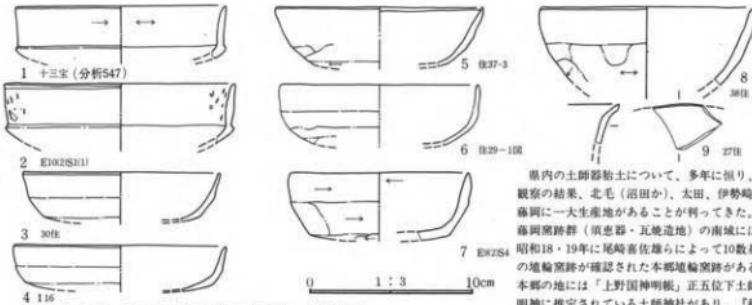
▲第286図に埴輪片を掲げた、全遺物中に、2点の存在があるので簡めて概量である。十三塚という小字名で、十三塚信仰との関連を考える時、十三塚としたら、古墳が再利用されても良いと考えられる。しかし概報団にある北端地と今回の対象地に、古墳の存在は不明瞭である。



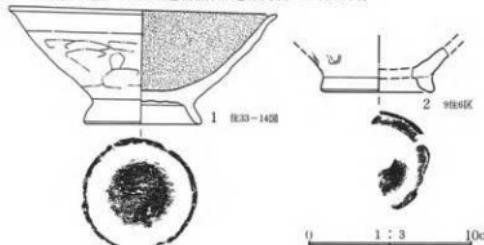
第288図 土器類遺物図(推定笠懸窯群製の須恵器例)

▲笠懸窯群は、新田郡笠懸町に所在する。東毛地域の一大窯群で、8世紀には造瓦部門の主体をなす。土器類は、須恵器と第288図7に示したような内面研磨・内黒処理を施した焼成焰須恵器が表される。胎土の化学分析においても傾向が示されている。壺・环球の特徴は底部立上りに、内湾気味の丸みがあること、底部と立ち上りとの間に、4回矢印のような突出しがあることなど。

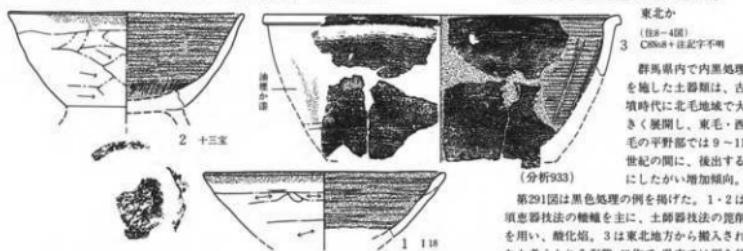
## 第5篇 検出された遺構と遺物(古代)



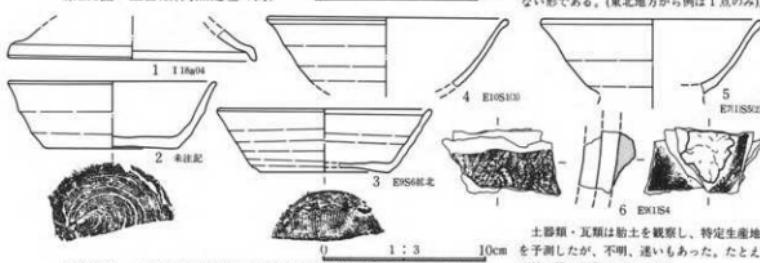
第289図 土器類遺物図(推定藤岡製の土器類例)



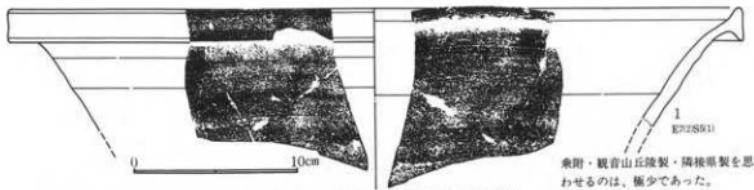
第290図 土器類(土器器・須恵器技法の共存個体例)



第291図 土器類(内黒処理の例)

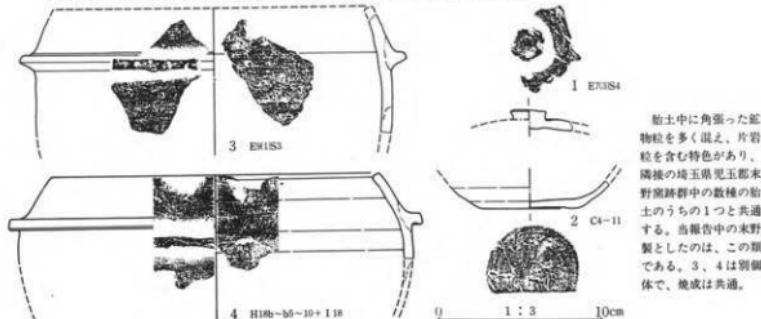


第292図 土器類(笠懸窯跡群製と隣接県産と不明類の須恵器例)

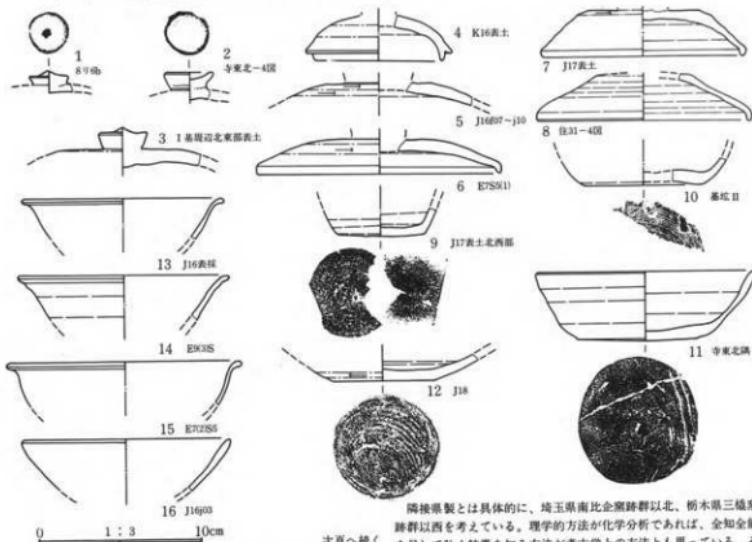


第293図 土器類遺物図(乗附・観音丘陵製か隣接県製か不明類の須恵器例)

乗附・観音丘陵製・隣接県製と思わせるのは、極少であった。



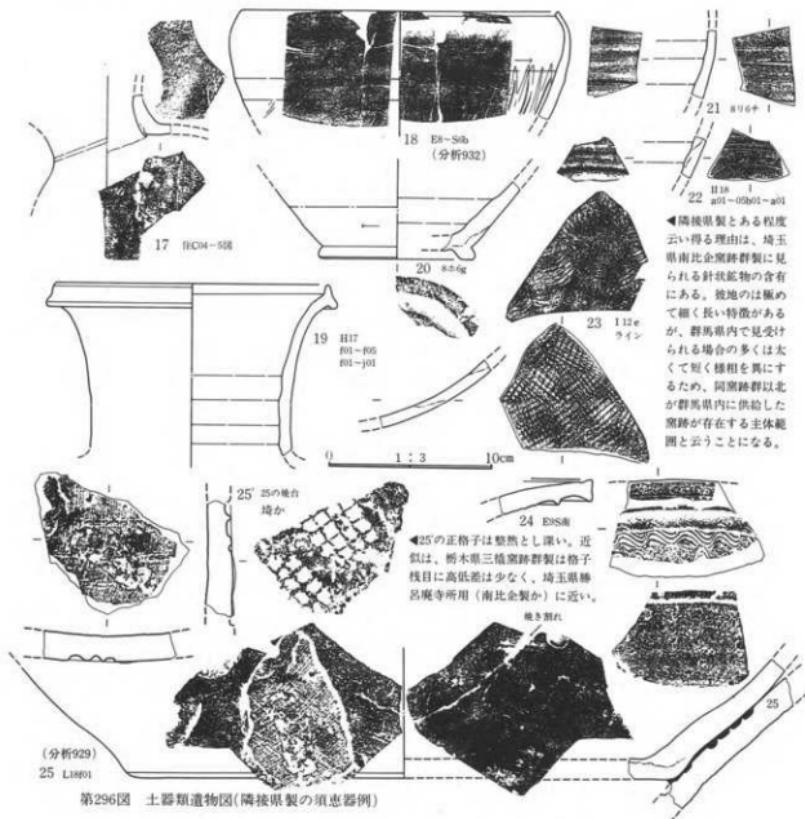
第294図 土器類遺物図(埼玉県未野窯跡群製の須恵器例)



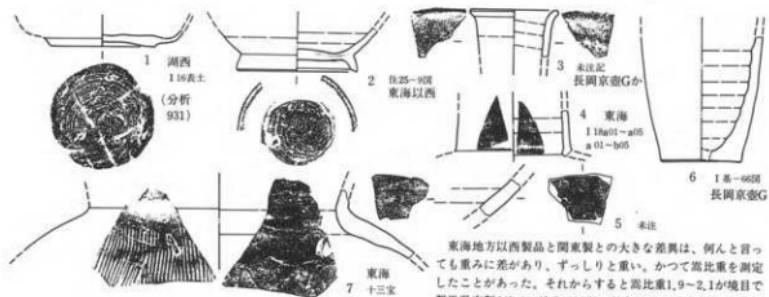
第295図 土器類遺物図(隣接県製の須恵器例)

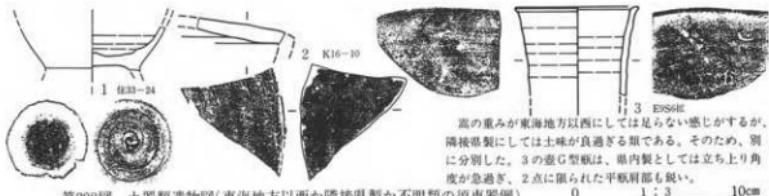
隣接県製とは具体的に、埼玉県南北企窯跡群以北、埼玉県三郷窯跡群以西を考えている。理学的方法が化学分析であれば、全知全能を尽して胎土特徴を知る方法が考古学上の方法とも思っている。そのため、観察表の胎土観察はそのことを意識しながら記入している。

第5篇 検出された遺構と遺物(古代)

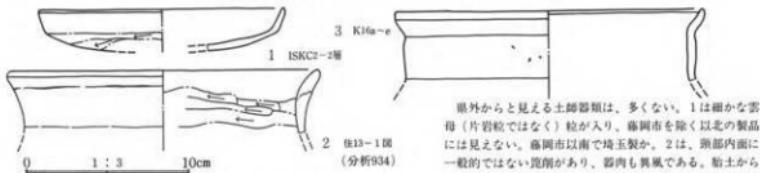


第296図 土器類遺物図(隣接県製の須恵器例)

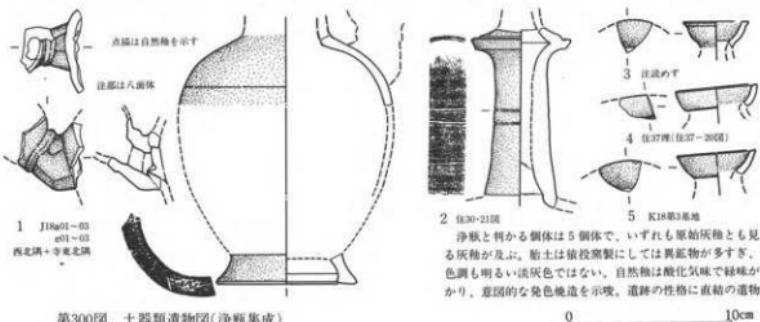




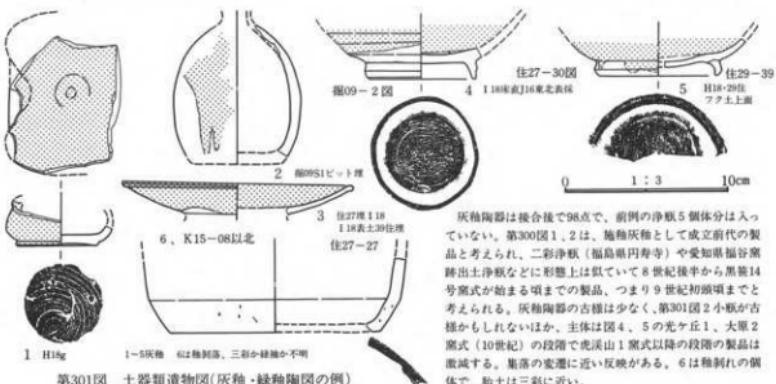
第298図 土器類遺物図(東海地方以西か隣接県製か不明類の須恵器例)



第299図 土器類遺物図(隣接県製かの土器の例)



第300図 土器類遺物図(淨瓶集成)



第301図 土器類遺物図(灰釉・緑釉陶器の例)

高の重みが東海地方以西にしては珍らしい感じがするが、隣接県製にしては土株の急過ぎる点である。そのため、別に分別した。3の蓋G型瓶は、瓶内製としては立ち上り角度が急過ぎ、2点に偏られた平底肩部も似い。

0 1 : 3 10cm

県外から見える土器器種は、多くない。1は細かな雲母(片岩鉱ではなく)粒が入り、奈良市を除く以北の製品には見えない。奈良市以南で培養製か。2は、頭部内面に一般的ではない凹面があり、器肉も異風である。筋立がら見てではない。3は蓋が重く、硬質で、県内では北方地域、当遺跡位置からは県外を考えた方が近似である。

2 住30-21號  
3 泥めす  
4 住37號(住37-20號)  
5 K18第3地  
0 10cm

浄瓶と判る個体は5個体で、いずれも原始灰釉とも見る灰釉が及ぶ。筋土は猿投窯製にしては異色物が多く、色調も明るい淡灰色ではない。自然釉は酸化気味で軽味があり、意図的な免色施造を示唆。遺跡の性格に直結の遺物。

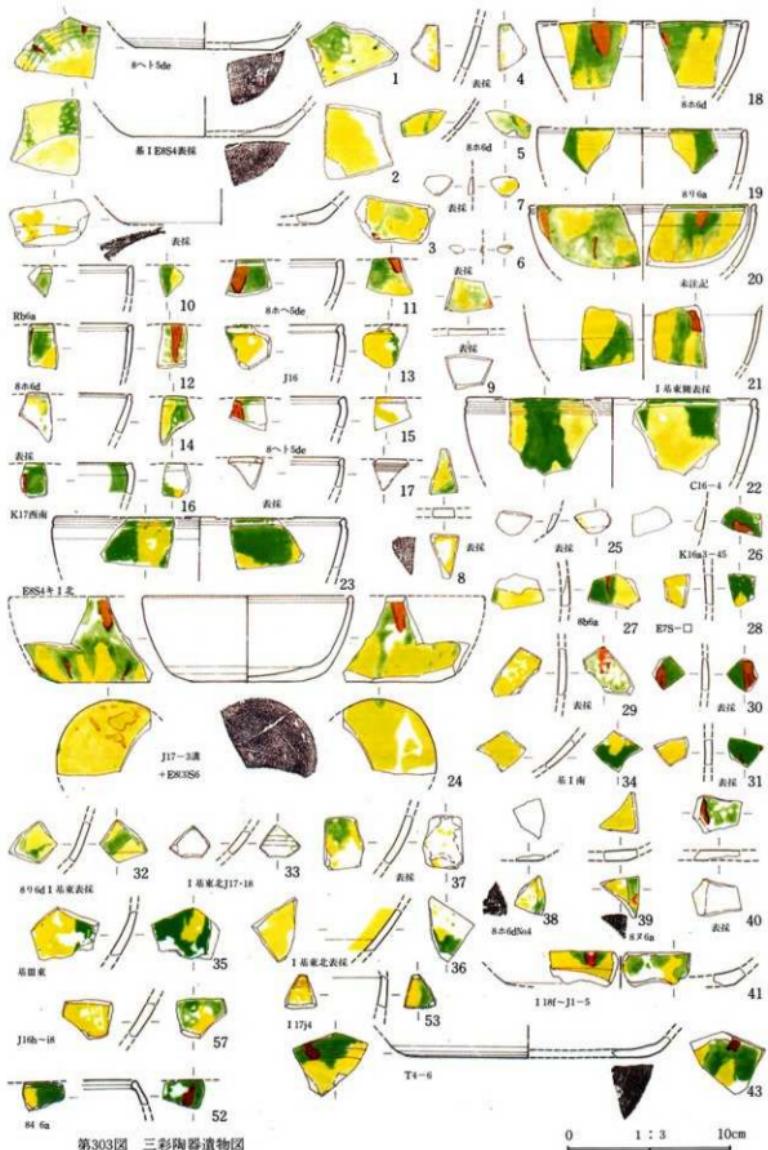
灰釉陶器は身合後で98点で、前例の淨瓶5個体分は入っていない。第300図1,2は、施釉灰陶として成立前代の製品と考えられ、二彩淨瓶(福島県円寿寺)や愛知県福岡郡跡出土淨瓶などに形態上は似ていて8世紀後半から黒葉14号窯式が始まるまでの製品、つまり9世紀初頭頃までと考えられる。灰釉陶器の吉祥は少なく、第301図2小瓶が吉祥かもしれないほか、主体は図4、5の光ケ丘1、大里2窯式(10世紀)の段階で虎山1窯式以降の段階の製品は激減する。墓落の変遷に近い反映がある。6は釉割れの個体で、胎土は三彩に近い。

第5篇 検出された遺構と遺物（古代）



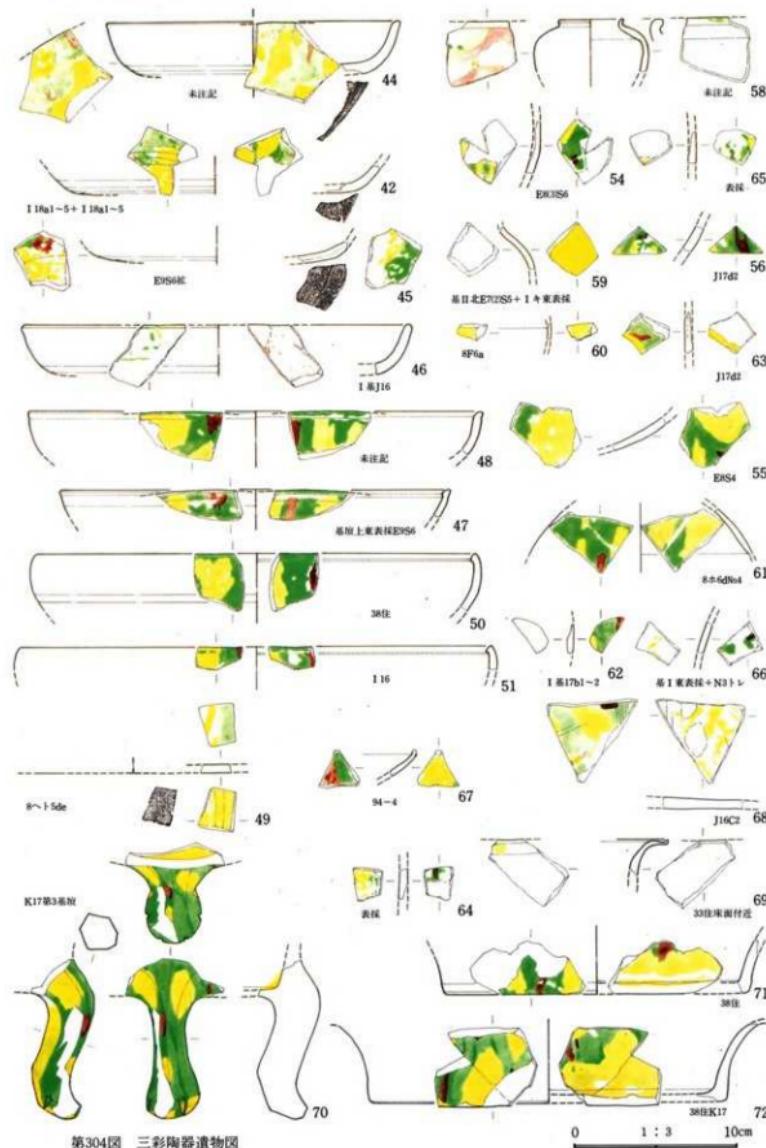
分布は基壇1号の周辺、基壇4号のあたり、南東獨立柱建物群（主体は8世紀か）に黒丸記号が集まり、基壇1・4号は、元機能位置を示唆する場所として重要。72点もの出土は地方に於いて異例のことと、器種も多く、奈良県正倉院例よりも全体的に大形（測図の際、縦横、全個体を確認）傾向がある。火食、鉢など大形器を多く含む性格は、供器具の可能性が減られ、より法具としての可能性が大となる。

第302図 三彩陶器の分布

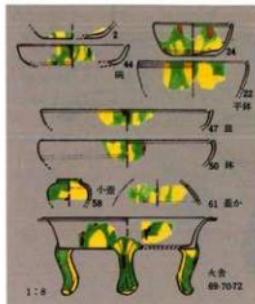


第303図 三彩陶器遺物図

第5篇 検出された遺構と遺物（古代）



第304図 三彩陶器遺物図



第305図 三彩陶器の器種

▲第303・304図に多色図版を用いて、三彩の文様と施釉の残存状態を示した。黄色部は明瞭な白彩は認め難く、透明釉部である。  
個体識別は長時間を要するため行なっていない。接合関係の低さからすれば、相当数の個体数があつたと考えられる。  
実測図の土器焼き、口徑は全個体を編者が確認（理屈上の方法により）した。口縁の円弧形状は端正で、重みは少ない。正倉院伝存の同一種より、大口径が多い。

種は確実な種のものを第305図に掲げた。種揃い、個体量とも、関東地方以北屈指の例で、全体の組合せは法具、祭器の感強し。



押出仏像の大きさ想定像の一例



▲近年、住居跡からの出土が増加し、珠を小鉢片とする例（写真跡は見えない。注記の田道とものである。）『阿弥陀如来像』（真図版58）は、他にもあり。

第306図 銅製造物図



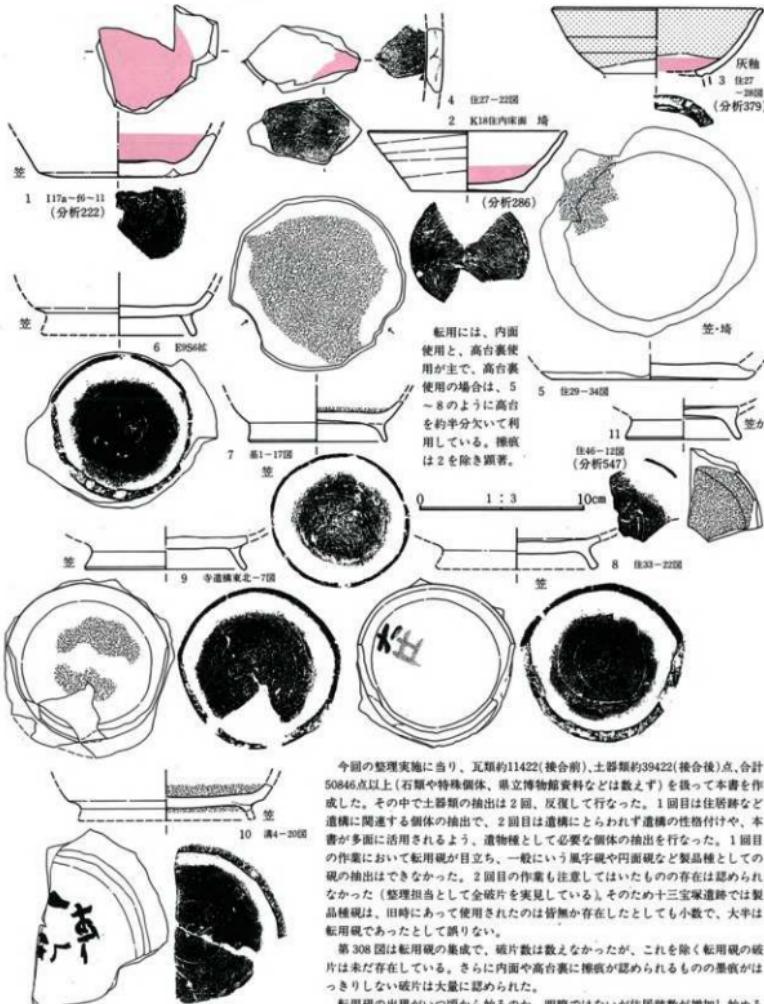
▲上図2葉は大きさの想定図である。発掘出土の押出仏の例は、少ない（地方仏教史の近藤義雄によれば前橋市山王庵、同市、群馬町上野国分寺跡に既出例ありという）。法隆寺伝存の阿弥陀如来五尊像写真より描起図を作成し、当遺跡の尊像姿に似た右脇侍像中に、手首Aを用いて作図の結果、高さは約18cmとなり。全體で三尊・五尊像を成した可能性が高い（最上図の右原形、勢は聖空菩薩像）。なお法隆寺には厨子中央壁に貼られた例があり、用法示唆。



▲当遺跡において、鉄地鍍金製品は、1点のみである。用途不詳であるが、円は近正円。

第307図 鉄地鍍金製造物図

## 第5篇 検出された遺構と遺物(古代)



今回の整理実施に当り、瓦類約11422(接合前)、土器類約39422(接合後)点、合計50846点以上(石器や特殊個体、県立博物館資料などは数えず)を扱って本書を作成した。その中で土器類の抽出は2回、反復して行なった。1回目は住居跡など遺構に関する個体の抽出で、2回目は遺構ごとにわかれず遺構の業務付けや、本書が多面に活用されるよう遺構として必要な個体の抽出を行なった。1回目の作業において転用鏡が目立ち、一般的にいう風字鏡や円面鏡など製品鏡としての鏡の抽出ができないかった。2回目の作業も注意してはいたものの存在は認められなかった(整理担当として全鏡片を実見している)。そのため十三室東道路では製品鏡は、田間にあって使用されたのは皆無か存在したとしても小数で、大半は転用鏡であったとして頗りない。

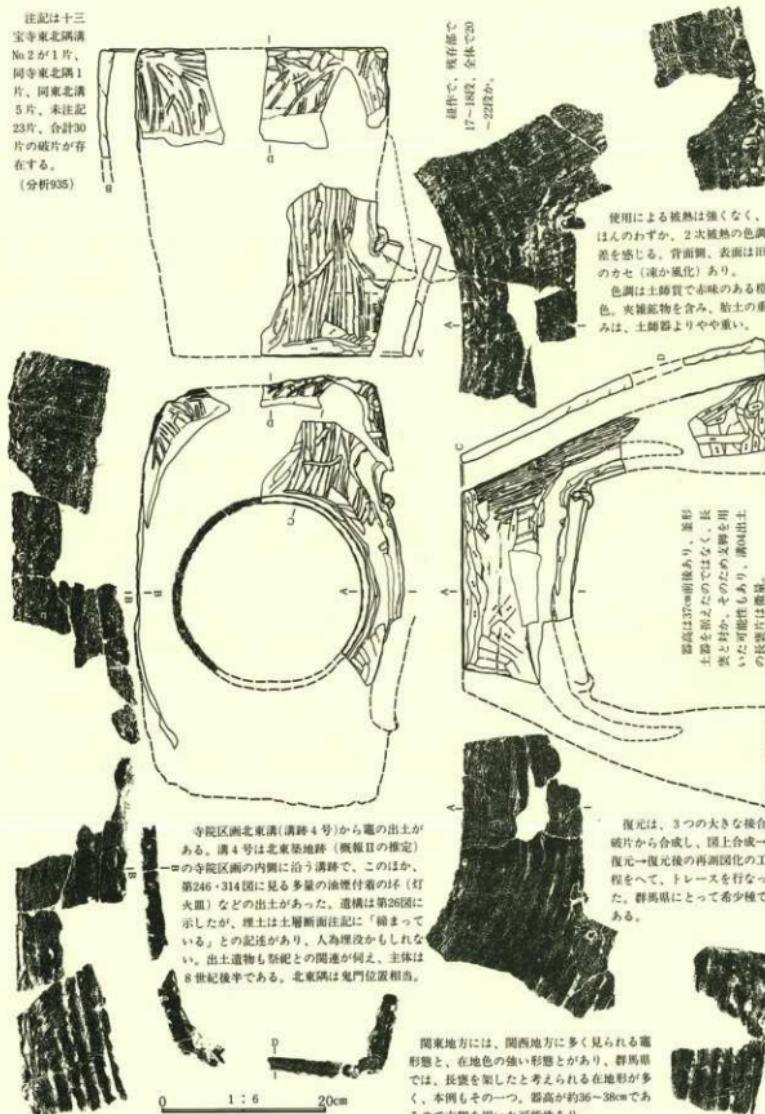
第308図は転用鏡の集団で、破片数は数えなかったが、これを除く転用鏡の破片は未だ存在している。さらに内面や高台裏に墨痕が認められるものの墨痕がはっきりしない破片は大量に認められた。

転用鏡の出現がいつ頃から始めるのか、明瞭ではないが住居跡数が増加し始める8世紀中～後半には図1・2・5・7～9のとおり存在する。当遺跡の古い段階で注目されるのは赤色顔料付着の土器で抽出できたのは図中の4点のみ)。それ以降、9世紀前半頃まで復元・接合して鏡の体を成す個体は少くなり、中頃以降、時期特徴を示す個体は1点しか抽出できなかつた。

県内における製品鏡は、方形透や琵琶透を表現した円面鏡が西毛の集落からでも出土を認めるようになり、主体窓として秋間窓群や吉井窓群があり、秋間窓群では特殊器種の散布のある支群単位で複数の鏡破片を採集している。東毛地域では数えるほどしか出土は知られておらず、笠懸窓群での既出や採集例は知らない。製品鏡の不在は当遺跡の性格を示唆する現象として捉えたい。

第308図 土器類遺物図(転用鏡とその関連集成図)

注記は十三  
宝寺東北溝  
No.2が1片、  
同寺東北溝1  
片、同東北溝  
5片、未注記  
23片、合計30  
片の破片が存  
在する。  
(分析935)



第309図 甕遺物図

第5篇 検出された遺構と遺物（古代）



赤色顔料付着の個体は、整理資料統べからの抽出で、出土位置の明らかなのは4点で、それは北半に偏在する。墨書土器は住7・30-33・37・38に多く、溝4も目立つ。墨書「大井」の分布界は広く、それだけ当時の人々が豊穣の念を持って接していた井戸で、井戸8号付近に「大井」鉢の偏在があり、井戸8号のことか。住45から「<sup>鉢</sup>○○治」が出土し、同場所か基3周辺に宿泊施設があったのか。

第310図 砚・墨書土器・暗文土器の分布



第311-312図は墨書銘・泥書銘の集成である。概報II(P.70)の集成と合成してみると現品不明の多さが目立つ。そのため両図は合併して構成した。土器図を略すのが概報所載の図で他の番号は補圖25内の番号である。判読は筆者が行なったが、概報IIの判読と異なるのは第311図29で「宿」と見え、「酒(ハク)・とまる」=泊で、「泊」となろう。宿泊施設を示唆か。既読は「酒?」である。ほか72を除くと既読に異存はない。25は「家佐」に見えるが何であろうか。全体的には部所・所属を示す例に大井・北井(18)があり、大井は点数も多いから中心的存在の井戸か。次頁へ続く。

第311図 墨書銘集成図

第5篇 検出された遺構と遺物（古代）



51・58・65の「上田」、「神田」、「田」は管理田に供える供耕具の用途跡か。22-72(既述は「方」)は「左」に見え。佐位の佐とは同音であり、佐位縣の頭文字か。器種別に見ると、蓋・把・塊など一般的な器種のほか、47が土師器腹片で珍しい。5は転用視化する前の墨書きらしく、中心に近い側が良く判らない。以上、8世紀中頃から9世紀前半までが多い。

第312図 墨書・刻書銘集成図

第313図 刻書土器図



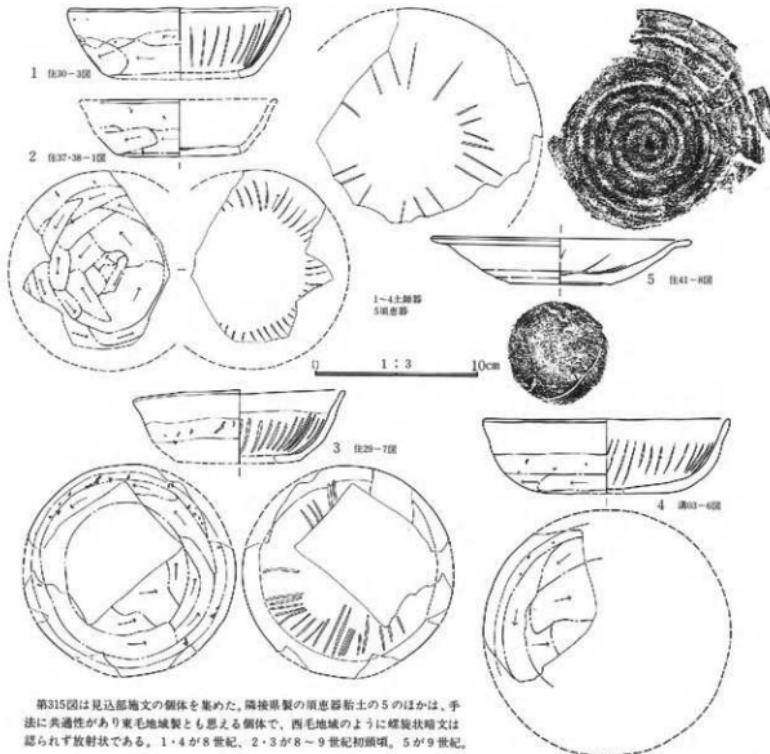
本図は、各住居跡の工房機能と焼火器の性格、各住居での集中状態などを知る目的で作成した。

扱った資料は、本書掲載の环・壺類統てであるが、このほか未載の中にも油壺類の多く個体は多くあり、漆付着個体も若干、存在している。また15ライン以降に実数が少ないのは、今回の整理で見当らなかった土器が相当量あるため、実態の反映ではない。

集約の結果、鍛冶場である住42、金属工房と考えられる住29から漆付着の环の出土があり、そのほか16~5以北の寺跡区画内の住居跡からも出土しているため、寺跡区画内の住居跡は工房機能を併有していたと考えられる（住居廃棄後の二次的な土器の納置は、少なくとも有縁者以上であったとして）。溝4内の焼火器は、土製壺の出土もあり祭祀か、溝中に少ないので、廻収処理場にあらずか。

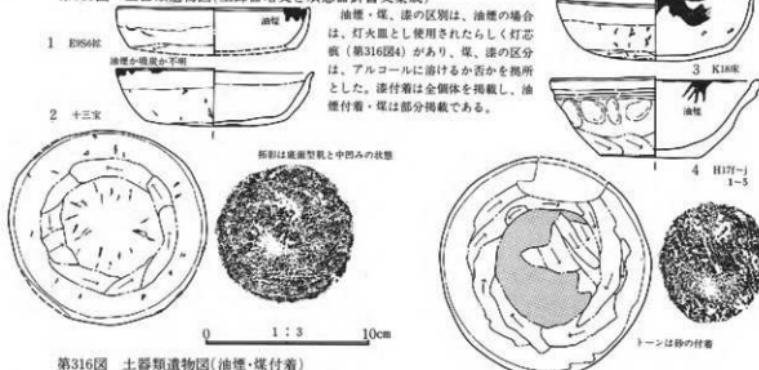
第314図 漆・油壺付着の环・壺類の分布

第5篇 検出された遺構と遺物(古代)

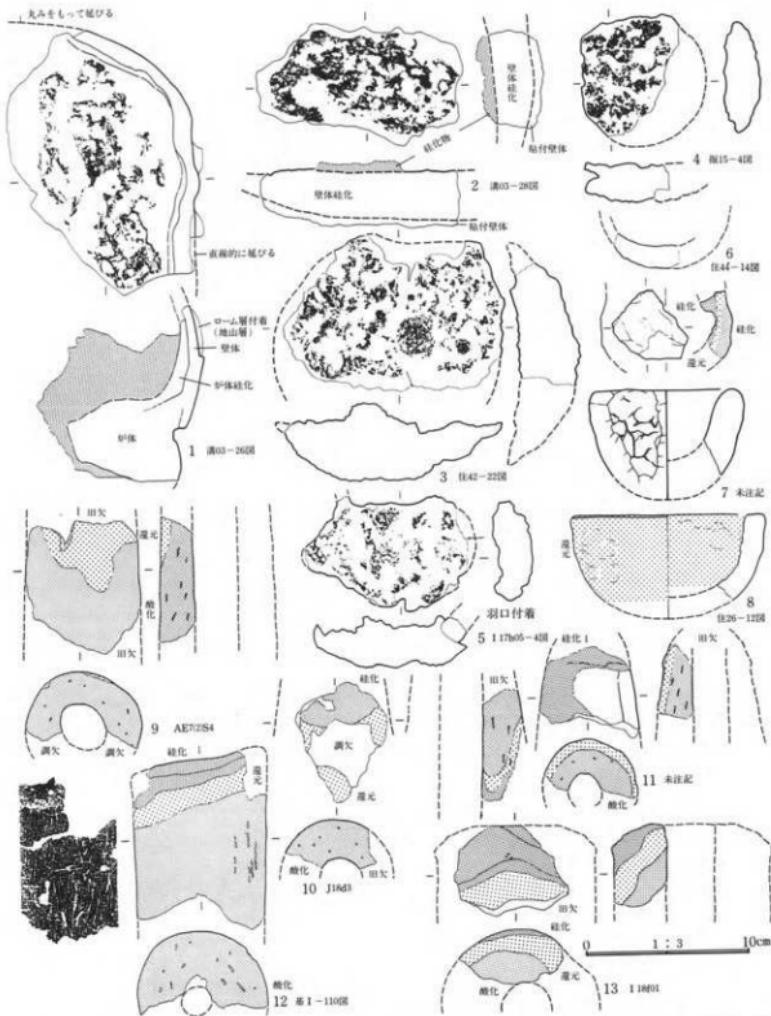


第315図は見込部施文の個体をまとめた。隣接県製の須恵器胎土の5のほかは、手法に共通性があり東毛地域製とも思える個体で、西毛地域のように螺旋状縞文は認められず放射状である。1・4が8世紀、2・3が8～9世紀初頭頃、5が9世紀。

第315図 土器類遺物図(土師器暗文と須恵器計畫書文集成)



第316図 土器類遺物図(油煙・煤付着)



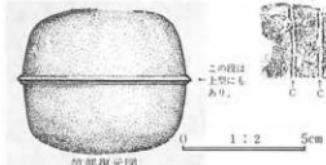
第317~319図まで金属製品製作関連の遺物類。炉は原料鉄（銅）を再精錬（流動した鉄滓は見られない）したと思われる大形炉片が溝跡3号から出土し、底との接觸らしい。第317図は底から壁体片で、平面規模は最小限で $27 \times 25\text{cm}$ 以上を想定でき。2の炉底面（1とは別個体）からすると長辺は最小限で $30\text{cm}$ 以上か。鋳治洋は梅形の最大級で、3の直径約14cm、小継は1で $7.5\text{cm}$ を測る。5は梅形洋に羽口の先端の下側がゆき着して残り、挿入の角度は水平に対し、約50度。6~7は坩堝または取瓶で、外見の色調は、洋物が鉢化した個所で見ると紫がかったあづき色を呈するので溶解金属は鋼が主体か。6は珍しい形。9~13は鋸輪の羽口である。鋸頭円錐形（10~11）は少なく円柱形が多いのが特色。断面の混ざり物はスサ。製作を12に長辯植物、刈辯糸による織物圧痕あり。巻き寿司の要領で製作か。全鐵洋 $12.4\text{kg}$ 。

第317図 金属製品生産関連遺物図 1~2 炉体片、3~5 梅形の鉄洋、6~7 垠堝または取瓶

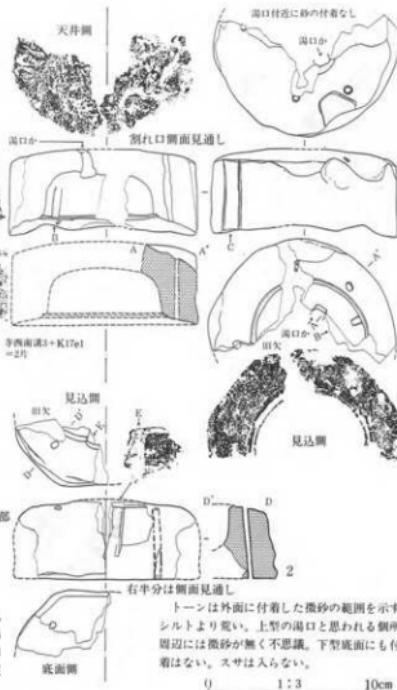
## 第5篇 検出された遺構と遺物（古代）

溶瘤型としたのは、下型の2の内面に微妙が付着して残り、しかも下団拓影のとうり上下型の相互が伴受穴を通し、接着し合う（合せの状態が得られ）その結果、内部に径7cm弱の中空状態が存在する点などから説型を推定した。

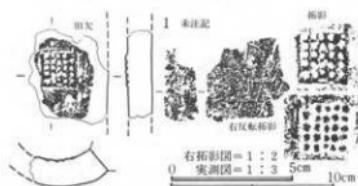
色調は土師器より赤味が強く、より重みがある。棒受けの穴は上型の1で3個所、下型の2で1個所が残存している。上型で欠損の穴数を推定すれば、きらに1・2穴が考えられ、合計4～5穴と想定される。下型の泥底面には、わずか墨彩の付着を認めるほか、他の露胎の面には母型と思われる（下へ続く）。



物質（本型・粘土型か不詳）を引き抜いた時の細まかな擦痕が見える。范内には、矢印B、矢印Eと共に、凸部、凹部として作り出される。矢印Cは延長部の下穴を欠損しているため具体的には明らかではないが、合せの目印か。上型の穴は湯口か。范形状の推定が上方の立場園である。殆どのように見えますが、推定は不確実



### 第318团 速筑型遗物团(速筑1)

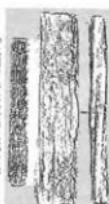


第319圖 游館製造物圖(游館2)



第320圖 水打石と水打金遺物図

第319図は、芯まで赤味の酸化を呈す。全体観は瓦に似た半球状で、側面も部屋面取りがあるが、瓦ほどシャープでない。胎土は重みがあり、裏窓器の土味と共通し、前削とも同じである。溶滑型と特徴したのは、胎土が失透すること、漆喰の付着が側面にあることからである。内面には $5\times 5$ の列点が $2.1\text{cm}\times 2.1\text{cm}$ の方形の区画内に配されている。各欠損面は時間である。漆喰の本物の不透明さが母型の陰影は認められる。このほか漆喰の本体が溶滲型の一部が区分困難な複数が117点1.42kgあり、それらについては、スサを多く含む型塑成品（型倉を含む）を想像した。また、輪廻の羽口の半大にスサが入るが、それらとは被熱抵抗性が異なる。そのため型塑は2組、3組である。

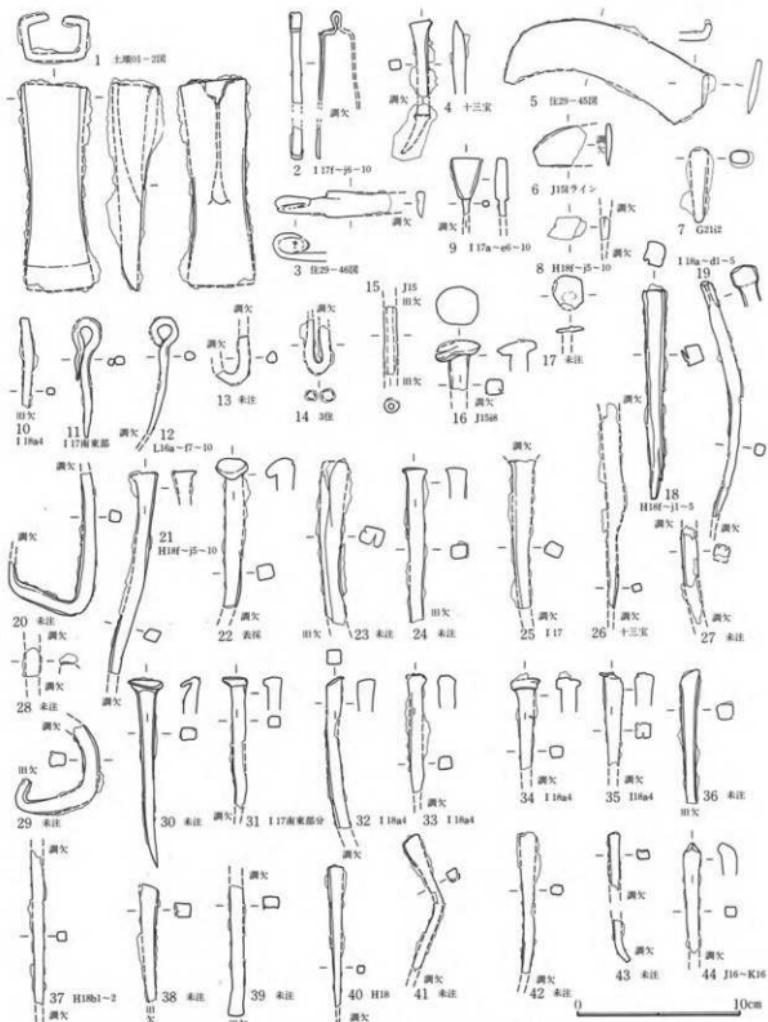


第320図は火薬し道昌で、1の水打石は石薬。

火打石の特色は、绳文時代以前の石器と比べれば、角立っている個所純てに細かな使用痕が無数にある点である。原材は川原石だった

2は鉢形の火打金で木の台部底の木質は見えない。鉢形の出現は時期は不明確で、幕末より右乾拓団と比較すると、金属性部長は極端に違い、幕末の頃、上州吉井(現多野郡吉井町)

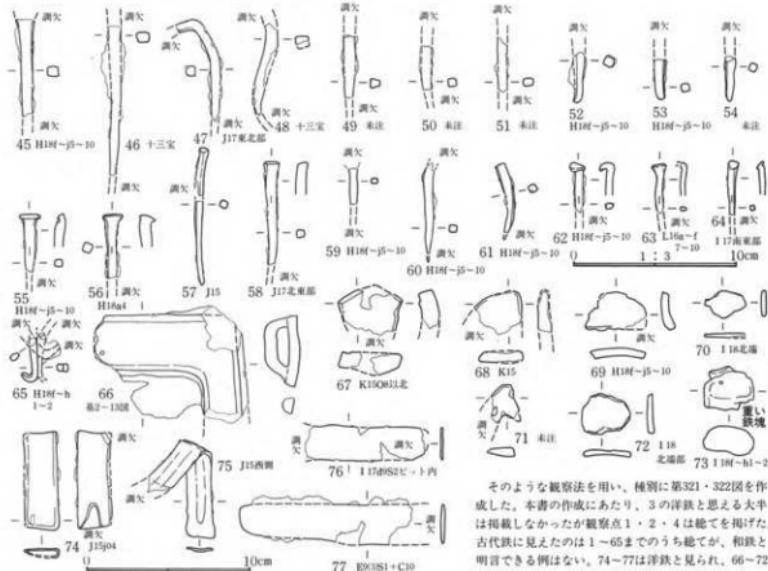
にあった本家中野屋製品は全国的に知られ、水打金は群馬県にとって重要な研究資料



鉄の精錬から製作に至るまでの工程に生ずる遺物の解釈と時序法は研究者によって異なるため、掲載を体系づけをされた葦田藏郎の観点に従う（「製鐵遺跡」、ニューサイエンス社1983など）った。しかし錆化した鉄に關し、考古学上の外觀觀察は体系づけられていない。そのため本書では、次の観点で4区分を行なった。1. 古代鉄の鍔は、錯割れ剝落が、不定気味に発達。和鉄の鍔のように層状剝離（徑・板目は、方向づいた層状剝離となる）は顕著でない。2. 和鉄の場合、層状剝離に発達。時期古代～明治初年頃。3. 洋鉄の場合、錆化に方向性なく、層状剝離しても発達していない。幕末以降。4. 錆鉄の鍔は1に似ているが芯側で大きく割れる。次頁へ続く

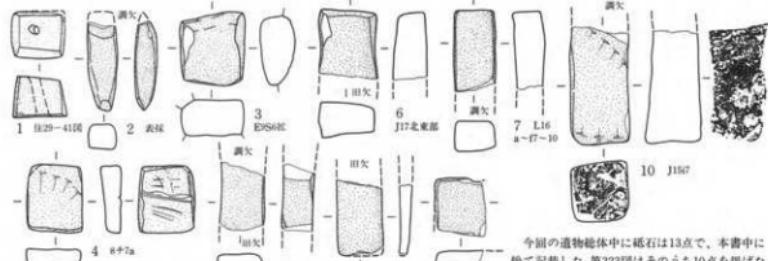
第321図 鉄器類遺物図

## 第5篇 検出された遺構と遺物(古代)



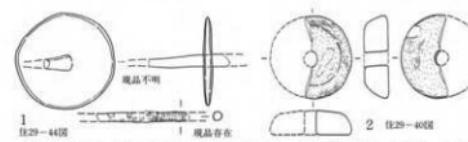
第322図 鉄器類遺物図

そのような観察法を用い、種別に第321・322図を作成した。本書の作成にあたり、3の洋鉄と思える大半は掲載しなかったが観察点1・2・4は絶てを掲げた。古代鉄に見えたのは1～65までのうち統てが、和鉄と明言できる例はない。74～77は洋鉄と見られ、66～72は鉄錠に見える。73は鉄錠のような形で原料鉄か。



第323図 砥石遺物図

今回の遺物全体中に砥石は13点で、本書中に總て記載した。第323図はそのうち10点を掲げた。石材鑑定は飯島静雄による。7人は造営者。



第324図 紡錘車遺物図(集成)

紡錘車は遺跡の性質が示唆される遺物種であり、県下の全体集約、時期別、遺跡別に検討がなされている。記録保存図・写真によれば住居跡10号に2点の出土があるが、現品不明である。第324図2は硅質貝岩である。

群馬県は延沢村(群馬郡南牧村延沢)が著名なほか各地に延の地名、延石神社、日用延石を採集使用した話などがあり、中延石級の産出地であった。そのため古代においても延石(流紋岩)は用いられ、当遺跡の13点中、4点が延石(1・2・3)、4点が流紋岩(6・8・10)であった。4は真岩で、県内では利根市要地区で真岩(珪質真岩)延石の採掘が行なわれたことがあった。4はそれに似ているが被熱(産出以前の熱変化)している点が異なり、柄側面は青緑である。9は白色凝灰岩で、軽用砥で中世以降か。図6には整形の研削痕があり、中世以降か。5の平面下方は旧材面、往27-46には川原石時の旧材面が残る。

## 第10章 遺物観察

遺物の観察は観察表の作成時ばかりでなく、分類仕分け作業の段階から既にはじまっており、実測図の描写と観察表内容とは一致している。実測図は土器類を1:3で、瓦類に1:5を用いた。それを除く変則的な縮尺は縮少値の数字、または縮尺を図の傍に示した。実測は三次元電子実測機（機械名称スリー・スペース）班と整理班による手実測との併用で、その区分は土器の場合、正立もしくは倒立しうる大きさの個体、瓦の場合は四辺を有するか大形破片に用いた。実測図は補助員と整理担当（編者）とが作成し、瓦類の大形片を除き他を大幅な加筆か鉛筆トレースを整理担当が行ない、続いてインクトレース（淨書）の工程を踏んだ。

遺物実測図の表現法は、実録中軸は土器の四分割実測法を行ない得る直実測の個体に、1点鎖線は土器残存量の不足から回転実測した個体を示す。割口延長の破線は通常の場合、想定であるので破線2単位でそれを示し、それ以上伸びている場合は実測の分割位置とは別に残存個所があって、それを用いて補なった。外形線ほか形を決める線は、主体を実線で、補助を細線で表現してある。器壁断面中に粘土紐作痕と粘土走行を捉えたか、その際3種類の表現を用いた。細線は明らかに粘土紐の単位や粘土板接合の単位がしっかりと見える時、破線は推定される時、点描は接合面と明確に認定できないながらも、最少限、粘土走行は捉えたつもりである。多くの場合は点描と細描とを併用した表現を用いており、その意味は、粘土紐の単位はある程度、観察し得たものの部分的には判然としない個所を含むことの意味である。または土師器中に型膚を認める場合は、接合線が描かれても紐作りとは限らず、粘土塊の接合面の時もある。瓦断面の側部のケバ線は、窓削による面取端を表わし、須恵器のケバは、水挽成形時の挽出し部である。土器の接撫、撫の上下端は、破線様に途切の隙間を入れ、輪縁目も同様に用いた。窓削や削を示す線は1点鎖線を用いたが、矢印は、夾雜鉱物の抜ける場合と喰い込む場合の両名を捉え、大多数側を示し、移動の方向である。必要に応じて底外側平面、見込側平面を作成した。造形表現が必要な際には点描図を加えた、光源は右上45°方向である。なお図版の版下は2倍図版のため1:3なら67%の縮図がトレース原図である。

拓本については、二つの意味あいから、拓影図を貼付した。一つは文様技法痕や整形状態自然の凍ハゼなどの特徴を捉える時、二つめは器面全体の質感を表現するためである。

観察表は瓦類を除き、図版順に作成してある。瓦類は種別と分類にのっとり、類別単位で扱った。項目中の図・写真番号は一致する。出土位置は本来であれば一覧表中に記入すべきであるが、当遺跡の遺物取上げはグリッド番号の変更、台帳中の取上げ内容の補足、接合による出土地の複合化などがあり、土器注記のみの単純な状態ではなかった。そのため、図版作成の時点より、観察表中に長文の出土地表現を行なうことは無理であると判断されたため、実測図傍に出土地を明記し、観察表中には最少限の表現を行なった。記録保存図・出土状況写真・遺物取上げ台帳・遺物注記の4者の照合と扱いについては132頁の住居跡項で触れたので参照されたい。器種名称は、古語名称を主とし近代以降の名称を従としたが整然とした分離はできず混用もある。量目欄は、古語であれば度目と表現しなければならないが、實用に習い量目とした。胎土・焼成・色調と摘要欄については、胎土は含まれる夾雜の鉱物・粒子を捉え、肉眼による製作地の推定、備考欄に記入したが、1979年から始めた胎土分析約950点の結果を踏まえたことと、県内各窯跡群の採集資料に基づく。焼成は種単位で軟・並・硬・（焼締）に分けた。

そのほか被熱・凍ハゼ（焼成時の石ハゼは表現していない）などの風化についても観察し、顔料・漆・油煙の付着は備考欄に記入した。

第5篇 検出された遺構と遺物（古代）

図番号 写真番号	種 器 形	出土位置	量 目(cm) 残 存 状 態	胎 土・焼 成・色 調 と 摘 要	備 考	
第13図1、 写真図版29	軟質陶 器鉢	十三宝、詳 細不明。	口縁、片口部片。	白色粒子入る。硬。灰色。 やや焼かかる。	割口に組作痕あり、口縁の周辺に横擦 痕あり。	在地製。
同図2 写29	軟質陶 器鉢	E 6 S 7	口縁、片口部片。	白色粒子入る。硬。暗灰 色。外面彫かかる。	割口に組作痕あり、口縁部の周辺に横 擦痕あり。片口は指により凹ませる。	在地製。
同図3 写29	軟質陶 器鉢	H 17	口縁部片	白色粒子入る。硬。灰色。 二次被熱か。	割口に組作痕あり、口縁部の内、外 面に横擦痕あり。内面磨耗あり。	在地製。
同図4 写29	軟質陶 器鉢	未注記	口縁部片。	白色粒子入る。青。暗 色。	割口に組作痕あり、全体にハゼ多く、 剥落あり。	在地製。ハ ゼあり。
同図5 写29	軟質陶 器鉢	K 17	口縁部片。	白色粒子入る。硬。灰色。 やや焼かかる。	割口に組作痕あり、口縁部の内・外 面に横擦痕あり。	在地製。
同図6 写29	軟質陶 器鉢	K 16・17	体部片。	白色粒子入る。硬。灰色。 やや焼かかる。	割口に組作痕あり、体部外面に成形時 の凹凸あり、内面磨耗あり。	在地製。
同図7 写29	軟質陶 器鉢	K 17	体部片。	白色粒子入る。硬。灰色。 やや焼かかる。	割口に組作痕あり、器面全体がやや荒 れています。内面に磨耗痕あり。	在地製。
同図8 写29	軟質陶 器鉢	J 15	体部片。	白色粒子入る。硬。灰色。 やや焼かかる。	内面に組作痕不明瞭。器面全体がやや 荒れています。	在地製。
第14図1 写真図版29	青磁皿	注記読めず。	底～体部片。	淡灰色。焼締。釉淡褐色 色。	体部裏面下方から底面にかけ露胎とな り、釉は薄く褐色気味。内面磨擦文。	中国製、同 安窯系。
同図2 写29	青磁皿	未注記。	口縁部片。	淡灰色。焼締・釉淡褐色 色。	口縁部内面側に2条の沈線あり。釉は 薄く褐色気味。	中国製、龍 泉窯系。
同図3 写29	青磁皿	未注記。	体部片。	明淡灰色。焼締。釉淡褐色 色。	体部裏面下方から底面にかけ露胎とな り、釉は薄く褐色気味。	中国製、龍 泉窯系。
同図4 写29	青磁碗	I 17	体部片。	淡灰色。焼締。釉淡明綠 色。	発色良く淡青緑色で厚い。砧手。	中国製、龍 泉窯系。
同図5 写29	青磁碗	I 17	体部片。	淡灰色。焼締。釉淡暗綠 色。	体部外側に砧手蓮弁あり、釉は暗色氣 味である。	中国製、龍 泉窯系。
同図6 写29	青磁碗	I 18	体部片。	淡灰色。焼締。釉淡暗綠 色。	内・外裏文で釉は、やや薄く、褐色氣 味。	中国製、龍 泉窯系。
同図7 写29	青磁碗	表採	底部片、(底径5、 4)。	淡灰色。焼締。釉淡暗綠 色。	高台は削出し、同端部～底面裏無釉。 底胎は鉄足氣味に酸化。	中国製、龍 泉窯系。
第16図1 写真図版29	燒締陶 器要	表採	体部片。	素地窓が擴う。焼締。 灰色。	割口に組作痕、外面に叩目あり、内面 に擦痕あり。	美濃焼。
同図2 写29	燒締陶 器要	E 7 S 5	頸部片。	白色氈物粒多い。焼締。 暗褐色（酸化氣味）。	内・外面に回転による擦痕あり、割口 に組作痕あり。	常滑焼。
同図3 写29	燒締陶 器要	溝3号（南 須恵大溝）	肩部片。	白・黒色氈物微。焼締ま りあり、暗褐色。	割口は灰色氣味、組作痕あり、外面自 然崩、内面指圧痕あり。須恵器か不詳。 搬入。	東京・県外 搬入。
同図4 写29	燒締陶 器要	J 15	肩部片。	白色氈物粒多い。焼締。 暗褐色（酸化氣味）。	割口に組作痕、内面に指圧痕あり。内 面磨耗氣味。	常滑焼。
同図5 写29	燒締陶 器要	E 8 S 4	体部片。	白色氈物粒多い。焼締。 暗褐色（酸化氣味）。	割口に組作痕、内面に整形擦痕あり、 破片角部磨耗氣味。	常滑焼。
同図6 写29	燒締陶 器要	8チ6i	体部片。	白色氈物粒多い。焼締。 暗褐色（酸化氣味）。	割口に組作痕、外面に刷毛目、内面に 板状工具による整形擦痕あり。	常滑焼。
同図7 写29	燒締陶 器要	基壇2号南 側	体部片。	白色氈物粒多い。焼締。 暗褐色（酸化氣味）。	割口に組作痕、外面に刷毛目、内面に 組作痕と整形擦痕あり。	常滑焼。
同図8 写29	燒締陶 器要	J 18	体部片。	白色氈物粒多い。焼締。 暗褐色（酸化氣味）。	割口に組作痕、外面に刷毛目、内面に 板状工具の整形擦痕あり。	常滑焼。
同図9 写29	燒締陶 器要	E 8 S 4	体部片。	白色氈物粒多い。焼締。 暗褐色（酸化氣味）。	割口に組作痕、外面に叩目、内面に 整形擦痕あり。	常滑焼。
同図10 写29	燒締陶 器要	表採	体部片。	白色氈物粒多い。焼締。 暗褐色（酸化氣味）。	割口に組作痕、外面に叩目・刷毛目、 内面に組作痕と整形擦痕あり。	常滑焼。
同図11 写29	燒締陶 器要	十三宝	体部片。	白色氈物粒多い。焼締。 暗褐色（酸化氣味）。	割口に組作痕、外面に刷毛目、内面に 指圧痕と整形擦痕あり。	常滑焼。
同図12 写29	燒締陶 器要	E 7 S 6	体部片。	白色氈物粒多い。焼締。 暗褐色（酸化氣味）。	割口に組作痕、内・外・外面に組作痕、内 面に整形擦痕あり。	常滑焼。
同図13 写29	燒締陶 器要	E 9 S 4	底 部 片。底 径 (12.1)	白色氈物粒多い。焼締。 暗褐色（酸化氣味）。	割口に底面接合痕、内面に整形擦痕あり。	常滑焼。
同図1 写29	土師質 器石	I 18	径1.9、厚0.7。	白色粒子わずか含む。硬。 淡橙色（酸化氣味）。	土師器より硬調。型合せ作、側部に合 目痕あり、土質は輕い。	製作地不詳。
同図2 写29	土師質 器石	未注記。	半欠品、径1.7。	白色粒子わずか含む。硬。 淡橙色（酸化氣味）。	土師器より硬調。型合せ作、片側剥落。 製作地不詳。土質は輕い。	製作地不詳。

図番号 写真番号	種 器 形	出土位置	量 目 (cm) 残存状態	胎 土・焼成・色調と摘要	備 考
第17図3・4 写真図版29	石板	I 18. 十三宝	側部片、小口部片。	3は、側部が残り左側平面に網状の割込みが施されている。 4は、小口部が残る。細片のため野縞は見えない。	粘板岩。 近代以降。
第18図1 写真図版29	煉瓦	基壇 2号	側部と平側部片。	白色・暗褐色粒子含み、鉱物粒入る。素地のき目は粗でやや軽い。 赤褐色で酸化鉄の発色は鮮やかで、鉄分多しか。	地方製か。 近代以降。
同図2～ 7 写29	近世軟 質陶器	2表探、3 J 16. 4 I 16. 5 J 15 6 K 16. 7 J 17	2底部片、3内耳 盤形底へ体部。4 手焙部片、5火 鉢基部片、6量覚 片、7火鉢口縁部 片。	2は厚手のため、行火、火鉢などの底面か、黒色焼かかかる。 3は内耳が付され、二次被熱のためか煙は微弱である。 4は刷込みと外縁に平行叩伏の押圧痕文あり、黒色焼かかる。 5は外間に押圧痕文あり、内面回転擦痕あり、黒色焼かかる。 6は内・外面部回転擦痕が残り、整形難。淡褐色で煙見えず。 7は外間にカセ多く削刻、内面回転擦。焼かかる。費蓋火鉢か。	地方製。 近世以降。
第19図1～ 12 写真図版29	近世・ 近代陶 器を除き 陶器	1住居跡 8 2-11K 15 3 I 18 4 J 16 5末注記 6・8 K 17 7・12十三 宝 9 J 15 10表探	1体へ口縁部片。 2底へ口縁部片。 3底部片。4体へ～ 口縁部片。5・9・ 10・12体部片。 6・8高台部片。 7・11口縁部片。 8底へ体部片。	1淡灰色で長石質。外面下方露窓。17・18世紀。2皿、高台削出、 内面チム痕、輪は1様。17世紀。3・4磁器、3小口白磁。 4赤釉小环、丸紋、各19世紀。5透明釉碗、胎土灰色。18 世紀頃。6鉢釉鏡で内面のみ施釉、18世紀頃。7内面透明釉、外 面飛散施文、鍋、19世紀末以降。8内面透明釉、鍋、19世紀 末以降。9外透明釉。内面網目焼。皿、17世紀頃。10内面、外 上方に透明釉、鍋、外縁の露胎部に煤付着、19世紀末以降。11鉢、 白土施文、内・外透明釉、水注、19世紀末以降。12割口に磁作痕 あり、外面上方の灰釉軋かかり、便利、19～20世紀。	1・2 美 濃・瀬戸。 3・4伊万 里系。 7・8・10・ 11益子焼か。 9唐津系ほ か不明。近 世以降。
第20図1～4 写真図版30	近代瓦	第20図中1 1枚瓦片。	ほか瓦片。 瓦片。	1は焼瓦のカキアブリ部で、網目・焼焼。 2～4は十能瓦。(補注参照)の側部片で、焼は甘い。	2～4在地 製。
第29図1 現品不明	土師器 坏	基壇 1号 N 1柱穴	径 (12.5)、高 (約 3.5)	本図は、概報Ⅱ作成の整理時の実測図。器形から土師器と考えら れる。そのため側部側は鋸削と横擦か。	現品不明。
同図2 写30	鉄製 鍵・釘	同上	頭・先欠損。長 3 +α。	曲の状態は鍵であるが、内臓は針である。長輪、杖の銷割れが ある。残存不良。欠損は調査時以降。	
同図3 写30	鉄製 釘	同上	頭・先欠損。長 6.3。	先端が曲り、使用釘と考えられる。欠損は調査時以降。長輪、杖 方向に割れがある。残存不良。	
同図4 写30	鉄製 釘	基壇 1号 N	完存、長 10.6。	極めて残存の良い日本の一本で先端にわざか錆ぶくれがある 。頭部は漬し、折り曲げ。	
同図5 写30	土師器 坏	2柱穴		白色粒子、鉱物粒含む。	
同図6 写45種 7	瓦 瓦刀	基壇 1号 N 3柱穴	口縁部片。口径 (12.0)。	口縁部周辺横擦。体部中位に型膚あり、 底面荒削。	
同図7 写30	鉄製 釘	同上	側部片。厚 1.65	白色・褐色粒子、鉱物粒 入る。橙色(酸化気味)。	
同図8 写30	土師器 坏	基壇 1号 N 4柱穴	先は欠損のため使用釘か。頭部は漬し、折り曲げ。先端に錆ぶ くれあり。	表面回転条痕あり、二枚作。裏面に錆 瓦当筋の捺压文あり。側部凹取 2回。	第265図、考 察参照。
同図9 写30	土師器 坏	同上	口縁部片。口径 (13.2)。	白色粒子、鉱物粒含む。	
同図10 写30	鉄製 釘	同上	頭欠損。長 2.4 + α	頭部側の欠損は調査時以降。先が曲っているため使用釘か。銷化 少ない。	
同図11 写30	土師器 坏	基壇 1号 S 1柱穴	底部片。	白色粒子、鉱物粒含む。	墨書銘「大井」 とあり。蓋は丁寧。
同図12 写30	瓦塔 屋蓋	同上	屋蓋部片。	白色粒子、鉱物粒。昔。 暗灰色(芯淡褐色)。	半纏竹管工具施文。裏面に半纏表現ら し岐差と部的に赤色顔料付着。
同図13 写30	鉄製 釘	基壇 1号 S 2柱穴	頭・先欠損。長 9.3 +α。	頭部、先は調査時以降の欠損。中途で曲りがあるため使用釘か。 銷化は長輪方向に極目の銷割れあり。	墨書銘「大 井」。
同図14 写30	土師器 坏	基壇 1号 S 要中央柱穴	口縁部片。口径 (12.0)。	白色粒子、鉱物粒含む。昔。	体部外型膚、底面荒削あり。
同図15 写30	鉄製 釘	同上	先欠損。長 2.4 + α。頭径 3.1。	頭部大きく錆町または新。頭部は別の板金を鍛着か。釘部先の欠 損は調査時以降か不明。	
同図16 写30	鉄製 釘	同上	先・元部欠損。長 4.8 + α。	頭部にして鍛先の側面に刃部がなく、鉄地金も中空状態になり精 鍛に非らず、そのため工具など利器か。	
同図17 写30	須恵器 転用器	基壇 1号 東 南柱穴	口縁部片。口径 (14.4)	白色粒子入。鉱物微。軟。	転用器。錆離右回転初切。
第30図18 写真図版30	土師器 坏	基壇 1号 北 東隅土壤	口縁部片。口径 (11.7)	白色粒子入。鉱物粒。昔。	錆離方向不明。底面未切か。器内は肥 厚し特徴的。
同図20 写30	須恵器 坏	基壇 1号 北 西隅土壤			笠懸製か。

第5篇 検出された遺構と遺物(古代)

図番号 写真番号	種 器形	出土位置	量 目(cm) 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要	備考	
第30回21 写30	土師器 环	基壇1号北 西隅土壤	口縁部片。口径 (12.8)。	白色粒子・鉱物粒入。青。 橙色。	口縁部周辺横擦、端部に煙付焼。体 部下方に型痕、底面鉛削。	油埋付着。
同回22 写30	土師器 壺	同上	口縁~全体部。口径 (14.4)。	白色粒子・鉱物粒入。青。	口縁部内・外側横擦。体部外側鉛削。	
同回23 写30	鉄の椀 形鉢	同上	最長10.5。	表面に旧小形鉢の形成をとどめる。正円状態でないのに端部が 尖らないので伊藤の直径が直接示される訳ではない。		
同回24 写30	鉄製 釘	同上	頭・先欠損。長3.3 +α。	頭・先を欠損する。調査時以降の欠損。部分的に鏽ぶくれがあり 遺失状態は良くない。		
同回26 写30	須恵器 环・椀 速か	基壇1号開 通か	口縁部片、口径 15.6。	白色粒子・鉱物粒多。軟。	外面の繊維目は発達し、多い。口縁部 は肥厚し、特徴的。	培玉・隣接 県製。墨青。
第31回34 写真回版30	鉄製 工具か 釘	基壇1号開 通か	頭・先欠損。長3.0 +α。	頭側と先を欠損する。調査時以降の欠損。上半が急に太くなり、 釘の成り行とは異なり、鋸目もやや良く、工具か。		
同回35 写30	鉄製 釘	同上	完存。長11.4。	頭部が曲り、使用跡。部分的に柱方向の鉛削。鏽ぶくれはあるもの の、残存状況は良好。しかし粗鉛造。		頭太の釘。
同回36 写30	鉄製 釘か	同上	先欠損。長3.3+ α。	先部は調査時以降の欠損。中途に曲りがあるため使用釘か。頭部 の打ち曲げはなく、太い。		頭太の釘。
同回37 写30	鉄製 釘	同上	先欠損。長3.3+ α。	先部は調査時以降の欠損。頭部の打ち曲げはなく、太い。鋸目は やや詰む。		頭太の釘。
同回38 写30	鉄製 飾釘	同上	先欠損。座径3.3, 長5.1+α。	先部は調査時以降の欠損。頭部の座金は、熱圧着らしく、座板金 に釘の頭が突出して見える。		
同回39 写30	鉄製 釘	同上	先欠損。長10.5+ α。	先部は調査時以降の欠損。頭部の打ち曲げはなく、太い。鋸目は やや詰む。		頭太の釘。
同回40 写30	鉄製 鍔か	同上	両端部欠損。最大 長6.6+α。	頂上方の欠損の延長は、そう長くないと見られ、鍔かは疑問あり。 両端は調査時以降の欠損。延方向の鉛削あり、粗鉛造。		
同回41 写30	鉄製 釘	同上	頭・先欠損。長1.8 +α。	両端は調査時以降の欠損。延方向に鉛削れあり、粗鉛造。残存状 況も鏽剥落多く、不良。		
同回42 写30	鉄製 座金か 座金か	同上	小欠損。長7.5、幅 2.1。	地金は、鋸目に伴う鉛削は発達していないため洋鉄か。両側に 折り曲げ痕、且つ凹みあり。小車子などの引手座金か。		洋鉄か。
第36回65 現品不明	須恵器	基壇1号外 南側	底部片。底径(7.1)	本図は概報作成時の遺物実測図面中にあり、現品を探し出すこと はできなかった。		現品不明。
第37回69 写真回版30	鉄製 釘	基壇1号外 南側	先欠損。座径4.2, 長3.3+α。	座金は熱圧着か。鋸目は、粗で延方向に鉛削あり、欠損は調査時 以降である。		
同回70 写30	鉄製 釘	同上	先欠損。長14.1+ α。	欠損は調査時以降。頭部は打ち延ばし、折り曲げ。延方向に鉛削 があり、粗鉛造に見える。		
同回71 写30	鉄製 釘	同上	先欠損。長11.4+ α。	欠損は調査時以降。頭部の折り曲げはなく、頭太の状態となる。 延方向に鉛削あり、やや粗な鉛造。		頭太の釘。
同回72 写30	鉄製 釘	同上	先欠損。長11.4+ α。	欠損は調査時以降。頭部の折り曲げはなく、頭太の状態となる。 延方向に鉛削あり。		頭太の釘。
同回73 写30	鉄製 釘	同上	頭・先欠損。長6.45 +α。	欠損は調査時以降。頭部は欠損するが頭太になる。延方向に鉛削 があり。		頭太の釘か。
同回74 写30	鉄製 釘	同上	下半欠損。長5.1+ α。	欠損は調査時以降。頭部の折り曲げはなく、頭太の状態となる。 延方向に鉛削あり、粗鉛造。		頭太の釘。
同回75 写30	鉄製 釘か	同上	先欠損。長5.1+α +α。	先の欠損は古時か。頭部の折り曲げはなく、頭太の状態となる。 鏽ぶくれが大きい。		頭太の釘か。
同回76 写30	鉄製 釘	同上	下半欠損。長3.6+ α。	先の欠損は調査時以降、頭部を折り曲げ、全体延方向に鉛削があ り、粗鉛造。		
同回77 写30	鉄製 釘	同上	下半欠損。長4.2+ α。	先の欠損は調査時以降。頭部は折り曲げたように見え、延方向に 鉛削があり、粗鉛造。		
同回78 写30	鉄製 釘	同上	先・欠損。長6.6+ α。	先の欠損は調査時以降。頭部は頭太の状態となり、延方向に鉛削 がある。		頭太の釘か。
同回79 写30	鉄製 釘	同上	頭・中途欠損。長 4.05+α。	欠損は調査時以降。鏽ぶくれがあり、中间を大きく欠損し、その 間の長さは不明。		
同回80 写30	鉄製 釘	同上	上半欠損。長2.4+ α。	欠損は調査時以降。鏽ぶくれと、延方向の鉛削による欠失があり、 上半は細くなる。		
同回81 写30	鉄製 釘か	同上	頭・先欠損。長2.1 +α。	欠損は調査時以降。延方向の鉛削による欠失があり、部分的に細 くなる。		
同回82 写30	鉄製 釘か	同上	頭・先欠損。長1.3 +α。	欠損は調査時以降。欠損が多く、釘であるか否か不明。他に破片 が存在するが接合できず		
同回83 写30	鉄製 釘か	同上	単位不明。長2.1 +α。	欠損はないよう見えるが、短小である。全体がわずか鏽ぶくれ の状態にあるが粗鉛造には見えない。釘か不明。		

図 番 号 写真番号	種 器 形	出土位置	量 目 (cm) 残 存 状 態	胎 土・焼 成・色 調 と 描 要	備 考
第37回84 写真図版30	鉄製 板状	基壇 1 号外 南側	二次利用鉄片か。 厚 0.6。	不定方向に細かな割れがあり、錆鉄製を思わせる。横断面は浅い 弧状を呈し、当初は大器物か。頭部は磨耗し、二次利用か。	錆鉄製か。 二次利用か。 スサ入る。
同回85 写30	羽口	同上	端部片。	羽口片で、横断面のとおり、小片となって割れてから以降に高火 度の二次被熱あり。縫合断面の欠損は調査時以降である。	錆鉄か。
第42回100 写真図版30	鉄製 板状	基壇 1 号外 東南側	鉄片。長 4.8+α。 厚 1.4	不定方向に細かな割れがあり、錆鉄製を思わせる。製品の残欠片 で、頭部は角張るため、転用されていないらしい。脇は旧欠損。	錆鉄か。
同回101 写30	鉄製 利器か	同上	長 4.8。	片切刃に見えるが、製品名は不明である。先端部をわずか欠損し、 調査時以降である。	
同回102 写30	鉄製 鍔	同上	長 10.8+α。	両端部は調査時以降である。全体に捻れがあり使用の結果である。 板状方向に鋸割があるが、先達せし、粗緻造ではない。	
第43回111 写真図版31	鉄製 板状	基壇 1 号外 東～北東側	二次利用鉄片か。 厚 0.4。	不定方向に細かな割れがあり、錆鉄製を思わせる。頭部の角張り は丸みをおびるため、元は製品の二次利用か。	錆鉄製か。
同回112 写31	鉄製 板状	同上	二次利用鉄片か。 厚 0.5。	不定方向に細かな割れがあり、錆鉄製を思わせる。頭部の角張り は丸みをおびるため、二次利用か。大きな縫割があり三枚となる。	錆鉄製か。
同回113 写31	鉄製 釘	同上	先欠損。長 4.5+ α。	先は調査時以降の欠損。頭部は折り曲げ。縫割は先達せし、やや 粗緻を思わせる。	
同回114 写31	鉄製 釘か	同上	頭欠損。長 3.0+ α。	上半を欠損しているため、釘と明言できない。欠損は調査時以降。 縫ぐれあり。	
第44回120 写真図版31	土師器 环	基壇 1 号外 北～西南側	口縁～底部片。口 径 (10.5)。	白色粒子含む。昔。暗褐色 口縁部の内・外面に横擦。体部中位に 凹凸。底面に篦削あり。	
同回123 写31	鉄製 釘	同上	先欠損。長 6.3+ α。	先を欠損し、調査時以降の欠損。頭太の頭部となり、板状方向の縫 割少くなく、遺存状態。	頭太の釘。
第45回26 写真図版31	土師器 环	基壇 1 号外 西～西南側	半 欠。 口 径 (12.5)。	白色粒子・氷結含む。昔。 口縁部の内・外面に横擦。体部下半に 瘤型、底面篦削。	
同回128 写31	鉄製 茶托	同上	小破あり。長 12.4。	全体に質感があり、地金は遺存しているらしい。木葉形。見込に 葉脈が刻まれ、元の小孔は虫歎の透窓。	錆鉄製。明 治以降。
同回129 写31	鉄製 釘か	同上	長 3.5。	先・元ともに旧痕どうりで、欠損は不明。三面(断面に図示)に 斜方向の擦痕もしくは付着物がある。	
同回130 写31	鉄製 板状	同上	鉄片。長 5.6。	不定方向に細かな割れがあり、錆鉄か。頭部は磨耗し、種不詳製品 二次利用か。縫合断面は弧形であり、大形品を思わせる。	錆鉄か。二 次利用か。
同回131 写31	鉄製 板状	同上	鉄片。長 2.9。	不定方向に細かな割れがあり、錆鉄製を思わせる。頭部は丸みを おびて磨耗している。旧製品は弧形成と、屈曲部がある。	錆鉄か。二 次利用か。
第52回11 写真図版31	土師器 环	基壇 2 号外 南側。	口～底部片。 口径 (11.9)。	白色粒子・氷結含む。昔。 口縁部の内・外面に擦擦あり、体部中位に 瘤型、底面篦削。	
同回12 写31	須恵器 壺	同上	底～体部片。底径 7.0。	白色粒子・氷結含む。昔。 底縫合右端糸余糸。貼付高台。体部に 縫合目。内面に乾燥の高台圧痕。	
同回13 未掲載	鉄製 金具	同上	長 9.4。欠損あり。	不定方向に細かな割れがあり、錆鉄製を思わせる。端部や後部は 明瞭。芯は中空状態となるが合せかは不明。種不詳。	錆鉄製か。
同回14 写31	鉄製 板状	同上	鉄片。長 5.0+α。	不定方向に細かな割れがあり、錆鉄製を思わせる。縫合断面は弧 形りを呈し、角は磨耗す。旧罐は不詳ながら弧形成は大器表示。	錆鉄製か。 二次利用か。
同回15 写31	鉄製 板状	同上	鉄片。長 2.5	不定方向に細かな割れがあり、錆鉄製を思わせる。縫合断面は弧 形りを呈し、角は磨耗す。弧形成は旧罐が大器であることを示唆。	錆鉄製か。 二次利用か。
同回16 写31	鉄製 捺部分	同上	先欠損。長 3.1+ α。	鎌化顯著。先部は調査時以降の欠損。曲げ捻りは製品として必要 であったらしく整う。	
同回17 写31	鉄製 棒状	同上	完存。長 17.0。	小穴はあるものの箇頭は旧状のまま。縫に捺の縫割が認められ素 延しを物語る。曲りは使用の結果か。やや粗緻造。	
同回18 写31	鉄製 大釘	同上	先欠損。長 25.8+ α。	頭部はやや頭太となる。曲り状態は使用を示唆。征方向に縫割 が認められ、やや粗緻造。	大釘、道路、 中成長。
同回19 写31	鉄製 釘	同上	先欠損。長 6.6+ α。	頭部は、頭大となり、打ち曲げの状態はない。鎌化顯著で遺存 は不良。欠損は調査時以降。征方向の縫割は目立ない。	頭太の釘。
同回20 写31	鉄製 釘	同上	完存。長 7.9。	数少ない完存の釘例。頭部は打ち曲げではなく、頭太のよう である。部分的に縫ぐれの状態となるが征方向の縫割は目立ず。	頭太の釘か。
同回21 写31	鉄製 釘	同上	先欠損。長 7.5× α。	先部は調査時以降の欠損。頭部は頭太りの状態。縫ぐれの状態 にあり、征目縫割が部分的に認められる。やや粗緻造。	頭太の釘。
同回22 写31	鉄製 釘	同上	先欠損。長 5.9+ α。	先部は調査時以降の欠損。頭部は頭太りの状態。捻れ状態は使用 釘。先側に征目縫割が認められ、やや粗緻造。	頭太の釘。
同回23 写31	鉄製 釘	同上	先欠損。長 5.2+ α。	先部は調査時以降の欠損。頭部は頭太りの状態か。鎌化のため不 明瞭。やや曲り状態にあり使用。征方向の縫割あり。	頭太の釘か。
同回24 写31	鉄製 釘	同上	先欠損。長 4.3+ α。	先部は調査時以降の欠損。頭部は頭太りの状態。征方向の縫割あ るが先達していない。	頭太の釘。

第5篇 検出された遺構と遺物（古代）

図 番 号 写真番号	種 器 形	出土位置	量 目 (cm) 残 存 状 態	胎 土・焼 成・色 調 と 摘 要	備 考
第52図25 写真図版31	鉄製 釘	基壇 2 号外 南側	先欠損。長 6.2 + $\alpha_s$	先部は調査時以降の欠損。頭太の頭部で、全体に鏽ぶくれは少ない。柱方向の鋸割はわずかにあり。	頭太の釘。
同図26 写31	鉄製 釘	同上	頭部欠損。長 5.4 + $\alpha_s$	頭部は調査時以降の欠損。全体に鏽化ははだしく、外形線不明瞭。鋸割は発達していない。曲りあり、使用釘か。	
同図27 写31	鉄製 釘か 釘	同上	頭部欠損。長 7.5 + $\alpha_s$	頭部は調査時以降の欠損。部分的に鏽化あり、柱方向の鋸割は目立たない。	
同図28 写31	鉄製 釘	同上	頭部欠損。長 9.5 + $\alpha_s$	先をわずか、頭部を欠損。欠損は調査時以降。全体に鏽化少なく、柱方向の鋸割はほとんど見えない。曲りあり、使用釘か。	
同図29 写31	鉄製 釘	同上	先・頭部欠損。長 7.5 + $\alpha_s$	先・頭部を欠損。欠損は調査時以降。全体に鏽化少なく、柱方向の鋸割あり。わずか曲りあり、使用釘か。	
同図30 写31	鉄製 釘か 釘	同上	先・頭部欠損。長 2.2 + $\alpha_s$	先・頭部を欠損。欠損は調査時以降。全体に鏽化少ないが柱方向の鋸割あり。	
同図31 写31	鉄製 釘か 釘	同上	先・頭部欠損。長 5.4 + $\alpha_s$	先・頭部を欠損。欠損は調査時以降。全体に鏽ぶくれし、柱方向の鋸割あり。曲りあり、使用釘か。	
同図32 写31	鉄製 釘か 釘	同上	上半部欠損。長 2.6 + $\alpha_s$	上半部を大きく欠損する。欠損は調査時以降。全体的に鏽化少ない。先端が L 字形を曲り、使用釘か。鍵にしては小形過ぎる。	
同図33 写31	鉄製 釘か 釘	同上	先・頭部欠損。長 2.8 + $\alpha_s$	先・頭部を欠損。欠損は調査時以降。全体に鏽化多く、柱方向の鋸割あり。	
第53図34 写真図版31	石材 切石片	基壇 2 号外 南側	切石材の破片。	切石（削石）の 2 面が残され、他は破片の割れ口。石材種名は右のとおりであるが、同定時に異質岩片多しとされた。分析番号 937。	流紋岩質凝灰岩、分 937。
同図35 写31	石材 破片	同上	主体材の破片。	拓磨側が主体材の加工面であるか否か、風化し、判然とせず。質は極めて軟らかく、軽い。	流紋岩質凝灰岩、分 938。
同図36 写31	石材 破片	同上	主体材の破片。	拓磨側が主体材の加工面であるか否か、風化し、判然とせず。質は極めて軟らかく、軽い。分析番号 938。	
第62図75 写真図版31	鉄製 板状	基壇 2 号外 南側	鉄片。長 2.2 + $\alpha_s$	不定方向に鏽化進み薄鉄駆か。旧材種は不明であるが角部は丸みを持ち、摩耗している。	薄鉄駆か。二 次利用か。
同図76 写31	鉄製 板状	同上	鉄片。長 3.9 + $\alpha_s$	不定方向に鏽化進み薄鉄駆か。旧材種は不明であるが圓下方断面に屈曲あり。角部は丸みがあり摩耗している。	薄鉄駆か。二 次利用か。
同図77 写31	鉄製 釘	同上	先部欠損。長 5.5 + $\alpha_s$	先部は調査時以降の欠損。頭部は頭太の状態となる。柱方向に鋸割あり。鏽化やすむ。	頭太の釘。
同図78 写31	鉄製 釘か 釘	同上	先・頭部欠損。6.8 + $\alpha_s$	先・頭部は調査時以降の欠損。全体に鏽ぶくれあり。柱方向の鋸割は、部分的に見られる。	
第65図91 写真図版31	鉄製 釘	基壇 2 号外 東側	先部欠損。長 4.5 + $\alpha_s$	先部は調査時以降の欠損。頭部は頭太の状態。全体に鏽ぶくれあり、柱方向の鋸割も部分的に認められる。	頭太の釘。
同図92 写31	鉄製 釘	同上	先・頭部欠損。長 2.8 + $\alpha_s$	先・頭部は調査時以降の欠損。鏽ぶくれ、柱方向の鏽化は少ない。欠損多く、釘と明瞭困難。	
同図93 写31	鉄製 釘	同上	先・頭部欠損。長 5.1 + $\alpha_s$	先・頭部は調査時以降の欠損。鏽化進み残存不良。わずか曲りが認められ、使用釘か、柱方向の鏽化あり。	
第67図105 写真図版31	鉄製 釘	基壇 2 号外 北東側	先鋸割。長 15.2。	先部は柱方向の鋸割。全体に鏽ぶくれは少ない。頭部は頭太となる。頭の小口面は斜方向に傾む。やや曲りあり。使用釘。	頭太の釘。
同図106 写31	鉄製 釘	同上	先欠損。長 8.4 + $\alpha_s$	先部に欠損あり。欠損は調査時以降。中程に鏽ぶくれあり。下半はゆるやかに曲り、使用釘。柱方向の鋸割は発達せず。	頭太の釘。
同図107 写31	鉄製 釘	同上	頭部小片。長 8.4。 $\alpha_s$	頭部に小片あり。下半は大きく曲り、使用釘。柱方向の鋸割は発達せず。頭部は頭太となる。	頭太の釘。
同図108 写31	鉄製 釘	同上	先欠損。長 4.3 + $\alpha_s$	先部に欠損あり、欠損は調査時以降。部分的に柱方向の鋸割はあるが発達せず。頭部は頭太となる。	頭太の釘。
同図109 写31	鉄製 釘	同上	先欠損。長 3.8 + $\alpha_s$	先部に欠損あり。欠損は調査時以降。頭部は打曲げ、折返し。鋸割は発達せず。	
同図110 写31	鉄製 釘	同上	先・頭部欠損。長 8.4 + $\alpha_s$	頭部はわずか、先は大きく欠損する。欠損は調査時以降。柱方向に鏽割が見られる。頭部の成り行は頭太か。	頭太の釘か。
同図111 写31	鉄製 釘か 釘	同上	先・頭部欠損。長 3.6 + $\alpha_s$	先・頭部とも大きく欠損。欠損は調査時以降。全体にやや曲りがあり、使用釘か。柱方向にわずか鋸割あり。	
同図112 写31	鉄製 釘か 釘	同上	先・頭部欠損。長 5.6 + $\alpha_s$	先・頭部とも大きく欠損。欠損は調査時以降。全体にわずか曲りあり、使用釘か。鋸割は発達せず。	
同図113 写31	鉄製 釘	同上	先・頭部欠損。長 3.6 + $\alpha_s$	先・頭部とも大きく欠損。欠損は調査時以降。全体にわずか曲りあり、使用釘か。鋸割見立いが、鏽ぶくれあり。	
同図114 写31	鉄製 釘	同上	先・頭部欠損。長 6.0 + $\alpha_s$	先・頭部とも大きく欠損。欠損は調査時以降。全体に大きく曲り、使用釘か。鋸割少ないと。	
同図115 写31	鉄製 釘	同上	上半部欠損。長 2.5 + $\alpha_s$	上半部を大きく欠損。欠損は調査時以降。先部が少し曲り、使用釘か。部分的に鏽ぶくれがあるが、柱方向の割れは未発達。	

図番号 写真番号	種器形	出土位置	量目(cm) 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要	備考
第67図116 写真図版31	鉄製 釘か	基壇2号外 北東側	上半欠損。長4.9+ $\alpha$ 。	欠損は調査時以降。鏽ぶくれは少なく、柱方向の鏽割れも少ない。 頭部欠損のため釘かは明確でない。	
同図117 写31	鉄製 釘か	同上	上半欠損。長3.4+ $\alpha$ 。	欠損は調査時以降。鏽ぶくれ、ややあり。柱方向の鏽割れは少ない。頭部欠損のため、釘かは明確でない。	
同図118 写31	鉄製 釘か	同上	上半欠損。長3.9+ $\alpha$ 。	欠損は調査時以降。鏽ぶくれ、ややあり。柱方向の鏽割れは少ない。頭部欠損のため、釘かは明確でない。	
第73図143 写真図版31	須恵器 壇	基壇2号外 北側	底部片。台部径 (8.4)。	白色粒物・粒子。硬~ 繊。灰色。 底面に輪轂右回転の糸切。貼付高台。	接続県製。 県外搬入。
同図144 未掲載	鉄製 板状	同上	端部破片。長辺3.5+ $\alpha$ 。	不規方向に、細かな網状より鉄製鋏。割口はやや角ぼる。平面 頂上方に崩端部あり。断面(右側)は反り、横断はやや円弧。	鉄鋏か。製 品種不明。
第74図149 写真図版31	嗣製 鏡	基壇2号外 西側	完全。直径3.3。	表面に「寛永通寶」と字跡あり。背字跡はなく、字跡は全体に細 く、斬永水か。	
第77図157 写真図版31	土師器 小形壺	基壇2号外 近	口~体部片。口径 (9.6)。	白色・褐色粒子・粒物粒 合む。硬。赤褐色。	口縁部の内・外面横擦、体部外面剝削。 壺部内面に研磨痕あり。
第81図1 現品不明	土師器 壺	基壇3号周	口~体部片。口径 (12.1)。	実測図は概報II作成の整理時に、作成された図を使用。形状から 土師器である。	現品不明。
同図7 写31	嗣製 鏡	同上	完存品。直徑3.3。	表面の字跡は「元豊通寶」である。背面字跡はない。字跡はし かししており、遺存は良い。	
同図8 写31	鉄製 釘	同上	下半欠損。長5.2+ $\alpha$ 。	下半部を大きく欠損し、欠損は調査時以降である。全体に鏽ぶく れがある。頭部打延し、折曲げ全体に凹凸があり使用釘か。	頭太の釘。
同図9 写31	鉄製 釘	同上	下半欠損。長10.8 + $\alpha$ 。	下半部を大きく欠損し、欠損は調査時以降である。全体に鏽ぶく れがあり、頭部は頭太となる。	
同図10 写31	鉄製 釘	同上	欠損多い。長8.4+ $\alpha$ 。	中途、先端を大きく欠損し、頭部も鏽ぶくれに覆れ、形状不明瞭。 鏡多く、遺存状態不良である。	
同図11 写31	石製 切石	同上	切石破片。長辺 13.4+ $\alpha$ 。	切石(削石)の破片である。三方向に加工面がある。部分的に工 具刃痕あり、石材は粗質で、軽い。	角岡石鞍山 岩。
第84図1 写真図版31	土師器 壺	寺遺構東北 隅	口縁部欠損。口径 (11.9)。	白色・褐色粒子・粒物粒 合む。昔。橙色。	口縁部の内・外面に横擦あり、体部下 位に型崩、底面に剝削あり。
同図2 写31	土師器 壺	同上	半欠。口径 (12.1)。	白色・褐色粒子・粒物粒 合む。硬。赤褐色。	口縁部に油煙痕あり、その内・外面に 横擦、体部下位に型崩、底面剝削。
同図3 写32	土師器 壺	同上	半欠。口径 (13.2)。	白色粒子・粒物粒合む。 硬。淡橙色。	口縁部の内・外面に横擦あり。体部下 位に型崩あり、底面剝削。
同図4 未掲載	須恵器 蓋	同上	摘み部片。摘部径 3.1。	白色粒子・粒物粒合む。 灰。	摘み中凹みとなる。端部は尖らない。 体部との接合面が割口に見える。
同図5 写32	須恵器 壺	同上	上半部欠損。底径 7.4。	白色粒子・粒物粒微。昔。 底色。	底笠製。
同図6 写31	須恵器 壺	同上	半欠。口径 (12.1)。	白色粒子・粒物粒微。硬。 暗灰色。	接続県製。
同図8 写32	須恵器 瓶	同上	体部片。最大径 (13.8)。	白色粒子・粒物粒多。硬。 暗褐色。	内面に輪轂目隠れ状態であり。外面 に自然釉がかかる。
同図9 写32	須恵器 大形瓶	同上	体部~底部片。底 径(14.8)	白色粒子・粒物粒微。硬。 暗褐色。	内面にゆるやかな輪轂目あり。体部外 面下半に剥削目あり。
同図12 現品不明	土師器 壺	同上	口径(12.0)。	本図は概報II作成時の盤の図による。土師器で、体部下半に剝削。 器内底面が異風で、デフォルメ表現らしい。	接続県製。
同図13 現品不明	土師器 壺	同上	口縁部片。口径 (18.2)。	本図は概報II作成時の盤の図による。体部は荒削。器内と外形が 異風でデフォルメ表現らしい。	現品不明。
同図14 写32	土師器 壺	同上	3分2個体。口径 (10.8)。	白色粒子・粒物粒合。昔。 暗褐色。	内面に油煙物質の付着が あり、形状不明瞭。
第85図1 写真図版32	土師器 壺	寺遺構北西 隅	3分2個体。口径 (11.4)。	白色粒子・粒物粒合。硬。 暗褐色。	口縁部の内・外面横擦、体部外面型崩。 底面おおまか剝削。
同図2 写32	土師器 壺	同上	半欠。口径 (13.6)。	白色粒子・粒物粒微。硬。 暗褐色。	口縁部の内・外面横擦、体部外面下半 の押圧痕、底面平底剝削。
同図3 写32	須恵器 壺	同上	頭部~口縁部片。 口径9.5。	白色粒子・粒物粒合。硬。 暗灰色。	頭部と体部の接合は三段か、割口によ る。頭部・体部間に指の圧痕あり。
同図4 写32	鉄製 釘	同上	下半部欠損。長4.4 + $\alpha$	頭太の釘で、鏽化に石付。大きく鏽ぶくれし、柱方向の鏽割 見えない。欠損は調査時以降である。	頭太の釘。
第86図1 写真図版32	鉄製 不詳	寺遺構J17	下半の欠損不明。 長5.9。	欠損に見える先延長が存在したか不明。頭太の釘のようにも見 えるが確認不明。柱方向の鏽割見えず。	種不明。
同図2 写32	鉄製 釘か	同上	先・頭部欠損。長 2.3+ $\alpha$ 。	両端の欠損は調査時以降。大きく鏽ぶくれあるが、柱方向の割 見えない。頭太の釘のようにも見えるがはっきりしない。	

第5篇 検出された遺構と遺物(古代)

図番号 写真番号	種器形	出土位置	量目(cm) 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要	備考
第86図3 写真図版32	鉄製 釘	寺遺構J17	先・頭欠損。長4.0 +α。	先・頭部は調査時以降の欠損。柱方向の鋸割があり粗造に見える。頭部側は太くなる傾向があり、頭太の釘か。	
4 写32	鉄製 釘	同上	上半欠損。5.8+ α。	上半部は調査時以降の欠損。全体に曲がりあり。使用釘か。焼付 ぐれあり。	
5 写32	鉄製 釘か	同上	先・頭欠損。3.4+ α。	先・頭部は調査時以降の欠損。柱方向の鋸割あり。全体的に焼他 くない。	
6 写32	鉄製 釘か	同上	先・頭欠損。5.0+ α。	先・頭部は調査時以降の欠損。柱方向の鋸割あり。全体的に焼化 多く遺存不良。	
7 写32	鉄製 釘か	同上	先・頭欠損。4.6+ α。	先・頭部は調査時以降の欠損。柱方向の鋸割あり。全体に焼化少 ない。	
8 写32	鉄製 釘	同上	先・頭欠損。4.5+ α。	先・頭部は調査時以降の欠損。柱方向の鋸割目立す。先部に曲り があり、使用釘か。	
第88図1 写真図版32	須恵器 壇	台地東縁	半欠。口径(3.3)。 白色粒子・鉱物粒微。緑。 底面に糸切痕あり。貼付高台。体部上 灰化。	底面に糸切痕あり。貼付高台。体部上 半に鐵錫目、下半に質斑。	接觸製。
第90図1～ 6 写真図版32	鉄製 釘 2・3 釘。 1・4 ～6板 状	南門周辺	1～3・6部分欠 損。2底長3.3、3 長3.3+α。4 4.0、5長4.9。6 長3.4+α。	1 銅化不定方向に細剝離のため鉄錫か。製品種不明である。 2 底板金と釘は熱着らしき。釘頭一部が板金に突出する。 3 欠損は調査時以降。柱方向の鋸割があるが目立ず。 4 銅化不定方向。鉄錫か。角は丸みあり摩耗し、二次利用品か。 5 銅化不定方向。鉄錫か。剥げ口脱く、種々不詳の破片。 6 銅化不定方向に細剝離のため鉄錫か。製品種不明である。	1・6 洋鉄 か。2 鈎釘 か。4・5 銅錫か。4 は二次利用。
第108図1 写真図版32	鉄製 釘	掘立03・18 号	頭部・中途欠損。 長7.2+α。	頭部・中途の欠損は調査時以降。全体に焼化は少ない。柱目の鋸 割、わずかにあり。	
第110図1 写真図版32	鉄製 釘か	掘立04号	先・頭欠損。長3.8 +α。	欠損は調査時以降。焼化著者で遺存不良。柱方向に鋸割は少ない。 先・頭部を押すため釘であるかは不確か。	
第114図1 写真図版32	須恵器 瓶	掘立09号	口縁部片。口径 (9.0)。	白色粒子・鉱物粒。緑。 底面の作行は端正で、横錫目はほとん ど目立ず。	接觸製・ 搬入。
同図3 写32	鉄錫	同上	長5.2。厚2.5。	裏面に炉体の付着があり。輪錫状を成さないが、楕円錫津の類別 に属すると考えられる。外側は炉体の円弧ではない。	
第117図1 現品不明	須恵器 壇	掘立11号	底径(5.7)。	本図は概報II作成時の実測図の淨書図。現品を探し出すことがで きなかった。	現品不明。
第118図1 現品不明	須恵器 壺	掘立15号	底径(7.5)。	本図は概報II作成時の実測図の淨書図。内面に墨痕の注記があり 転用観かもしない。	現品不明。
同図2 写32	鉄製 釘か	同上	先・茎欠損。長4.9 +α。	欠損は調査時以降。縁よくれ、柱目方向の鋸割少なく、粗造 を思わせる。そのため片刃尖根鋸根の可能性が考えられる。	
同図3・4 写32	鉄錫 楕円津	同上	3直径(6.1) 4直径(8.3)	3・4とも底面に炉床面の痕跡あり、とともに外形の円形と底成り の接点の様は、炉床の様を示唆する。楕円津で欠損は旧時。	
第124図1 写真図版32	土師器 壺	掘立21号	ほぼ完崩。口径 11.7。	白色粒子・鉱物粒含む。 口縁部と体部外面に油煙付着。形彫帶 硬。橙色。	油煙付着。
同図2・3 現品不明	土師器 壺	同上	2口径(14.3) 3口径(15.3)	図は概報II作成時の際の固形化で、それを淨書。3は器形が異風で、 直徑が少しあき過ぎるよう見える。	現品不明。
同図3 写32	鉄製 板状	同上	破片。長(4.0)	不定方向に鋸割があり鉄錫を思わせる。角部は丸みをもち、旧材 利用と考えられる。旧種は不詳であるが弧状成す物体。	鉄錫か。二 次利用か。
同図4 写32	鉄製 釘	同上	先・頭欠損。	欠損は調査時以降。焼化著者で遺存不良。柱方向の鋸割あり、全 体に粗造を思わせる。全体に曲りがあり使用釘か。	
第126図1 現品不明	須恵器 壺	掘立22号	底径(6.6)。	概報II作成時の際の図を淨書して掲げた。現品を探し出すことが できなかった。	現品不明。
第130図 3・5～7 写真図版32	鉄製3 釘 5釘か 6板状 7釘	柱穴・ビッ ト関連	3完存。長13.0。 5長4.8+α。 6長5.8+α。 7長7.7+α。	3は頭打ち曲の釘で、焼化は柱目割が進む。数少ない完存例。素 延べの粗造。5は欠損多く、調査時以降。焼化は少なく、柱目 鋸割。	
第133図1 写真図版32	土師器 壺	住居跡02号	口縁部片。口径 (11.8)。	白色粒子・鉱物粒。硬。 口縁部の内・外間に横撹。体部外側下 方以下鋸削。	
同図2 写32	土師器 壺	同号	口縁部片。口径 (12.7)。	白色粒子・鉱物粒。普 通。	
同図3 写32	土師器 壺	同号	口縁部～体部片。 口径(13.8)	白色粒子・鉱物粒。硬。 口縁部の内・外間に横撹。体部の型崩 不明瞭、以下鋸削。	
同図4 写32	土師器 壺	同号	口縁部～体部片。 (15.0)。	白色粒子・鉱物粒。硬。 口縁部の内・外間に横撹。体部の型崩 帯なく鋸削となる。	

図番号 写真番号	種器形	出土位置	量目(cm) 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要	備考
第133図5 写真図版32	土師器 壺	住居跡02号。	口縁～体部片。口径(15.0)。	白色粒子・鉱物含。晩。淡橙色。	口縁部の内・外面横擴。体部中位以下 窓削。窓削は大まかで特徴的。
第134図1 写真図版32	土師器 壺	住居跡03号。	口縁部片。口径(11.2)	白色粒子・鉱物含。硬。橙色。	口縁部の内・外面横擴。体部下半以下 窓削。型崩不明瞭。
同図2 写32	土師器 壺	同号	口縁～体部片。口径(12.1)。	白色粒子・鉱物微。橙色。	口縁部の内・外面横擴。体部中位に型 崩。以下窓削で大きめ。
同図3 写32	土師器 壺	同号	口縁～底部片、口径(12.1)。	白色粒子・鉱物や多い。硬。暗橙色。	口縁部の内・外面横擴。体部中位に型 崩。以下窓削で、大まか。
同図4 写32	土師器 壺	同号	口縁部片。口径(13.3)。	白色粒子・鉱物含。硬。橙色。	口縁部の内・外面横擴。体部中位の型 崩不明瞭。中位以下窓削。
同図5 写32	土師器 壺	同号	3分2個体。口径(12.6)。	白色粒子・鉱物微。硬。暗橙色。	口縁部の内・外面横擴。体部中位の型 崩不明瞭。中位以下窓削。
同図6 写32	土師器 壺	同号	口縁～底部片。口径(15.4)。	白色粒子・鉱物微。晩。暗橙色。	口縁部の内・外面横擴。以下窓削は大 まかで特徴的。
同図7 写32	須恵器 壺	同号	体部～底部片。口径(7.0)。	白色粒子・鉱物微。晩。灰色。	底面系切。体部外面鍵織目あり。体部 の立上は急である。
第136図1 写真図版32	土師器 台付壺	住居跡04号	脚部片。脚部径6.3。	白色粒子・鉱物含。晩。橙色。	上半部欠損し。割口は丸みをおびる。 内面凹の当り、脚部内に紐作痕あり。
同図2 写32	土師器 壺	同号	部分小欠あり。器高26.6。口径20.6。	白色粒子・鉱物含。硬。暗橙色。	唯一の復元要例。口縁～頭部の内・外 面横擴。体部外面窓削。
同図3 写33	須恵器 壺	同号	底～体部片。底径8.6。	白色粒子・鉱物微。軟。灰黄色。	底面系切。体部と底部との間に挽出し 凹み長くあり。内・外面鍵織目あり。
同図4 写33	須恵器 壺	同号	底～体部片。高台径9.3。	白色粒子・鉱物含。軟。淡灰色。	貼付高台。底面系切。全体に施成甘い。 底部窓口に縄の透き間あり。
第138図1 写真図版33	土師器 壺	住居跡06号。	底～口縁部片。口径(12.5)。	白色粒子・鉱物含。軟。橙色。	口縁部の内・外面横擴。体部～底部に 窓削あり。肩はおおむか。
同図2 写33	土師器 台付壺	同号	台部片。台端部径(9.6)。	白色粒子・鉱物含。硬。暗橙色。	内・外面に横擴あり、外面横擴は矢印 に鉱物移動あり。
同図3 写33	土師器 壺	同号	脚部片。	白色粒子・鉱物含。晩。橙色。	内面に紐作痕と絞目あり。器面は全体 に滑らかで風化気味。
同図4 写33	土師器 壺	同号	口縁部片。口径(23.8)。	白色粒子・鉱物含。硬。橙色。	図は、写真で見る小片からの測定で5 とは別個体。口縁部の内・外面横擴。
同図5 写33	土師器 壺	同号	口縁部片。口径(23.8)。	白色粒子・鉱物含。硬。橙色。	図は、写真で見る小片からの測定。口 縁部の内・外面横擴があり。
同図6・7 現品不明	須恵器 壺・甕	同号	6口径(13.2)。 7口径(13.0)。	両割も、概報II作成時の図を証した。7は小形甕で外形線の 傾きが、少し異風で、もう少し傾斜するように思える。	6・7現品 不明。
第139図1 写真図版33	土師器 壺	住居跡08号	口縁～底部片。口径(12.2)。	白色粒子・鉱物含。硬。橙色。	口縁部内・外面横擴。体部中位～上方 に型崩、以下底部に窓削あり。
同図2 写33	土師器 壺	同号	口縁～底部片。口径(12.2)。	白色粒子・鉱物含。硬。橙色。	口縁部内・外面横擴。体部中位に型崩 あり、以下底部まで窓削あり。
同図3 写33	土師器 甕	同号	口縁～体部片。口径(20.2)。	白色粒子・鉱物含。晩。淡橙色。	甕部外面に紐か型崩か不明瞭であるが 跡跡あり。肩部は窓削あり。
6・7 写33	鉄製 釘	同号	6近尖。長8.0。 7長6.0+α。	6部分的に鏽こぶあり、柱目納割あり、頃太の釘。ほぼ完形。7 柱目方向に納割あり、頭太の釘。欠損は調査後以降である。	6・7頭太 の釘。
8 写33	石材 破片	同号	破片。最長長部 14.8+α。	製品の断片で、加工面は2面のみ残存。全体に風化し、旧態の崩 れは不明瞭。質は極めて軟質で軽い。電材に利用か。	流紋岩質 灰岩。
第140図1 現品不明	須恵器 小形瓶	住居跡09号	最大径12.5。	概報Iから引用し、再掲示した。写真によれば、標目目が多くあ るよう見えるが、体部下部は回転窓削かはわからない。	現品不明。
第144図1 写真図版33	土師器 壺	同号	口縁～体部片。口径(14.0)。	白色粒子・鉱物微。軟。明橙色。	口縁部の内・外面に横擴あり。接部以 下おおむかなる鋸歯。作調丁寧。
同図2 写33	土師器 壺	同号	口縁～頸部片。口径(19.2)。	白色粒子・鉱物含。硬。明橙色。	口縁部の内・外面横擴。部分的に紐作 痕(型作であっても)あり。以下窓削あり。
同図3 写33	土師器 甕	同号	口縁～頸部片。口径(19.0)。	白色粒子・鉱物含。硬。明橙色。	口縁部の内・外面横擴と紐作痕(型作 であっても)あり。以下窓削あり。
同図4 写33	土師器 甕	同号	口縁～頸部片。口径(25.4)。	白色粒子・鉱物含。硬。明橙色。	大形なので長拵でなく壺形か。肩部以 下窓削。上方は内・外面横擴。
第146図1 写真図版33	土師器 壺	住居跡11号	底部片。	白色粒子・鉱物含。硬。明橙色。	外底窓削。内面邊とみられる樹脂付 着。それは暗茶褐色を呈す。
同図2 写33	土師器 鉢	同号	口縁～体部片。口径(21.7)。	白色粒子・鉱物含。硬。明橙色。	小片からの測定。口縁部の内・外面横 擴。外底窓削あり。
					稀少、鉢形。

第5篇 検出された遺構と遺物(古代)

番号 写真番号	種 器 形	出土位置	量 目(cm) 残 存 状 態	胎 土 ・ 成 形 ・ 色 調 ・ 概 要	備 考
第146図3 写真図版33	土師器 壺	住居跡11号	底部片。底径 (8.0)。	白色粒子・鉱物含。軟。淡橙色。	内面に凧ハゼあり。底面割口に粘土接合面見る。全体に磨耗あり、風化。
同図4 写33	須恵器 壺	同号	底部・体部片。底径 (6.8)。	白色粒子・鉱物含。普。灰色。	底面回転削形あり。底部と体部の間に掏出の凹みあり。
同図5 写33	須恵器 壺	同号	体部片。	白色粒子・鉱物含。繊。暗灰色。	外面上自然釉かかる。内面に紐作痕と浅い同心円の当目あり。
第150図1 写真図版33	土師器 壺	住居跡13号	口縁部片。口径 (19.4)。	白色粒子・鉱物含。硬。明橙色。	外面上粗筋痕あり。口縁部内・外面横撫面内面擦痕以外に鋸削痕あり。
第152図1 写真図版33	土師器 壺	住居跡14号	口縁部片。口径 (16.2)。	白色粒子・鉱物含。軟。淡橙色。	外面上粗筋痕あり。形状は異風であるが、長胴化初頭の壺片。
第154図1 現品不明	土師器 壺	住居跡15号	口径12.8.	概報II作成時の原図の淨書図で内面に、剥落部の記入があるので 白ゼカ。現品を探し出すことはできなかった。	現品不明。
同図2 写33	土師器 壺	同号	3分2個体。口径 (12.2)。	白色粒子・鉱物含。硬。淡橙色。	口縁部の内・外面横撫。体部中位茎、以下鋸削あり、大まか。
同図3 写33	土師器 壺	同号	3分2個体。口径 14.8.	白色粒子・鉱物含。硬。橙色。	口縁部の内・外面横撫。体部中位茎、以下鋸削あり、作溝丁寧。
第160図1 現品不明	土師器 壺	住居跡19号	口径12.4.	概報II作成時の原図の淨書図である。側部の記入がなく技法不明 瞭であるが、図面に従うと、上方より横撫、型削帶、鋸削か。	現品不明。
同図2 写33	須恵器 壺	同号	体部片。	白色粒子・鉱物含。硬。灰色。	外面上平行切後撫消。内面同心円の当目 あり。
第163図1 現品不明	土師器 壺	住居跡20号	口径12.3。	概報II作成時の原図の淨書図である。側部記入なく不明瞭である が底面は鋸削と考えられる。現品を探し出すことができなかった。	現品不明。
同図2 現品不明	土師器 壺	同号	口径12.4.	概報II作成時の原図の淨書図である。側部に横撫下端縞、型削、鋸削か。 以下に鋸削が表現されている。現品の発見はできなかった。	現品不明。
第165図1 写真図版33	土師器 壺	住居跡21号	口径22.5。 口縁部片。	白色粒子・鉱物含。硬。淡橙色。	内・外面横撫あり、以下外面削形。頸部コ字状を呈す。
同図2 写33	土師器 壺	同号	口径23.4。 口縁部片。	白色粒子・鉱物含。普。橙色。	内・外面横撫あり、以下外面鋸削。頸部コ字状を呈す。
同図3 写33	土師器 壺	同号	頸部径20.0。	白色粒子・鉱物含。硬。明橙色。	内・外面横撫あり、割れ口に紐作(型 作であっても)痕あり。頸部コ字状。
第167図1 現品不明	土師器 壺	住居跡22号	口径14.2。	概報II作成時の原図を淨書。内面に放射状と考えられる暗紋あり。 圓形狀から東毛地域とを考えられる。	暗紋あり。 現品不明。
同図2 写33	土師器 壺	同号	体部片。	遺物量が少ないため破片を掲げた。外身上斜方向からの裏面あり。 内面と割口に紐作痕あり。器内と紐作痕から壺と考えられる。	
同図3 写33	土師器 壺	同号	体部片。	遺物量が少ないため破片を掲げた。外表面の整形痕不明瞭。器内 の作調から壺と考えられる。	
第169図1 写真図版33	土師器 壺	住居跡23号	口縁・体部片。口 径(12.4)。	白色粒子・鉱物含。普。淡橙色。	体部下方の内・外に保付着。口縁部内・ 外面上横撫。体部中位外面凹凸あり。
同図2 写33	須恵器 壺	同号	口縁部片。口径 (15.4)。	白色粒子・鉱物含。硬。淡灰色。	外面上下方より天井部に至るまで輪轍 目あり。口縁部端形狀特徴的。
同図3 写33	須恵器 壺	同号	底部・体部片。底 径(5.7)。	白色粒子・鉱物含。繊。灰色。	大きく外傾する体部。器内薄い。底面 輪轍右回転系切あり。
同図4 写33	須恵器 壺	同号	体部片。	白色粒子・鉱物含。繊。灰色。	壺ではなく蓋かもしれない。底面はや 丸底氣味。形状異風。
同図5 写33	須恵器 壺	同号	底部・体部片。高 台径(7.2)。	白色粒子・鉱物含。硬。白色。	貼付高台。高台端部の形状異風である。 同窓跡群中の製品中に同形未見。
第172図1 写真図版34	土師器 壺	住居跡25号	上半欠。残存高 3.4.	白色粒子・鉱物含。普。淡橙色。	割口は磨耗する。外面上紐が型削かの 痕跡あり。作調粗雑な感あり。
同図2 写34	土師器 壺	同号	口縁部片。口径 (14.4)。	白色粒子・鉱物多。硬。橙色。	口縁部の内・外面上横撫あり。頸部の 下方鋸削あり。
同図3 写34	土師器 壺	同号	下半部欠。口径 (20.4)。	白色粒子・鉱物含。硬。明橙色。	口縁の内・外面上横撫あり。頸部に紐 作痕あり。
同図4 写34	須恵器 壺	同号	口縁部片。口径 (14.0)。	白色粒子・鉱物含。繊。灰色。	口縁部片で、いく分外反する。器面は 擦めて平滑。土味に起因か。
同図5 写34	須恵器 壺	同号	ほぼ完器。口径 14.0。器高5.5。	白色粒子・鉱物含。軟。灰色。	輪轍目は目立ず。高台貼付。底面尖切。 口縁部の外反は端反り気味。
同図6 写34	須恵器 壺	同号	3分1個体。口径 (14.4)。	白色粒子・鉱物含。軟。淡黃褐色。	口縁部内・外面上横撫。体部外面凹凸。 部分土剥技術。
同図7 写34	須恵器 壺	同号	2分1個体。口径 (14.8)。	白色粒子・鉱物含。軟。淡黃褐色。	東毛地域か 輪轍目。底面糸切貼付高台。 内面に被熱が顯著にあり。

図番号 写真番号	種器形	出土位置	量目(cm) 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要	備考	
第172図8 未掲載	須恵器 壇	住居跡25号 床面	底部片。高台部径 (6.7)。	白色粒子・鉱物微。昔。 灰色。	底面は滑で切離痕見えず。貼付高台。 体部の内・外も平滑。	隣接県か。
同図10 写34	須恵器 高台盤	同号	高台部片。高台部 径(12.2)。	白色粒子・鉱物含。軟。	底面軽轆右回転の剥削。付高台。器内 外・平滑である。	笠懸製。
第173図12 ~18 写真図版33	鉄製 釘。	同号	12長3.4+α。 12~15 14長5.8+α。 16~17 17長3.8+α。 18長い 鉄滓か。	12は頭打折曲の釘で、中途に曲りあり使用釘。杖目錫割目立す。 13は頭打折曲の釘で、中途に彎こより、杖目錫割目立す。 14は頭打折曲の釘で、中途に曲りあり、使用釘。杖目錫割見えず。 15は中途に曲りがあり、使用釘。彎ぶくれあり、欠損調査時以降。 16は頭部・先部欠損。欠損は調査時以降。現存不良。 17は頭部・先部欠損。横側も半分欠損。欠損は調査時以降。 18は鉄滓か原料鉄か不明。部分的に彎ぶくれあり。この類は第323 図73にもう1例あり。	18長い鉄滓 か原料鉄。	
第175図1 写真図版34	土師器 壺	住居跡26号	3分2個体。口径 13.4。	白色粒子・鉱物含。硬。 橙色。	口縁部の内・外面横撫。体部外凹凸 あり、以下鋤削。底面砂付着。	底面に砂付 着。
同図2 写34	土師器 甕	同号	口縁部片。口径 (19.3)。	白色粒子・鉱物含。硬。 暗褐色。二次被熱。	口縁部の内・外面横撫あり。体部外面 鋤削あり。	
同図3 写34	土師器 甕	同号	口縁~体部片。口 径(20.4)。	白色粒子・鉱物含。硬。 淡褐色。二次被熱。	口縁部の内・外面横撫。頭部作成痕(型 作であっても)。体部外面鋤削。	
同図4 写34	土師器 甕	同号	口縁~体部片。口 径(18.4)。	白色粒子・鉱物含。昔。 淡褐色。二次被熱。	口縁部の内・外面横撫。頭部作成痕(型 作であっても)。体部外面鋤削。	
同図5 写34	土師器 甕	同号	口縁~体部片。 口径(20.2)。	白色粒子・鉱物多。硬。 橙色。二次被熱。	口縁部の内・外面横撫。体部外面鋤削。 鋤削位置頭部におよび異風。	
同図7 写34	土師器 甕か	同号	底部~体部片。低 径4.4。	白色粒子・鉱物含。硬。 淡褐色。二次被熱。	底部まで鋤削あり。内面に窓の当り あり。甕の底部か。	
同図8 写34	須恵器 壇	同号	小欠あり。口径 15.0。器高5.4。	白色粒子・鉱物含。軟。 淡灰色。	体部に細かい繊維目多くあり。底面轆 右回転糸切あり。口縁肥厚する。	隣接県製。
同図9 写34	須恵器 壇	同号	中破あり。口径 14.6。	白色粒子・鉱物微。軟。 暗褐色。	体部の繊維目少なく浅い。底面轆右 回転糸切あり。	隣接県製。
同図10 写34	灰釉陶 甕	同号	口縁部片。口径 (14.6)。	鉱物成。緋。淡灰色。 赤褐色。	内・外面上灰釉施釉。口縁端部肥厚 する。器肉薄い。	搬入。
第177図1 写真図版34	土師器 鉢	住居跡27号	口縁~体部片。口 径(17.5)。	白色粒子・鉱物微。軟。 淡褐色。	口縁部の内・外面横撫あり。体部外面 型崩あり、以下鋤削。	
同図3 写34	土師器 鉢	同号	口縁~体部片。 口径(24.1)。	白色粒子・鉱物含。昔。 暗褐色。	口縁部の内・外面横撫あり。体部外面 型崩あり、以下鋤削。	
同図4 写34	土師器 壺	同号	口縁~体部片。口 径(12.5)。	白色粒子・鉱物含。軟。 赤褐色。	口縁部の内・外面横撫あり。体部外面 型崩不明瞭。外面部鋤削以下鋤削。	
同図5 写34	土師器 甕	同号	口縁~体部片。口 径(18.0)。	白色粒子・鉱物微。昔。 橙色。	口縁部の内・外面横撫あり。頭部に沈 線あり、頭部以下鋤削。	
同図6 写34	土師器 甕	同号	口縁部片。口径 (21.6)。	白色粒子・鉱物微。硬。 淡褐色。	口縁部の内・外面横撫あり。頭部に紐 作(型作であっても)。底。以下鋤削。	
同図7 写34	土師器 甕	同号	口縁部片。口径 (20.2)。	白色粒子・鉱物含。軟。 暗褐色。二次被熱。	口縁部の内・外面横撫あり。頭部に紐 作(型作であっても)。底。以下鋤削。	
第178図8 写真図版34	土師器 甕か	同号	体部~底部片。底 径3.6。	白色粒子・鉱物含。硬。 暗褐色。二次被熱。	体部外面鋤削。やや肉まかである。器 肉は薄い。内面窓の当りあり。	
同図9 写34	土師器 甕	同号	口縁~体部片。口 径(21.2)。	白色粒子・鉱物含。硬。 明褐色。	口縁部の内・外面上横撫あり。頭部に紐 作(型作であっても)。底。以下鋤削。	
同図10 現落不明	須恵器 壺	同号	口径13.4	概報II作成時の因より淨書。内・外面上に付着している。外面にハ ビ剥落あり。大きな繊維目目あり。底面糸切との注記あり。	現品不明	
同図11 写35	須恵器 壺	同号	半欠。口径 (13.2)。	白色粒子・鉱物含。軟。 暗灰色。	底面軽轆右回転糸切あり。外面に繊維 目目あり。器肉厚い。	隣接県製。
同図12 写35	須恵器 皿	同号	底部片。底径 (6.7)。	白色粒子・鉱物含。軟。 灰色。	器肉薄く特徴的。底面軽轆右回転糸 切あり。	隣接県製。
同図13 未掲載	須恵器 壺か	同号	口縁部片。口径 (12.5)。	白色粒子・鉱物微。硬。 灰色。	口縁部は外反。肥厚。器肉薄く特徴的。 体部に繊維目あり。	隣接県製。
同図14 写35	須恵器 壺か	同号	口縁~体部片。口 径(13.4)。	白色粒子入・鉱物含。軟。 暗褐色。	器肉は厚く、大まかな繊維目あり。器 肉凹は異風。	隣接県製。
同図15 写35	須恵器 壺か	同号	口縁~体部片。口 径(15.5)。	白色粒子・鉱物多。硬。 灰色。	体部外面に繊維目あり。ゆるやかに外 反は群馬県内多い。	笠懸か隣接 県製。
同図16 写35	須恵器 壺か	同号	口縁~底部片。口 径(15.0)。	白色粒子・鉱物含。軟。 灰色~黄灰。二次被熱。	口縁部埋理痕。全体的に二次被熱。外 面に浅い繊維目あり。	隣接県製か。 油埋付着。

第5篇 検出された遺構と遺物（古代）

図 番 号 写真番号	種 器 形	出土位置	量 目 (cm) 残 存 状 態	胎 土・焼 成・色 調 と 摘 要	備 考	
第178図17 写真図版35	須恵器 壺	住居跡27号	底 部 片。底 径 (7.2)。	白色粒子・氷物含。軟。底面輪縫右回転糸切。高台貼付。全体にやや磨耗する。	県内・隣接県製。	
同図18 写35	須恵器 壺	同号	口縁～底部片。口 径 (14.6)。	白色粒子・氷物微。硬。底面未切後、高台貼付。底側が特徴的に厚くなる。	隣接県製。	
同図19 写35	須恵器 壺	同号	半 欠。口 径 (14.5)。	白色粒子・氷物含。繩。底面未切後、高台貼付。部の内・外に浅い輪縫目多い。	隣接県製。	
同図20 写35	須恵器 壺	同号	半 欠。口 径 (14.6)。	白色粒子・氷物含。繩。底面輪縫右回転糸切。高台貼付。体部内・外に外縁輪縫目大まかで深い。	隣接県製。	
同図21 写35	須恵器 壺	同号	口縁部欠。底 径 (8.4)。	白色粒子・氷物含。硬。底面に輪縫右回転糸切。高台貼付。全体の瓶端部に油煙が保付着。	県内・隣接県製。	
同図22 写35	須恵器 把手瓶	同号	残 存 部 最 大 径 (27.8)。	白色粒子・氷物微。繩。外面上に自然輪あり。割口に紐作痕。内面に輪縫目あり。	県内・隣接県製。	
同図24 写35	須恵器 大甕	同号	体部下方片。	白色粒子・氷物多。繩。外縁平付印後。撲。内面組作痕あり。外面上に墨かかる。	県内・隣接県製。	
第179図26 写35-25	灰釉陶 小甕	同号	口縁部片。	氷物粒微。繩。淡灰色。内・外面に灰釉かかる。口縁端部は小さく丸く外返する。	搬入。	
同図29 写35-28	灰釉陶 瓶	同号	底部～体部片。底 径 (6.6)。	氷物粒微。繩。淡灰色。内・外面に漫し掛の灰釉かかる。底面は回転削削後、高台付着。	搬入。	
同図31 写35-30	灰釉陶 瓶	同号	底部～体部片。底 径 (6.5)。	氷物粒微。繩。淡灰色。内・外面に漫し掛の灰釉かかる。底面は回転削削後、高台付着。	搬入。	
同図33～44 写35	鉄製	同号	33 残存長 5.4+α。 33刀子 34不明 35釘か 36釘か 37不明 38～42 43釘か 44板状	33次掘査時以降。茎先に研出棱あり。鋸削少なく鋸歯。 34鋸削少なく粗粒。中央に小孔あり。欠損は調査時以降。 35残存長 3.6+α。 35釘か 36残存長 2.4+α。 37残存長 4.8+α。 38長 10.6+α。 39完全。長 6.8。 40長 3.0+α。 41長 3.4+α。 42長 5.0+α。 43長 5.4+α。 44残存長 3.2+α。	33次掘査時以降。茎先に研出棱あり。鋸削少なく鋸歯。 34鋸削少なく粗粒。中央に小孔あり。欠損は調査時以降。 35残存長 3.6+α。 35釘か 36残存長 2.4+α。 37残存長 4.8+α。 38長 10.6+α。 39完全。長 6.8。 40長 3.0+α。 41長 3.4+α。 42長 5.0+α。 43長 5.4+α。 44残存長 3.2+α。	44は洋鉄か。 ほかは古代鉄製。
同図45 写35	石製 砕石	同号	部分欠損あり。長 10.4+α。	刃傷あり。全体に系巻巻になり、合せは少なかったらしい。	流紋岩。	
同図46 写35	石製 砕石	同号	欠損あり。長 8.6+α。	トーン部は、川原時の原石面で未使用。三方向の面に使用面あり。川原石の採集使用か。採集者は原石産出地（西毛）の人々。	砥沢石（流紋岩）。	
同図47 写35	石製 小形砥	同号	完存品。長 4.6。	絶じて五面体になり、先尖りで、平面上方、左側面に刃ならしの条痕あり。小形砥の出土例は少なく稀少な遺物。	砥沢石（流紋岩）。	
同図48 写35	石製 磨き石	同号	欠損あり。長 8.6。	平面加工がわずかに磨耗があるが、硬質部がわずかに高くなるので金属用ではないらしい。欠損は旧時。	溶結凝灰岩。	
同図49 写35	石 同号		長径 2.6。	自然石の川原石をさし小円錐で、こうした小円錐は、住居跡から時おり出土する。色は暗い鐵褐色。	チャート。	
第180図1 写真図版35	土器器 壺	住居跡28号	口縁～体部片。口 径 (12.2)。	白色粒子・氷物微。軟。淡褐色。	油煙付着。	
同図 2 写35	土器器 壺	同号	口縁～体部片。口 径 (21.2)。	白色粒子・氷物微。軟。淡褐色。	口縁の内・外面に横擦あり。頭部扭作（製作でも）痕。以下範囲。	
同図 3 写35	須恵器 壺	同号	底部片。高台端部 (12.0)。	白色粒子・氷物多。繩。底面は圓筒目。内面継縫による輪縫目あり。	埼玉県製か。穿孔か。	
同図 4 写35	鉄製 鉗	同号	先欠損。長 4.0+α。	欠損は調査時以降。頭部は頭太く、打折曲げか不明。鋸化少なく茎目方向の鋸削少ない。		
第182図 1 写真図版55	土器器 壺	住居跡29号	口縁 部 分。口 径 (12.6)。	白色粒子・氷物微。シルト質。軟。淡褐色。	縫隙開。	
同図 2 写真図版35	土器器 壺	同号	2 分 1 個体。口 径 (12.0)。	白色粒子・氷物微。硬。口縁部の内外面横擦あり。体部に型膚があり。底面大まかな窪形。平底臭味。	煤か漆か不詳付着。	
同図 3 写35	土器器 壺	同号	底 面 欠。口 径 (12.1)。	白色粒子・氷物微。硬。口縁部の内・外面横擦あり。体部に型膚あり。以下底面窪削あり。		
同図 4 写35	土器器 壺	同号	小破 あり。口 径 12.2。	白色粒子・氷物含。硬。明橙色。	口縁部の内・外面に横擦あり。体部に型膚あり。以下底面窪削あり。	
同図 6 写35	土器器 壺	同号	完器。口 径 11.6。器高 3.4。	白色粒子・氷物含。硬。明橙色。	口縁部の内・外面に横擦あり。体部に型膚あり。底中央に小凹み。	

図番号 写真番号	種 器形	出土位置	量 目(cm) 残存状態	胎土・焼成・色調と構要	備考
第183図8 写真図版35	土師器 台付壺	住居跡29号	口縁~脚頭部。口 径(14.6)。	白色粒子・鉱物微。硬。 橙色。	写真並み気味、因修正済。頸部紐作痕、 内外接痕。体部外腹剥削。
同図9 写35	土師器 壺	同号	口縁~体部片。口 径(15.0)。	白色粒子・鉱物微。昔。 橙色。	口縁部内・外面横擦。頸部紐作(型作 でも)痕。体部外腹剥削。
同図10 写35	土師器 壺	同号	口縁~体部片。口 径(19.4)。	白色粒子・鉱物微。昔。 橙色。	口縁部の内・外に横擦あり。頸部以下寛 削。口作と頸部に器内の特徴あり。
同図11 写36	土師器 壺	同号	口縁~頸部片。口 径(21.2)。	白色粒子・鉱物微。昔。 橙色。	口縁部の内・外に横擦あり。推方向内・ 外不一致。頸部以下寛削あり。
同図12 写36	土師器 壺	同号 埋土	口縁~体部片。口 径(21.2)。	白色粒子・鉱物微。硬。 暗褐色。二次被熱。	口縁部の内・外に横擦あり。以下体部 外腹剥削あり。
同図13 写35	土師器 壺	同号	口縁部片。口徑 (23.4)。	白色粒子・鉱物微。昔。 橙色。	口縁部の内・外面に横擦あり。推方向 は内外一致している。
同図14 写36	土師器 壺	同号	口縁~頸部片。口 径(19.3)。	白色粒子・鉱物微。昔。 淡橙色。	口縁部の内・外面横擦。頸部紐作(型 作でも)痕あり。頸部以下寛削。
同図15 写36	土師器 壺	同号 埋土	口縁~体部下半。 口径20.6。	白色粒子・鉱物含。硬。 橙色。	口縁部の内・外横擦。頭部紐作(型作 でも)痕。体部中位接合面、器外寛削。
同図16 写36	土師器 壺	同号	底部片。底径4.0。	白色粒子・鉱物微。軟。 橙色。二次被熱。	体部外腹寛削。寛削大まで上手。器 外寛削文あり。
同図17 写36	土師器 壺	同号	底部片。底径 (4.0)。	白色粒子・鉱物微。昔。 橙色。	体部外腹寛削。内底面、寛の当たり跡あ り。器内薄い。
同図18 写36	土師器 甕	同号 床面	底部片。底径 (3.4)。	白色粒子・鉱物微。昔。 橙色。	体部外腹寛削。寛削大まで上手。器 肉薄い。
第184図19 写真図版36	須恵器 皿	同号	3分1個体。口徑 (17.2)。	白色粒子・鉱物含。軟。 灰色。	全体焼歪。体部に織目あり。器肉を 薄く焼き。上手。糸切。
同図20 写36	須恵器 皿	同号 埋土	2分1個体。口徑 (14.8)。	白色粒子・鉱物含。硬。 灰色。	体部の内・外面に織目あり。器肉は 厚く、内・外織目整然と。右回転。
同図21 現品不明	須恵器 壺	同号	口径12.6。	概報II作成時の図の証書図で、現品を探し出すことができなかっ た。織目単位は多くないようである。	現品不明。
同図22 写29	須恵器 壺	同号 埋土	2分1個体。口徑 12.1。	白色粒子・鉱物含。昔。 黒灰色。	体部の内・外面に織目あり。器肉を 薄く取る特徴的。織目右回転糸切。
同図23 現品不明	須恵器 壺	同号	口径13.0。	概報II作成時の図を証書。体部外腹に織目あり。器肉は薄作り で、上手。口縁部の肥厚状態に特徴あり。	現品不明。
同図24 写36	須恵器 壺	同号	口縁~底部片。口 径(12.6)。	白色粒子・鉱物微。硬。 灰色。	底面未切。体部織目あり。器肉は厚 く、特徴的。埼玉県北部に多い形態。
同図25 写36	須恵器 壺	同号 埋土	2分1個体。口徑 (13.2)。	白色粒子・鉱物微。硬。 灰色。	底面未切。体部に織目あり。器肉は 薄く特徴的。底端に突出の凹み。
同図26 写36	須恵器 壺	同号	小破あり。口径 13.3。	白色粒子・鉱物含。軟。 暗灰色。	底面糸切。織目右回転。体部に織目 あり。底面の器肉厚く特徴的。
同図27 写36	須恵器 壺	同号 埋土	2分1個体。口徑 13.4.	白色粒子・鉱物含。綿。 暗灰色。	底面織目右回転糸切。体部に織目あ り。底端に突出の凹み。
同図28 写36	須恵器 壺	同号 床面	口縁部片欠損。底 径(6.0)。	白色粒子・鉱物含。綿。 暗灰色。	内面に擦痕あり、顯著。体部に織目。 底面右回転糸切あり。
同図29 写36	須恵器 壺か	同号	口縁~体部片。口 径(13.0)。	白色粒子・鉱物含。硬。 灰色。	体部外腹に多数の浅い織目あり。内 面平滑で、器内は薄い。
同図30 写36	須恵器 壺か	同号	口縁~体部片。口 径(15.4)。	白色粒子・鉱物含。硬。 灰色。	体部外腹に多数の浅い織目あり。内 面平滑で、器内は薄い。
同図31 写36	須恵器 壺	同号	口縁~底部片。口 径(15.6)。	白色粒子・鉱物含。綿。 黒灰色。	体部の外腹に織目、底面に糸切痕あ り。高台高く、器肉薄く特徴的。
同図32 写36	須恵器 瓶	同号 床面	体部片。最大径 (14.6)。	白色粒子・鉱物含。綿。 暗褐色(酸化氣味)。	内・外腹に織目。体部外腹下方に回 転寛削。外腹に自然輪かかること。
同図33 写36	須恵器 瓶	同号 床面	底部片。高台部径 (8.8)。	白色粒子・鉱物微。綿。 黒灰色。	外腹に自然輪。内腹縁による織目あ り。底面回転寛削。
第185図35 写真図版36	須恵器 中形甕	同号	体部片。	白色粒子・鉱物微。昔。 灰色。	内面に素文の当目、外腹は平滑である。笠懸製が 笠懸製壠縫は少ない。
同図36 写36	須恵器 大甕	同号	体部片。	白色粒子・鉱物微。昔。 灰色。	内面に素文の当目、外腹は平滑である。笠懸製が 笠懸製壠縫は少ない。
同図37 写36	須恵器 小形甕	同号 床面	底部・口縁部欠損。 最大径(23.1)。	白色粒子・鉱物多。綿。 灰色。	外腹に焼成前施文あり。外腹液ハゼ多。 内・外腹に組作痕。外腹平行内。
同図38 写36	須恵器 小形甕	同号 床面	底部・口縁部欠損。 最大径(30.6)。	白色粒子・鉱物含。綿。 灰色。	内・外腹に組作痕。當目・叩目ともに 目立す。器内薄作で精作。

## 第5章 検出された遺構と遺物(古代)

図番号 写真番号	種器形	出土位置	量目(cm) 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要	備考
第185図41 写真図版36	石製 砥石	住居跡29号	完存。長7.6。	小口を除く四面に使用面あり。消耗は図のように部分使用がある。	実質安山岩
同図47 写36	鉄製 輪金具	同号	小欠あり。長径5.0、短径4.2。	小口は四面切れ込み一割れ→整形らしく縮少例。材質も稀少例。	
同図48 写36	鉄製 釘か	同号	先+頭部欠損。長3.3+α。	輪軸の金具で部分的に鏽ぶくれあり。一枚目成りの割れが部分的にあり、粗緻化ではなさそう。横断面円形。欠損は調査時以降。	
同図49 写36	鉄製 不詳	同号	先欠損。長2.3+α。	鏽ぶくれがあり、表面は不良。欠損は調査時以降。側部に直交する木目の木質付着。釘のようであるが頭部欠損し、不明。	木質付着。
第187図1 現品不明	土師器 环	住居跡30号	口径12.8。	縦縫合2回成時の縫を示す。外面に油墨との注記あり。口縁部の内・外横擦。底面鋸削。体部中位形崩壊らしい。	現品不明 油墨付着。
同図2 写真図版36	土師器 环	同号	口縁部片。口径(13.2)。	白色粒子・氷物微。青。口縁部・外縫横擦。体部に型崩あり、以下鋸削。妙らしく横擦方向判明。	
同図6 写36	土師器 环	同号	口縁部～底部片。口径(13.0)。	白色粒子・氷物微。硬。口縁部の内・外縫横擦。体部に型崩あり、以下鋸削。	
同図7 写36	土師器 环	同号	口縁部～底部片。口径(13.2)。	白色粒子・氷物微。硬。口縁部の内・外縫横擦。灯芯痕・油墨付着。底面鋸削。	油墨付着。 灯火皿。
同図8 写36	土師器 环	同号	口縁部少く。口径11.6。	白色粒子・氷物微。硬。口縁部の内・外縫横擦。体部型崩あり。底面鋸削。	
同図9 写36	土師器 环	同号	3分2個体。口径(12.4)。	白色粒子・氷物微。硬。口縁部の内・外縫横擦。灯芯痕・油墨付着。底面鋸削。	油墨付着。 灯火皿。
第188図10 写真図版36	土師器 环	同号	口縁部少く。口径12.4。器高4.1。	白色粒子・氷物微。硬。口縁部の内・外縫横擦。灯芯痕・油墨付着。吸炭部あり、体部横擦・底面鋸削。	口縁部に油 墨付着。
同図11 写37	土師器 环	同号	口縁部少く。口径12.2。器高3.5。	白色粒子・氷物微。硬。口縁部の内・外縫横擦。体部に型崩あり。以下鋸削。内面ハゼあり。	
同図12 写37	土師器 环	同号	口縁部少く。口径12.4。器高3.5。	白色粒子・氷物微。硬。口縁部の内・外縫横擦。体部の型崩立ず。以下鋸削。内面ハゼあり。	
同図13 写37	土師器 环	同号	完存。口径12.4。器高4.0。	白色粒子・氷物微。硬。口縁部の内・外縫横擦。体部に型崩あり。以下鋸削。底面に墨書き。	底面墨書き 「右」か。
同図14 写37	土師器 环	同号	口縁部少く。口径12.8。器高4.0。	白色粒子・氷物微。硬。口縁部の内・外縫横擦。体部に型崩あり。底面前割あり。	底面墨書き、 文字不明。
同図15 写37	土師器 环	同号	口縁部少く。口径13.8。器高3.6。	白色粒子・氷物微。青。口縁部の内・外縫横擦。体部型崩。底面大まかな鋸削。	
同図16 写37	土師器 环	同号	上半欠。底径4.4。	白色粒子・氷物微。青。体部下辺に大まかな鋸削。内面平滑で器内は薄い。	
同図18 写37	須恵器 塊	同号	3分1個体。口径(14.8)。	白色粒子・氷物微。青。底面横擦右回転糸切後、貼付高台。体部横擦目あり。	脚接県製。
同図19 写37	須恵器 蓋	同号	完存。口径15.0。器高5.1。	白色粒子・氷物含。硬。体部下半に浅く、多くの横擦目あり。上半面横擦右回転糸切後。	脚接県製。
同図20 写37	須恵器 塊	同号	口縁～体部片。口径14.2。	白色粒子・氷物多。締。体部外縫に浅い横擦目あり。器内極めて薄作。壇としては浅い。	脚接県製。
第190図1 写真図版37	土師器 环	住居跡31号	口縁～体部片。口径(12.3)。	白色粒子・氷物含。青。口縁部の内・外縫横擦。体部中位に素面帯(形崩)あり。以下鋸削。	
同図2 写37	土師器 环	同号	口縁～体部片。口径(12.1)。	白色粒子・氷物含。青。口縁部の内・外縫横擦。体部中位に形崩あり。以下鋸削。	
同図3 写37	土師器 蓋	同号	擴部片。同端部径2.9。	白色粒子・氷物微。締。体部側の器内は薄作で特徴的。擴部端は尖らず丸い。	脚接県製。
同図4 写37	須恵器 蓋	同号	口縁～体部片。口径(13.3)。	白色粒子・氷物微。硬。体部下辺に浅い横擦目多くあり、上方は機械右回転の割削。	脚接県製。
同図5 写37	須恵器 壺か塊	同号	口縁部片。口径(14.2)。	白色粒子・氷物微。軟。体部に浅い横擦目あり。内面は平滑で機械目立しない。	笠懸製。
同図6 写37	須恵器 大壺	同号	体部片。	割口に紐作痕見える。内面に同心円当目、外縫に平行印あり。外縫自然輪。	脚接県製。
第192図1 写真図版37	土師器 环	住居跡32号	3分1個体。口径(12.6)。	白色粒子・氷物微。硬。口縁部の内・外縫に横擦あり。体部外縫型崩、以下鋸削あり。	
同図2 写37	土師器 环	同号	口縁部中欠。口径12.2。器高3.2。	白色粒子・氷物微。硬。口縁部の内・外縫に横擦無あり。体部外縫の型崩不明瞭。以下底面鋸削。	
同図3 写37	土師器 环	同号	3分2個体。口径11.8。	白色粒子・氷物微。硬。口縁部の内・外縫に横擦あり。体部外縫に型崩あり、以下底面鋸削。	
同図4 写37	土師器 环	同号	3分2個体。口径12.2。器高3.1。	白色粒子・氷物微。青。口縁部の内・外縫に横擦あり。体部外縫に型崩あり、以下底面鋸削。	

番号 写真番号	種 器形	出土位置	量 目(cm) 残存状態	胎土・焼成・色調と概要	備考
第192図5 写真図版37	土師器 壺	住居跡32号	3分2個体。口径 11.8. 器高3.7。	白色粒子・鉱物微。硬。 明褐色。	口縁部の内・外面横擦あり。体部外面 型膚あり。底面大きな凹形。
同図6 写37	土師器 壺	同号	3分2個体。口径 12.2. 器高3.2。	白色粒子・鉱物合。昔。 橙色。	口縁部の内・外面横擦あり。体部外面 型膚あり。底面凹形。
同図7 写37	土師器 壺	同号	2分1個体。口径 (12.8.)	白色粒子・鉱物合。硬。 暗褐色。	口縁部の内・外面横擦あり。体部外面 形膚あり。底面凹形。口縁油煙付着。
同図8 写37	土師器 壺	同号	口縁～体部片。口 径(20.0)	白色粒子・鉱物合。硬。 淡褐色。	口縁部の内・外面横擦あり。頸部に扭 作風(型作でも)あり。以下同前。
同図9 写37	須恵器 蓋	同号	3分2個体。口径 12.0. 器高3.3。	白色粒子・鉱物合。緑。 暗灰色。	外側下方に輪轂目あり。上方尖切後輪 轂右回転削削あり。
同図11 写37	須恵器 壺	同号	2分1個体。口径 (12.2.)	白色粒子・鉱物合。緑。 暗灰色。	口縁部の内・外面横擦あり。底面大 きな凹形。
同図12 未掲載	須恵器 壺	同号	口縁～底部片。口 径(14.0.)	白色粒子・鉱物合。硬。 灰色。	底面右回転尖切後、周辺直削。体部外 面横擦目あり。外反形状は笠懸否定的。
同図13 写37	須恵器 壺	高台部分。高台端 部径6.8。	白色粒子・鉱物合。緑。 淡灰色。	底面右回転尖切後、高台貼付。内 外面横擦目あり。	
第193図15 写真図版37	須恵器 鉢	同号	口縁～体部片。口 径20.2。	白色粒子・鉱物合。緑。 黒灰色。	口縁部上方輪轂右回転の輪轂目あり。 下半直削。割口に紐作用あり。
第195図1 現品不明	土師器 壺	住居跡33号	口径12.8。	概報II作成時の図を淨書。口縁部左辺内・外横擦か。体部中位は 型膚か。底面直削か。器形は同住居跡出土より古様を呈す。	現品不明。
同図2 写37	土師器 壺	同号	底部片。	白色粒子・鉱物微。昔。 橙色。	底面墨書きあり。 其損以下に井か、「大圓」か。 「大」か。
同図3 写37	土師器 壺	同号	3分2個体。口径 10.4. 器高3.3。	白色粒子・鉱物合。軟。 暗褐色。	口縁部の内・外面上に横擦あり。体部型 膚不明显。底面凹形。
同図4 写37	土師器 壺	同号	完存。口径12.4。 器高3.2。	白色粒子・鉱物微。昔。 橙色。	口縁部の内・外面上に横擦あり。体部外 面に型膚あり。底面凹形。
同図5 写37	土師器 壺	同号	2分1個体。口径 10.5。	白色粒子・鉱物微。昔。 淡褐色。二次被熱。	口縁部の内・外面上に横擦あり。体部外 面の型膚が極めて少。以下質削。
同図6 写37	土師器 壺	同号	口縁中綻。口径 13.0. 器高4.4。	白色粒子・鉱物微。硬。 橙色。	口縁部の内・外面上に横擦あり。体部外 面の型膚が極めて少。以下質削。
同図7 写37	土師器 壺	同号	完存。口径13.0。 器高3.4。	白色粒子・鉱物合。軟。 暗褐色。二次被熱。	口縁部の内・外面上に横擦あり。体部型 膚あり。底面直削。内面熱のハゼあり。
同図8 写37	土師器 壺	同号	完存。口径13.0。 器高3.4。	白色粒子・鉱物微。軟。 橙色。	口縁部の内・外面上に横擦あり。体部型 膚あり。底面丁寧な差削あり。
同図9 写37	土師器 壺	同号	完存。口径15.0。 器高4.4。	白色粒子・鉱物合。硬。 橙色。	口縁部周辺横擦あり。体部外表面膚あり。 底面直削あり。
同図10 写38	土師器 壺付脚	同号	3分2個体。口径 (10.0.)	白色粒子・鉱物合。硬。 明褐色。	口縁部内・外面上に横擦あり。壺部外下面 に範削。脚部に、おさえの圧痕あり。
同図11 写38	土師器 甕	同号	口縁～体部片。口 径(20.6.)	白色粒子・鉱物合。硬。 暗褐色。	口縁部の内・外面上に横擦あり。外下面 に範削あり。
同図12 写38	土師器 甕	同号	口縁～体部片。口 径(21.8.)	白色粒子・鉱物合。硬。 暗褐色。	口縁部の内・外面上に横擦あり。体部範削あり。
同図13 写38	土師器 甕	同号	口縁～体部片。口 径(22.4.)	白色粒子・鉱物合。昔。 橙色。	口縁部の内・外面上に横擦あり。体部外表面 範削あり。
第196図15 写真図版38	須恵器 蓋	同号	口縁部片。口径 (14.0.)	白色粒子・鉱物微。緑。 灰色。	口縁端部丸みあり。体部外面上方に輪 轂右回転範削あり。
同図16 写38	須恵器 蓋	同号	口縁部欠。擴部径 3.0.	白色粒子・鉱物多。硬。 灰色。	体部に回転範削あり。擴部端部は丸み おびる。
同図17 写38	須恵器 蓋	同号	口縁部小欠。口径 17.0. 器高5.0.	白色粒子・鉱物合。硬。 暗褐色。	端部は尖る。体部外面上方に輪轂右回 転範削あり。
同図19 写38	須恵器 壺	同号	底部片。底径8.2.	白色粒子・鉱物合。軟。 暗褐色。	底面は右回転直起後範削。内面平滑。 全体に鋸割例は極少である。
同図20 写38	須恵器 壺	同号	底部～体部。高台 径7.2.	白色粒子・鉱物合。緑。 灰色。	高台は尖り、薄作。体部外面上に輪轂目 あり。底面の切り離し不明。
同図21 現品なし	須恵器 台付瓶	同号		概報II作成時の図を淨書。No.10621台板に32件があり。第192図14 と同一物か。この21は削削した方がよいかもしれない。	現品不明。 第192図14。
同図24 未掲載	須恵器 瓶か 底面	同号	底部片。高台接合 部径5.6.	白色粒子・鉱物微。緑。 灰色。	内面に縦による輪轂目があり、無環か。 外面は平滑。底面の切り離し不明。
同図25 写38	須恵器 瓶	同号	胸部片。最大径 (17.2.)	白色粒子・鉱物合。緑。 暗褐色。	内面輪轂目あり。外面上に自然輪かかる。 輪轂回転は右。

## 第5篇 検出された遺構と遺物（古代）

図番号 写真番号	種器形	出土位置	量目(cm) 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要	備考
第196図26 写真図版38	鉢津 椀形津	住居跡33号	長径4.6。	楕円形鉢津で、極めて小形。周囲は炉壁成りではなく、底面のみが炉と接していたらしく炉底らしき痕あり。表面部分剥ぶくれ。	楕円形鉢津。
同図27 写真38	須恵器 大形瓶	同号	底部～体部片。底径16.4。	白色粒子・鉱物含。硬。暗灰色。	体部下に軽轆を回転(正立時)。内・外面部作痕。割口にも紐作痕。
第198図1 写真図版1 等38	土師器 壺	住居跡34号 床面	口縁部少く。口径12.6。器高5.0。	白色粒子・鉱物微。硬。明橙色。	口縁部下に沈線2条。口縁部の内・外横施、体部型崩。底面鋸削。
同図2 写真38	土師器 壺	同号	ほぼ完存。口径12.6。器高4.0。	白色粒子・鉱物微。昔。淡橙色。	口縁部の内・外面横施。体部にわざか型崩。型崩帶あり。体部～底部鋸削。
同図3 写真38	土師器 壺	同号 床面	完存。口径13.3。器高4.2。	白色粒子・鉱物微。硬。明橙色。	口縁部の外・外面横施。体部にわざか型崩。型崩帶あり。体部～底部鋸削。
同図4 写真38	土師器 壺	同号	口縁部少く。口径12.4。器高3.4。	白色粒子・鉱物含。硬。暗褐色。	口縁部内・外面横施。型崩帶の位置まで塗付着。油煙に沿線に、内面漆付着。
同図5 写真38	土師器 壺	同号	ほぼ完存。口径12.6。器高3.7。	白色粒子・鉱物含。硬。淡橙色。	口縁部内・外面横施。以下鋸削。口縁部に灯芯痕と油煙付着。
同図6 写真38	土師器 壺	同号 床面	ほぼ完存。口径13.0。器高3.2。	白色粒子・鉱物含。硬。暗褐色。	口縁部内・外面横施。体部に型崩、以下鋸削。内面に油煙が付着。
同図7 写真38	土師器 壺	同号 床面	口縁部少く。口径12.6。器高3.3。	白色粒子・鉱物含。硬。明橙色。	口縁部内・外面横施。体部に型崩。底面は大きな箇削あり。
同図8 写真38	土師器 壺	同号 床面	口縁部少く。口径10.8。器高3.1。	白色粒子・鉱物含。硬。淡橙色。	口縁部内・外面横施。体部に型崩。底面は大きな箇削。口縁部に油煙。
第201図1 写真図版38	土師器 壺	住居跡36号 床面	口縁部片。口径11.8。	白色粒子・鉱物微。昔。暗褐色。	口縁部の内・外面上に横施。体部に型崩あり。底面箇削。
同図2 写真38	土師器 壺	同号 床面	口縁～体部片。口径12.4。	白色粒子・鉱物微。昔。暗褐色。	口縁部の内・外面上に横施。体部に型崩あり。底面箇削。
同図3 写真38	土師器 壺	同号 床面	口縁部片。口径14.4。	白色粒子・鉱物微。昔。暗褐色。	口縁部の内・外面上に横施。体部に型崩。以下鋸削。
同図4 写真38	土師器 壺	同号 床面	口縁部片。口径15.4。	白色粒子・鉱物微。硬。暗褐色。	口縁部の内・外面上に横施。体部上方に型崩あり。以下鋸削。
同図5 写真38	土師器 壺	同号 床面	口縁部少く。口径12.2。器高3.8。	白色粒子・鉱物微。硬。暗褐色。	口縁部の内・外面上に横施。体部上方に型崩。底面箇削。灯芯痕・油煙。
同図6 写真38	土師器 壺	同号 床面	完存。口径12.0。器高3.4。	白色粒子・鉱物微。硬。淡橙色。	内面に油煙と漆付着。口縁部内・外横施。底面箇削。
第202図7 写真図版38	土師器 壺	同号	2分1個体。口径12.6。	白色粒子・鉱物微。硬。暗褐色。	口縁部の内外面上に横施あり。体部外型崩。底面箇削と小さな凹み。
同図8 写真38	土師器 壺	同号 床面	2分1個体。口径11.6。	白色粒子・鉱物含。硬。暗褐色。	口縁部の内・外面上に横施あり。体部外型崩あり。底面に大きな箇削。
同図9 写真38	土師器 壺	同号 床面	口縁部少く。口径11.8。器高3.9。	白色粒子・鉱物微。軟。暗褐色。	口縁部の内・外面上に横施あり。体部外型崩あり。底面箇削。
同図10 写真38	土師器 壺	同号	2分1個体。口径12.8。	白色粒子・鉱物微。軟。暗褐色。	口縁部の内・外面上に横施あり。体部外型崩。底面箇削。
同図11 写真38	土師器 壺	同号 床面	口縁～体部片。口径14.8。	白色粒子・鉱物微。軟。暗褐色。	口縁部の内・外面上に横施あり。頸部下に凹みあり。以下鋸削。
同図12 写真39	土師器 壺	同号 床面	底部～体部。口径14.8。	白色粒子・鉱物含。軟。暗褐色。	体部下半は大きな箇削。内面底に凹み、上方に滑らか。
同図13 写真39	須恵器 壺	同号	口縁～底部片。口径12.0。	白色粒子・鉱物含。緑。暗褐色。	底面に軽轆右回転の糸切あり。体部に浅い軽轆目。
同図14 写真39	須恵器 壺	同号 床面	口縁～底部。口径13.4。	白色粒子・鉱物含。昔。暗褐色。	底面に軽轆右回転の糸切あり。体部に浅い軽轆目。
同図15 写真39	須恵器 壺	同号 床面	3分2個体。口径13.6。器高3.6。	白色粒子・鉱物微。緑。灰褐色。	底面切削後、右回転箇削。体部と底部との間に突出しの凹み。
同図16 写真38	須恵器 壺	高台部片。高台部 床面	高台部片。高台部 口径11.2。	白色粒子・鉱物含。硬。灰褐色。	底面の切削は糸切による。高台貼付。外側にその接合面あり。
同図17 写真38	須恵器 長颈瓶	体部上半部片。残 存部径1.9。	白色粒子・鉱物含。緑。暗褐色。	頸部三段接合で長颈瓶は唯一の例。内面指痕。軽轆目。	接合部製。
同図18 写真38	須恵器 瓶	体部～底部片。底 径9.8。	白色粒子・鉱物含。硬。灰褐色。	体部上半に軽轆目。下方回転箇削。内面軽轆目。	三段接合。
同図21 写真38	鉢製 不明	先欠。長4.0+ φx	欠損は調査時以降である。平面以上方は、旧時状態で、折かは疑問である。鉢化は極方向の割れあり。	口縁部の内・外面上に横施あり。体部型崩。底面箇削。	接合部製。
第204図2 写真図版39	土師器 壺	住居跡37号 埋・標上か	口縁部片。口径11.8。	白色粒子・鉱物微。昔。暗褐色。	口縁部の内・外面上に横施あり。体部型崩。底面箇削。

図番号 写真番号	種 器 形	出土位置	量 目 (cm) 残 存 状 態	胎 土・焼 成・色 調 と 摘 要	備 考
第204図3 現品不明	土師器 壊	住居跡37号	口縁～体部片。口径(13.2)。	概報II成時の図を示す。体部下半の箆削が表現されている。現品を探し出すことができなかった。	現品不明
同図4 写39	土師器 壊	同号	口縁～体部片。口径(13.2)。	白色粒子・鉱物含。硬。暗橙色。	口縁部の内・外面に横擦あり。底面箆削。唇上とは壁立上り外面を描す。
第205図5 写真図版39	土師器 壊	同号	2分1個体。口径12.0。器高3.4。	白色粒子・鉱物微。青。暗褐色。	口縁部の内・外面に横擦あり。体部型膚あり。底面大きな箆削あり。
同図6 写39	土師器 壊	同号	2分1個体。口径(11.6)。	白色粒子・鉱物微。青。暗褐色。	口縁部の内・外面に横擦あり。体部に型膚あり。底面箆削あり。
同図7 写39	土師器 壊	同号	完全。口径12.5。器高2.7。	白色粒子・鉱物微。青。暗褐色。	口縁部の内・外面に横擦あり。体部に型膚あり。底面箆削あり。
同図8 写39	土師器 壊	同号	底部～体部。	白色粒子・鉄物微。青。暗褐色。	口縁部の内・外面に横擦が部分的に残り、下方に型膚、底面に箆削あり。
同図9 写39	土師器 壊	同号	口縁部少欠。口径11.8。器高3.4。	白色粒子・鉱物微。青。暗褐色。	口縁部の内・外面に横擦あり。体部に型膚あり。底面箆削あり。
同図10 写39	土師器 壊	同号	2分1個体。口径12.4。器高3.4。	白色粒子・鉱物微。青。暗褐色。	口縁部の内・外面に横擦あり。体部に型膚あり。底面箆削。
同図11 写39	土師器 壊	同号	口縁部少欠。口径12.4。器高3.6。	白色粒子・鉱物含。硬。暗褐色。	口縁部の内・外面に横擦あり。わずか油煙付着。
同図12 写39	土師器 壊	同号	口縁部少欠。口径12.5。器高3.6。	白色粒子・鉱物微。硬。暗褐色。	口縁部の内・外面に横擦あり。底面箆削あり。
同図13 写39	土師器 壊	同号	3分2個体。口径13.0。器高3.4。	白色粒子・鉱物含。硬。暗褐色。	口縁部の内・外面に横擦あり。体部に型膚あり。底面箆削。
同図14 写39	土師器 壊	同号	口縁部少欠。口径12.2。器高3.4。	白色粒子・鉱物含。硬。暗褐色。	口縁部の内・外面に横擦、以下箆削あり。箆削は極めて丁寧。
同図16 写39	土師器 大形壊	同号	完全。口径15.0。器高4.6。	白色粒子・鉱物微。硬。暗褐色。	口縁部の内・外面横擦。体部に型膚あり。底面箆削あり。
第207図17 写真図版39	土師器 大形壊	同号	3分1個体。口径(15.4)。	白色粒子・鉱物含。硬。暗褐色。	口縁部の内・外面に横擦あり。体部中央から下方に箆削あり。
同図18 写39	土師器 壊	同号	底部欠損。口径(21.2)。	白色粒子・鉱物含。青。暗褐色。	口縁部の内・外面に横擦あり。体部箆削。体部下方内面に紐作痕あり。
同図2 写39	須恵器 大形壊	往居跡37・ 38号	2分1個体。口径(17.5)。	白色粒子・鉱物微。軟。灰色。	底面は切離し後、鐵錫右回転箆削。体部上半縦目。下半箆削。笠蓋製。分析926。
同図3 写39	土師器 壊	同号	口縁～体部片。口径(18.6)。	白色粒子・鉱物含。青。暗褐色。	口縁～頸部の内・外面横擦あり。体部に外側箆削あり。
同図4 写39	土師器 壊	同号	口縁～体部片。口径(20.0)。	白色粒子・鉱物含。青。暗褐色。二次被熱。	口縁～頸部の内・外面横擦あり。頸部に紐作(型作でも)痕。以下箆削。二次被熱。
同図5 写39	土師器 壊	同号	口縁～体部片。口径(20.4)。	白色粒子・鉱物微。青。暗褐色。	口縁～頸部の内・外面横擦あり。体部に外側箆削あり。
第209図3 写真図版39	土師器 壊	住居跡35- 2号。床面。	口縁部少欠。口径12.2。器高3.5。	白色粒子・鉱物含。硬。暗褐色。	口縁部の内・外面横擦あり。体部外面に型膚あり。底面箆削。
同図4 写39	土師器 壊	住跡38- 2号。同31-1号	4分3個体。口径12.2。器高3.9。	白色粒子・鉱物含。硬。暗褐色。	口縁部の内・外面横擦あり。体部外面に型膚あり。底面大きな箆削。
同図5 写39	土師器 壊	住居跡38号	2分1個体。口径(13.0)。	白色粒子・鉱物含。硬。暗褐色。	口縁部の内・外面横擦あり。体部外面に型膚あり。底面大きな箆削。
同図6 写39	土師器 壊	住跡38-2- 38-1号	口縁部少欠。口径12.3。器高3.2。	白色粒子・鉱物微。青。暗褐色。	口縁部の内・外面横擦あり。体部外面に型膚。底面箆削。口縁に油煙付着。
同図8 写39	土師器 壊	同号	4分3個体。口径11.8。器高3.4。	白色粒子・鉱物微。青。暗褐色。	口縁部の内・外面横擦あり。体部外面に型膚あり。底面箆削。
同図9 写39	土師器 壊	住居跡38号	口縁部片。口径(14.2)。	白色粒子・鉱物含。硬。暗褐色。	口縁部の内・外面に横擦あり。体部外面に型膚あり。底面箆削。油煙付着。
同図10 写39	土師器 壊	同号	2分1個体。口径(14.6)。	白色粒子・鉱物含。青。暗褐色。	口縁部の内・外面に横擦あり。体部外面に型膚あり。底面箆削。
同図12 写39	須恵器 壊	同号	3分1個体。口径(13.6)。	白色粒子・鉱物含。硬。灰色。	高台剥落。体部外面に浅い鐵錫目あり。笠蓋製。底面にわずか糸切痕残る。
同図16~19 写39	銚子16 金冠。 他是釦。	同号	16は長3.6+ $\alpha$ 。 17は長6.0+ $\alpha$ 。 18は長6.6。 19は長8.8+ $\alpha$ 。	16の先端は調査時以降、征目削少なく精緻と思われる。 17頭部の打折折曲げで、中途に曲りがあり使用印。 18完全の釦で、頭部打折曲げ。鋏削少なく、稀少な完存例。 19部分的に曲りがあり使用釦か。部分的に征目削れあり。	
第211図1 写真図版40	須恵器 壊	住居跡39号	口縁～体部片。口径(16.6)。	白色粒子・鉱物含。青。淡黄褐色。二次被熱。	土師器技法との共存。口縁横擦。外面土師器技法箆削。内部研磨で旧時は黒色化か。共存。

第5篇 検出された遺構と遺物(古代)

図番号 写真番号	種 器 形	出土位置	量 目(cm) 残 存 状 態	胎 土・焼 成・色 調 と 摘 要	備 考
第211図2 写真図版40	土師器 甕	住居跡39号	口縁部~体部片。 口径(17.6)。	白色粒子・鉱物微。硬。 橙色。	口縁部の内・外に横擦あり。頭部以下尾削。頭部は工具による沈線化。
同図3 写40	土師器 甕	同号	口縁部~体部片。 口径(20.2)。	白色粒子・鉱物微。硬。 橙色。	口縁部の内・外に横擦あり。頭部以下尾削。内面に整形具の跡あり。
同図4 写40	土師器 甕	同号	下半部。口径 (19.8)。	白色粒子・鉱物微。硬。 橙色。	口縁部の内・外に横擦あり。頭部以下尾削。体部中位内面に接合面あり。
同図5 写40	土師器 甕	同号	底部片。底径 (5.0)。	白色粒子・鉱物微。普。 淡橙色。	外面に尾削あり。内面は平滑である。 底肉はやわらかい。
同図6 写40	土師器 甕	同号	底部片。底径 (5.4)。	白色粒子・鉱物微。硬。 淡橙色。	外面上尾削あり。内面扭作感あり。割 口にも見える。
同図7 写40	須恵器 壇	同号	3分1個体。口径 (14.4)。	白色粒子・鉱物微。軟。 淡黄灰色。	底面の切離し不明瞭。体部に轆轤目あり。口縁部は特徴的に外反する。
同図8 写40	須恵器 壇	同号	底部片。台部径 (7.2)。	白色粒子・鉱物微。軟。 淡黄灰色。	1と同一種、接合できず。内面研磨不明瞭。高台長く特徴的。
同図9 写40	灰釉陶 皿	同号	口縁部片。	白色粒子・鉱物微。緑。 淡灰色。	内・外に淡緑灰色の施釉あり。口縁部 端、やや肥厚し、外反する。
同図10 写40	灰釉陶 皿	同号	口縁~体部片。口 径(14.4)。	白色粒子・鉱物微。緑。 淡灰色。	2と同一個体か。接合できず。釉塊見 えず、釉淡緑灰色。
同図11 未掲載	粘土塊 塑像か	同号	長3.0+α。	白色粒子・鉱物微。軟。 淡黄褐色。	陶土のように重くはなし、因側部側に 凹(折影)あり、塑像などの破片か。
同図12~ 17 写40	鉄製 刀	同号	12長(3.2)。 12筒状 13不明 14~17 釘	12小刀の朝日口鉄鋸金物を思わせる形である。精化状態は古代鉄。 13鑑片のように見えるが、針金2本の捩りか。精化は洋鉄風。 14頭部打折曲げの釘で、征目の銷割あり。粗鍛造と思われる。 15頭部打折曲げの釘で、征目の銷割あり。粗鍛造と思われる。 16先部に曲があり使用釘か。征目方向の銷割あり。 17やや曲りがあり使用釘か。精化多く、粗鍛造と思われる。	欠損は調査。 欠損は調査。 欠損は調査。 欠損は調査。 欠損は調査。 欠損は調査。 欠損は調査。
同図18 写40	磁化物 付岩片	同号	岩片。	岩片に鉄を多く含む磁化物が付着する。小形炉の付近にあつた石材の破片か。	欠損は調査。
第218図1 写真図版40	土師器 甕	住居跡40号	口縁部片。口径 (11.6)。	白色粒子・鉱物微。普。 橙色。	口縁部周辺横擦あり、体部外型崩 あり。底面尾削あり。
同図2 写40	土師器 甕	同号	口縁部~底部。口 径(12.0)。	白色粒子・鉱物微。普。 橙色。	口縁部の内・外に横擦あり。体部外型 崩不明瞭。底面尾削。
同図3 写40	土師器 甕	同号	口縁部~底部。口 径(14.0)。	白色粒子・鉱物微。普。 橙色。	口縁部の内・外に横擦あり。体部外型 崩不明瞭。底面尾削。
同図4 写40	土師器 甕	同号	2分1個体。口径 (13.0)。	白色粒子・鉱物微。普。 橙色。	口縁部の内・外に横擦あり。体部外型 崩あり。底面尾削。
同図5 写40	土師器 甕	同号	口縁部小片。口径 12.4。器高3.0。	白色粒子・鉱物微。硬。 橙色。	口縁部の内・外に横擦あり。体部外型 崩あり。底面尾削。
同図6 写40	土師器 甕	同号	口縁部部分片。口 径12.8。	白色粒子・鉱物微。硬。 橙色。	口縁部の内・外に横擦あり。体部外型 崩あり。底面尾削。
同図7 写40	土師器 甕	同号	口縁部~底部片。 埋土中一括 口径(12.8)。	白色粒子・鉱物微。硬。 橙色。	口縁部の内・外に横擦あり。体部外型 崩あり。底面尾削。
同図8 写40	土師器 甕	同号	口縁部~底部片。 埋土中一括 口径(14.2)。	白色粒子・鉱物微。普。 橙色。	口縁部の内・外に横擦あり。体部外型 崩不明瞭。底面尾削。
第214図9 写真図版40	土師器 甕	同号	3分2個体。口径 11.8。器高(3.4)。	白色粒子・鉱物微。硬。 橙色。	口縁部の内・外に横擦あり。体部外型 崩あり。底面尾削。
同図10 写40	土師器 甕	同号	3分2個体。口径 12.2。器高3.6。	白色粒子・鉱物微。軟。 淡橙色。	口縁部の内・外に横擦あり。体部外型 崩あり。底面尾削。
同図11 写40	土師器 甕	同号	3分2個体。口径 13.0。	白色粒子・鉱物微。硬。 橙色。	口縁部の内・外に横擦あり。体部外型 崩あり。底面尾削。
同図12 写40	土師器 甕	同号	口縁部小片。口径 12.6。器高4.0。	白色粒子・鉱物微。硬。 橙色。	口縁部の内・外に横擦あり。体部外型 崩あり。底面尾削。
同図13 写40	土師器 甕	同号	完全。口径13.4。 器高3.4。	白色粒子・鉱物微。硬。 橙色。	口縁部の内・外に横擦あり。体部外型 崩あり。底面尾削。
同図14 写40	土師器 甕	同号	3分の2個体。口 径11.8。	白色粒子・鉱物微。普。 橙色。	口縁部の内・外に横擦あり。体部外型 崩あり。底面尾削。
同図15 写40	土師器 甕	同号	完全。口径13.0。	白色粒子・鉱物微。硬。 橙色。	口縁部の内・外に横擦あり。体部外型 崩あり。底面尾削。
同図16 写40	土師器 甕	同号	埋土中一括 高3.4。	白色粒子・鉱物微。硬。 橙色。	口縁部の内・外に横擦。頭部組作痕(型 作でも)、以下尾削。頭部に瘤狀。

図番号 写真番号	種器形	出土位置	量目(cm) 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要	備考
第214図17 写真図版40 蓋	須恵器	住居跡40号 床面	口縁~体部片。口径15.0。	白色粒子・鉱物粒含。硬。灰色。	口縁部の内・外面に粗織目あり。体部外面上方回転右旋削あり。
第216図1 写真図版40 蓋	土師器	住居跡41号 床面	完存。口径12.2。 高3.4。	白色粒子・鉱物粒含。硬。橙色。	口縁部の内・外面に横挽あり。体部外面に型虜わざにあり。
同図2 写40	土師器 壺	同号 床面	口縁部小欠。口径12.2。高3.6	白色粒子・鉱物微。昔。淡橙色。	口縁部の内・外面に横挽あり。体部外面に型虜わざにあり。底面窓削。
同図3 写40	土師器 壺	同号 床面	3分2個体。口径12.0。高3.6。	白色粒子・鉱物微。硬。淡橙色。	口縁部の内・外面に横挽あり。体部外面に型虜わざにあり。底面窓削。
同図4 写40	土師器 壺	同号 床面	完存。口径12.2。 高3.6。	白色粒子・鉱物微。硬。橙色。	口縁部の内・外面に横挽あり。体部外面に型虜わざにあり。底面窓削。凹みあり。
同図5 写40	土師器 壺	同号 床面	口縁部小欠。口径12.0。高3.6。	白色粒子・鉱物微。昔。淡橙色。	口縁部の内・外面に横挽あり。体部外面に型虜わざにあり。底面窓削。付着物あり。その両方が。
同図6 写40	土師器 壺	同号 埋土	3分1個体	白色粒子・鉱物微。昔。橙色。	口縁部の内・外面に横挽あり。体部外面に型虜わざにあり。底面窓削。削目不詳。
同図7 写40	土師器 壺	同号	体部~脚部。脚部 径9.0。	白色粒子・鉱物粒含。昔。橙色。	白色粒子・鉱物粒含。昔。体部下方窓削。内部整形具の当り痕あり。器内薄い。
同図10 現品不明	須恵器 壺	同号	口径12.0。	概報II作成時の図を参考。	底面粗織目回転糸切あり。体部の内・外面は粗織目。口縁部の口作りに特徴あり。
同図11 写40	須恵器 壺	同号 埋土	2分1個体。口径 15.2。	白色粒子・鉱物微。総。黒灰色。	底面糸切後、高台貼付。体部外面に粗織目あり。口縁部外反、器内薄い。
同図12 写40	粘土塊	同号	長2.5。厚1.9。	白色粒子・鉱物微。軟。橙色。やや重い。	焼土塊のようにも見えるがやや重く、塑成物の破片か。
同図13 写40	鉄製 釘	同号	先・頭部欠。長2.8 +α。	頭部。先部とともに調査時に残る。錆化は多くないが、細かな錆ぶくれが多くあり、古代鉄を思わせる。	
第218図1 写真図版41 環	土師器	同号 壺	口縁~体部片。口径 12.2。	白色粒子・鉱物微。昔。淡橙色。	口縁部の内・外面に横挽あり。体部外面に型虜わざにあり。底面窓削。
同図2 写41	土師器 壺	同号	口縁~体部片。口径 12.2。	白色粒子・鉱物微。昔。淡橙色。	口縁部の内・外面に横挽あり。体部外面に型虜わざにあり。底面窓削。
同図3 写41	土師器 壺	同号 床面	口縁部小欠。口径 12.6。高3.8。	白色粒子・鉱物微。昔。淡橙色。	口縁部の内・外面に横挽あり。体部外面に型虜わざにあり。底面窓削。
同図4 写41	土師器 壺	同号 埋土	3分2個体。口径 12.4。高3.4。	白色粒子・鉱物微。昔。淡橙色。	口縁部の内・外面に横挽あり。体部外面に型虜わざにあり。底面窓削。
同図5 写41	土師器 壺	同号	口縁~底部片。口径 11.2。	白色粒子・鉱物含。硬。橙色。	口縁部の内・外面に横挽あり。体部外面に型虜不整面。底面窓削。
同図6 写41	土師器 壺	同号 床面	完存。口径12.2。 高3.2。	白色粒子・鉱物微。軟。橙色。	口縁部の内・外面に浅く横挽あり。体部外面型虜あり。底面窓削。
同図7 写41	土師器 壺	同号 埋土	口縁~底部片。口径 12.5。	白色粒子・鉱物微。昔。淡橙色。	口縁部の内・外面に横挽あり。体部外面型虜、内面にゼアリ。底面窓削。
同図9 写41	土師器 壺	同号 床面	2分1個体。口径 13.4。	白色粒子・鉱物含。昔。淡橙色。	口縁部の内・外面に横挽あり。体部外面型虜不整面。底面窓削。
同図10 写41	土師器 壺	同号	口縁部片。口径 16.2。	白色粒子・鉱物微。硬。淡灰色。	口縁部の内・外面に横挽あり。体部外面型虜あり。底面窓削。
同図11 写41	須恵器 壺	同号 床面	底部片。底径7.0。 高3.4。	白色粒子・鉱物含。昔。灰色。	底面右回転の窓削。底部と体部際に突出しの凹みあり。
同図12 写41	須恵器 壺	同号	口縁~底部。口径 13.4。	白色粒子・鉱物含。軟。淡灰色。	底面右回転の糸切あり。体部の内・外面に横織目あり。窓削に突出しの凹み。
同図13 写41	須恵器 壺	同号	口縁部小欠。口径 13.2。高4.0。	白色粒子・鉱物含。硬。灰白色。	底面粗織右回転糸切あり。体部外面に粗織目多し。
同図14 現品不明	須恵器 壺	同号	口径13.4。	概報II作成時の図を参考。 注記によれば、底面は回転窓削。体部に粗織目表現はない。	現品不明。
同図15 写41	須恵器 大甕	同号	頸部片。	白色粒子・鉱物含。軟。大まかな波状文が2段見える。外間に回転糸見える。	笠懸製か隣接県製。
第220図16 写真図版41 環	鉄製 釘	同号 埋土	完存例。長11.8。	4本の釘がゆきしている。うち3本は頭太の釘のように見える。各釘に曲りは見えず。未使用の可能性あり。2本は錆化少ない。	4本がゆき。頭太の釘。
同図17 写41	鉄製 不明	同号	長7.4+α。	綫のようにも見えるが曲の部位が異なる。錆化も層状の剥離があり和歌のようにも見えるが曲の部位が異なる。別に剥離落も多い。	
同図18 写41	羽口	同号	破片長4.6+α。	羽口片で、旧時に割れてからも、欠損部に被熱延化が進む。割口にスサは見えない。	破損後も被熱。
同図19 写41	鉄製 鉄塊	同号	長4.4。	鉄滓のようにも見えるが、重過ぎる。鉄塊にしては軽く感じられる。錆ぶくれがあり、鉄分が多い。この例は本住居跡中1点のみ。	

第5篇 検出された遺構と遺物(古代)

図 番 号 写真番号	種 器 形	出土位置	量 目(cm) 残 存 状 態	胎 土・焼 成・色 調 と 摘 要	備 考
第220回B20 写真図版41	鉄滓 椀形	住居跡42号	欠損少。最大径 14.2	ほぼ完存に近い椀形陣で、欠損部は旧時である。底面は炉の底成り状態の圧痕があり、その形はやや深目である。	
同図21 写真41	鉄滓 椀形	同号	欠損少。最大径 10.4 <sub>a</sub>	ほぼ完存に近い椀形陣で、欠損部は旧時である。底面は炉の底成り状態の圧痕があり、その形はやや浅目である。	
第223回1 写真図版41	土師器 壺	住居跡43号	口縁～体部片。口 径(12.2)。 .	白色粒子・氷物含。普。 口縁部の内・外面に横撫あり。体部外 面に型磨あり。底面覗削。	油煙か漆付 着。
同図2 写真41	土師器 壺	同号	口縁～底部片。口 径(13.4)。	白色粒子・氷物微。普。 口縁部の内・外面に横撫あり。体部外 面に型磨あり。底面覗削。	
同図3 写真41	土師器 大形壺	同号	口縁部片。口径 (17.2)。	白色粒子・氷物微。普。 口縁部の内・外面に横撫あり。体部外 面に型磨あり。底面欠損。	
同図4 写真41	土師器 甕	同号	口縁部～体部。口 径(19.6)。	白色粒子・氷物微。硬。 口縁部の内・外面に横撫あり。頂部外 面に型磨あり。底面覗削。	煤付着。
同図5 写真41	須恵器 壺	同号	2分1個体。口径 (14.0)。	白色粒子・氷物含。締。 白色粒子・氷物微。硬。 白色粒子・氷物微。普。 口縁部に機械的回転の糸切あり。体部に 輪穂目あり。口縁外反し特徴的。	輪穂目。 輪穂外反し特徴的。
同図7 写真41	須恵器 壺	同号	高台部片。高台部 径(7.6)。	白色粒子・氷物微。普。 底面の初期し、不明。貼付高台。内面 平滑。	輪接塗製。
同図8 写真41	須恵器 大甕	同号	口縁部片。口径 (50.0)。	白色粒子・氷物含。硬。 白色粒子・氷物微。普。 底面の重ねは輪形陣よりも軽く感じる。	全體に回転条痕均一に入る。大口径で ありながら器内薄く特徴的。
同図11 写真41	鉄滓 破片	同号	最長部2.6。	椀形陣の破片かもしれない。各面に炉底の圧痕はなく、椀形陣で あれば大形陣の破片。しかし重ねは輪形陣よりも軽く感じる。	
同図12 写真41	鉄滓 破片	同号	最長部3.2。	椀形陣の破片かもしれない。各面に炉底の圧痕はなく、椀形陣で あれば大形陣の破片。しかし重ねは輪形陣よりも軽く感じる。	
同図13 写真41	羽口	同号	最長部3.8。	白色粒子・氷物微。普。 白色粒子・氷物微。スサ 合。硬。淡黄褐色。	小片で欠損は旧時である。スサは多く ないが入る。
同図14 写真41	鉄滓 椀形	同号	欠損少。最大径 9.2 <sub>a</sub>	ほぼ完存に近く、欠損は旧時である。底面は炉の底成りの状態の 圧痕があり、その形はやや深目である。	
第225回1 写真図版41	土師器 壺	住居跡44号	口縁部小欠。口径 11.8。器高3.4。	白色粒子・氷物微。普。 口縁部の内・外面に横撫あり。体部外 面に型磨あり。底面大きな凹痕。	油煙・灯芯 灰。火皿。
同図2 写真41	土師器 壺	同号	口縁部～体部片。 口径(12.1)。	白色粒子・氷物含。普。 口縁部の内・外面に横撫あり。体部外 面に型磨。底面覗削。内面ハゼあり。	油煙・灯芯 灰。火皿。
同図3 写真41	土師器 甕	同号	2分1個体。口径 (11.2)。	白色粒子・氷物含。硬。 白色粒子・氷物微。普。 口縁部の内・外面に横撫。外表面作(型 作でも)。底。外表面覗削。内面経作底。	煤付着。
同図4 写真41	土師器 甕	同号	口縁部片。口径 (21.0)。	白色粒子・氷物含。硬。 白色粒子・氷物微。普。	口縁部の内・外面に横撫。外表面作(型 作でも)。底。体部外表面覗削。
同図5 写真41	土師器 甕	同号	口縁部片。口径 (21.6)。	白色粒子・氷物微。硬。 白色粒子・氷物微。普。	口縁部の内・外面に横撫。外表面作(型 作でも)。底。体部外表面覗削。
第226回6 写真図版41	須恵器 壺	住居跡44号	口縁部小欠。口径 17.0。器高2.4 <sub>a</sub>	白色粒子・氷物含。締。 底面に右回転糸切あり。口縁部を丸 める。体部外面輪穂目あり。	内面摩耗。 輪・大・笠。
同図7 写真41	須恵器 小甕	同号。床面	口縁部片。口径 (21.8)。	白色粒子・氷物含。締。 口縁部の外周に一段の凹みがあり特徴 的な口作となる。	輪接塗製。
同図8 写真42	須恵器 中形甕	同号	体 部 片。最 大 径 (38.2)。	白色粒子・氷物粒。硬。 暗灰色。	形態が不自然であるが2度測定。確認 。内面同心円当目。外側叩撫消。
同図9 写真42	須恵器 大甕	同号	体 部 片。	白色粒子・氷物含。硬。 暗灰色。	外側叩撫消。内面素文当目。割口に紐 作風あり。
第227回10 写真図版42	須恵器 小甕	住居跡44号	体 部 片。	白色粒子・氷物含。締。	輪接塗製。
同図11 写真42	須恵器	同号	体 部 片	白色粒子・氷物含。普。	胎土に2種以上の粘土の織があり瓦窓 かその系統を思わせ。外蓋正格子叩。
同図15～ 17 写真42	鉄製 釘	同号	15長2.6+α <sub>a</sub> 16長6.1+α <sub>a</sub> 17長6.8+α <sub>a</sub>	15欠損は調査時以降。銷こぶがあり、残存は良くない。 16欠損は調査時以降。征方向の剥離れあり、残存は良くない。 17欠損は調査時以降。征方向の剥離れが少しはある。 以上3点とも曲りがあり、使用歴か。	瓦工人製作。
第229回1 写真図版42	土師器 壺	住居跡45号	口縁～体部片。口 径(19.0)。	白色粒子・氷物含。火山 石英か含。普。椎色。	口縁部の内・外面に横撫があり。体部 に型磨あり。底面覗削。
同図2 写真42	須恵器 蓋	同号	体 部 片。	白色粒子・氷物含。軟。 灰色。	体部外面に輪穂右回転の笠削あり。内 面に輪穂目あり。
同図3 写真42	須恵器 壺	同号	高台部片。高台部 径(8.8)。	白色粒子・氷物微。硬。 灰色。	底面切離して不明。貼付高台。内面に 漆付着。高台端部に凹みあり。
同図4 写真42	須恵器 壺	同号	口縁～体部片。口 径(16.6)。	白色粒子・氷物含。普。 灰色。	体部の外間に輪穂目あり。内面に剥落 あり。輪穂右回転。

図番号 写真番号	種 器形	出土位置	量 目(cm) 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要	備 考
第229図5 写真図版42	鉄製 釘	住居跡45号	先欠損。長4.2+ α。	全体に鉄化多い。頭部も鉄化顯著で旧形状不明。全形状においてわざかに曲りがあり、使用釘を思われる。欠損は調査時以前。	
同図6 写42	鉄滓 釘	同号	小欠。最大径13.8。 cm	欠損は旧時である。底面は伊豆の庄痕があるが全面ではなく、部分的である。底面は浅く凹む。	
第230図2 写真図版42	土師器 壺	住居跡46号	口縁部片。口径 (11.4)。	白色粒子・鉱物合。硬。 暗褐色。	口縁部の内外面横撫。体部外面型膚あり。底面剝削。
同図3 写42	土師器 壺	同号	口縁部部分欠。口径 (12.2)。器高3.6. cm	白色粒子・鉱物合。昔。 暗褐色。	口縁部の内・外表面横撫。体部外面型膚あり。底面剝削。
同図4 写42	土師器 壺	同号	口縁部部分欠。口径 (12.0)。器高3.6. cm	白色粒子・鉱物合。昔。 暗褐色。	口縁部の内・外表面横撫。体部外面型膚あり。底面剝削。内面ハゼあり。
同図5 写42	土師器 壺	同号	口縁部~体部片。 口径(19.4)。	白色粒子・鉱物微。硬。 暗褐色。	口縁部の内・外表面横撫。頭部に型膚、以下剥削あり。
同図6 写42	土師器 壺	同号	口縁部~体部片。 口径(17.2)。	白色粒子・鉱物微。硬。 橙色。	口縁部の内・外表面横撫。頭部の割口に紐作痕(型作でも)あり。体部剝削。
同図7 写42	土師器 壺	同号	口縁部~体部片。 口径(21.4)。	白色粒子・鉱物合。硬。 橙色。	口縁部の内・外表面横撫。頭部に型膚あり。体部剝削剝削。
同図8 写42	土師器 壺	同号	口縁部~体部片。 口径(21.2)。	白色粒子・鉱物微。昔。 橙色。	口縁部の内・外表面横撫。頭部に型膚・紐作痕あり。体部外面剝削。
同図10 写42	須恵器 壺	同号	3分1個体。口径 (12.8)。	白色粒子・鉱物合。軟。 淡灰色。	底面織籠右回転糸切あり。体部と底部間に突出しの凹みあり。
同図11 未掲載	須恵器 壺・塊	同号	口縁部片。口径 (12.8)。	白色粒子・鉱物微。軟。 灰。	体部外面に織籠目あり。器肉薄作りで笠懸製。
同図13 写42	須恵器 釘	同号	完存。長3.4。	小形の釘で、頭部打折げた釘。鉄化は表面に剥落しているので、旧態はもう少し長かったと考えられる。柱方向の割れあり。	
第231図1 写真図版42	土師器 壺	住居跡45・ 46号	3分2個体。口径 12.0。器高2.8. cm	白色粒子・鉱物合。昔。 橙色。	口縁部の内・外表面に織籠目あり。体部外面型膚あり。底面剝削。
同図2 写42	土師器 壺	同号	3分2個体。口径 12.0. 器高2.6. cm	白色粒子・鉱物合。硬。 橙色。	口縁部の内・外表面に織籠目あり。体部外面型膚あり。底面剝削。
同図3 写42	土師器 壺	同号	口縁部片。口径 (24.2)。	白色粒子・鉱物微。硬。 橙色。	口縁部の内・外表面横撫あり。頭部に紐作(型作でも)あり。体部外面剝削。
同図4 写42	土師器 壺	同号	底部~体部底。底 径4.2。	白色粒子・鉱物合。硬。 暗褐色。	体部外面剝削。内面工具の当り痕あり。器肉は薄い。
同図5 写42	須恵器 蓋	同号	口縁一部片。口径 (13.4)。	白色粒子・鉱物微。軟。 灰。	体部外面上方に織籠右回転の剝削あり。器肉の内層は厚く澤端。
同図6 写42	須恵器 壺	同号	底部片。高台壠部 径(9.2)。	白色粒子・鉱物微。硬。 灰。	底面は織籠右回転の糸切後、高台貼付。
同図7 写42	須恵器 壺	同号	底部片。高台壠部 径(9.2)。	白色粒子・鉱物合。軟。 灰。	織籠目あり。回転方向不明。内面付着。製作地県内・隣接県製。
第239図1 写真図版43	須恵器 壺	井戸跡	底部片。底径 (7.2)。	白色粒子・鉱物合。硬。 淡灰色。	底面糸切。体部外面織籠目あり。底部と体部間に突出しの凹みあり。
第240図1 写真図版43	土師器 壺	満跡01号	3分2個体。口径 (13.6)。	白色粒子・鉱物微。橙色。	口縁部の内・外表面横撫あり。体部外面型膚あり。底面剝削。
第241図2 写真図版43	須恵器 大瓶	満跡02号	口縁~体部片。口径 (23.0)。	白色粒子・鉱物多。硬。 橙色。	形状異質なため再測を行なう。復元の試験でもない。織籠目あるやか。
同図6 未掲載	焼経陶 壺	同号	体部片。	白色粒子・鉱物多。硬。 褐灰色。	外側に叩目あり。割口に紐作痕あり。外側は酸化の色味である。
第243図1 現品不明	土師器 壺	満跡03号	口径12.4.	概報II作成時の図を浄書。完存らしいが該当遺物は見当らず。口 縁部内・外機掛か。体部外壁は塑型帶。以下剥削か。	現品不明。
同図2 写真図版43	土師器 壺	同号	口縁部片。口径 (12.2)。	白色粒子・鉱物合。硬。 暗褐色。	口縁部の内・外表面横撫。体部外面型膚。底面剝削。
同図3 写43	土師器 壺	同号	口縁部片。口径 (12.6)。	白色粒子・鉱物合。硬。 暗褐色。	口縁部の内・外表面横撫。体部外面型膚。底面剝削。
同図4 写43	土師器 壺	同号	口縁部片。口径 (12.2)。	白色粒子・鉱物合。硬。 暗褐色。	口縁部の内・外表面横撫。体部外面型膚。底面剝削。
同図5 写43	土師器 壺	同号	口縁部片。口径 (12.2)。	白色粒子・鉱物微。昔。 橙色。	口縁部の内・外表面横撫。体部外面型膚。底面剝削。
同図7 写43	土師器 大瓶	同号	口縁部片。口径 (17.2)。	白色粒子・鉱物合。軟。 橙色。	口縁部の内・外表面横撫。体部外面型膚あり。底面剝削。
同図8 現品不明	須恵器 壺	同号	口径13.2.	概報II作成時の図を浄書。完存らしいが該当遺物は見当らず。底面 糸切と注記あり。	現品不明。

第5篇 検出された遺構と遺物（古代）

図番号 写真番号	種 器 形	出土位置	量 目 (cm) 残 存 状 態	胎 土・焼 成・色 調 と 摘 要	備 考
第243図9 現品不明	須恵器 壺	溝跡03号	口径14.2。	概報II作成時の図を淨書。口縁部の内・外面横擦か。体部外面肩と型唐突か。	現品不明。
同図10 写43	須恵器 壺	同号	3分1個体。口径 (12.8)。	白色粒子・鉱物含。硬。 底面に輪轍右回転糸切あり。体部に浅い輪轍目あり。	須内製・輪轍接縫製。
同図11 写43	須恵器 壺	同号	口縁部～底部片。 口径 (13.2)。	白色粒子・鉱物含。普。 底面に輪轍右回転糸切あり。体部内モ 外に浅い輪轍目あり。	埼玉製。
同図12 写43	須恵器 壺	同号	3分1個体。口径 (13.2)	白色粒子・鉱物微。軟。 底面に輪轍右回転糸切あり。体部外モ 内に浅い輪轍目あり。	輪接縫製。
同図14 現品不明	須恵器 壺	同号	口径16.4。	概報II作成時の図を淨書。体部に多くの輪轍目(か)がある。口縁 部は外反する。器内薄い特徴あり。	現品不明。
同図15 写43	須恵器 壺	同号	底部～口縁部片。 口径 (16.6)	白色粒子・鉱物含。軟。 底面糰切。輪轍右回転。外面に浅い輪轍 目あり。	輪接縫製。
同図16 写43	須恵器 壺	同号	口縁～底部片。口 径 (15.0)	白色粒子・鉱物微。繩。 底面輪轍右回転の糸切後、高台貼付。 高台欠落。体部に輪轍目あり。	輪接縫製。
第244図18 写真図版43	須恵器 瓶	同号	体部片。最大部径 (18.0)	白色粒子・鉱物含。普。 灰。	頭部内面に3段接合面あり。内面に指 圧痕あり。
同図19 写43	須恵器 台付瓶	同号	高台部片。高台部 径 (9.0)	白色粒子・鉱物含。繩。 灰。	高台貼付。内・外に輪轍目あり。輪 轍回転。
同図20 写43	須恵器 大形瓶	同号	底 部 片。底 径 (14.0)	白色粒子・鉱物含。繩。 黒灰。	底部は粘土板らしい。割口に体部との 接合面見える。
同図21 写43	須恵器 小形甕	同号	口縁部～頸部。(口 径 (21.2))	白色粒子・鉱物微。繩。 暗灰。	内・外に輪轍条痕あり。器内の置き は、頭部で肥厚気味。
同図22 写43	須恵器 小形甕	同号	口縁部～頸部。口 径 (21.6)	白色粒子・鉱物微。繩。 暗灰。	内・外に輪轍条痕あり。回転早。
同図23 写43	須恵器 小形甕	同号	口縁部～頸部。口 径 (23.2)	白色粒子・鉱物微。硬。 灰。	大きく外反する。内・外に輪轍条痕 あり、回転早い。内面はやや薄い。
第245図25 写真図版43	羽口	同号	半欠弱。最大径 (5.2)	白色粒子・鉱物含。硬。 淡黄灰色。	凹凸痕あり。先端部が硬化し黒灰色を 呈する。重さは軽く感じる。
同図26～ 28 写60 -317図 1 ～3	大形炉 破片	同号	各、各部破片。 26底部～壁体。 27底部～壁体。 28底部片。	26割れ口を見ると、底面が使用時に割れていたりしく割口内部まで 焼化する。壁は薄い個所で6mm、厚い個所で10mmとなる。 27壁体側の多くが焼化する。そのほか第245図補注参照。 28炉床部片で、炉体は貼付粘土。そのほか第245図補注参照。	
第246図1 写43	土師器 壺	同号	口縁～体部片。口 径 (12.0)	白色粒子・鉱物微。普。 橙色。	口縁部の内・外に横擦。体部外型 瘤あり。底面 kazefu。
同図2 写43	土師器 壺	同号	口縁～体部片。口 径 (12.2)	白色粒子・鉱物微。普。 橙色。	口縁部の内・外に横擦。体部外型 瘤あり。底面 kazefu。
同図3 写43	土師器 壺	同号	口縁～体部片。口 径 (12.0)	白色粒子・鉱物含。硬。 橙色。	口縁部の内・外に横擦あり。体部外 面に型瘤あり。底面 kazefu。
同図4 写44	土師器 壺	同号	口縁～体部片。口 径 (13.2)	白色粒子・鉱物微。普。 橙色。	口縁部の内・外に横擦あり。体部外 面の型瘤不明顯。底面 kazefu。
同図5 写43	土師器 壺	同号	口縁～体部片。口 径 (13.2)	白色粒子・鉱物微。普。 橙色。	口縁部の内・外に横擦あり。体部外 面の型瘤不明显。底面 kazefu。
同図6 写44	土師器 壺	同号	口縁～体部片。口 径 (13.4)	白色粒子・鉱物含。硬。 橙色。	口縁部の内・外に横擦あり。体部外 面に型瘤あり。底面 kazefu。
同図7 写43	土師器 壺	同号	口縁～体部片。口 径 (12.8)	白色粒子・鉱物含。硬。 暗橙色。	口縁部の内・外に横擦あり。体部外 面の型瘤不明显。底面 kazefu。
同図8 写44	土師器 壺	同号	2分1個体。口径 (11.2)	白色粒子・鉱物含。普。 橙色。	口縁部の内・外に横擦あり。型瘤帶 なし。体部中位以下に kazefu。
同図10 写44	土師器 壺	同号	3分2個体。口径 11.2, 器高3.2,	白色粒子・鉱物含。硬。 明橙色。	口縁部の内・外に横擦あり。型瘤帶 なく、体部中位以下に kazefu。
同図11 写44	土師器 壺	同号	3分1個体。口径 (12.4)	白色粒子・鉱物含。普。 橙色。	口縁部の内・外に横擦あり。型瘤帶 なし、体部中位以下に kazefu。
同図12 写44	土師器 壺	同号	3分1個体。口径 (13.0)	白色粒子・鉱物含。普。 橙色。	口縁部の内・外に横擦あり。体部外 面に型瘤あり。以下底面 kazefu。
同図13 写44	土師器 壺	同号	3分1個体。口径 (12.6)	白色粒子・鉱物含。硬。 橙色。	口縁部の内・外に横擦あり。体部外 面の型瘤不明显。底面 kazefu。
同図14 写44	土師器 壺	同号	3分1個体。口径 (12.6)	白色粒子・鉱物含。硬。 橙色。	口縁部の内・外に横擦あり。体部外 面の型瘤不明显。底面 kazefu。
同図15 写44	土師器 壺	同号	3分2個体。口径 (12.6)	白色粒子・鉱物含。硬。 橙色。	口縁部の内・外に横擦あり。体部外 面に型瘤あり。底面 kazefu。

図番号 写真番号	種 器形	出土位置	量 目(cm) 残 存 状 態	胎 土 ・ 焼 成 ・ 色 調 と 概 要	備 考
第246回17 写真図版44	土器器 鉢	同号	口縁~体部片。口 径(19.8)。	白色粒子・鉱物粒含。硬。 口縁部の内・外面に横擦あり。下面下 方に研磨あり。	現品不明。 赤色釉料。
同回18 現品不明	須恵器 壺	同号	口径(13.0)。器高 (3.6)。	概報II作成時の口を淨書。内面に赤色顔料付着。燒成温度低い。 輪軸右回転との注記あり。器肉厚く、底部際に突出の棱部あり。	東海地方製 湖西窯か。 輪軸右回転系切。
同回19 写44	須恵器 壺	同号	体部~底部片。底 径5.6。	白色粒子・鉱物粒微。締。 灰白色。	厚さのは特徴的。
同回20 写44	須恵器 壺	同号	口径~底部片。口 径(16.7)。	白色粒子・鉱物粒微。締。 灰色。	体部に細い輪軸目あり。高台を底部際 に付ける特徴あり。
第247回1 写真図版44	土器器 台付壺	溝跡06号	脚部片。脚端径 9.0。残存高3.0。	白色粒子・鉱物粒微。硬。 脚端部に穿孔あり。内・外側横擦あり。 脚部・体部の接合面で欠損。	焼成後穿孔 4穴。
同回2 写44	須恵器 壺	同号	3分個体。口径 11.8。器高3.8。	白色粒子・鉱物粒含。太 い針状鉱物含。硬。灰色。	輪軸回転右。斜切後回転見開用。内面 滑らか。外面に浅い輪軸目あり。
同回3 写44	鉄釘釦	同号	先・元欠損。長3.2 +α。	頭部は曲り、使用釘。征目の銷削れなく、鏽ぶくれは部分的に 存在する。	頭部は曲り、使用釘。征目の銷削れなく、鏽ぶくれは部分的に 存在する。
第249回1 写真図版44	土器器 壺	土壤01号	口径部少々。口径 12.2。器高3.3。	白色粒子・鉱物粒微。硬。 口縁部の内・外面に横擦あり。体部外 面中に型斑あり。以下露用。	口縁部の内・外面に横擦あり。体部外 面中に型斑あり。以下露用。
第251回1 写真図版44	須恵器 壺	土壤03号	口縁部片。口径 (21.8)。	白色粒子・鉱物粒微。締。 暗灰色。	内・外側に回転力のある撫痕あり。器 肉はやや薄い。
同回2 未掲載	須恵器 壺	同号	頸部片。頸部径 (30.6)。	白色粒子・鉱物粒微。軟。 灰色。	立上りに2条~1単位の沈線あり。器内 はやや厚い。内面底部に布庄痕あり。
同回3 写44	羽口	同号	径(7.6)。	白色粒子・鉱物粒含。硬。 灰~淡褐色。	割れ口に細かなスサが見える。先端部 は欠損。表面に繊物圧痕あり。
同回4 写44	羽口	同号	径(7.0)。	白色粒子・鉱物粒含。硬。 灰。	割れ口に細かなスサが見える。先端部 は欠損。表面に繊物圧痕あり。
第256回1 写真図版44	須恵器 壺	土壤06号	体部片。最大径 (31.4)。	白色粒子・鉱物粒微。締。 暗灰色。	内面に同心円の目、外面に格子目印 あり。外面上に輪滑面付着。
第259回1 写真図版44	炉壁體 かみ口	土壤11号	小片。	白色粒子・鉱物粒含。硬。 淡黄色。	一方向づいてスサが入っているため羽 口かもしれない。
第261回1 写真図版44	羽口	土壤10号	小欠あり。長14.2。 最大径8.8。	白色粒子・鉱物粒含。硬。 赤褐色。	外側に指擦のような条痕の凹みあり。 先端は硅化泡、鉄分の津波付着。
同回2 写44	羽口	同号	小片。径(7.8)。	白色粒子・鉱物粒微。硬。 灰~淡褐色。	先端は硅化泡、鉄分の津波付着。
第262回1 写44-3	羽口	I 17 h 05	破片。径(7.4)。	白色粒子・鉱物粒微。硬。 灰~淡褐色。	割れ口に細かなスサが見える。先端に 繊物付着。
同回2 写44-4	鉄滓模 形	同上	小欠あり。長径 (10.6)。	底側は凹面成りを呈し、縦断面右側に羽口の残片が硅化付着し ている。欠損部は旧時。写真は別に写真図版60にもあります。	羽口片付着。

## 第9章 出土遺物の項 (237~258頁、第282~323図)

図番号 写真番号	種 器形	出土位置	量 目(cm) 残 存 状 態	胎 土 ・ 焼 成 ・ 色 調 と 概 要	備 考
第282回1 写54・58	塑像頭 部	基壇1号	頭部片耳部。最長 4.6。	白色粒子・鉱物粒微。軟。 軽い。灰。	割れ口に細かなスサがわざかに見え、 耳たぶに硅化泡あり。火中痕。
同回2 写54	塑像か 螺旋か	表採	最長2.6。最大径 2.1。	白色粒子・鉱物粒微。軟。 軽い。灰。	割れ口にスサ見えず。欠損は旧時、基 部は接合面。螺旋状の刻みあり。
同回3 写54	塑像か 螺旋か	H 17 i 6付 螺旋か 近	最長2.2。最大径 2.1。	白色粒子・鉱物粒微。軟。 軽い。灰。	外観にスサ見えず、基部は接合面。指 おさえ状の跡あり。
同回4 写54	塑像か 衣部か	住居跡25号	最長5.4。	白色粒子・鉱物粒微。軟。 軽い。淡緑。	割れ口に細かなスサがわざかに見える。衣部か。 表面に型状の棱部あり。
同回5 写54	塑像物 不詳	E 7(1) S 5(2)	最長4.0。 最長2.2。	白色粒子・鉱物粒微。軟。 軽い。暗灰。	割れ口にスサ見える。表面は半截竹管 状工具痕あり。表面纏される。
同回6 写54	塑像物 不詳	住居跡39号 床面	最長6.5。	白色粒子・鉱物粒微。硬。 重い。灰。	外観にスサ見えず、側面に工具による 文様面あり。欠損は旧時。
第283回1 写真図版54	土管様 瓦製品	注記十三室	段部片。最長6.5。 重い。灰。	外側に凸帯。以下露用。内面に布庄痕。 土台は重い。型作り。	類別1類。
同回6 写54	土管様 瓦製品	注記十三室	体部片。最長8.5。 重い。灰。	外側に輪滑面付着あり。その後を撫整形。 土台は軽い。型作り。	類別2類。
同回2 ～5・7 写54	土管様 瓦製品	2・7注記 十三室、5 はC 6本、 他未注記	各部片。5の有段 部は2.4+α。推定 上は長18~19cm。 最大径8~9cm	大半の成形は同回のように結状による 縞目による絡めが行なわれたのかもし れないが撫られ不明。2~5は有段部 あり、7は広端面。各型作り。	類別2類。

第5篇 検出された遺構と遺物（古代）

図 番 号 写真番号	種 器 形	出土位置	量 目 (cm) 残 存 状 態	胎 土・焼 成・色 調 と 摘 要	備 考
第284図 1 ~7 写真図版54	須恵質 瓦塔	1・4・7 は基壇1号 南側、6は 同2号北側。 他は各注記 参照。	各部位については 第284図中の部位 想定図を参照。半 截竹管には0.9cm と、0.65cmの2種 の直径あり。	白色粒子・鉱物粒微。軟。 赤褐~灰(酸化気味)。土 味は重く陶土質。	各欠損はいずれも旧跡。輪部片は1点 も見当らず。7点は屋蓋部片。6・7の 裏面にわずか赤色顔料付着。各個体、 各部の観察内容は第284図の補注を参 照されたい。
第285図 1 写真図版54	須恵器 樽形甌	寺東北	体部片。最大径 (14.8)。	白色粒子・鉱物粒微。緑。 黒灰色。	外面に錐目。内面に繊維目あり。割れ 口に紐作痕あり。
同図 2 未掲載	須恵器 高坏	E 9 S 6 瓶	壺部片。	白色粒子・鉱物粒多。並。 灰。	底面に接目。脚部の接合部あり。全体 に風化し、割れ口丸みおびる。
第286図 1 写真図版54	埴輪 円筒か	住居跡11号	基部片。	白色粒子・鉱物粒微。硬。 橙。	外面上に錐目。内面に指の圧痕と擦りあり。 東毛製。
同図 2 写真 写54	埴輪 円筒か	住居跡11号	体部片。	白色粒子・鉱物粒微。硬。 橙。	外面上に錐目。内面に指の圧痕。割れ口 に紐作痕あり。
第287図 写真図版54	円形加 工品	J 17	直径3.2	白色粒子・鉱物粒微。軟。 橙・黒。	酸化焰気味の内面研磨、黒色処理の坏 か手牌に打ち欠き円形に再加工。
第288図 1 写真図版54	須恵器 蓋	E 9 S 6	摘径4.8。	白色粒子・鉱物粒微。硬。 灰。	注記の住地は住居跡該当不明。中央 部の換出し窓ある。
同図 2 写真 写54	須恵器 蓋	J 18	摘径4.2。	白色粒子・鉱物粒微。軟。 灰。	中央部の換出し高まり、笠懸製品に多 く共通あり。端部やや丸い。
同図 3 写真 写54	須恵器 蓋	注記十三室	体部片。	白色粒子・鉱物粒微。並。 灰。	天井部外面に繊維右回転の範囲あり。 器肉はやや厚い。
同図 4 写54	須恵器 壺か	E 9 S 6	口縁~体部片。口 径(14.4)。	白色粒子・鉱物粒微。軟。 灰。	体部の内・外面上に繊維目あり。回転方 向は右回転。
同図 5 未掲載	須恵器 壺か	E 7(2) S 7	口縁~体部片。口 径(14.2)。	白色粒子・鉱物粒微。並。 灰。	立てる。
同図 6 写54	須恵器 柄	住記十三室	体部~底部片。底 径(7.4)。	白色粒子・鉱物粒微。軟。 灰。	体部外面に繊維目あり。底部と体部外 面との間に換出し棲あり。底面系切。
同図 7 写54	須恵器 壺	未注記	体部~底部片。底 径(7.2)。	白色粒子・鉱物粒微。軟。 淡橙・黒。酸化焰。	底面は大切後回転範囲。外面墨書き。 内面研磨、内黒処理。文字不明。
同図 8 写54	須恵器 大形环	E 9 S 6	体部~底部片。底 径(10.4)。	白色粒子・鉱物粒微。軟。 灰。	底面はやるい回転の范囲。外面上に繊 維は著者でない。
同図 9 写54	須恵器 壺	注記意味不 詳	底部片。台部径 (7.8)。	白色粒子・鉱物粒微。軟。 灰。	底面は繊維右回転の糸条。その後高台 接合。
同図10 写54	須恵器 壺	注記十三不 明	底部片。	白色粒子・鉱物粒微。軟。 暗灰。	底面の切離し技法不明。その後、撫整 形。高台貼付。
同図11 写54	須恵器 台付瓶	H・I 18遺 構面上	底部片。台部径 (14.6)。	白色粒子・鉱物粒微。並。 底面は回転範囲。高台は貼付。器肉は 大形であるが、やや薄作。	笠懸製。
第289図 1 写真図版55	土師器 壺	住記十三室	口縁 部 片。口 径 (14.0)。	白色粒子・鉱物粒微。軟。 淡橙。	口縁部の内・外面上に横撫あり。器肉は 薄作り。
同図 2 写55	土師器 壺	E 10(2) S 1(1)	口縁 部 片。口 径 (14.4)。	白色粒子・鉱物粒微。軟。 橙。	口縁部の内・外面上に横撫あり。内・外 面にハリあり。
同図 3 写55	土師器 壺	住居跡30号	口縁~体部片。口 径(12.2)。	白色粒子・鉱物粒微。軟。 淡橙。	口縁部の内・外面上に横撫あり。底面は 範囲。型崩は不明。
同図 4 写55	土師器 壺	I 16	口縁~体部片。口 径(13.4)。	白色粒子・鉱物粒微。軟。 淡橙。	口縁部の内・外面上に横撫あり。底面は 範囲。形崩は不明。
同図 7 写55	土師器 壺	E 9(2) S 4	口縁~底部片。口 径(11.4)。	白色粒子・鉱物粒微。軟。 淡橙。	口縁部の内・外面上に横撫あり。体部・ 底部は剥削。
同図 8 写55	土師器 小形鉢	住居跡38号	口縁~体部片。口 径(13.6)。	白色粒子・鉱物粒微。軟。 淡橙。	口縁部の内・外面上に横撫あり。体部は 剥削。器肉はやや厚い。
同図 9 写55	土師器 壺	住居跡27号	口縁部小片。	白色粒子・鉱物粒微。軟。 淡橙。	口縁部の内・外面上に横撫あり。器肉は 薄作り。
第290図 1 写真図版54	土師須 恵壺	住居跡33号	完存。口径16.7。 器高7.1。	白色粒子・鉱物粒微。軟。 淡黄褐・黒。酸化気味。	口縁部の内・外面上に横撫あり。体部に 凹凸あり。内面黒色処理。
同図 2 未掲載	土師須 恵壺	住居跡 9号	底部。	白色粒子・鉱物粒微。軟。 淡黄灰。酸化気味。	体部の内面に凹凸あり。高台は貼付。 器肉はやや厚い。二次被熱か。
第291図 1 写真図版55	土師須 恵壺	I 18	口径(15.2)	白色粒子・鉱物粒微。軟。 淡褐・黒。酸化気味。	口縁部の内・外面上に横撫あり。体部範 囲。内面研磨。内黒処理。
同図 2 写55	土師須 恵壺	注記十三室	口縁~体部片。口 径(14.6)。	白色粒子・鉱物粒微。軟。 淡褐・黒。酸化気味。	口縁部の内・外面上に横撫あり。体部範 囲。内面研磨。内黒処理。

図番号 写真番号	種器形	出土位置	量目(cm) 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要	備考	
第291図3 写真図版55	須恵器 鉢	住居跡8号	口縁~体部片。口径(22.0)。	白色粒子・鉱物粒含。軟暗褐。	内面に研磨・黒色處理。外面に油煙か漆付着。体部外面下方回転削削。	東北製か。 分析93。
第292図1 写真図版55	須恵器 蓋	I 18 a 04	口縁部片。 口径(15.6)。	白色粒子・鉱物粒微。硬灰。	器高があると推定でき、笠懸製として異異。端部丸みおびる。	笠懸・輪接不明。
同図2 写55	須恵器 壺	未注記	3分1個体。口径(13.0)。	白色粒子・鉱物粒微。軟淡灰。	底面は糸切りによる。輪轂右回転。体部の内・外に輪轂目あり。	笠懸・輪接不明。
同図3 写55	須恵器 壺	E 9 S 6	4分1個体。口径(13.4)。	白色粒子・鉱物粒微。緑。	底面が油煙後、回転削削。体部の内・外に輪轂目あり。器内得作。右回転。	笠懸・輪接不明。
同図4 写55	須恵器 壺・塊	E 10 S 1(3)	口縁部片。口径(15.2)。	白色粒子・鉱物粒微。並暗灰。	口縁端部が肥厚し、体部におまかなか輪轂目あり。輪轂右回転。	笠懸・輪接不明。
同図5 写55	須恵器 壺	E 7 (1)	口縁~体部片。口径(14.2)。	白色粒子・鉱物粒微。並暗灰。	口縁端部が肥厚し、体部におまかなか輪轂目あり。輪轂右回転。	笠懸・輪接不明。
同図6 写55	須恵器 中形壺	E 9 (1)	体部片。	白色粒子・鉱物粒微。緑。	断面凹凸側が本体の底。内面同心円文あり。外側に要片と粘土被付着。	笠懸・輪接不明。
第293図1 写真図版55	須恵器 大壺	E 7 (2) S 5 (1)	口縁部片。口径(46.0)。	白色粒子・鉱物粒微。緑。	割れ口は暗赤褐色。内・外に大きな輪轂目あり。	東北製・輪接製。
第294図1 写真図版55	須恵器 蓋	E 7 (3)	摘捺部片。摘径2.2. S 4	雪白・黒色粒子・鉱物粒含。雪母粒含。硬灰。	天井部は回転削削。摘みは平らで特徴的。器身や厚い。	末野製。
同図2 写55	須恵器 壺	C 4 - 11	体部~底部片。底径(6.0)。	雪白・黒色粒子・鉱物粒含。雪母粒含。緑。灰。	底面は糸切り。器肉薄作り。体部外面に輪轂目あり。	末野製。
同図3 写55	須恵器 羽釜	E 9 (1) S 3	体部片。最大径(24.0)。	白・黒色粒子・鉱物粒含。雪母粒含。並。洪福。	内・外壁は凹凸少ない。内面に擦痕あり。割れ口に紐作痕あり。	末野製。
同図4 写55	須恵器 羽釜	H18	口縁部~体部片。 口径(20.4)。	白・黒色粒子・鉱物粒含。雪母粒含。並。洪福。	口縁は内傾し、特徴的。割れ口に紐作痕。内面に輪轂目あり。	末野製。
第295図1 写真図版55	須恵器 蓋	S 9 6 D	摘捺部片。摘径2.4. S 4	白色粒子・鉱物粒微。硬。	器肉は薄作り。摘み中央尖る。端部や底面はやや厚い。	関接県製。
同図3 写55	須恵器 蓋	基壇1号 外北東	摘捺~体部片。摘径3.1.	白色粒子・鉱物粒微。硬灰。	器内はやや厚い。摘み中央尖る。端部やや尖る。	関接県製。
同図4 写55	須恵器 蓋	K16表土	口縁~体部片。口径(7.8)。	白色粒子・鉱物粒微。硬灰。	天井部は回転削削。器内はやや厚い。端部はやや丸い。	関接県製。
同図5 写55	須恵器 蓋	J 16	体部片。	白色粒子・鉱物粒微。硬。	体部外壁に輪轂右回転の荒削あり。器肉やや厚い。	関接県製。
同図6 写55	須恵器 蓋	E 7 S 5 (1)	口縁~体部片。口径(15.4)。	白色粒子・鉱物粒微。緑。	体部外壁に輪轂右回転の荒削あり。器肉やや厚い。口縁端部や丸い。	関接県製。
同図7 写55	須恵器 蓋	J 17表土	口縁~体部片。口径(12.5)。	白色粒子・鉱物粒微。硬灰。	体部外壁上方に輪轂右回転の荒削あり。内面に輪轂目。端部やや丸い。	関接県製。
同図9 写55	須恵器 小形环	J 17表土	底部片。 底径(5.6)。	白色粒子・鉱物粒含。底黒灰。	底面の前縫しは荒起しが、その後回転荒削。併せて内・外に輪轂目あり。	関接県製。
同図10 写55	須恵器 壺	基壇II(該当不明)	底部片。 底径(7.2)。	白色粒子・鉱物粒微。硬灰。	底面は糸切による。体部の内・外は滑らか。	関接県製。
同図11 写55	須恵器 壺	寺東北鍋	3分2個体。口径13.5. 器高4.5。	白色粒子・鉱物粒微。硬灰。	底面は荒削再整形。体部の内・外に輪轂目あり。肉取り不均行。	関接県製。
同図12 写55	須恵器 壺	J 18	底部片。底径6.3.	白色粒子・鉱物粒含。硬。	底面は輪轂右回転の余切。底部と体部に回転削削あり。	関接県製。
同図13 写55	須恵器 壺か	J 16	口縁部片。口径(12.6)。	白色粒子・鉱物粒微。緑。	口縁端部は特徴的に肥厚する。器肉は薄い。体部に輪轂目不明。	関接県製。
同図14 写55	須恵器 壺か	E 9 (3) S	口縁部片。口径(13.2)。	白色粒子・鉱物粒微。硬灰。	体部外壁に輪轂目あり。口縁端部は特徴的に反する。	関接県製。
同図15 写55	須恵器 壺か	E 7 (2) S 5	口縁部片。口径(14.6)。	白色粒子・鉱物粒微。硬灰。	口縁端部は肥厚し、特徴的に外反する。輪轂目は目立ず。	関接県製。
同図16 未掲載	須恵器 壺か	J 16 j 03	口縁部片。口径(13.0)。	白色粒子・鉱物粒微。硬。	口縁端部は内側に肥厚化する。体部に輪轂目は目立ず。	関接県製。
第296図17 写真図版55	須恵器 平瓶	住居跡4号	頭部片。頭部径(6.8)。	白色粒子・鉱物粒微。緑。	内面に粘土板の接合面見える。外面に自然釉かかる。	関接県製。
同図18 写55	須恵器 鉢	E 8 S 6 b	口縁部片。口径(19.5)。	白色粒子・鉱物粒微。硬暗灰。	内面におまかなか研磨あり。外面に輪轂目。口縁端部は脱い。	関接県製。 分析92。
同図19 写55	須恵器 瓶	H17	口縁~頸部片。口径(16.8)。	白色粒子・鉱物粒微。緑。	内面に輪轂目あり。外面は凹凸目立す。	関接県製。
同図20 写55	須恵器 瓶	8ホ6g	体部~底部片。台部径(9.6)。	白色粒子・鉱物粒微。緑。	体部外壁下部は回転削削。内面に輪轂目あり。高台は貼付。	関接県製。

第5篇 検出された遺構と遺物（古代）

図番号 写真番号	種器形	出土位置	量目(cm) 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要	備考
第296図21 写真版55	須恵器瓶		8リ6チ	体部片。 白色粒子・鉱物粒微。緑。黒灰。体部外表面回転の範囲。内面に織縫目あり。外面上自然釉かかる。	隣接県製。
同図22 等55	須恵器瓶	H18	体部片。	白色粒子・鉱物粒微。緑。暗灰。	体部外表面回転の範囲。内面に織縫目あり。割れ口に絞作痕あり。
同図23 等55	須恵器中形甕 シ	I 12 e ライ ン	体部下方片。	白色粒子・鉱物粒微。緑。灰。	内面に同心円当目。外面上細格子即ち。外面上自然釉かかる。
同図24 等55	須恵器大形甕 瓦女瓦	E 9 S 南	口縁部片。	白色粒子・鉱物粒微。緑。灰。	外面上に5+αを単位とする波状文あり。外面上自然釉かかる。
同図25 等55 25'	須恵器大形甕 瓦女瓦	L 18 f 01	底部片。 底径(3.0)。 付着瓦片。	白色粒子・鉱物粒微。緑。暗灰。 胎土は25と同じ。横骨構造、粘土板剥取条痕不明顯。裏面に正格子あ。正格子の状態は235頁第278回格子撇入1型にあり。	隣接県製。 25'は付着瓦。分析番号929。
第297図1 写真版55	須恵器壺	I 16 東土	底部片。底径6.5。	白色粒子・鉱物粒微。緑。暗灰。 底面に織縫右回転糸切あり。器肉薄く特徴的。	瀬西製。
同図2 写真版56	須恵器壺	住居跡25号	底部片。台部径 (7.4)。	交織物ほとんど見えず。緑。灰。	底面に織縫右回転糸切後、高台貼付。内・外面上に織縫目あり。器肉薄い。
同図3 写真版56	須恵器小形甕	未注記	口縁部片。口径 (5.4)。	交織物ほとんど見えず。緑。黒灰。	東海以西製。
同図4 写真版56	須恵器瓶	I 18	頸部片。頸部径 (7.2)。	交織物ほとんど見えず。緑。暗灰。	内面に工具による右回転の織縫目あり。内面に織縫目。器肉は薄作りで、特徴的。
同図5 写真版56	須恵器中形甕 南側	基壇1号外	体部片。	白色粒子・鉱物粒微。緑。暗灰。	内面に織縫目あり。外面上自然釉かかる。
同図6 写真版56	須恵器小形甕	未注記	体部～底部片。底 径(5.2)。	白色粒子・鉱物粒微。緑。灰。	内面に工具による右回転の織縫目あり。底面は糸切。
同図7 写真版56	須恵器中形甕	注記十三室 南側	頸部～体部片。頸 部径(16.2)。	白色粒子・鉱物粒微。緑。暗灰。	内面に素文當目。外面上平行印あり。外面上自然釉かかる。
第298回2 写真版56	須恵器平瓶	K16	体部片。	白色粒子・鉱物粒微。緑。灰。	内面に回転条痕あり。外面上自然釉が厚くかかる。
同図3 写真版56	須恵器瓶	E 9 S 6	口縁部片。口径 (7.6)。	白色粒子・鉱物粒微。緑。黒灰色。	内・外面上に織縫目あり。器肉は薄い。外面上自然釉かかる。
第299回1 写真版56	土器壺 坏	I SKC 2	口縁～体部片。口 径(15.4)。	白色粒子・鉱物粒微。雷 母入なし。緑。橙。	口縁部の内・外面上に横構あり。体部外 面下方に見附あり。器肉薄作り。
同図3 未発載	土器壺 壺	K16	口縁部片。口径 (19.0)。	白色粒子・鉱物粒微。重 い。硬。橙。	口縁部～頸部に横構あり。頸部外面に 型崩痕あり。
第300回1 写真版56	須恵貯 淨瓶	J 18	各部片。最大径 (13.6)。	白色粒子・鉱物粒微。緑。淡褐。	注口部、肩部、高台部分、計6片あり。原始灰釉か。東海製。
同図2 写真版56	須恵貯 淨瓶	住居跡30号	頸部片。残存長 径11.2。	白色粒子・鉱物粒微。緑。淡褐。	注口部の割れ口は封され、欠損後も利 用される。全面に釉あり。酸化気味。
同図3 写真版56	須恵貯 淨瓶	注記判読で きず	口部片。口径 (4.0)。	白色粒子・鉱物粒微。緑。淡褐。	注口部は釉あり。酸化気味。
同図4 写真版56	須恵貯 淨瓶	住居跡37号	口部片。口径 (5.0)。	白色粒子・鉱物粒微。緑。淡褐。	注口部は釉あり。酸化気味。
同図5 写真版56	須恵貯 淨瓶	K18	口部片。口径 (4.8)。	白色粒子・鉱物粒微。緑。淡褐。	注口部は釉あり。酸化気味。
第301回1 写真版56	灰陶壺 耳皿	H18	3分2個体。底径 5.0。	白色粒子・鉱物粒微。緑。淡灰。	底面は右回転糸切り。内面に織縫目あり。牠は底面裏を除いて施釉。
同図2 写真版56	灰陶壺 小甕	獨立柱建物 9号	2分1個体。径 (8.0)。	白色粒子・鉱物粒微。緑。淡灰。	内面の工具痕は不明確。牠はカヤし剥落あり、二次被熱か。牠は厚い。
同図3 写真版56	灰陶壺 皿	住居跡27号	口縁～体部片。口 径(14.6)。	白色粒子・鉱物粒微。緑。淡灰。	口縁端部は肥厚する。牠は高台を除き施釉。漫掛。牠は薄い。
同図4 写真版56	灰陶壺 甕	住居跡27号	底部片。台部径 (6.6)。	白色粒子・鉱物粒微。緑。淡灰。	牠は薄く、高台を除いて施釉。施掛。
同図5 写真版56	灰陶壺 甕	住居跡29号	底部片。台部径 (7.4)。	白色粒子・鉱物粒目立す。緑。淡灰。	牠は薄く、高台を除いて施釉。施掛。
同図6 写真版56 不詳	縁陶か 三彩お よび彩 釉陶器	K15	体部片。最大径 (16.4)。	透明鉱物微、同鉱物角ぼ る。軟。黄灰。	牠はほとんど剥落。胎土はショーグ状 でも小鉱物入るため縁陶器か。
第303・304 図1～2 写真版57 ・58 漏なし	細かな出土 位置は因縁 の注記参照			胎土の鉱物粒はほとんど目立ず、わずか含まれる透明鉱物の角 ぼりは観察しない。そのほかの鉱物が目立ないのは、地色が白色の 鉱物・粒子を見えづらくしている。硬さはショーグ状で軟らか。 色調は淡黄色を呈す。	東海以西製。

図番号 写真番号	種 器形	出土位置	量 目(cm) 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要	備 考
同図1	碗	8へ5de	底鉢(8.4)。	地・緑・褐色あり。内・外にトチ痕が各1あり。底回転荒削。	二次被熱が、風化あり。
同図2	碗	基壇1表探	底径(8.0)。	地・緑釉あり。内面地釉のみ。底面は回転荒削。	風化あり。
同図3	皿・碗	表探	底径(12.0)。	外画は地の釉。内面は地の釉と綠釉あり。底面は回転荒削。	風化あり。
同図4	环・碗	表探	体部片。	地・緑釉あり。綠色が内・外ともほんのわずかしか見えない。	風化顕著。
同図5	皿・碗	8へ6d	体部片。	地・緑釉あり。二次被熱変色している。風化あり。	二次被熱。
同図6	环・碗	表探	体部片。	外画は緑・褐釉あり。微細な破片で断面の傾き不明。	風化あり。
同図7	环・碗	表探	体部片。	地の釉あり。微細な破片で断面の傾き不明。内面剥落。	風化あり。
同図8	火食皿	表探	底部片。	片面は地の釉のみ。片面に地・綠釉あり。	風化あり。
同図9	皿・碗	表探	体部片。	地・緑・褐釉あり。釉剥落。	風化あり。
同図10	碗	Rb6a	口縁部片。	地・緑釉あり。口縁部に使用の磨耗あり。	風化あり。
同図11	碗	8へ5de	口縁部片。径約21。	地・緑・褐釉あり。口縁部に使用の磨耗あり。	風化あり。
同図12	碗	8へ6d	口縁部片。	地・緑・褐釉あり。口縁部に使用の磨耗あり。	風化あり。
同図13	碗	J16	口縁部片。	地・緑釉あり。口縁部に使用の磨耗あり。口縁下に浅い沈線1条。	風化顕著。
同図14	碗	表探	口縁部片。	地・緑釉あり。口縁部に使用磨耗。口縁下に浅い沈線1条。	風化顕著。
同図15	碗	8へ6de	口縁部片。径約18。	地・緑・褐釉あり。口縁部に使用の磨耗あり。口縁下に浅い沈線1条。	風化あり。
同図16	碗	K17西南	口縁部片。	地・緑・褐釉あり。口縁部に使用の磨耗少なし。口縁下浅い沈線1条。	風化あり。
同図17	碗	表探	口縁部片。	緑の釉あり。口縁部に使用の磨耗あり。	風化顕著。
同図18	碗	8へ6d	口径(13.0)。	地・緑釉あり。口縁部に使用の磨耗少ない。体部外回転荒削。	風化あり。
同図19	碗	8へ6a	口径(13.0)。	地・緑釉あり。口縁部に使用の磨耗少ない。口縁下浅い沈線1条。	二次被熱。
同図20	碗	未注記	口径(14.0)。	地・緑・褐釉あり。口縁部に使用の磨耗あり。口縁下沈線1条。	風化少。
同図21	碗	基1東表探	口径約(15.0)。	地・緑・褐釉あり。体部外面に回転荒削あり。	二次被熱。
同図22	碗	C16-4	口径(17.8)。	地・緑釉あり。口縁部に使用の磨耗あり。口縁下に沈線2条あり。	風化あり。
同図23	碗	基1北側	口径(17.8)。	地・緑釉あり。口縁部に使用磨耗。外回転荒削。	風化あり。
同図24	碗	J17-3溝他	口径(12.8)。	地・緑・褐・褐釉。底内・外面トテン痕各1。磨耗あり。荒削。	風化あり。
同図25	碗か	表探	体部片。	地の釉あり。頬ときは画面の荒削目を水平とした場合。	風化顕著。
同図26	碗か	K16	体部片。	緑・褐釉あり。小片のため傾きの根拠なく不明。	風化あり。
同図27	碗・鉢	8b6a	体部片。	地・緑・褐釉あり。小片のため傾きの根拠なく不明。	風化あり。
同図28	碗・鉢	E7S□	体部片。	地・緑釉あり。小片のため傾きの根拠なく不明。	風化あり。
同図29	碗・鉢	表探	体部片。	地・緑・褐釉あり。釉剥落多い。	風化あり。
同図30	碗・鉢	表探	体部片。	地・緑・褐釉。底内・外面トテン痕各1。磨耗あり。荒削。	風化少。
同図31	碗・鉢	表探	体部片。	外面地・褐釉。内面地の釉あり。小片のため傾き根拠なく不明。	風化少。
同図32	碗か	基1東表探	体部片。	地・緑釉あり。外面に回転荒削痕あり。	風化あり。
同図33	碗か	基1東北	体部片。	内面地の釉・外面緑釉あり。外面に回転荒削痕あり。	風化顕著。
同図34	碗・鉢	基1号南	体部片。	内面地の釉・外面地・緑釉あり。外面上の釉剥落気味。	風化顕著。
同図35	碗・鉢	基3号東	体部片。	内面地・緑釉・外面地・緑釉あり。	風化あり。
同図36	碗か	基1東北探	体部片。	内面地の釉・外面地・緑釉あり。外面上に回転荒削痕あり。	風化あり。
同図37	碗・鉢	表探	体部片。	内面地・緑釉あり。外地面の釉あり。大半剥落。	風化顕著。
同図38	碗か	8へ5d	底部片。	外面上に・緑・褐釉あり。内面側は剥落不明。底面回転荒削痕あり。	風化あり。
同図39	碗か	8へ6a	底部片。	外面上に・緑・褐釉あり。内面側は地釉。底面回転荒削痕あり。	風化あり。
同図40	碗	表探	底部片。	片面に地の釉あり。片面に褐の釉・緑釉あり。	風化あり。
同図41	碗	I18	底径(13.8)。	外地面・褐・緑釉あり。内地面・緑釉あり。外面上に回転荒削痕。	風化顕著。
同図42	碗	I18	底径(16.8)。	内・外面上に地・緑・褐釉あり。外面上に回転荒削痕。	風化あり。
同図43	碗	掘立4号	底径(13.8)。	内・外面上に地・緑・褐釉あり。外面上に回転荒削痕。	風化あり。
同図44	皿	未注記	口径(17.8)。	内・外面上に地・緑・褐釉。外面上に回転荒削痕。	風化あり。
同図45	碗	E9S6號	底径(11.2)。	外面上に地・緑・褐釉。内面上に地・緑・褐釉あり。外面上に回転荒削痕。	風化あり。
同図46	盤	基1号J16	口径(23.4)。	外面上に地・緑・褐釉。内面上に地・緑・褐釉あり。外面上に回転荒削痕。	風化顕著。
同図47	盤	E9S6	口径(23.4)。	内・外面上に地・緑・褐釉。外面上は磨耗。体部回転荒削。	風化少。
同図48	盤	未注記	口径(28.2)。	内・外面上に地・緑・褐釉。外面上は磨耗。体部外回転荒削。	風化少。
同図49	盤か	8へ5de	底部片。	片面地の釉・内地面・緑釉あり。被熱色変。風化あり。	二次被熱。
同図50	鉢	住居跡38号	口径(27.6)。	外面上に地・緑・内地面に地・緑・褐釉あり。口縁磨耗。回転荒削。	風化少。
同図51	鉢	I16	口径(28.6)。	内・外面上に地・緑・褐釉あり。口縁部磨耗。	風化少。
同図52	鉢	8チ6a	口縁部片。	内面上に地・緑釉あり。外面上に褐・緑釉あり。口縁部磨耗少なし。	風化少。
同図53	鉢	I17j4	口縁部隠片。	外面上に地・緑釉あり。内面上に地の釉あり。	風化あり。
同図54	鉢	E8S6	体部片。	外面上に地・緑・褐釉あり。内面上に地・緑釉あり。	風化あり。
同図55	鉢か	E8S4	体部片。	内面上に地・緑釉。外面上に地・緑・褐釉あり。	風化あり。
同図56	鉢か	J17	体部片。	内・外面上に地・緑・褐釉。外面上は磨耗。	風化少。
同図57	鉢か	J16	体部片。	内・外面上に地・緑・褐釉あり。口縁部磨耗。	風化あり。
同図58	小甕	未注記	口径(4.0)。	色調は緑・褐釉であるが褐色は二次被熱のためか不明。風化。	二次被熱。
同図59	小瓶か	基壇2ほか	体部片。	内面上の釉の大半は剥落。外面上に地の釉あり。	風化顕著。
同図60	小瓶か	8F6a	体部片。	内面上に地の釉・外面上に地・緑釉あり。極めて薄作り。	風化あり。

第5篇 検出された遺構と遺物（古代）

図番号 写真番号	種 器 形	出土位置	量 目 (cm) 残存 状態	胎 土・焼 成・色 調 と 摘 要	備 考
同図61 写真61	蓋か	8号6d	体部片。	焼きは内面の鐵錫口模様。外面、地・緑・褐釉、内面地・緑釉。	風化あり。
同図62 不明	基壇1号	体部片。		外面に地・緑・褐釉あり。内面は剥落欠損。	風化少。
同図63 不明	J17	体部片。	小片のため傾き不明。内面に地・緑釉、外面上に地の釉あり。	風化あり。	
同図64 不明	表探	体部片。	小片のため傾き不明。内面に地・緑釉、外面上に地・緑釉あり。	風化頗著。	
同図65 不明	表探	体部片。	小片のため傾き不明。外面上に地・緑・褐釉、内面に地の釉あり。	風化あり。	
同図66 火舎	基1東表探	体部片。	内面に地の釉。外面上に地・緑・褐釉あり。	風化頗著。二次被熱。	
同図67 不明	記注意味？	体部片。口縁際か。	外面上に地・緑釉、内面に地・緑・褐釉あり。口縁際が薄作り。	風化少。	
同図68 火舎か	J16	底部片。	片側に地の釉。片側に地・緑・褐釉あり。内・外整形底あり。	風化あり。	
同図69 火舎	住居跡33号	口縁部片。	被熱のため発色状が不明瞭。地の釉を確認できる。口縁際削。	二次被熱。	
同図70 火舎	基壇3号	脚部。	全体窓整形。足端の刻み4個所。地・緑・褐釉あり。発色良。	風化少。	
同図71 火舎	住居跡38号	底部径 (18.0)	内・外面上に地・緑・褐釉あり。72とは直徑、傾き異なり別個体。	風化あり。	
同図72 火舎	住居跡38号	底部径 (21.6)	内・外面上に地・緑・褐釉あり。71とは別個体。70と同一個体か。	風化あり。	
第306回1 写真図版58	金銅製 押出仙	基壇2号外 北東隅	残存長径0.97.	型による打出し仏像で、大きな個体の一部らしい。鍍金は厚く、鍍金製。色調は純金色に近い。(品位高)。整理中にやや色変あり。	
同図2 写58	銅製 鉈	住居跡29号	径3.8、珠典0.8. 厚0.7.	同上接合、圓化的狀態で、圓中の点線のない個所は鋸割を示し、破綻は欠損部(調査時)と鉈製の珠を示す。	
同図3 写58	銅製 筒	J151ライ	直徑1.3、長1.1.	筒状の金物で、円柱穴と思われる小孔あり。円形を成すについて鐵錫の跡は見えない。平面圓左端面によくれ状態の個所。	
第307回1 写真図版58	金銅製 輪金物	H・I18	ほぼ完存。直徑 7.4。厚0.15.	表面扁平な輪金物の一部分的に鍍金が残る。全体の鍍化は浅く、鍍金よりは少ない。鍛造の様子からは古代鉄か和鉄か不明。	鍍金製。
第308回1 写真図版56	転用鏡 須恵壺	I17	底面～体部片。底 径 (7.4.)	白色粒子・鉱物粒含。軟。内面底粗粒。底面右回転糸切後、回転 笠懸。内面に赤色顔料付着。笠懸製。	赤色顔料。分析22。
同図2 未掲載	転用鏡 須恵壺	K18	2分1個体。口径 (12.4.)	白色粒子・鉱物粒微。針 状物質合。硬。灰。内面底わずか磨耗。底面右回転糸切。外面部鐵錫。内面顔料付着。墳玉焼。	赤色顔料。分析28。
同図3 写56	転用鏡 灰釉陶	住居跡27号	口縁～体部片。口 径 (13.3.)	交差窓白色粒微。縁。灰。灰釉は浅く。折。内面底の釉なしの部分 に赤色料付着。内面は磨耗。	赤色顔料。分析39。
同図4 写56	転用鏡 須恵壺	住居跡27号	体部片。	白色粒子・鉱物粒含。並。内・外面部紫。内面側に赤色顔料付着。 内面磨耗は少すか。右回転。笠懸製。	赤色顔料。笠懸製。
同図5 写56	転用鏡 須恵壺	住居跡29号	底 部 片。底 部 径 (12.4.)	白色粒子・鉱物粒含。並。内面の磨耗顯著。墨底あり。底面拓本 は第184回図34にあり。	墨底。塊・ 笠。カ。
同図6 写56	転用鏡 須恵壺	E9S6弧	底 部 片。台 部 径 (8.6.)	白色粒子・鉱物粒微。軟。高台側が部分的に欠かれ、内側に磨耗 耗耗あり。墨底は見えず。右回転。	笠懸製。
同図8 写56	転用鏡 須恵壺	住居跡33号	底 部 片。台 部 径 (10.2.)	白色粒子・鉱物粒微。軟。高台側が部分的に欠かれ、内側に磨耗 耗耗あり。墨底不明顯。墨書あり。右回転。	笠懸製。
同図9 写56	転用鏡 須恵壺	寺道横北東	底 部 片。台 部 径 (10.0.)	白色粒子・鉱物粒微。軟。高台側が部分的に欠かれ、内側に磨耗 耗耗あり。墨底あり。底面は右回転磨削。	笠懸製。
同図10 写56	転用鏡 須恵壺	溝跡4号	底 部 片。台 部 径 (10.8.)	白色粒子・鉱物粒微。軟。内・外面部粗粒し、墨底あり。外面部 割口に墨底。底面は右回転磨削。	笠懸製。
同図11 写56	転用鏡 須恵壺	住居跡46号	底 部 片。台 部 径 (7.2.)	白色粒子・鉱物粒含。軟。底面外側に墨底あり。底面に余切見え る。鐵錫右回転。	墨底あり。 笠懸製。
第309回 写真56・58	土器製 電	溝跡4号	約5.9 1個体。器 高約 (37.0.)	白色粒子・鉱物粒含。軟。全体は紐作で指による成形後、質削 り。内面は擦により整え紐痕見える。	東毛製。
第310回2 写真図版38	須恵器 壺	住居跡33号	ほぼ完器。口 径 15.5. 器高3.5. 底 面	白色粒子・鉱物粒微。硬。体部外間に鐵錫右回転の鋤削あり。外 面に「大井」墨書あり。	笠懸製か。 墨書。
同図3 写39・59	土器器 壺	住居跡38号	底 ～ 体部片。	白色粒子・鉱物粒微。並。体部から底面にかけ鋤削。底面に「大 井」墨書あり。	
同図4 写39・59	土器器 壺	住居跡37号	底 ～ 体部片。	白色粒子・鉱物粒微。軟。底面鋤削。内面に墨痕が吸収あり。外 面明鏡。	墨書。
同図6 写59	土器器 壺	住居跡38号	底部片。	白色粒子・鉱物粒微。並。底面鋤削。外面上に墨書あり「大井か」 墨書あり。大の字は欠刻あり。	墨書。
同図7 写36・59	須恵器 壺	住居跡30号	底 部 片。底 径 (8.0.)	白色粒子・鉱物粒微。軟。底面に右回転糸切後、周辺回転置削あり。 底面に「大井か」墨書あり。	墨書。
同図8 写43・59	須恵器 壺	溝跡3号	底 部 片。底 径 (9.0.)	白色粒子・鉱物粒含。軟。底面に右回転置削条痕あり。同面に「大 井か」墨書あり。	墨書。
同図9 写59	土器器 壺	I17ベルト 中	底部片。	白色粒子・鉱物粒微。並。底面に鋤削あり。同面に「大井か」墨 書あり。	墨書。
同図10 土器壺	住居跡19号	底部外面墨書。	概報II回図25-16を引用。「大井」とあり。現品不明。	墨書。	
同図11 土器壺	住居跡7号	底部外面墨書。	概報II回図25-11を引用。「大井？」とあり。現品不明。	墨書。	
同図12 須恵壺	溝跡4号	底部外面墨書。	概報II回図25-51を引用。「大井」とあり。現品不明。70同一個体。	墨書。	
同図13 土器壺	住居跡33号	底部外面墨書。	概報II回図25-25を引用。「大」とあり。現品不明。	墨書。	

番号	種類	出土位置	量目(cm) 既存状態	胎土・構成・色調と摘要	備考
第310回14	土師壺	住居跡30号	底部外面墨書き。概報II挿図25-22を引用。「大(井?)」とあり。現品不明。		墨書き。
同回15	土師壺	住居跡21号	底部外面墨書き。概報II挿図25-17を引用「大?」とあり。現品不明。		墨書き。
同回16	土師壺	住居跡22号	底部外面墨書き。概報II挿図25-18を引用。「大?」とあり。現品不明。		墨書き。
同回17 写40	須恵器 壺	住居跡41号	口縁部欠損あり。 口径12.6cm。	白色粒子・鈍物粒微。硬。底面は右回転糾合。内・外面部輪目あり。内・外面上に「大」と墨書きあり。	笠・開製。墨書き。
同回18	須恵器 壺	満路4号	底部外面墨書き。	紙報II挿図25-47を引用。「北井」とあり。現品不明。	墨書き。
同回19	土師器	住居跡46号	底部部。	白色粒子・鈍物粒微。硬。底面は直角糾合。内・外面上にハゼあり。底面に「長」と墨書きあり。	墨書き。
写42・59	土師器 壺	満路2号	口縁 部片。口径 (12.2)。	白色粒子・鈍物粒微。並。口縁部横模様。以下直開。口縁部に「長 坂」と墨書きあり。	墨書き。
同回20 写59	土師器 壺	注記十三室 坪	口縁 部片。口径 (12.6)。	白色粒子・鈍物粒微。軟。口縁部の内、外正面横模様。口縁部に「長 坂」と墨書きあり。	墨書き。
同回22 写29・59	須恵器 蓋	満路2号	2分1個体。口径 (14.6)。	白色粒子・鈍物粒微。軟。体部に機械右回転糸切あり。撫端尖る。箇内に「足」と墨書きあり。	笠差製。墨書き。
同回24 写59	土師器 壺	H17	底部部。	白色粒子・鈍物粒微。軟。内面に凹。外側面も擦痕あり。器内厚い。底面に墨書きあり。文字不明。	墨書き。
同回25 写39・59	須恵器 壺	住居跡37号	完器。口径13.5cm。 高さ3.9cm。	白色粒子・鈍物粒含。硬。底面は右回転糾合。体部外面に輪目あり。と後しの後り。墨書き「家佐?」。	笠差製か。墨書き。
同回26 写43	須恵器 壺	満路3号	口縁部欠損。口径 17.1。器高6.7cm。	白色粒子・鈍物粒微。並。底面機械右回転糾合。高台付。体部外面機械目あり。「足」と墨書き。	笠差製。墨書き。
同回27	土師壺	住居跡23号	底部外面墨書き。	概報II挿図25-20を引用。「足?」とあり。現品不明。	
同回28 写39・59	須恵器 壺	住居跡38号	底部部。底径7.4cm。	白色粒子・鈍物粒微。並。底面は回旋糾合。体部に輪目あり。底面に「高か」「尚か」と墨書きあり。	笠・開製。墨書き。
同回29 写42・59	須恵器 蓋	住居跡46号	摘出部。摘出径2.6cm。	白色粒子・鈍物粒含。並。体部外面に機械右回転糾合あり。外面に「○泡」と墨書きあり。	陶接左製。墨書き。
同回30 写39・59	土師器 壺	掘立柱建物 南門	底~体部。底径 6.8cm。	白色粒子・鈍物粒含。並。底面は手拭形。内面に凹凸あり。内外面に「国」「國」と墨書きあり。	製作地不詳。墨書き。
同回31 写59	土師器 壺	満路04号	底部部。	白色粒子・鈍物粒含。硬。底面に開口あり。内面に墨書きあり。墨書き。	墨書き。
同回32 写41	土師器 壺	住居跡42号	2分1個体。口径 (13.8)。	白色粒子・鈍物粒微。軟。口縁部横模。型崩不明瞭。下半直開。底面に二文字の墨書き。判読できず。	墨書き。
同回33 写39・59	土師器 壺	住居跡37号	3分2個体。口径 (13.0)。	白色粒子・鈍物粒含。硬。口縁部の内・外表面横模。体部外側糾合。底面に三文字の墨書き。判読できず。	墨書き。
同回35 写32・35	土師器 壺	H17.8±7.2 ピット	口縁 部片。口径 11.8cm。	白色粒子・鈍物粒微。軟。口縁部の内・外表面横模。以下外側四凸あり。外面に「人甲」と墨書きあり。	墨書き。
同回36 写39	土師器 壺	住居跡38号	底部部。	白色粒子・鈍物粒微。並。底面は糾合。体部外位外面に型崩あり。底面に判読不明の墨書きあり。	墨書き。
同回37 写59	須恵器 壺	L16.8±6 7~10 (5.6)。	底部部。台部 低 底。	白色粒子・鈍物粒微。軟。底面に糸切あり。裏面は極めて厚い。	東毛・隣接 県製。墨書き。
同回38 未掲載	土師壺	住居跡29号	口径 (12.4)。	本図は概報II作成時の図による。底面に判読できないが墨書き。	現品不明。
同回39 同回40 写37	土師器 壺	J 18	体部片。	白色粒子・鈍物粒微。硬。底面は糾合。体部外位外面に判読できないが墨書き。	墨書き。
須恵器 壺	H18.8±5 最 北ピット内	口縁 部片。	白色粒子・鈍物粒微。軟。底面に糸切あり。内面に墨書きがあり。	東毛・隣接 県製。墨書き。	
同回42	須恵器 壺	住居跡30号	底部片。底径8.0cm。	白色粒子・鈍物粒微。軟。底面に機械右回転糸切あり。体部外位外面に判読できないが墨書き。	墨書き。
同回43 写59	須恵器 壺	基壇 1号	底部片。 底径 (6.8)。	白色粒子・鈍物粒微。軟。体部に輪目あり。器内厚い。内面に判読できない墨書きあり。	東毛・隣接 県製。墨書き。
同回44 写41・59	須恵器 壺	住居跡43号	底部片。 底径 (7.0)。	白色粒子・鈍物粒微。青。底面に機械右回転糸切あり。体部外位外面に輪目あり。外側に判読困難墨書き。	笠差製。墨書き。
同回45 写59	土師器 壺	J 16 j 03	底部片。	白色粒子・鈍物粒微。軟。底面に直角糾合。底面に判読できないが墨書き。	墨書き。
同回46 写59	土師器 壺	未注記	底部片。	白色粒子・鈍物粒微。軟。底面に直角糾合。底面に判読できないが墨書き。	墨書き。
同回47 写34・59	土師器 壺	住居跡26号	体部片。	白色粒子・鈍物粒微。並。外側に直角糾合。外側に判読できないが墨書き。	墨書き。
同回48 写36・59	土師器 壺	住居跡30号	底部片。	白色粒子・鈍物粒微。並。底面に直角糾合。外側に判読できないが墨書き。	墨書き。
同回49 写34・59	土師器 壺	住居跡27号	底部片。	白色粒子・鈍物粒微。並。底面に直角糾合。外側に判読できないが墨書き。	墨書き。

## 第5章 検出された遺構と遺物（古代）

図番号	種類	出土位置	量目(cm) 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要	備考	
第312図50	須恵壺	J 18	底部片。	概報II作成時の底。底面拓影中にみ切・回転鋸削。現品不明。	墨書き。	
同図51	土師壺	住居跡2号	体部外面墨書き。概報II押図25-1を引用。「上田」とある。現品不明。	墨書き。内墨書き。		
同図52	須恵壺	住居跡4号	底部内部墨書き。概報II押図25-2を引用。「九」とあります。「九」の検討も要。	墨書き。		
同図53	須恵壺	住居跡4号	底部内部墨書き。概報II押図25-3を引用。「不明」とあります。現品不明。	墨書き。		
同図54	土師壺	住居跡5号	底部外部墨書き。概報II押図25-4を引用。「万」とあります。現品不明。	墨書き。		
同図55	須恵壺	住居跡6号	底部外部墨書き。概報II押図25-5を引用。「上」とあります。現品不明。	墨書き。		
同図56	土師壺	住居跡6号	底部外部墨書き。概報II押図25-6を引用。「夫」とあります。現品不明。	墨書き。		
同図57	土師壺	住居跡8号	体部外面墨書き。概報II押図25-7を引用。「忠」とあります。現品不明。	墨書き。		
同図58	土師壺	住居跡7号	底部外部墨書き。概報II押図25-8を引用。「神田」とあります。現品不明。	墨書き。		
同図59	須恵壺	住居跡7号	底部内部墨書き。概報II押図25-9を引用。「不明」とあります。現品不明。	墨書き。		
同図60	須恵壺	住居跡7号	体部外面墨書き。概報II押図25-10を引用。「十」とあります。現品不明。	墨書き。		
同図61	土師壺	住居跡7号	底部外部墨書き。概報II押図25-12を引用。「不明」とあります。現品不明。	墨書き。		
同図62	土師壺	住居跡13号	底部外面墨書き。概報II押図25-13を引用。「田」とあります。現品不明。	墨書き。		
同図63	高台壠	住居跡16号	底部外面墨書き。概報II押図25-14を引用。「一」とあります。現品不明。	墨書き。		
同図64	土師壺	住居跡16号	底部外面墨書き。概報II押図25-15を引用。「水」とあります。現品不明。	墨書き。		
同図65	須恵壺	住居跡22号	底部外部墨書き。概報II押図25-19を引用。「田」とあります。現品不明。	墨書き。		
同図66	土師杯	住居跡9号	底部外面墨書き。概報II押図25-34を引用。「一」とあります。現品不明。	墨書き。		
同図67	土師?	基上? 岩南側	墨書き。不明。概報II押図25-45を引用。「不明」とあります。現品不明。	墨書き。		
同図68	須恵壺	溝跡4号	底部外面墨書き。概報II押図25-48を引用。「中」とあります。現品不明。	墨書き。		
同図69	須恵壺	溝跡4号	底部外面墨書き。概報II押図25-46を引用。「@」とあります。現品不明。	墨書き。		
同図70	須恵壺	溝跡4号	底部外面墨書き。概報II押図25-50を引用。「甲」とある。12個同一個体。	墨書き。		
同図71	須恵壺	溝跡4号	底部外面墨書き。概報II押図25-55を引用。「不円」とあります。現品不明。	墨書き。		
同図72	須恵壺	獨立建C号	底部外面墨書き。概報II押図25-56を引用。「方」とあります。「左」では?。現品不明。	墨書き。柱穴。		
同図73	土師壺	獨立建C号	底部外面墨書き。概報II押図25-57を引用。「十」とあります。現品不明。柱穴中。	墨書き。		
同図74	土師壺	溝跡3号	底部外面墨書き。概報II押図25-58を引用。「吉」とあります。現品不明。	墨書き。		
同図75	土師壺	溝跡3号	体部外面墨書き。概報II押図25-61を引用。「不明」とあります。現品不明。	墨書き。		
同図76	土師壺	溝跡3号	底部外面墨書き。概報II押図25-62を引用。「不明」とあります。現品不明。	墨書き。		
第313図1 写真図版44	土師器	溝跡4号	2分々側彫。口径:白磁粒子・鉱物粒微。硬。体部縦横。口縫部横彫。内面に煤か油 (10.4)。 根付。白磁粒子・鉱物粒微。	内面に煤か油 根付。白磁粒子・鉱物粒微。硬。体部縦横。口縫部横彫。内面に煤か油 根付。白磁粒子・鉱物粒微。硬。口縫部横彫。外面上に墨書き。体部外 面に墨書き。内面に放射状紋あり。	刻鑿。	
	写真図版36	土師器	住居跡30号	体部一部縦部片。白色粒子・鉱物粒微。硬。口径(14.0)。 根付。	口縫部横彫。外面上に墨書き。体部外 面に墨書き。内面に放射状紋あり。	東毛製作。 昭文あり。
同図2	土師器	住居跡37・ 39・60 号	2分々側彫。口径:白磁粒子・鉱物粒微。硬。 (12.4)。 根付。	口縫部横彫。外面上に墨書き。体部外 面に墨書き。内面に放射状紋あり。	東毛製作。 昭文あり。	
同図3	土師器	住居跡29号	3分々側彫。口径:白磁粒子・鉱物粒微。硬。 (13.4)。 根付。	口縫部横彫。その下方に墨彫、以下削 削を施す。内面放射状紋あり。	東毛製作。 昭文あり。	
同図4	土師器	溝跡3号	4分1側彫。口径:白磁粒子・鉱物粒微。硬。 (15.5)。 根付。	口縫部横彫。その下方に墨彫、以下削 削を施す。内面放射状紋あり。	東毛製作。 昭文あり。	
写43・60 号	土師器	住居跡41号	3分々側彫。口径:白磁粒子・鉱物粒合。軟。 (16.2)。 灰。	内面に磨耗顯著。底面糞余。体部外面 に縦横彫。全体後成放射状紋付。	接隣県製。 針書。	
第316図1 写真図版60	土師器	E 9 S 6 拡	口縫 部 片。口径: (12.2)。 根付。	口縫部横彫。その下方墨彫、以下削 削あり。口縫部横彫。内面灯芯痕、油煙痕あり。	火灯皿。	
同図2	土師器	注記十三室	口縫小欠あり。口 径:12.4。器高3.6。 根付。	口縫部横彫。体部へ底面に墨彫多い。 油煙痕や吸煙痕が口縫部にあります。	火灯皿。	
同図3	土師器	K18	口縫小欠あり。口 径:12.2。器高4.0。 根付。	口縫部横彫。体部に墨彫あり。以下削 削。口縫部油煙付。内面ハゼあり。	油煙付着。	
同図4	土師器	H 17 f ~ j 1 ~ 5 号	H 17 f ~ j 1 ~ 5 号	口縫中欠あり。口 径:13.2。器高5.0。 根付。	口縫部横彫。体部に墨彫無い凹口。白 色粒子・鉱物粒合。硬。口縫部横彫。内面に墨痕でない凹口。 以下削削。砂付着。灯芯痕と油煙。	火灯皿。
第317図3 写60	漆器	住居跡42号	最大径(14.4)。	底面に伊吹面の小裡付着。底面の残りは、ほぼ伊吹の成り状態を 呈す。欠損は旧時。	本報告中最 大の楕円形。	
同図4	取瓶か 壺	住居跡44号	最大径(8.0)。	体部外面に成形時の凹凸あり。胎体は全体が硅化物地で付着する硅化物 地はあざき色と黒色である。胎体は全体によんでは ない付着の硅化物は多くない。		
同図7	取瓶か 壺	未注記	最大径(9.6)。	体部外面は成形時の凹凸の熱割れあり。硅化は全体によんでは ない付着の硅化物は多くない。		
同図8	取瓶か 壺	住居跡26号	最大径(12.0)。	体部外面は成形時の凹凸と熱割れあり。内面側はほとんど硅化し、 硅化物の付着もある。硅化物はあづき色を呈するので銅錆むか。		
同図9	羽口 ~13。 写60	9. 注参照 10. J 18 11. 未注記 12. 基1号 13. I 18	最大径7.2。 最大径(7.6)。 最大径(6.4)。 最大径(8.6)。 最大径(10.0)。 最大径(12.0)。	透風孔が歪んでいる。スサ入。被熱割れあり。 数少ない裁断面彫。スサ入。先端鋸歯化。 数少ない裁断面彫。スサ入。表面は全般的に硅化。 側面に織物状底あり。スサ入。先端は硅化。写真図版62。 大きな羽の目。サナ不明確。表面側は大き目。	織物状底。	

図 番 号 写真番号	種 器 形	出土位置	量 目 (cm) 残 存 状 態	胎 土・焼 成・色 調 と 摘 要	備 考
第318図1 写真60・62	溶范型 上型	K17e 1 ほ か	最大径11.5。 白色粒子・鉱物粒含。や や重い。橙。	図中の補注参照。小孔3+αあり。砂部 分的に付着。側部に刻条線あり。	1・2で上 型・下型を なす。復元 図参照。
同図2 写60・62	溶范型 同下型	K17e 1	最大径(11.6)。 白色粒子・鉱物粒含。や や重い。橙。	図中の補注参照。小孔1+αあり。砂部 分的に付着。1と接点あり。	
第319図1 写真60・62	溶范型	未注記	厚2.0。 白色粒子・鉱物粒含。や や重い。橙。	図中の補注参照。内面に5×5列の判 点文あり。側部に端面あり。	
第320図1 写60	火灯石	住居跡43号	最長5.0。	平面圓表側に川原石時の原石面あり。側部に数多くの打痕が白濁 して残る(火打石の特色)。	石英。
同図2 写33	火打金	住居跡25号 付近	最長5.8。	圓形の火打金で台木の木質は見えない。背側に極方向の割れ あり。欠損は台座時によく。	近世か。
第320図1 写真圖版61	鉄製 手斧	土壤0付近	長12.9。幅4.3。厚 2.9。	姿形の鉄斧で刃先是片刃切の始刃で手斧としての利用が大か。全体の鱗 化は不定方向で古代鉄を思わせて、鏽ぶくれ多いのは粗鑄造か。	
同図2 写61	鉄製 擔子	I 17 f ~ j 6~10	中途欠損。長7.8+ α。	毛表面である。黒内で剥離しか出土例がない。鱗化少なく精緻を思 わせ。不定方向の鱗化所あり。古代鉄か。一枚板を曲げ成形。	古代鉄か。
同図3 写61	鉄製 刀子	住居跡29号	先端欠損。長7.4+ α。	物打部から切先欠損。墨を丸めた工作あり。変な形で特殊な用途 か。鱗化は全体的に多く、不定方向の鱗化あり。古代鉄か。	
同図4 未掲載	鉄製 鎌	注記十三室	中途欠損。長7.7+ α。	鍔部を中途欠損。鎌先は櫛形を呈す。鍔部は鱗化し不明瞭。 基は鍔中にかかる。短過ぎるので旧欠損ありか。	本報告中唯 一の鎌。
同図5 写61	鉄製 鎌	住居跡29号	長13.2。	全体に遺存はよい。刃部は片刃気味ではあるが刃裏側からも刃づ くあり。研磨消耗少ない。鱗化は全体的に鱗化を思わせる。	
同図6 写61	鉄製 不明	J 15 f ライ	最長3.5。	鍔先のように思えるがはつきりしない。不定方向の鱗化があり、 古代鉄を思わせる。片側、始氣味の両刃になす。	
同図7 写61	鉄製 不明	G21 i 2	長4.6。	全体に鱗化しているものの刃ではないようである。部分的に鱗落 しの結果、横断面形は隋円をなす。	
同図8 写61	鉄製 不明	H18 f ~ j 5~10	長2.4。厚0.7。	大形製錬の刃部に近い刃片のようである。不定方向の鱗割があり 直角刃を思わせる。	
同図9 写61	鉄製 不明	I 17 a ~ e 6~10	長4.8+α。幅1.8. 厚0.9。	基を欠損する。用途不明。平面形は鎌のよう見えるが、横断面 の先是尖らず鍔ではない。鱗化は不定方向の割れあり。	
同図10 写61	鉄製 棒状	I 18 a 4	長5.4+α。	鱗化は極方向の割れ少なく、刃とは思えない。鏽ぶくれあり、不 定方向の鱗割あり。古代鉄を思わせる。	
同図11 壹金	壹金	I 17	長7.6。	細さに付し鱗化少く、不定方向の鱗割あり。古代鉄か。柵削少。	
同図12 壹金粒	壹金粒	J 16	長7.4+α。	細さに付し鱗化少く、不定方向の鱗割あり。古代鉄か。	
同図13	棒状	未注記	長2.1+α。	棒状鉄を曲げた状態。極方向の鱗化少なく鱗割を思わせる。	
同図14	棒状	住居跡3号	長3.4+α。	棒状鉄を曲げた状態。極方向の鱗化少ない。古代鉄か。	
同図15	棒管状	J 15	長4.2+α。	管状を成すが、鱗化でそなったのかは不明。植物根にあらず。	
同図16	鉤針	J 15 i 8	長3.2+α。	鉤針の頭部。大きな鱗割があり、刃側も極方向の鱗割れあり。	
同図17	鉤針	未注記	頭部径2.1。		
同図18	鉤	H 18	長12.9。	旧態の全状が知れる鉤。全体に極方向の鱗割れあり。	旧態良好。
同図19	鉤	I 18	長14.6+α。	頭部を打ち広げ。極方向の鱗化少ないが、鏽ぶくれあり。	
同図20	鉤・鉤	未注記	長9.0+α。	極方向の鱗割少しが、部分的にふくれあり。鍔は不明。	
同図21	鉤	H 18	長12.6+α。	極方向の鱗化、鏽ぶくれあり。頭部にめくら。曲りは使用鉤。	
同図22	鉤	表採	長9.4+α。	曲りがあり使用鉤。頭部打され曲げ。極方向の鱗割れあり。	
同図23	鉤	未注記	長10.2+α。	全体に曲りがあり使用鉤。極方向の鱗割れ著。粗鑄造。	
同図24	鉤	未注記	長9.6+α。	頭部めくれあり。先端は旧欠損。全体に鱗化進む。	
同図25	鉤	I 17	長9.4+α。	頭部欠損。全体に鱗化顯著。わずか曲りがあり使用鉤。	
同図26	鉤	注記十三室	長12.8+α。	全体に鱗化顯著で、極方向の鱗割れ発達し、粗鑄造を思わせる。	
同図27	鉤	未注記	長6.2+α。	全体に曲り、使用釘。鱗化顯著で、極方向は発達。粗鑄造か。	
同図28	鉤	未注記	長1.8+α。	鱗化した部分が大半で、本体は欠損。鉤かは明確でない。	
同図29	鉤・鉤	未注記	長6.5+α。	鍔かは明確でない。鱗化は進み、ふくれあり。曲りは使用済か。	
同図30	鉤	未注記	長11.60。	頭部は打ち折り曲げて、先端は少し曲り使用済か。極目割あり。	旧態良好。
同図31	鉤	I 17	長8.2+α。	頭部は打ち折り曲げて。全体は少し曲り使用鉤か。極目割あり。	
同図32	鉤	I 18 a 4	長9.6+α。	頭部は肥厚化。全体は少し曲り、使用鉤か。鱗化顯著。	
同図33	鉤	I 18 a 4	長7.3+α。	頭部は肥厚化。全体に鏽ぶくれあるが、極方向の割れはない。	
同図34	鉤	I 18 a 4	長5.8+α。	頭部の成形不良。全体に鱗化し、極方向も発達。粗鑄造か。	
同図35	鉤	I 18 a 4	長5.6+α。	頭部は打ち折り曲げか。全体に鏽ぶくれするが、極方向未発達。	
同図36	鉤	未注記	長8.4+α。	頭部は肥厚化。全体に鱗化し、極方向の割れも顯著。粗鑄造か。	
同図37	鉤	H 18	長9.8+α。	全体に極方向の割れ、ふくれあり。粗鑄造を思わせる。	
同図38	鉤	未注記	長7.5+α。	頭部は肥厚化。全体にふくれ、割れ少ない。鉤でないかも。	
同図39	鉤	未注記	長8.2+α。	先端を旧時欠損。全体にふくれ、割れ少ない。	
同図40	鉤	H 18	長8.9+α。	全体に鏽ぶくれ少なく、割れも少ない。頭部肥厚化。	

第5篇 検出された遺構と遺物(古代)

図番号 写真番号	種 器 形	出土位置	量 目(cm) 残存状態	胎 土・焼 成・色 調 と 捕 要	備 考
同図41	釘	未注記	長7.2+α。	全体に曲りがあり使用釘。柱方向の割れあり粗鍛造を思わせる。	
同図42	釘	未注記	長8.7+α。	頭部肥厚化。全体に曲りがあり使用釘。柱方向の鋸割あり。	
同図43	釘	未注記	長6.3+α。	頭部はわずか肥厚化。全体に曲りがあり使用釘。柱方向の鋸割。	
同図44	釘	J K16	長6.8+α。	頭部肥厚化。全体に銷ぶくれ、柱方向での鋸割あり。	
同図45	釘	H18	長5.9+α。	頭部難化で残存。全体に銷ぶくれあり。	
同図46	釘	注記十三室	長9.1+α。	中央部に大きな銷ぶくれあり。先側で柱方向の鋸割あり。	
同図47	釘	J 17東北部	長6.3+α。	部分的に銷ぶくれと、柱方向の鋸割あり。曲りは使用釘。	
同図48	釘	注記十三室	長5.6+α。	全体的に曲り。使用釘。柱方向の鋸割が目立つ。	
同図49	釘	未注記	長3.7+α。	部分的に銷ぶくれと、わずか柱方向の鋸割あり。	
同図50	釘	未注記	長2.8+α。	部分的に銷ぶくれと、柱方向の鋸割あり。	
同図51	釘	未注記	長3.3+α。	部分的に銷ぶくれと、柱方向の鋸割あり。	
同図52	釘か	H18	長3.1+α。	釘先部に曲りがあり使用釘。銷ぶくれあり。	
同図53	釘か	H18	長2.4+α。	釘先部でわずかに曲りがあり使用釘か。わずか銷ぶくれあり。	
同図54	釘か	未注記	長2.7+α。	釘先部にある。わずかに銷ぶくれと柱方向の割り。	
同図55	釘	H18	長3.6+α。	頭部打刃り曲げの釘で、銷ぶくれあり。小形釘。	
同図56	釘	H18	長3.9+α。	頭部打刃り曲げの釘で、銷ぶくれと、柱方向の鋸割あり。	
同図57	釘	J 15	長6.1+α。	頭部はわずか肥厚化する。全体に銷は少ないが、わずかふくらみ。	
同図58	釘	J 17東北部	長6.2+α。	頭部は肥厚化。曲りがあり使用釘。全体に銷は少ない。	
同図59	釘	H18	長2.3+α。	頭部際の破片である。全体に銷ぶくれは少ない。	
同図60	釘	H18	長5.6+α。	全体に曲りがあり使用釘。頭部の個体。部分的に銷ぶくれあり。	
同図61	釘	H18	長4.3+α。	全体に曲りがあり使用釘。先をわずか欠損。小形釘。	
同図62	釘	H18	長5.2+α。	頭部打刃り曲げの釘である。部分的に銷ぶくれあり。	
同図63	釘	L16 a ~ f	長2.9+α。	全体にわずか曲りがあり使用釘。鉈は削落、細くなる。	
同図64	釘	I 17南東部	長3.3+α。	全体にわずか曲りがあり使用釘。鉈は削落。細くなる。	
同図65	釘	H18	長3.3+α。	使用済の3本の釘があり、くっついている。各釘先はそれに近い。	
同図66	鉄片	K15	最大長4.0。	全体に大きな鋸割があり。大きな個体破片らしく丸みあり。	二次利用か。
同図68	鉄片	K15	最大長2.9。	全体に大きな鋸割があり鉄片。大きな個体破片らしく丸みあり。	二次利用か。
同図69	鉄片	H18	最大長3.9。	全体に大きな鋸割があり鉄片。大きな個体破片らしく丸みあり。	二次利用か。
同図70	鉄片	I 18北端	最大長2.5。	深い鋸割が生じ鉄片。製品の破片利用らしく、角は丸い。	二次利用か。
同図71	板状	未注記	最大長2.4。	製品様式明。精鍛造品らしい柱方向の鋸割ではなく、鉄片か。	
同図72	鉄片	I 18北端部	最大長3.1。	深そき鋸割あり鉄片。大きな製品の破片らしく丸みあり。	二次利用か。
同図73	鉄塊	I 18	最大長3.0。	製鍛鉄の一部か。重い。全体に銷化するが、方向性はない。	
同図74	板状袋	J 15 i 4	最大長6.0。	板金を袋状に。左平面の下側に吊しの耳と設け小柄ではない。洋鉄か。	
同図75	板状	J 15西側	最大長6.4。	板金に囁いた状態の個体。押型型らしき凹みと中央を溝状に入る。洋鉄か。	
同図76	板状	I 17	最大長7.3。	板金で銷化は不定方向を層状に剥離し、洋鉄か。	
同図77	板状	E 9 S 1	最大長10.7。	板金で銷化は不定方向を層状に剥離し、洋鉄か。	
第322回 2	石製 表探	長方形	長5.2+α。最大幅 1.7。	長方形の形状ではなく、先端は尖り気味。大きさ、先端の尖りの形狀から手持鉗。欠損部は点描なしの個所。	磁鉄石一塊 絞岩。
写真圖版60	砾石			平面形は長方形気味ではあるが、断面形は横円気味。横断面上3左端、裏面が未使用の絞岩面でケバで示した。手持鉗。	砾石一塊 絞岩。
同図3 写60	石製 E 9 S 6 抵	長4.6。最大幅4.0。		裏・裏と側部・側部の各面に使用あり。側部中央は余巻き状に中凹みとなる。大きさから手持鉗と考えられる。	砾石一塊 絞岩。
同図4 写60	石製 砾石	J 17東北部	長4.2。最大幅3.4。	ほぼ長方形を呈する。小口面を除き使用されているが、使用グセが生じるまでに至っていない。大きさから手持鉗と考えられる。	人造鉢。
同図5 写60	石製 砾石	L 16 a ~ f	長3.9+α。最大幅 7~10 2.8。	裏・裏・側部・側部に使用面があり、片側は旧時手損である。比較的均常に使用。大きさから手持鉗と考えられる。	砾石一塊 絞岩。
同図6 写60	石製 砾石	J 15 i 7	長4.6+α。最大幅 4.6。	裏・裏・側部・側部の各面に使用あり。側部中央は余巻き状に中凹みとなる。大きさから手持鉗と考えられる。	絞岩。
同図7 写60	人造 砾石	8 θ 7 a	長4.9+α。最大幅 2.5。	ほぼ長方形を呈する。小口面を除き使用されているが、使用グセが生じるまでに至っていない。大きさから手持鉗と考えられる。	絞岩。
同図8 写60	石製 砾石	表探	長4.6+α。最大幅 2.8.	裏・裏・側部・側部に使用面があり。片側は旧時手損である。比較的均常に使用。大きさから手持鉗と考えられる。	絞岩。
同図9 写60	石製 砾石	J 17東北部	長3.5+α。最大幅 3.2。	裏・裏と側部・側部の各面に使用がある。大半が欠損している。大きさから見て手持鉗。中世以降か。	白色凝灰岩。
同図10 写60	石製 砾石	I 18東土	長7.2+α。最大幅 3.6.	裏面は平面図に対して左側の側部と表面のみで、表面は右利きのクセが生じ、裏面・小口面は整形の研り跡あり。近世以降か。	絞岩。
第323回 1	鉄製 現品不 明	住居跡29号	直径6.0。	本図は概報図による。中央に軸あり。	
同図2	鉄製 防錆車	住居跡29号	長5.8+α。	防錆車の輪と思われる断面形。同形を呈する個体で、全体に織維状の物質が巻かれていたが、巻きつけた痕跡がある。	
同図3 写36	石製 防錆車	住居跡29号	直径5.1。	旧時の半毀品である。部分的に整形時と考えられる擦痕が残る。側面の斜面は、ふくらむ肉盛りがある。	硅質変成岩。

## 瓦類 (47~297頁、第29~297回)

瓦類は、男・女・軒瓦などを用いた古代では数少ない工業的なシステム製品であった。また瓦使用建物に対して製作地であった瓦屋は見込生産(計画生産)を行ない得る。いわば一貫生産の背景に基づいて製作されていた。そのため観察に当たっては量産物と見なし、共通項目を作成して観察表とした。観察表は既報掲載順とその観察結果のまとめの両面を作成し、利用の便に供した。

一覧化の凡例・例記は次のとおりである。写真番号については、未掲載とした記入が大半にあるが、整理の過程では撮影済である、経費上の都合で掲載しなかった。瓦種は男・女・軒・字瓦などである。純成は観察結果のまとめ表中で概括的に触れない。製作法・桶痕の項は女瓦一桶巻作・一枚作・男瓦一等木(絞作)・半絞作・一枚作に区分し、桶巻作は佐藤真「平瓦桶巻作」[考古学雑誌第58号] 1972年にいう桶巻作りと共通の技法が上野地域では7世紀中頃から8世紀前半にかけて広く使用されていたことが多年の観察によって確認され、寄木状の圧痕を残す場合にそれを認めてよい状況にある。それは女瓦ばかりでなく一部の男瓦にも認められている。しかし男瓦の多くは粘土円筒を2分割する半絞作(木津博正「真向」[国分境遺跡]群馬県境文化財調査委員会)によって作成されたと考えられる回転条痕を表面に残しながらも、内面には寄木圧痕のある個体も多く存在する。その例もここでは半絞作と呼ぶことにする。それに對し、一枚作は西毛地域において、女瓦の側面に布压痕を残す例が認められるものの、大半の場合に接縫の根拠に欠ける個体が多く、その場合は、一枚作可能性の項に□でなく不明と記した。粘土板剥離の項は、糸切で認められる場合に素、裏を付け〇で記した。この項目中に絞作りの場合も紐作と記入した。粘土板組合は粘土角材から割り取った粘土板(タクラ)の接合部を指し、有無を○・なしと記入した。布の合せ目痕は横骨構に被せた布袋の布合せ目压痕を意図している。布の擦り消しは、ほぼ全面と部分とがあり、微細な擦痕は除外した。織機織の有無は、女瓦の桶巻作りや男瓦の半絞作りを織機・回転台(自走能力の高い低いかの差と考へているが区別はむずかしい)で行なった場合に、回転条痕や条痕がある程度付くであろうとの技法推定を裏付けるために項目の設定を行なった。叩き締めの技法、型式は手掌や撫用いての無文状態を素文とし、綴、格子印などを記入し、格子など型式名称をあえた場合は、その名称を記入した。瓦乾燥時の圧痕については、当遺跡出土の瓦の主体である竪壓痕跡群観察の特徴(西毛地域では吉井窯跡群で多く見かける)とともにうべき乾燥法である。それは瓦の乾燥にあたり、複数の瓦の瓦利用を実立して団結、その際の圧と推測される棒状、場合によると、圧痕の強い、曲率の浅い側に陽の布压痕(側面部の布压痕が付着したために陽压痕となる)が残される個体もあった。側面部取回数は箇所の回数を指す多くの場合に、広端面(広小口)側につれ多くの傾向があり、おおむねの丁寧さを捉えるための項目設定である。備考欄には重量を記入した。重量は、一枚に復元された個体のみを測定した。その際、石膏を含めての重量である。石膏による考え方の方は石膏の嵩重約1.15倍以上であり、上野瓦の比重は(拙稿「嵩比重と吸水性の測定」「金井高寺遺跡」[吾妻町教育委員会] 1979で試みた所感からして)軽い場合に1.1、重い場合に1.8前後であり、当遺跡瓦は重い方である。そのため石膏の重さはある程度瓦に近いと云えるので瓦重量に含めて測定した。なお判断に迷う場合は△も記入した。

図版番号	写真番号	出土位置	瓦種	製作法 ・桶痕	一枚作 可能性	粘 土 板	布 压 痕	桶 痕	叩き法 型式名称	瓦乾燥 時圧痕	側 面 取回数	備 考	
第29図6	写45巻7	基壇1	男瓦	半絞作	なし	△	なし	なし	○	素文半絞	なし	2	鐵1 B型圧痕
第30図19	25	同上	女瓦	なし	不明	表○	なし	なし	なし	格子12	なし	欠	
	26	同上	女瓦	なし	不明	裏○	なし	なし	○	格子不2	なし	2	
	27	同上	女瓦	△	不明	表○	なし	なし	○	格子茂	裏○	欠	
	29	同上	女瓦	△	不明	表○	なし	なし	○	格子不明	なし	欠	
	30	同上	女瓦	なし	不明	○○	なし	なし	○	格子茂	なし		
第31図31	31	同上	女瓦	なし	不明	○○	なし	なし	○	格子12	裏○	3	
	32	同上	女瓦	なし	不明	○○	なし	なし	○	格子左	裏○	3	3.95kg
第32図43	43	同上	女瓦	なし	不明	裏○	なし	なし	なし	格子佐	裏○	2	
	44	同上	女瓦	なし	不明	表○	なし	なし	○	格子不2	裏△	2	
	45	同上	女瓦	なし	不明	裏○	なし	なし	○	格子雀	裏△	3	
第33図46	46	同上	鐵瓦	半絞か	不明	—	—	—	—	—	—	△4	
	47	同上	鐵瓦	欠	—	—	—	—	—	—	—	欠	
	48	同上	男瓦	半絞作	なし	裏○	なし	なし	○	素文類	なし	3	3.63kg
第34図49	49	同上	女瓦	なし	不明	○○	なし	なし	○	格子仇	裏○	3	
	50	同上	女瓦	なし	不明	表△	なし	なし	○	格子15	なし	欠	
	51	同上	女瓦	△	不明	○○	なし	なし	なし	素文類	なし	欠	
	52	同上	女瓦	なし	不明	表○	△	なし	なし	格子12	裏○	4	
	53	同上	女瓦	△	不明	○○	なし	なし	○	格子雀	なし	3	
	54	同上	女瓦	なし	不明	表○	なし	なし	○	格子雀	裏○	3	
第35図55	55	同上	女瓦	なし	不明	裏△	なし	なし	○	格子測左	裏△	3	
	56	同上	女瓦	なし	不明	○○	なし	なし	部分	格子測左	なし	3	
	57	同上	女瓦	△	不明	表○	なし	なし	部分	格子不明	裏○	2	
	58	同上	女瓦	なし	不明	表○	△	なし	なし	格子23	なし	欠	
	59	同上	女瓦	なし	不明	○○	なし	なし	○	格子6	なし	欠	
第36図60	60	同上	女瓦	なし	不明	裏○	△	なし	○	格子反	裏○	2	
	61	同上	女瓦	なし	不明	○○	なし	なし	○	格子反	裏○	3	3.80kg
第37図62	62	同上	女瓦	なし	不明	表○	なし	なし	○	格子4	裏○	3	
	66	同上	字瓦	なし	不明	表○	なし	なし	○	素文	なし	欠	字1型

第5篇 検出された遺構と遺物（古代）

図版番号	写真番号	出土位置	瓦種	製作法 ・構成	一枚作 可能性	剥取	接合	合目	擦消	轆轤の 使用痕	叩技法・ 型式名称	瓦乾燥 時汪痕	側部 面取	備考
第38回87 88 89	第45字7 未掲載 写48	基壇1 同上 同上	瓦瓦 寄木? なし	不明 不明 ○○	不 <sup>明</sup> 寄木? なし	表△ 裏○ なし	なし なし なし	なし なし なし	なし ○ なし	素文 素文類 格子	なし なし 反	欠 欠 裏○	宇1型	
	第39回90 91 92	未掲載 同上 同上	瓦瓦 瓦瓦 瓦瓦	なし なし なし	不明 不明 ○○	○○ 裏○ なし	なし なし なし	なし ○ なし	なし なし なし	格子 格子 格子	反 潤左 潤左	3 2 裏○	3	
	第40回93 94 95 96 97	未掲載 同上 同上 同上 同上	瓦瓦 瓦瓦 瓦瓦 瓦瓦 瓦瓦	なし なし なし なし △	不明 不明 なし 不明 ○○	○○ 表○ なし なし なし	なし なし なし なし なし	なし 部分 部分 なし なし	なし なし なし なし なし	格字不1 格子 格子 格子 格子	裏○ 8 8 14 裏△	3 2 4 欠 2		
第42回98 99 103 104	未掲載 同上 未掲載 同上	瓦瓦 瓦瓦 瓦瓦 瓦瓦	なし なし なし なし	不明 不明 表△ 表△	表○ 表△ 表△ 表△	なし なし なし なし	なし なし なし なし	○ <td>なし ○<td>なし 部分 部分</td><td>格不3A 格子 格子 格子 格子 不<sup>明</sup></td><td>2 欠 欠 3 3</td><td>格子字不明3A</td></td>	なし ○ <td>なし 部分 部分</td> <td>格不3A 格子 格子 格子 格子 不<sup>明</sup></td> <td>2 欠 欠 3 3</td> <td>格子字不明3A</td>	なし 部分 部分	格不3A 格子 格子 格子 格子 不 <sup>明</sup>	2 欠 欠 3 3	格子字不明3A	
	写45-1	同上	宇瓦	なし	不明	表○	なし	なし	なし	なし	素文	なし	3	宇1型
	43回115 116 117 118 119	未掲載 同上 未掲載 同上 未掲載 同上	瓦瓦 瓦瓦 瓦瓦 瓦瓦 瓦瓦	なし なし なし なし なし	不明 不明 表△ 表△ 表△	表△ 表△ 表△ 表△ 表△	なし なし なし なし なし	なし ○ <td>なし ○<td>なし 部分 部分</td><td>格子 格子 格子 格子 格子</td><td>九 20 9 22 なし</td><td>欠 欠 欠 1 2</td></td>	なし ○ <td>なし 部分 部分</td> <td>格子 格子 格子 格子 格子</td> <td>九 20 9 22 なし</td> <td>欠 欠 欠 1 2</td>	なし 部分 部分	格子 格子 格子 格子 格子	九 20 9 22 なし	欠 欠 欠 1 2	
	44回124 45回125 46回132 133 134	主拵 同上 未掲載 同上 未掲載 同上	瓦瓦 瓦瓦 瓦瓦 瓦瓦 瓦瓦	なし なし なし なし なし	不明 不明 表○ 表○ 表○	表○ 表○ 表○ 表○ 表○	なし なし なし なし なし	なし ○ <td>なし 部分 部分</td> <td>格子 格子 格子 格子 格子</td> <td>雀 13 茂 不2 12</td> <td>なし なし 欠 2 なし</td>	なし 部分 部分	格子 格子 格子 格子 格子	雀 13 茂 不2 12	なし なし 欠 2 なし		
第49回1 2 3 4 5 6	未掲載 基壇2 未掲載 未掲載 未掲載 写47 未掲載 未掲載	男瓦 男瓦 男瓦 女瓦 女瓦 女瓦	寄木? なし 半截作 なし 半截作 なし 不明 なし 不明 なし 不明	なし なし なし なし なし なし なし なし なし なし	表△ 表△ 表△ 表○ 表○ 表○	△ なし なし なし なし なし なし なし なし なし	なし ○ <td>なし 部分 部分</td> <td>素文類 素文半截 素文半截 格子 素文類 素文類</td> <td>表△ なし 2 欠 3.4kg 裏△</td> <td>4 2 2 欠 2 2</td>	なし 部分 部分	素文類 素文半截 素文半截 格子 素文類 素文類	表△ なし 2 欠 3.4kg 裏△	4 2 2 欠 2 2			
	第50回7 8 9	写51 未掲載 写48	女瓦 女瓦 女瓦	なし なし なし	不明 不明 表△	なし なし △	△ <td>なし なし なし</td> <td>なし ○<td>なし 部分</td><td>格子 格子 格子 不3</td><td>10 裏○ 3 裏○</td><td>3 3 3 3.75kg 字不明3A</td></td>	なし なし なし	なし ○ <td>なし 部分</td> <td>格子 格子 格子 不3</td> <td>10 裏○ 3 裏○</td> <td>3 3 3 3.75kg 字不明3A</td>	なし 部分	格子 格子 格子 不3	10 裏○ 3 裏○	3 3 3 3.75kg 字不明3A	
	第51回10	未掲載	女瓦	なし	不明	○○	なし	なし	なし	なし	簡単	へ	2	
	第53回37 38 39	未掲載 兜上 同上	男瓦 男瓦 男瓦	半截作 半截作 半截作	なし なし なし	表△ 表△ 表△	なし なし なし	なし ○ <td>なし 部分</td> <td>素文半截 素文半截 素文半截</td> <td>なし 表○<td>なし なし</td><td>2 3 3</td><td>3.06kg</td></td>	なし 部分	素文半截 素文半截 素文半截	なし 表○ <td>なし なし</td> <td>2 3 3</td> <td>3.06kg</td>	なし なし	2 3 3	3.06kg
	第54回40 41 42 43	未掲載 未掲載 未掲載 未掲載	男瓦 男瓦 男瓦 男瓦	半截作 半截作 半截作 半截作	なし なし なし なし	表○ 表○ 表○ 表○	なし なし なし なし	なし ○ <td>なし 部分</td> <td>素文半截 素文半截 素文紐作 素文半截</td> <td>なし 表○<td>なし なし</td><td>3 1 2 3</td><td></td></td>	なし 部分	素文半截 素文半截 素文紐作 素文半截	なし 表○ <td>なし なし</td> <td>3 1 2 3</td> <td></td>	なし なし	3 1 2 3	
	第55回44 45 46 47	未掲載 未掲載 未掲載 未掲載	男瓦 男瓦 男瓦 男瓦	寄木? 半截作 寄木? 半截作	なし なし なし なし	表○ 表○ 表○ 表○	なし なし なし なし	なし ○ <td>なし 部分</td> <td>素文類 素文半截 素文類 素文類</td> <td>なし 表○<td>なし なし</td><td>2 2 3 4</td><td>内面寄木修理</td></td>	なし 部分	素文類 素文半截 素文類 素文類	なし 表○ <td>なし なし</td> <td>2 2 3 4</td> <td>内面寄木修理</td>	なし なし	2 2 3 4	内面寄木修理
第56回47 48 49	未掲載 未掲載 未掲載	女瓦 女瓦 女瓦	なし なし なし	不明 不明 不明	○○ ○○ ○○	なし なし なし	なし ○ <td>なし 部分</td> <td>格子 格子 格子 表○</td> <td>仇 仇 仇 なし</td> <td>4 3 2 4.90kg</td> <td></td>	なし 部分	格子 格子 格子 表○	仇 仇 仇 なし	4 3 2 4.90kg			
	第57回50 51 52 53 54 55	未掲載 同上 未掲載 同上 未掲載 同上	女瓦 女瓦 女瓦 女瓦 女瓦 女瓦	なし なし なし なし なし なし	不明 不明 不明 不明 不明 不明	表○ 表○ 表○ 表○ 表○ 表△	なし なし なし なし なし なし	なし ○ <td>なし 部分</td> <td>格字不3 格子 格子 格子 格子 格子</td> <td>裏○ 九 10 10 9 15</td> <td>3 欠 3 2 欠 欠</td>	なし 部分	格字不3 格子 格子 格子 格子 格子	裏○ 九 10 10 9 15	3 欠 3 2 欠 欠		
	第58回56 57 58 59 60	未掲載 同上 未掲載 同上 未掲載 同上	女瓦 女瓦 女瓦 女瓦 女瓦	なし なし なし なし なし	不明 不明 不明 不明 不明	○○ 表○ 表○ 表○ 表△	なし なし なし なし なし	なし ○ <td>なし 部分</td> <td>格子 格子 格子 格子 格子</td> <td>11 11 11 11 3</td> <td>3 欠 欠 欠 欠</td>	なし 部分	格子 格子 格子 格子 格子	11 11 11 11 3	3 欠 欠 欠 欠		

図版番号	写真番号	出土位置	瓦種	製作法 ・桶底	一枚作 可能性	粘土板	布压痕	輪縫の 使用痕	叩技法・ 型式名称	瓦乾燥 時圧痕	側面取 扱	備考		
第58回61	写50	基礎 2	女瓦	なし	不明	表△	なし	なし	部分	なし	格子 3	なし		
第59回62	写50	同上	女瓦	なし	不明	表○	△	なし	なし	格子 2	裏○	3		
	63	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	表○	△	なし	部分	なし	格子 2	なし	
	64	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	表△	△	なし	○	なし	格子 2	欠	
	65	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	表○	△	なし	なし	格子 1	なし		
	66	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	表○	△	なし	部分	なし	格子 14	裏○	
	67	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	表○	△	なし	○	なし	素文類	なし	
	68	写53	同上	女瓦	なし	不明	○○	△	なし	なし	○	素文類	なし	
	69	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	○○	△	なし	部分	なし	素文類	裏○	
	70	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	○○	△	なし	なし	○	素文類	裏○	
第60回71	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	○○	△	なし	なし	△	○	素文類	なし	
	72	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	表○	△	なし	なし	△	○	素文類	なし
第61回73	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	表○	△	なし	なし	△	○	素文類	なし	
	74	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	表○	△	なし	△	○	素文類	なし	
第62回79	未掲載	同上	男瓦	半截△	不明	裏○	△	なし	なし	△	△	素文類	なし	
	80	写46	同上	男瓦	半截△	不明	裏○	△	なし	△	△	素文類	なし	
第63回81	未掲載	同上	男瓦	半截作	なし	不明	表△	△	なし	部分	なし	○	素文組作	なし
	82	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	表○	△	なし	○	○	○	格子不3A	裏△
	83	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	表○	△	なし	○	○	○	格子 仇	裏△
	84	写52	同上	女瓦	なし	不明	○○	△	なし	○	○	○	格子 15	裏△
	85	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	○○	△	なし	○	○	○	格子不明	裏○
	86	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	寄木○	△	なし	なし	△	△	素文類	なし
第64回87	写49	同上	女瓦	なし	不明	○○	△	なし	なし	△	○	○	格字不3	なし
	88	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	表○	△	なし	なし	○	○	格子 11	裏△
	89	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	表○	△	なし	部分	○	○	素文類	なし
	90	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	表○	△	なし	なし	○	○	素文類	裏△
第65回94	未掲載	同上	男瓦	半截作	なし	不明	表○	△	なし	なし	○	○	素文半截	なし
	95	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	表○	△	なし	なし	○	○	素文類	裏○
	96	未掲載	同上	男瓦	半截作	なし	不明	表○	△	なし	○	○	素文半截	なし
	97	未掲載	同上	男瓦	寄木？	なし	不明	表○	△	なし	○	○	素文類	なし
	98	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	○○	△	なし	なし	○	○	格子 反	裏○
第67回99	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	裏○	△	なし	なし	△	○	○	格子 9	裏○
	100	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	表△	△	なし	○	○	○	格子 6	なし
	101	写50	同上	女瓦	なし	不明	○○	△	なし	なし	○	○	格子文字左	欠
	102	写49	同上	女瓦	なし	不明	裏○	△	なし	部分	○	○	格子 1	裏△
	103	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	表○	△	なし	なし	○	○	調單 横	なし
68回119	未掲載	同上	芋瓦	—	—	—	—	—	—	—	—	—	宇1型	欠
	120	未掲載	同上	芋瓦	寄木○	なし	なし	紐作	なし	なし	○	○	素文組作	なし
	121	未掲載	同上	男瓦	寄木○	なし	なし	裏○	なし	なし	○	○	素文類	なし
	122	未掲載	同上	男瓦	半截体	なし	なし	表○	なし	なし	○	○	素文半截	なし
	123	未掲載	同上	男瓦	寄木？	なし	不明	表○	△	なし	△	△	素文類	なし
	124	未掲載	同上	男瓦	なし	なし	表○	△	なし	なし	○	○	素文類	なし
69回125	未掲載	同上	男瓦	半截作	なし	なし	表○	△	なし	なし	△	△	素文組作	なし
	126	未掲載	同上	男瓦	半截作	なし	表○	△	なし	なし	○	○	素文半截	なし
	127	未掲載	同上	男瓦	半截作	なし	表○	△	なし	なし	○	○	素文半截	なし
	128	未掲載	同上	男瓦	なし	なし	表○	△	なし	なし	○	○	素文類	なし
70回129	未掲載	同上	男瓦	寄木	なし	なし	表○	△	なし	△	△	△	素文組作	なし
	130	写46	同上	男瓦	寄木	なし	不明	表○	△	なし	○	○	素文類	なし
	131	写48	同上	女瓦	なし	不明	○○	△	なし	なし	○	○	格子 仇	なし
71回132	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	表○	△	なし	なし	○	○	格子 仇	なし	
	133	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	○○	△	なし	なし	○	○	格子 10	なし
	134	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	表○	△	なし	なし	○	○	格子 2	なし
	135	写50	同上	女瓦	なし	不明	表○	△	なし	なし	○	○	格子 4	なし
72回136	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	○○	△	なし	なし	○	○	格子 4	○	
	137	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	表○	△	なし	なし	○	○	格子不2	○
	138	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	表○	△	なし	なし	○	○	格子 仇	欠
	139	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	表○	△	なし	なし	○	○	格子 仇	なし
	140	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	表○	△	なし	なし	○	○	格子 茂	なし
	141	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	表○	△	なし	なし	○	○	格子 1	なし
	142	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	表○	△	なし	なし	○	○	素文寄木	なし
													表側隙削広い	

第5篇 検出された遺構と遺物(古代)

図版番号	写真番号	出土位置	瓦種	製作法 ・補痕	一枚作 可能性	粘土板	布瓦	石	鐵錫の 使用痕	叩技法。	瓦乾燥 時圧痕	側部 面取	備考	
73図145 146 147 写52	未掲載	基壇2	男瓦	半載作	なし	なし	組作	なし	なし	△	素文組作	なし	2	
	未掲載	同上	男瓦	半載作	なし	なし	組作	なし	なし	○	素文組作	なし	2	
	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	なし	なし	なし	なし	○	格子14	裏○	2	
74図150	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	裏○	なし	なし	○	なし	格子仇	なし	欠	
75図151 152 153 154 未掲載	写46	同上	男瓦	寄木	なし	なし	なし	なし	なし	○	素文類	なし	2	3.34kg
	未掲載	同上	男瓦	半載作	なし	なし	なし	なし	なし	○	素文半載	なし	2	
	未掲載	同上	男瓦	半載作	なし	なし	なし	なし	なし	○	素文組作	なし	3	
	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	○○	なし	なし	○	なし	格子渾	なし	2	粘土補修
76図155 156 写51	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	○○	なし	なし	○	なし	格子省	裏○	2	
	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	なし	なし	なし	○	なし	格子25	裏○	2	3.64kg
77図159	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	表○	なし	なし	○	なし	格子省	裏○	3	
78図160 161 162 163 未掲載 写49 164 未掲載 165 未掲載 166 未掲載	未掲載	同上	男瓦	寄木か	なし	なし	なし	なし	なし	○	素文類	なし	3	
	未掲載	同上	男瓦	半載作	なし	なし	なし	なし	なし	○	素文半載	なし	2	
	未掲載	同上	男瓦	半載作	なし	なし	なし	なし	なし	○	素文組作	なし	2	
	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	表○	なし	なし	○	なし	格子1	なし	欠	
	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	○○	なし	なし	○	なし	格子不明	なし	2	
	未掲載	同上	女瓦	寄木△	不明	なし	なし	なし	○	なし	格子13	裏△	欠	
	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	なし	なし	なし	なし	なし	格子3	なし	1	
	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	表○	なし	なし	○	なし	格子不2	裏○	2	
79図167 168 169 170 写53 171 未掲載	写48	基2他	女瓦	なし	不明	表○	なし	なし	○	なし	格子7	なし	欠	
	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	表○	なし	なし	○	なし	格子8	なし	2	
	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	表○	なし	なし	○	なし	格子21	なし	2	
	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	表○	なし	なし	○	なし	素文類	なし	3	ハゼ多い
	未掲載	基壇3	女瓦	なし	不明	表○	なし	なし	○	なし	格子23	なし	欠	
	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	表○	なし	なし	○	なし	格子16	なし	欠	
	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	○○	なし	なし	なし	なし	格子仇	なし	欠	
第81回4 5 6 未掲載	未掲載	寺東北	女瓦	なし	不明	表△	なし	なし	なし	なし	格子24	なし	欠	
	未掲載	同上	女瓦	寄木△	不明	裏○	なし	なし	なし	なし	格子22	裏○	2	
第85回5 6 未掲載	写51	寺西北	女瓦	なし	不明	○○	なし	なし	○	なし	格子6	裏○	2	
	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	なし	なし	なし	部分なし	なし	格子渾	裏○	2	
第87回3 134回8 未掲載	未掲載	Nトレ	女瓦	なし	不明	表○	なし	なし	なし	なし	格子10	なし	欠	
	未掲載	住居3	女瓦	なし	不明	表○	なし	なし	○	なし	圓卓少	裏○	2	表側際削広い
139回5 未掲載	未掲載	住居8	女瓦	なし	不明	○○	なし	なし	○	なし	格子14	裏△	2	
	未掲載	住居1	女瓦	なし	不明	表○	なし	なし	部分なし	なし	圓卓ハ	裏△	2	
142回7 写45-2 147回8 未掲載	写45-2	住居12	宇瓦	なし	不明	表○	なし	なし	なし	なし	一	なし	一	表側際削広 5.8kg
	未掲載	住居19	女瓦	なし	不明	表○	なし	なし	なし	なし	格子佐位	裏△	2	
160回3 4 写52	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	○○	なし	なし	○	なし	格子15	なし	2	
	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	なし	なし	なし	なし	なし	格子反	裏○	2	
161回5 6 未掲載	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	○○	なし	なし	○	なし	格子反	裏○	2	
	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	○○	なし	なし	○	なし	格子14	なし	欠	
175回11 未掲載	写52	住居26	女瓦	なし	不明	○○	なし	なし	なし	なし	格子16	裏○	3	
	未掲載	住居27	女瓦	なし	不明	なし	なし	なし	なし	なし	格子渾	裏○	2	
179回32 写47	写47	住居27	女瓦	なし	不明	○○	なし	なし	なし	なし	格子渾	裏○	2	
	未掲載	住居31	女瓦	なし	不明	○○	なし	なし	部分なし	なし	格子19	裏○	3	
193回17 18 未掲載	未掲載	住居32	女瓦	なし	不明	○○	なし	なし	なし	なし	格子佐位	裏○	2	
	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	○○	なし	なし	部分なし	なし	格子反	裏○	3	
202回19 20 未掲載	未掲載	住居36	女瓦	寄木○	なし	なし	組作	なし	なし	なし	素文寄木	なし	3	
	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	○○	なし	なし	なし	なし	格子14	なし	2	
211回16 写52	写52	住居39	女瓦	寄木△	不明	○○	なし	なし	なし	なし	格子16	なし	3	表側際広い
	未掲載	住居42	女瓦	なし	不明	表○	なし	なし	○	なし	格子反	裏○	3	
219回23 24 未掲載	未掲載	住居31	女瓦	なし	不明	○○	なし	なし	部分なし	なし	格子反	裏○	2	
	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	○○	なし	なし	部分なし	なし	格子反	裏○	2	
220回25 26 未掲載	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	○○	なし	なし	○	なし	格子反	裏○	2	
	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	○○	なし	なし	○	なし	格子反	裏○	2	
221回27 28 未掲載	写48	同上	女瓦	なし	不明	○○	なし	なし	○	なし	格字不1	裏○	3	
	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	表○	なし	なし	○	なし	格子4	裏○	2	
223回9 写47	写47	住居43	女瓦	なし	不明	○○	なし	なし	○	なし	格子佐位	裏○	3	
	未掲載	住居44	女瓦	なし	不明	○○	なし	なし	○	なし	格子反	裏○	3	3.15kg
227回12 13 写46	写46	同上	男瓦	半載作	なし	不明	表○	なし	なし	なし	素文半載	なし	1	
	未掲載	写45-1	住45-46	鏡瓦	一	一	一	一	一	一	格子渾	一	欠	鏡1型
231回8 9 未掲載	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	表○	なし	なし	部分なし	なし	格子佐位	裏○	2	
	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	表○	なし	なし	なし	なし	格子9	なし	1	
240回2	未掲載	満跡1	女瓦	なし	不明	裏○	なし	なし	○	なし	格子9	なし	1	

図版番号	写真番号	出土位置	瓦種	製作法 ・補痕	一枚作 可能性	粘土板	布压痕	輪轍の 使用痕	叩技法・ 型式名称	瓦焼成 時圧痕	側部 面取	備考	
240図3	未掲載	溝跡1	女瓦	なし	不明	表○	なし	なし	なし	格子 仇	なし	欠	
4	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	裏○	なし	なし	○	格子 4	裏○	2	
241図3	写45-1	溝跡2	宇瓦	なし	不明	なし	なし	なし	一	一	一	宇1型	
4	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	○○	なし	部分	一	格文不1	なし	欠	
5	写53	同上	女瓦	なし	不明	○○	なし	部分	○	格子 22	裏○	2	
244図24	未掲載	溝跡3	女瓦	なし	不明	表○	なし	なし	部分	なし	縦単 ハ	裏○	3
256図2	未掲載	土壤6	女瓦	なし	不明	なし	なし	なし	なし	格子 2	なし	欠	
3	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	○○	なし	なし	○	格子 滅左	裏○	3	
4	写49	同上	女瓦	なし	不明	なし	なし	なし	○	格子 人	なし	欠	
5	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	○○	なし	なし	○	格子 反	裏○	3	
6	写51	同上	女瓦	なし	不明	なし	なし	なし	○	格子 9	なし	欠	
259図2	未掲載	土壤11	男瓦	半裁作	なし	なし	紐作	○	なし	素文紐作	なし	2	
3	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	○○	なし	なし	○	格子 2	なし	欠	
4	写49	同上	女瓦	なし	不明	なし	なし	なし	○	格子 1	なし	欠	
5	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	○○	なし	なし	部分	格子 17	なし	欠	
6	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	裏○	なし	なし	部分	格文不明	なし	欠	
7	写50	同上	女瓦	なし	不明	裏○	なし	なし	○	格子 3	なし	欠	
8	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	なし	なし	なし	○	格子 1	なし	欠	
9	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	なし	なし	なし	部分	格文不明	なし	欠	
10	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	裏○	なし	なし	部分	格文不明	なし	欠	
11	未掲載	同上	女瓦	なし	不明	○○	なし	なし	なし	格子 10	裏○	2	
265図3	未掲載	注参照	鹿瓦	—	—	—	—	—	—	—	—	欠	
5	写45-5	注参照	鹿瓦	—	—	—	—	—	—	—	—	胎土鐵1型	
6	写45-6	注参照	鹿瓦	—	—	裏○	なし	なし	—	—	—	鹿1型	
266図3	写45-3	J16	宇瓦	—	—	—	—	—	—	—	—	宇1型か	
4	写45-4	K16	宇瓦	—	—	—	—	—	—	—	—	宇1型	
9	写45-9	J17	宇瓦	—	—	—	—	—	—	—	—	宇1型	
10	写45-10	注十三	宇瓦	なし	不明	なし	なし	なし	表○	なし	—	特殊	
11	未掲載	注十三	宇瓦	なし	不明	なし	なし	なし	表○	なし	なし	胎土字2型	
267図1	未掲載	注参照	男瓦	半裁作	なし	なし	なし	なし	○	素文	なし	3	
2	未掲載	注参照	男瓦	寄木	なし	裏○	なし	なし	○	素文	なし	2	
3	写48	十三室	女瓦	なし	不明	表○	なし	なし	○	格子 茂	裏○	4	
4	未掲載	注参照	女瓦	なし	不明	表○	なし	なし	部分	格子 清	裏△	2	
7	写49	J17	女瓦	なし	不明	裏△	なし	なし	○	格子 1	なし	欠	
9	未掲載	J15	女瓦	なし	不明	なし	なし	なし	○	格子 6	なし	欠	
10	写51	注参照	女瓦	なし	不明	なし	なし	なし	部分	格子 9	なし	2	
11	未掲載	注参照	女瓦	なし	不明	○○	なし	なし	なし	格子 13	なし	欠	
12	未掲載	H18	女瓦	なし	不明	表○	なし	なし	なし	格子 12	なし	欠	
13	未掲載	注参照	女瓦	なし	不明	なし	なし	なし	○	格子 14	なし	欠	
268図5	未掲載	注参照	女瓦	なし	不明	○○	なし	なし	○	なし	格子 清左	裏○	3
6	写47	注参照	女瓦	なし	不明	○○	なし	なし	○	なし	格子 清左	なし	2
8	写50	注参照	女瓦	なし	不明	○○	なし	なし	部分	格子 2	裏○	欠	
14	未掲載	注参照	女瓦	なし	不明	なし	なし	なし	なし	格子 15	なし	欠	
15	未掲載	注参照	女瓦	なし	不明	○○	なし	なし	部分	格子 15	なし	欠	
16	未掲載	注参照	女瓦	なし	不明	○○	なし	なし	なし	格子 16	なし	欠	
17	未掲載	I17	女瓦	なし	不明	なし	なし	なし	○	格子 17	なし	欠	
18	写52	注参照	女瓦	なし	不明	なし	なし	なし	○	格子 17	なし	欠	
19	未掲載	I18	女瓦	なし	不明	表○	なし	なし	なし	格子 清	なし	欠	
269図20	写52	注参照	女瓦	なし	不明	裏○	なし	なし	○	なし	格子 18	なし	欠
21	未掲載	注参照	女瓦	なし	不明	なし	なし	なし	なし	格子 不明	なし	欠	
22	写50	K17	女瓦	なし	不明	なし	なし	なし	○	格子 5	裏△	欠	
23	未掲載	J18	女瓦	なし	不明	○○	なし	なし	なし	格子 22	なし	2	
24	未掲載	H18	女瓦	なし	不明	表○	なし	なし	○	格子 不明	なし	欠	
25	写49	I16	女瓦	なし	不明	なし	なし	なし	○	格子 20	なし	欠	
26	未掲載	K7	女瓦	なし	不明	なし	なし	なし	○	格子 不明	なし	欠	
27	未掲載	十三室	女瓦	なし	不明	なし	なし	なし	○	格子 不明	なし	欠	
28	未掲載	K17	女瓦	なし	不明	なし	なし	なし	なし	格文類	なし	欠	
29	未掲載	注参照	女瓦	なし	不明	○○	なし	なし	部分	格文類	なし	欠	
30	未掲載	注参照	女瓦	なし	不明	○○	なし	なし	○	格文類	なし	欠	
31	未掲載	基1	女瓦	なし	不明	なし	なし	なし	縦作	なし	裏△	裏横刷毛目	

## 第5篇 検出された遺構と遺物（古代）

図版番号	写真番号	出土位置	瓦種	製作法	一枚作 ・桶板	粘土板	布面	轆轤の 使用痕	叩技法・ 型式名称	瓦焼痕 時圧痕	側部 面取	備考
32 写53	J17	女瓦	なし	不明	なし	なし	なし	○	なし	繩多	なし	欠
33 写53	注参照	女瓦	なし	不明	なし	なし	なし	○	なし	素文・刷	なし	欠
34 写53	注参照	女瓦	なし	不明	なし	なし	なし	刷毛	なし	素文・刷	なし	欠
35 写53	K16	男瓦	不明	不明	なし	なし	なし	木葉	△	素文類	なし	4
270図1 写50	J17	女瓦	なし	不明	なし	なし	なし	なし	○	なし	格子渦左	なし
2 写50	注参照	女瓦	なし	不明	○○	なし	なし	○	なし	格子渦左	なし	欠
3 写50	注参照	女瓦	なし	不明	○○	なし	なし	○	なし	格子渦左	なし	欠
4 未掲載	注参照	男瓦か	不明	不明	○○	なし	なし	○	なし	格子 19	なし	欠
5 未掲載	注参照	男瓦か	不明	不明	表○	なし	なし	○	なし	格子不1	なし	欠
6 写48	基礎1	男瓦か	不明	不明	なし	なし	なし	○	なし	格子 帯	なし	欠
271図1 写53	十三宝	男有段	半截作	なし	なし	○	△	なし	○	素文	なし	3
272図1 写53	十三宝	熨斗瓦	なし	不明	表△	なし	なし	部分	なし	繩多擦消	なし	3
2 写53	十三宝	熨斗瓦	なし	不明	なし	なし	なし	なし	なし	繩多	なし	2
3 写53	十三宝	熨斗瓦	なし	不明	なし	なし	なし	なし	なし	繩多	なし	2
4 写53	十三宝	熨斗瓦	なし	不明	なし	なし	なし	なし	なし	繩多	なし	2
5 写53	十三宝	熨斗瓦	なし	不明	なし	なし	なし	なし	なし	繩多	なし	2
6 写53	十三宝	熨斗瓦	なし	不明	なし	なし	なし	なし	なし	繩多	なし	2

### 瓦類種類・型式別一覧

#### 男瓦

○**素文無段半截作**（寄木）類 この類は、男瓦の大半を占め、焼成はおむね灰色で化色は少ない。表面は回転条痕があり内側の芯形は寄木ではないという確証はないが寄木として残存の少ない状況を認める。寄木痕をとどめる類は紐作が多いと考えられることに対し、粘土板剥取りの糸孔を基本に作されている。粘土板と芯形の関係において、粘土板接合面、布合目痕が極めて少ないので、予定された截断位置に粘土板接合面・布合目痕に沿うためと見て、從来の所見と同じ考え方である。回転条痕は早い痕跡を見せる特徴がある。推定笠原窯跡群製。

○**素文無段組作**（寄木）類 この類は、瓦接合面男瓦規数1945点中1605点に認め8.5%の存在に過ぎない。焼成は酸化気味が3分1ほど認められ、残りが還元気味から燒が加わる。作瓦の基本は紐作と考えられるが、寄木痕を伴なう類には粘土板剥取痕を認めるので、それは、前出の類に含むべきものか（第267図2）、紐作瓦の作瓦の間に行なわれたものは明確ではない。回転条痕は前出に比較した場合、削出は板状の工具を用いる例が多くあり、シャープな工具痕あるいは回転条痕を認めるのに対し、本類はゆるやかで、条痕が純い特徴がある。半截する場合は前出と同様である。推定笠原窯跡群製。

○**格子叩印** この類は、第270図4～6に示した3点が存在する。焼成は還元気味である。男瓦とした理由は、横断面の丸みからである。しかし3点とも、男瓦の全体が回転条痕を有するのに対し、回転条痕が認められない。そのため女瓦が並み、男瓦形状の丸みをもつとも考えられる。製作地は笠原窯跡群が推定される。

○**素文有段男瓦** この類は、第271図1のみしか存在しない。半截作であることは回転条痕が認められることから考えられ、それと同時に芯型が存在したのである。焼成は還元気味。

#### 女瓦

○**素文類** 女瓦中49%（重量比）が素文であった。この素文類は接合の結果、2分1以上復元された個体はないとから、格子叩の素文部・叩印の素文部とで大多數が構成されていると推定された。そのため大多数が女瓦一枚作ということになる。しかし本來的な形で素文類が存在したことの可能性は次の寄木焼痕を作なう類が存在するので、本類中に寄木焼痕の弱い被片が混ったことも考るが個体量は少ない。

○**素文寄木桶巻作** 素文寄木の桶巻作は6,006点中に4点が認められ、第63図6、第72図14に掲げた。後例は粘土板剥取材のタラッ材が粘土塊を積み上げて作らしやすく、粘土塊の接合面が多いと残されている。また後例の裏面には回転条痕があり桶巻作。焼成は還元気味。

○**素文寄木・鉛作** 前述のとおり第202図19に1点あり。しかし回転条痕は不明で桶巻作の左辺は薄い。焼成は還元気味。

○**格子「佐位」左型類** 烧成は還元気味が主で、叩位置は裏面中央に、叩位置か瓦側部に追切られた個体は少ない。そのため凸形台上の一作を考慮されると、粘土板剥取あり。布目痕は擦消した個体量は少なく、図示した5点のうち3点が布庄痕そのままである。乾燥は瓦側部の圧痕が3（4）例に残る。全復元はなく、狭口幅23cm。

○**格子「仇」型類** 全復元個体は1例あり。焼成は還元気味。叩位置は裏面中央に、2列×3単位前後。そのため推定一枚作。粘土板剥取痕あり。布目は10点の箇所中8点が擦消。乾燥の圧痕が2（4）例にあり、大きさは長44.4、広小口で26.2cmである。

○**格子「九」型類** 全復元個体はない。焼成は還元主体。叩位置は裏面中央に、2列×3単位前後と推定され、一枚作と考えられる。粘土板剥取痕は認められ、布目の擦消は、図示した3点中全個体が擦消。乾燥時の圧痕は判然としない。

○**格子「測」型類** 全復元個体はない。焼成は還元気味。叩位置は裏面中央に2列×3単位前後～3列。そのため推定一枚作。粘土板剥取痕あり。布目擦消は、図示の6点中1（3）例にあり、弱い。乾燥の圧痕は2（3）例に認められる。

○**格子「測」左型類** 全復元個体は3点あり。焼成還元気味。叩位置は裏面中央に2列×3単位前後。そのため推定一枚作。粘土板剥取痕あり。布目擦消は図示の8例中、全部にある。乾燥の圧痕は4（5）例にあり。大きな例で長42.4、広小口26.5cmである。

○**格子「雀」型類** 全復元個体はない。焼成は還元主体。叩位置は中央に寄るが、多目で不定気味は「測」型に似る。推定一枚作。粘土板剥取痕あり、布目擦消は図示の8例中、7例にあり。乾燥の圧痕は3（4）例にあり、大きさは合長42.5、狭口幅22.7cm。

○**格子「虎」型類** 全復元個体はない。焼成は還元気味。叩位置は各小片に推定困難。回転・寄木痕なく一枚作か。粘土板剥取痕あり。布目擦消は、図示の5例中、4例にあり。乾燥の圧痕は2例にあり。

○**格子「反」<sup>2</sup>型類** 全復元個体は2例あり。焼成還元気味。叩位置は裏面中央に2列×3単位前後。そのため推定一枚作。粘土板剥取痕あり。布目擦消は図示の14例中、8（12）例にあり。乾燥の圧痕は14例にあり。大きな例で長41.0、広小口で27.9cm。薄型に新・古あり。

○**格子「人」<sup>2</sup>型類** 1個体のみの存在。焼成は暗い灰色。焼結。回転・寄木痕なく一枚作か。粘土板剥取痕は不明瞭。布の擦消あり。

- 格子文字不明 1型類 全復元個体は1例あり。焼成は還元気味。叩位置は裏面中央に3列×3単位前後。そのため推定一枚作。粘土板剥取痕は図示3例、全部にあり。乾燥時の瓦圧は2例あり。大きさは長40.6、広小口38.4cmである。なお範型に新・古あり。
- 格子文字不明 2型類 全復元個体1例。焼成は還元気味。叩位置は2列×3単位前後。そのため推定一枚作。粘土板剥取痕あり。布目の擦消は図示した5例中に全部認められる。乾燥時の瓦圧は3（4）例あり。大きさは長40、広小口28cm。
- 格子文字不明 3型類 全復元個体1例。焼成は還元気味。叩の数単位は推定で中央寄り、2列×約3単位。推定一枚作。粘土板剥取痕あり。布目の擦消は図示した5例中に全部認められる。乾燥時の瓦圧は3（4）例あり。大きさは長42.5、広小口27cm。
- 格子文字二種類 3個体存在し、第270回1～3および同図補注。さらに221頁で触れたので参照されたい。
- 格子1型類 全復元個体なし。焼成は還元気味。叩位置は小片のため不明。寄木圧痕、回転条痕なく推定一枚作。粘土板剥取痕あり。布目の擦消は図示した8例中に6（8）認められ、瓦乾燥時圧痕は疑いが1例ある。
- 格子2型類 全復元個体なし。焼成は還元気味。叩位置は第1回135回では1単位から2分列×3単位であり、推定一枚作。粘土板剥取痕あり。布目の擦消は図示した6例に部分が2例あり。弱い瓦の乾燥時圧痕は2例あり。大きさは前出図からすると大きさうである。
- 格子3型類 全復元個体なし。焼成は還元気味。叩位置は第58回60では中央寄りにあり、2列×3単位以上か。推定一枚作。粘土板剥取痕あり。布目の擦消は図示した4例中に1例。他2例が部分。瓦の乾燥時圧痕は不明確である。
- 格子4型類 全復元個体1例。焼成は還元気味。叩位置は第37回62では中央寄りに2列×3単位中に+1単位。推定一枚作。粘土板剥取痕あり。布目の擦消は図示した4例中に3例あり、1例なし。瓦の乾燥時圧痕は4例。大きさは前出で長43.5、広小口27cm。
- 格子5型類 全復元個体なし。焼成は還元気味。叩位置は小片のため不明確。寄木圧、回転条痕なく推定一枚作。粘土板剥取痕不明瞭。布目の擦消は図示した1例中に1例。乾燥時の瓦圧痕は疑い。
- 格子6型類 全復元個体なし。焼成は還元気味。叩位置は小片のため不明確。回転条痕なく推定一枚作。粘土板剥取痕あり。布目の擦消は図示した4例中に3、部分1例。乾燥時の瓦圧痕は1例あり。
- 格子7型類 1個体しか存在しない。焼成は酸化気味。叩位置は小片のため不明確。寄木圧、回転条痕なく推定一枚作。粘土板剥取痕なし。布目の擦消あり。乾燥時の瓦圧痕は1例あり。
- 格子8型類 全復元個体なし。焼成は還元気味。叩位置は第40回94から推測すると2列×3単位前後。推定一枚作。粘土板剥取痕あり。布目の擦消は図示した4例中1、部分1であった。乾燥時の瓦圧痕は似似1例あり。大きさは前出で狭小口は24.9+4cmである。大形瓦。
- 格子9型類 全復元個体なし。焼成は還元気味。叩位置は小片のため不明確。寄木圧、回転条痕なく推定一枚作。粘土板剥取痕あり。布目の擦消は図示した6例中に3、部分3であった。乾燥時の瓦圧痕は2例あり。
- 格子10型類 全復元個体なし。焼成は酸化気味。叩位置は第57回53から推測すると2列×3単位前後。推定一枚作。粘土板剥取痕あり。布目の擦消は図示した7例中に2、部分2であった。乾燥時の瓦圧痕は4例、疑似1例あり。
- 格子11型類 全復元個体なし。焼成は還元→酸化気味。叩位置は第58回56から推測すると2例×3単位前後。推定一枚作。粘土板剥取痕あり。布目擦消は図示した4例に部分3であった。乾燥時の瓦圧痕は2例。大きさは前出からすると大形瓦。
- 格子12型類 全復元個体なし。焼成は還元気味。叩位置は第58回57では中央部で、2列×3単位と似た状態の2単位あり。推定一枚作。粘土板剥取痕あり。布目擦消は図示した3例中1点、部分1あり。乾燥時の瓦圧痕は疑似が1例あり。
- 格子13型類 全復元個体なし。焼成は還元→酸化気味。叩位置は第69回125では中央部で2列×3単位と似た状態の2単位あり。推定一枚作。粘土板剥取痕あり。布目擦消は図示した3例中1点、部分1あり。乾燥時の瓦圧痕は疑似が1例あり。
- 格子14型類 全復元個体はない。焼成は還元時。叩位置は第73回147によれば2列×3単位前後が推測される。推定一枚作。粘土板剥取痕あり。布目の擦消は図示の7例中、6例にあり。乾燥時の瓦圧痕は2例、疑似1例である。大きさは前出で狭小口23.5cm。
- 格子15型類 全復元個体はない。焼成は還元→酸化気味。叩位置は第160回4によれば、2列3単位と推定でき、推定一枚作。粘土板剥取痕あり。布目の擦消は図示の6例中、3例、部分2例。乾燥時の瓦圧痕は疑似1例である。大きさは前出で広小口29.0cm、大形瓦。
- 格子16型類 全復元個体はない。焼成は還元気味。叩位置は第211回16によれば、2列×3単位と推定でき、推定一枚作。粘土板剥取痕あり。布目の擦消は図示の4例中なく、乾燥時の瓦圧痕は1例である。前出瓦の大きさは、叩位置と側部間、瓦の厚さから中一小形瓦。
- 格子17型類 全復元個体はない。焼成は還元気味。叩位置は推定困難。寄木圧、回転条痕なく、推定一枚作。粘土板剥取痕あり。布目の擦消は図示の3例中、2例、部分1例であった。乾燥時の瓦圧痕は、不明確である。
- 格子18型類 全復元個体はない。焼成は酸化気味。叩位置は推定困難。作瓦法不明瞭。布目擦消1回中1。
- 格子19型類 全復元個体はない。焼成は還元気味。叩位置は第190回7によれば、2列×3単位と推定でき、推定一枚作。粘土板剥取痕あり。布目の擦消は図示の1例は、部分。乾燥時の瓦圧痕は存在する。前出瓦の大きさは広小口28.5cmと中形級である。
- 格子20型類 全復元個体はない。焼成は還元→酸化気味。叩位置は小片のため推定困難。寄木圧痕、回転条痕なく推定一枚作。粘土板剥取痕は不明確。布目の擦消は図示の2例はともに。乾燥時の瓦圧痕は不明確。
- 格子21型類 全復元個体はない。焼成は還元気味。叩位置は小片のため推定困難。作瓦法不明確。粘土板剥取痕も不明確。布目の擦消は図示の1例はあり。乾燥時の瓦圧痕は不明確。
- 格子22型類 全復元個体はない。焼成は酸化気味。叩位置は小片のため推定困難。寄木圧痕に疑似があり、桶巻作も考慮の必要性あり。布目の擦消は図示した4例中1例あり、乾燥時の瓦圧痕は2例あり。
- 格子23型類 全復元個体はない。焼成は酸化気味。叩位置は小片のため推定困難。作瓦法不明確。粘土板剥取痕あり。布目の擦消は図示の2例中、1例あり。乾燥時の瓦圧痕は不明確。
- 格子24型類 全復元個体はない。焼成は還元気味。叩位置不明。作瓦法不明確。粘土板剥取痕疑似。布目の擦痕は1例中なし。
- 格子25型類 全復元個体は1例。焼成は還元気味。叩位置は1列×3（4）単位。推定一枚作。粘土板剥取痕不明確。布目の擦消は図示した1例中に1例。乾燥時の瓦圧痕あり。大きさは第60回156で、長40、広端部幅（29.5）cmであった。
- 縄叩頭 女瓦の6.2%（重量）を占める存在で、焼成も含まれるが目立って酸化気味が多い。さらに酸化気味の焼成過程が大半を占める中で、最終的には黒色焼を行なった個体も多く存在（図示中では第60回71、第61回73、第64回90、第73回142）がある。叩は繩縄を叩板に巻き横打る方法で2列を1字間に6部位を瓦中央に施す例が多くあり、図示した12例中に7例が認められる。また斜面に3列を2～3単位をもって同一方向に叩いた第61回74の例、部位が交叉した第134回8の例、横向に打込んだ第67回103の例などは極めて少い個体である。しかし焼成技法の共通性や、表面を全面的に擦消しない個体は19点に共通しているため、限定された時期の所産と考えられる。作瓦法の主体は叩位置から見て第67回103を除いて一枚作が推定できる。第61回74、第67回103、第134回8は布の擦消あり。また復元個体は4例あり、第60回72は、長39.9、広小口（28.2）cm、第61回73は、長39.2、広小口27.3cm、第61回74は、長39.8、広小口（30.2）cm、第142回1は40.2、広小口28.0cmを測る。

# 第6篇 化学分析

## ——十三宝塚遺跡出土遺物の化学分析——

### はじめに

1979年にはじめた県工業試験場による蛍光X線を用いた土器の胎土分析は、試料点数は900点を越え、過去12回以上にわたる報告がある。その結果、県内10個所にわたる窯跡群の一傾向を知るとともに、製作地の同定も可能となってきた。さらに各窯跡群の胎土傾向は立地基盤層と有機的な関連があることも明らかとなった。今回の分析中、土器の胎土については、それら既往の成果を踏まえることとし、赤色顔料については、酸化鉄、水銀朱（辰砂一水銀・硫黄化合物）、鉛丹（四酸化三鉛）などを前提とした場合、主要元素反応はどれを検知することができるか、今回、新たに凝灰岩の分析が加った点については、蛍光X線分析・X線回折で試し、最悪の結果は、試料蓄積にとどめることとした。

以下、本稿の化学的な記述は小沢と化学課職員、考古学的な記述は大江が、結果については、協議結果を大江が記述し、小沢と化学課職員が記述確認を行なった。

### 1. 試料の選択と採取

今回の分析試料は、遺物類について十三宝塚遺跡を主とし、補助試料を高崎市教育委員会、新里村教育委員会、当団飯塚誠、大西雅広から提供いただいた。

土器類は肉眼観察により、生産地域はある程度特定してあるので、その特定が困難な個体、特定が可能であっても、分析値の蓄積を必要とする個体を選択した。また936は埼玉県美里町水殿瓦窯跡（13世紀）瓦は、洪積世粘土と見られる胎土で、既分析値に粗質胎土の例が少ないので補足資料として加えた。

石類は、十三宝塚遺跡の基壇2号が石積化されていたと考えられ、その主石材である凝灰岩の産出地を知るために、県下各地の比較素材を含め937～947まで11点の試料抽出を行なった。分析に当り、石材鑑定を実施した飯島静男に分析に対する留意を伺ったところ「凝灰岩のような火山碎屑岩類の分析に当っては異質岩片を除いて本質的な基質および斑晶のみを分析すべきであり」、さらに「そのようにしてはじめて溶岩などの比較的純粋な火成岩などの分析値と同等に論議させうることができる」との異質岩片の除去について教示を得た。そのため、岩石試料は破碎し、35mmメッシュで<sup>粗</sup>細い、岩片を除去して試料を作成した。

分析試料の肉眼観察と試料内容は表1、分析試料一覧に示した。

### 2. 分析の目的

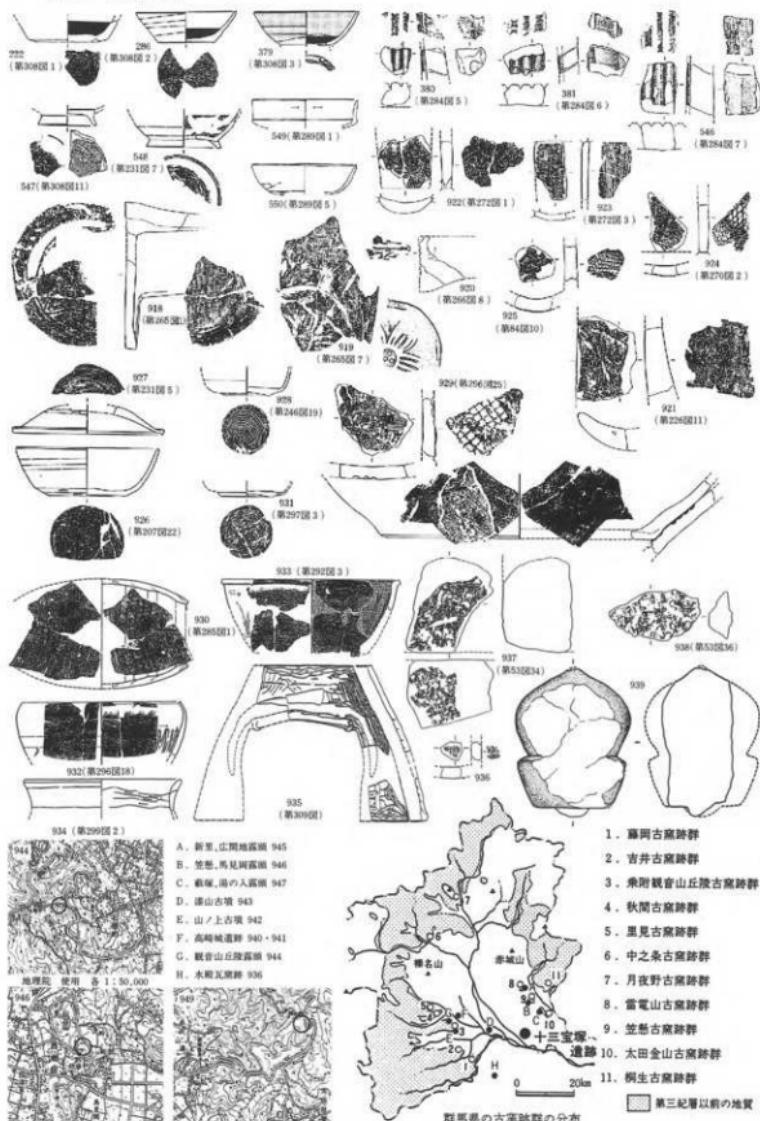
次の4点を主要目的とする。

- (1) 赤色顔料付着の試料番号222・286・379・380・381・546について赤色顔料の主要元素を知りたい。
- (2) 漆に見える物質の付着した547・548については分析法を検討する。(群馬県工業試験場は県工芸所を合併し、現在も工芸部がそれを継ぐ)。
- (3) 土器の胎土分析は、製作地同定を目的とする。
- (4) 凝灰岩と類似の石材については、同定を行ないたいところであるが、分析方法と試料からサンプル化の基礎方法を確立に向け、検討することを目的とする。

### 3. 分析方法及び測定条件

試料番号380・549・550・918・919・920・921・922・923・924・925・926・927・928・929・930・931・932・933・934・935・936・937・938・939・940・941・942・943・944・945・946・947の33点について蛍光X線分

付図1 分析試料図



## 第6篇 化学分析

付表1 分析試料一覧

試料番号	図版番号	資料の種別と名稱	資料の構成地	摘要	分析の目的	肉眼観察上の製作地
222	第308図 1	須恵器坏 転用鏡	I 17 a ~ f 6 ~ 11	灰色。軟質。胎土に白色粒子含む。内面は磨耗があり転用鏡と考えられる。内面に赤色顔料付着。顔料の主元素は鉛丹・水銀朱・酸化鉄のいずれかを知りたい。8世紀。	顔料の主元素を知る	笠懸窯跡群
286	第308図 2	須恵器坏 転用鏡	K 18住居 内床面	灰色。硬質。胎土に白色粒子微。内面は磨耗があり転用鏡と考えられる。内面に赤色顔料付着。顔料の主元素は鉛丹・水銀朱・酸化鉄のいずれかを知りたい。9世紀。	同上	隣接県製で 埼玉か。
379	第308図 3	灰釉陶碗 使用の鏡	住居跡27 号	灰色。緑。内面は磨耗があり、顔料を塗るために鏡ばかりでなく鏡として用いた可能性もある。赤色顔料の主元素は鉛丹・水銀朱・酸化鉄のいずれかを知りたい。9世紀後半~10世紀前半。	同上	東海地方製品
380	第284図 5	須恵器 瓦塔	注記は十 三	酸化気味で褐色。軟。白色粒子わずかに含み、黒色粒子を少しまじえる。表面に瓦葺表現があり、裏面に赤色顔料の付着あり。顔料の主原料は鉛丹・水銀朱・酸化鉄のいずれかを知りたい。8世紀。	同上と製作地 同定	笠懸窯跡群
381	第284図 6	同上	K 16 i 8	前出に胎土・焼成は共通する。表面に瓦葺表現があり。裏面に赤色顔料の付着がある。顔料の主原料は鉛丹・水銀朱・酸化鉄のいずれかを知りたい。8世紀。	顔料の主元素を知る	同上。
546	第284図 7	基壇1号 J 16北東部	前出に胎土・焼成は共通する。表面に瓦葺表現があり。裏面に赤色顔料の付着がある。顔料の主原料は鉛丹・水銀朱・酸化鉄のいずれかを知りたい。8世紀。	同上	同上。	
547	第308図 11	須恵器壇 転用鏡	住居跡46 号	黄褐色。軟。白色粒子少。鉱物粒微。上部を欠損し、高台部のみ。高台裏に墨痕があり、磨耗が見られる。墨痕の主要素は炭素分であるが、土器素地中に含まれる炭素分量と差が生じか反応を知りたい。	分析法の検討	笠懸窯跡群
548	第231図 7	須恵器壇 転用の壇	住居跡46 号	暗褐色。硬。白色粒子少。鉱物粒微。体部~底部。内面に漆と思われる樹脂が付着している。その物質の反応性を知りたい。9世紀。	同上	隣接県製で 埼玉か。
549	第289図 1	土師器 壺	E 10(2) S 1(l)	淡褐色。軟。白色粒子少。鉱物粒微。細かいシルト質。この胎土は一見して特徴的である。製作地の推定を既成品と比較したい。6世紀。	製作地 同定	藤岡製。
550	第289図 5	土師器 壺	住居跡38 号	淡褐色。白色粒子少。鉱物粒微。細かいシルト質。この胎土は一見して特徴的である。製作地の推定を既成品と比較したい。8世紀。	同上	藤岡製。
918	第265図 1	瓦 瓦鉢	住居跡19 号ほか	白色粒子少。鉱物粒微。硬。壺1型。当遺跡出土の大形接合個体2個のうちの一つ。推定単井五葉蓮華文瓦。8世紀。	同上	笠懸窯跡群
919	第265図 7	瓦 男瓦 N 3柱穴	基壇1号 E 8 S E	橙色。白色粒子少。鉱物粒微。硬。壺1型。男瓦裏面に瓦当範囲が押しされ、文様が残された。意匠は単井五葉蓮華文である。8世紀。	同上	笠懸窯跡群
920	第266図 8	瓦 字瓦	住居跡13 号	灰色。白色粒子少。鉱物粒微。硬。字1型。当遺跡出土の字及大形接合個体のうちの一つ。扇形草文の意匠。小焼削れ多く、縫合。8世紀。	同上	笠懸窯跡群
921	第226図 11	瓦 字瓦	注記十三 とあり	暗褐色。白色粒子少。黑色・褐色粒含むが鉱物粒微は多くない。その中にわざか鞋石粒をまじえる。胎土の質は軽く、洪積世粘土を思わせる。共通の胎土に。試験番号922がある。字2型。8世紀。	同上	東毛製か埼玉製。
922	第272図 1	瓦 熨斗瓦 宝とあり	注記十三 1	淡褐色。白色粒子少。黒色・褐色粒含むが全体量は少。胎土の質は軽く、洪積粘土か。胎土は前に同じ。熨斗1型。8世紀。	同上	東毛製か埼玉製。
923	第272図 3	瓦 熨斗瓦 宝とあり	注記十三 38号	淡褐色。白色粒子少。白色粒子・鉱物粒含微。全体量は少。胎土は前に似るがやや重みあり。洪積世粘土か。第三層の割出粘土か。熨斗2型。	同上	東毛製か 8世紀。
924	第270図 2	瓦 女瓦	16.7	灰色。白色粒子少。鉱物粒含み、黑色粒子多い。縫。文字2種の印があり、「奢」・「削」左。8世紀。	同上	笠懸窯跡群
925	第84図 10	寺東北隅 女瓦	黄褐色。白色粒子少。鉱物粒含む。軟質。格子24型。同叩は1片しか出土していない。丸みの強い瓦で、女瓦か迷う瓦である。8世紀。	同上	笠懸窯跡群	
926	第207図 22	須恵器 大形壺	住居跡37 ~ 38号	灰。白色粒子多い。鉱物粒含む。全体量は少。軟質。織機右回転窓前が底面にある。体部側まで削りがおよぶ。8世紀。	同上	笠懸窯跡群
927	第231図 5	須恵器 蓋	住居跡45 ~ 46号	灰。白色粒子多い。鉱物粒含むが、全体では少ない。軟質。織機右回転窓前が上に施される。8世紀。	同上	笠懸窯跡群
928	第246図 19	須恵器 坏	寺東北隅 瓦	灰白色。白色粒子少。鉱物粒はわずか入るが、ほとんどないとした方が近い。縫。底面に織機右回転の糸切あり。8・9世紀。	同上	東海地方製 で湖西窯か。
929	第296図 25'	須恵器大 腹付着瓦	L 18 f 1	灰~暗灰色。白色粒子多い。鉱物粒は入るが、全体としては少ない。縫。大要片と瓦片とは共通の胎土。詳しく述べ第278図須器蓋入1型。	同上	隣接県製、 埼玉か。
930	第285図 1	須恵器 地形焼	寺東北 窓	黒灰色。白色粒子少。鉱物粒微。縫。全体に黒色の縛と自然釉あり。内面織目と割口に紐作痕あり。數少ない古墳時代製品。6世紀。	同上	西毛~埼玉 県製。
931	第297図 3	須恵器 坏	I 16表土 3	灰色。白色粒子多くが全体的に少ない。縫。底面右回転糸切。東海地方方製の928と胎土異なる。8・9世紀。	同上	湖西製。
932	第296図 18	須恵器 鉄鉢形	E 8 S 6 f	暗灰。白色粒子少。鉱物粒は少ない。その中で白色粒子が多い。内面に研磨あり。体部外面にもあり。8世紀。	同上	隣接県製埼玉。

試料番号	図版番号	資料の種別と名称	資料の摘出地	摘要	分析の目的	内眼観察上の製作地
933	第292図 3	須恵器鉢	住居跡8号	暗灰色。白色粒子・鉱物粒はほんのわずか含むが、ないと云って良いくらい。内面研磨、黒色処理。外面に油煙か漆付着。8・9世紀。	製作地同定	東能地方製か。
934	第299図 2	土器器縁	住居跡13号	明褐色。白色粒子・鉱物粒含む。硬。胎土はやや軽く、洪積世粘土を思わせる。内面底部に異風の削りがあり、地域では一般的でない。	同上	網接縫製か。9世紀。
935	第309図	土器製電	溝跡4号	橙色。白色粒子多く、鉱物粒含む。胎土は土器より重い、全体を組立てて成形し、その後に擦を加えて整形。8世紀。	同上	東毛製。
936	第324図 936	中世瓦 女瓦	水殿瓦窯跡表探	鍾倉時代(瓦窯)から中世瓦の質感はある。黒灰色。白色粒子少なく黒色粒子多い。外表面、割れ口灰化。裏、裏素文。胎土は軽く、洪積世粘土を思わせる。瓦窯跡を含めた台地は洪積世以降の形成。	同上の比較資料。	埼玉県美里町水殿瓦窯跡表探。
937	第53図 34	基礎化粧 石材か 外雨側	基礎2号	2面に旧時の面を残すが、大半は欠損。風化のためか全体に消耗し、角部は丸みをおびる。8世紀。	製作地同定	流紋岩質凝灰岩。
938	第53図 36	基礎化粧 石材か 外雨側	基礎2号	1面のみに旧時の面を残すが、大半は欠損。風化のためか全体に消耗し、角部は丸みをおびる。8世紀。	同上	流紋岩質凝灰岩。
939	第324図 939	長楽寺遺跡空風輪	世良田小学校工事	新田郡尾島町所在。工事残土採集。凝灰岩としては極めて重く、県内産出凝灰岩が比較的軽らかく軽いこと異なり、夾雜物量も少ない。	同定比較資料	白色凝灰岩。14世紀。
940	第324図 940	高崎城遺跡 高崎市高松町所在	高崎市高松町所在。高崎市教育委員会平成2年度発掘調査。城跡に高崎第15連跡が設置され、その遺構通路。同石は別称断壁石である。	同定比較資料	ディサイト 質凝灰岩。	
941	第324図 941	同上	同上	同上の同構造調査。同石は別称大谷石とされている石材である。940と併せて、近代遺構、近代遺物で、市教育委員会から提供いただいた。	同定比較資料	流紋岩質輕 質凝灰岩。
942	第324図 942	山ノ上古墳 石室材	山ノ上碑 石室材内探	高崎市山ノ上所在。平成3年山頂の工事が行われ、試料は山ノ上古墳の石室材と共通。切石積。7世紀。当団飯塚原を通じて市教委による。	同定比較資料	石材同定未 凝灰岩。
943	第324図 943	津山古墳 石室材	石室材内探	高崎市下佐野町所在。切石横開石型石室。石室内から採集。7世紀。当団飯塚原を通じて高崎市教委から提供いただいた。	同定比較資料	石材同定未 凝灰岩。
944	第324図 944	観音山丘陵	墓頭	高崎市石原所在。凝灰岩質砂岩層の露頭より。砂質分が強く、サラサラしている。第三紀層。	同定比較資料	凝灰岩質砂 岩。
945	第324図 945	新里村広間地	墓頭	貝化石を含む。小礫、円粒状の大粒子(粘土物質)を多く含む。新里村教育委員会加賀二生から提供いただいた。第三紀層。	同定比較資料	流紋岩質凝 灰岩。
946	第344図 946	笠懸町馬見岡	石切場跡	馬見岡凝灰岩層の模式となった石切場跡。平成2年、当団大西・大江採集。第三紀層。	同定比較資料	見岡凝灰 岩。
947	第344図 947	蘇塚町八王子丘陵	石切場跡	蘇塚町湯の入所在。蘇塚石の石切場跡。湯の入の最奥の石切場跡。平成2年、当団大西・大江採集。第三紀層。	同定比較資料	ディサイト 質凝灰岩。

析を行なった。赤色顔料の付着する222・286・379・380・381・546の6点は蛍光X線分析を、また岩石の937・938・939・941・942・943・944・945・946・947の11点についてはX線回折を行なった。漆と見られた物質が付着する548については試験場化学課で検討した結果、赤外分光分析装置(F T - I R)を使用し、条件はチャート図傍のモードを参照されたい。次に蛍光X線分析の分析方法及び測定条件を示す。

## 蛍光X線分析

試料 供試料を振動ミル粉碎機により10μm以下に粉碎し、5~10gを油圧プレス機を用いて径4cmの円板状に成型して使用した。

分析装置 理学電機㈱ K G - 4型

測定条件

分光結晶: Fe, Sr, RbにはLiF(2d=4.028Å) Ca, K, Ti, Si, AlにはEDDT(2d=8.808Å)  
MgにはADP(2d=10.648Å)

検出器 : LiFを使用したときS.c EDDT, ADPを使用したときP.C

時定数 : 1

計数法 : Fe, Ca, K, Ti, Sr, Rbはチャートによる。Si, Al, Mgは定時計数法による。チャートの速さは、4°/minとした。

波高分析器: 機分方式

測定線 : FeKα, CaKα, KKα, TiKα, AlKα, MgKα, SrKα, RbKαの各一次線を使用した。

X線照射面積: 20mm $\phi$ 

## 測定方法

検量線法: 6点

標準試料: 群馬県埋蔵文化財調査事業団から依頼を受けた土器(295、310、336、345、360、380)

を湿式化学分析して、標準試料とした。

## 4. 分析結果

- (1) 蛍光X線分析を行なった33点については結果を付表2・付図2に示した。
- (2) 蛍光X線分析を行なった赤色顔料の6点、岩石の11点について付図5に示した。
- (3) 赤外分光分析装置(F T - I R)を使用した漆付着の試料548については付図4に示した。その条件は、

付表2 萤光X線分析値一覧

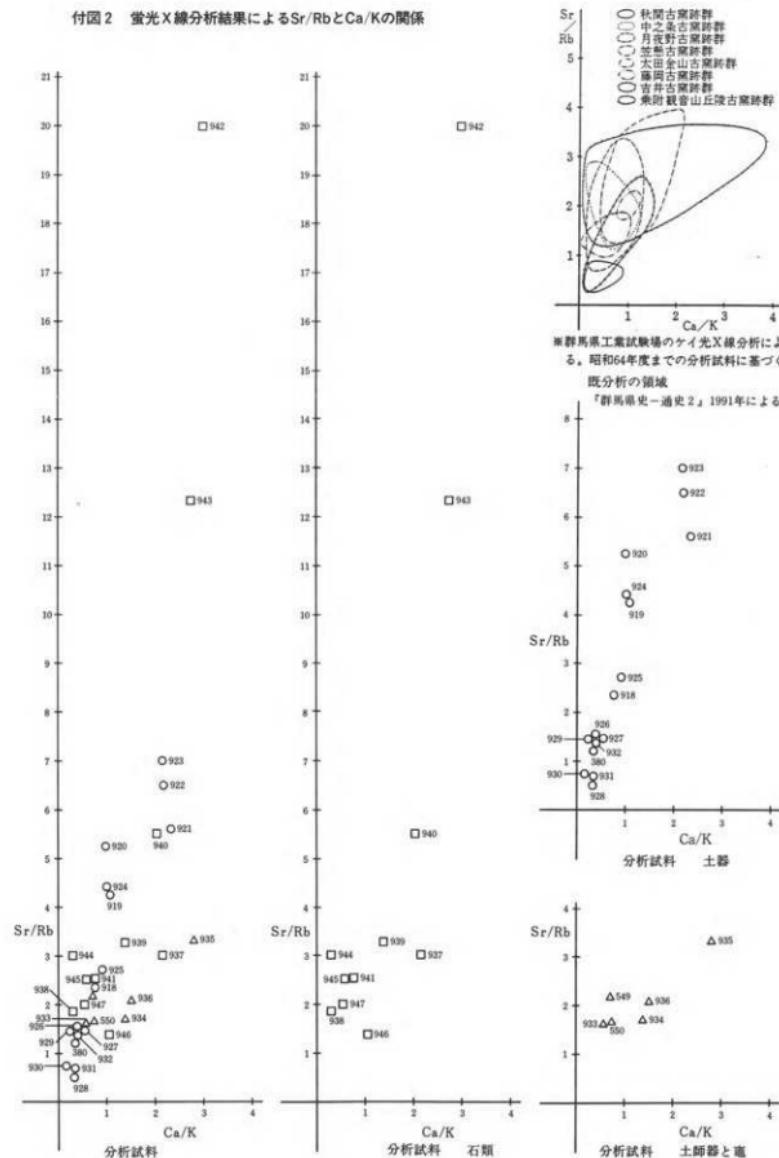
試 料	試 料 内 容	SiO <sub>2</sub> %	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> %	MgO%	FeO%	TiO <sub>2</sub> %	K <sub>2</sub> O%	CaO%	Sr/Rb	Ca/K
380	須恵器 瓦塔	70.10	14.88	1.11	4.08	0.75	1.70	0.62	1.29	0.37
549	土師器 壁	62.95	19.30	0.71	8.44	0.99	1.14	0.81	2.25	0.71
550	土師器 壁	55.14	16.97	4.58	10.19	1.10	2.03	1.45	1.63	0.71
918	瓦廠 (窯1 A)	62.50	21.99	0.89	8.72	0.87	1.39	1.06	2.33	0.76
919	瓦男 (窯1 B)	59.06	18.23	0.89	9.04	0.88	1.15	1.24	4.25	1.08
920	瓦字 (字1)	61.62	19.87	0.83	9.00	0.88	1.21	1.20	5.25	0.99
921	瓦字 (字1)	61.89	23.24	1.25	4.88	0.95	0.58	1.36	5.60	2.34
922	瓦 製斗 (製斗1)	61.16	22.14	1.19	5.37	0.97	0.66	1.44	6.50	2.18
923	瓦 製斗 (製斗2)	62.21	22.05	1.43	5.02	0.95	0.67	1.44	7.00	2.16
924	瓦女 格子2種	62.76	19.01	1.03	8.30	0.87	1.21	1.23	4.40	1.02
925	瓦女 格子24型	62.35	21.02	0.82	8.09	0.84	1.23	1.12	2.71	0.91
926	須恵器 大形坏	61.54	22.20	2.06	7.82	1.08	1.66	0.65	1.50	0.39
927	須恵器 盒	55.81	23.36	1.66	9.56	1.13	1.57	0.73	1.44	0.46
928	須恵器 壁	83.80	12.10	0.96	3.07	0.87	1.10	0.37	0.50	0.34
929	須恵器大塗付着瓦	71.91	18.51	0.77	4.57	0.87	1.78	0.49	1.42	0.28
930	須恵器 檜鉢	73.05	16.47	0.77	4.46	0.86	1.80	0.33	0.72	0.19
931	須恵器 壁	77.81	17.84	1.15	4.08	0.84	1.20	0.38	0.67	0.32
932	須恵器 鉄鉢形	67.33	18.22	0.95	5.55	0.91	1.70	0.55	1.38	0.32
933	須恵器 鉢	59.19	16.19	1.40	7.54	1.05	1.68	0.95	1.60	0.57
934	土師器 壁	57.70	17.05	0.73	8.23	1.22	0.62	0.86	1.71	1.38
935	土器 電	56.02	19.40	1.30	9.28	1.13	0.66	1.86	3.33	2.82
936	中世瓦 女瓦	54.86	15.00	5.87	8.90	1.09	1.78	2.71	2.10	1.52
937	基理化粧石材か	60.94	13.47	1.42	7.22	0.91	1.55	3.32	3.00	2.15
938	基理化粧石材か	65.14	7.34	0.07	3.41	0.46	3.96	1.21	1.86	0.31
939	長樂寺五輪塔部材	77.00	8.89	2.03	7.68	0.25	1.76	2.43	3.28	1.39
940	高崎城遺跡石材	70.00	7.32	1.46	4.32	0.58	1.47	2.99	5.50	2.04
941	高崎城遺跡石材	81.63	2.84	1.19	2.05	0.28	3.07	2.18	2.46	0.71
942	山ノ上古墳石室材	63.01	6.91	2.13	5.58	0.64	1.23	3.69	29.00	2.99
943	漆山古墳石室材	63.11	6.66	1.67	4.85	0.58	1.29	3.51	12.33	2.73
944	觀音山丘陵露頭	60.75	15.52	0.99	3.27	0.50	1.36	0.38	3.00	0.28
945	新星村広間地露頭	77.06	1.95	0.89	2.72	0.36	2.85	1.80	2.50	0.63
946	笠懸町馬見岡露頭	71.36	3.08	2.05	2.19	0.32	2.28	2.42	1.39	1.06
947	蘇原町湯の入露頭	71.98	6.03	1.33	2.86	0.49	2.87	1.52	2.00	0.53

図の脇に示した。

## 5. 分析のまとめ

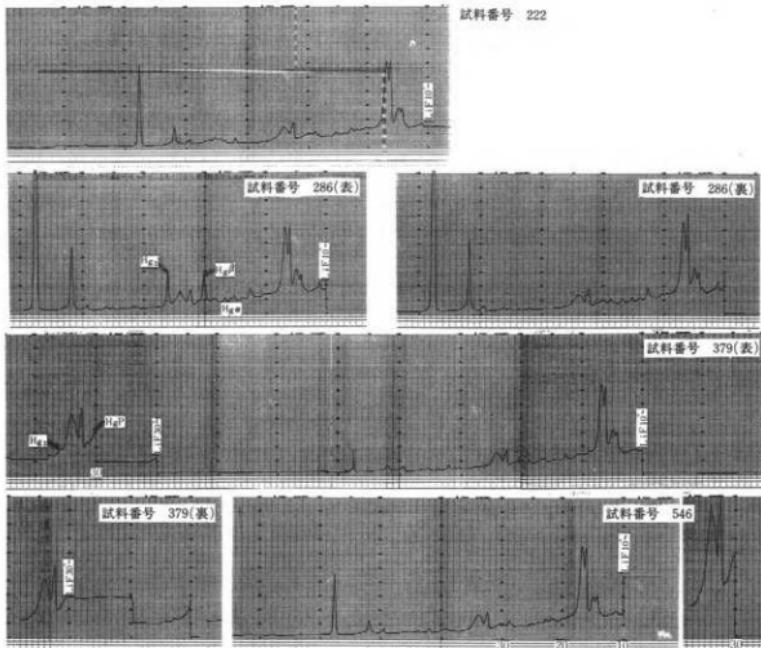
- (1) 萤光X線による分析結果、Sr/Rb、Ca/Kの既往の各領域と肉眼観察の関係は次の通りである。
  - 肉眼観察で推定された笠懸窯跡群製380・918・919・920・924・925・926のうち919・920・924が外れ、380・918・925・926が笠懸領域内に入る。
  - 肉眼観察で推定された洪積世粘土、第三紀層の流出粘土を用い、藤岡で製作されたという549・550は陶土

付図2 蛍光X線分析結果によるSr/RbとCa/Kの関係



## 第6篇 化学分析

付図3 赤色顔料の蛍光X線分析

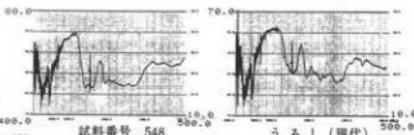


付図4 漆の赤外分光分析

```

SCAN-MODE:NORMAL
LIST OF PARAMETER
DOVBLEBEAM %T
RESOLUTION :2.φ      REPEAT   :OFF
ACCUMULATION:3.φ      NO.       :1
MIRROR.SPEED :SLOW     WAIL-TIME :0 MIN
SAN          :AUTO      RECOURER
APODIZATION :TRIANGULAR ABSICCA :40000--400
                  :X1 EXP
USER.NO.    :
ORDINATE.%T;70.0-10.0-80.0-10.0
ABS         :2.00-0.00

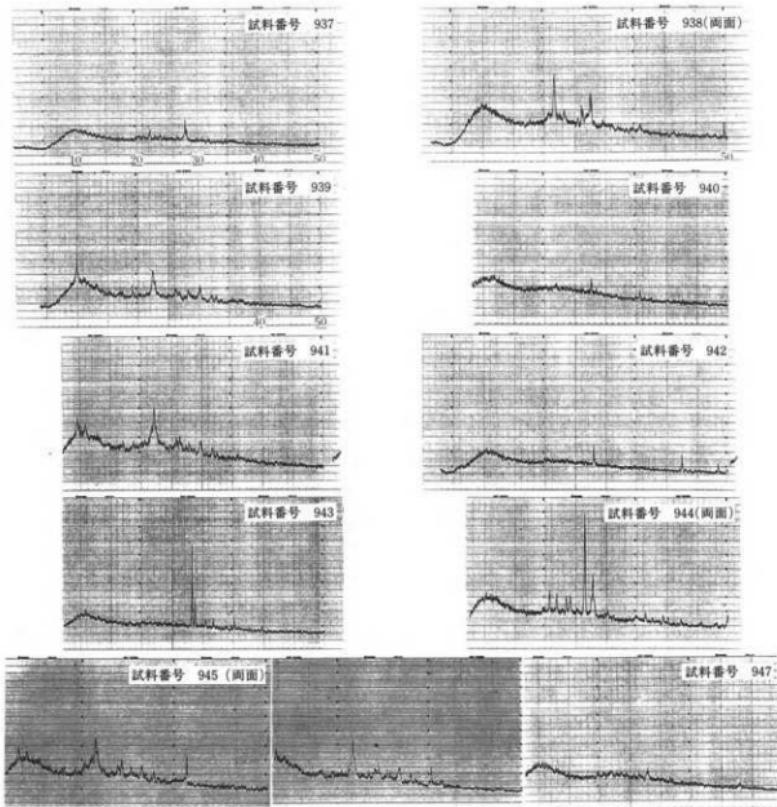
```



基盤を基に作成された藤岡領域内に550は入り、549は近接する。

- 肉眼観察で推定された東毛製923・935、東毛製か埼玉製921・922はSr/Rb、Ca/K値が高く、拡散傾向があった。既分析で土器類を分析した際(『下東西遺跡』当団1987)と類似あり。
- 肉眼観察で推定された隣接県製・埼玉か929・932、西毛～埼玉県製930、隣接県製934、および水殿瓦窯跡の936は、934・936が藤岡領域に近接し、929・932・930はCa/Kの値が極めて少なく、Sr/Rb値も低い点は、藤岡の一部、乗附、秋間など板鼻層群(地質上の層群名)基盤に共通する傾向があり、埼玉県との関係は察跡試料の増加が必要である。
- 肉眼観察で推定された東海地方製928・931は、Sr/Rb、Ca/Kの値が極めて低く、かつて分析した常滑焼、

付図5 石類のX線回折



涅美焼の結果に接する。

- (2) 赤色顔料の蛍光X線の分析結果は付図3に示したが、付着する面、しない面の明瞭な286・379については両面を、付着の薄い222・546については付着面のみを実施した。その結果、286・379の付着面の物質は水銀反応が得られ、222・546は測定機器の検出限界値以下であった。
- (3) 漆の赤外分光分析については、現在のうるしと比較した場合の結果を付図4に示した。波形は類似があるものの試料増加による補充を行なわない限り、結論は得られない。
- (4) 岩石については付図5にX線回折の結果を示し、蛍光X線分析によるSr/Rb, Cu/Kの値を付図2に示した。その結果、X線回折による939と941、945と946とはチャートのパターンが同じで、蛍光X線分析からも近接した位置にあるが、産出地との比較については試料増加と試料の摘出方法の検討が必要である。

## 第7篇 考 察

### 第1章 土地利用の変遷

歴史的変遷のうち明治時代以前は、17頁「周辺遺跡と歴史的環境」の項で触れた。遺構として具体的に現われるのは、中世遺構で第11図に示したとおりである。長方形の土壙については、坂爪久純「土壤」「十三宝塚遺跡第6次発掘調査」1987に、この地域では耕作に関連したとの推定があるように、中世後半頃には耕地化した段階があったと想定され、15・16世紀に多用された在地窯業製品の軟質陶器製内耳鍋の存在が無く、生活域として薄かったようであるが掘立柱建物跡I号を、この頃の建物と推測している。構造に特殊な点もあり機能は言及を避けたい。13・14世紀頃の遺物類は北半部に片寄る。その北半部に溝跡5・7号が存在している。溝跡5号は2次調査の境町調査区（報告未）では第4図のとおり検出されておらず、別に両側に南北走行の長大な溝と、一辺97mの小区画を画する溝が検出されている。その方向性は同5・7号とほぼ同じN13°Eをとり、中世と推定されるため、同期の可能性がもたれる。溝跡7号と2次調査北区東半の溝は中心施設の回繞溝として区画・区分に見える平面形を有しているが、溝跡7号の内部に建物跡は検出されていない。しかしその内部には地下式土壙の土壙9号、井戸跡4号があるので、その一角に生活機能の存在を想定しておきたい。その遺構が館跡であったか否かは、13・14世紀頃の絵巻を見ると、例えば『一遍上人絵伝』（日本の絵巻20）小松茂美1988には館の周囲に浅い溝が見え、大規模に掘切りを想定しなくともよい状況がある。また散在的な出土であるが龍泉窯系青磁碗の発色は褐色よりも明るい青色をおび、やや上手を思わせる感があることを思えば階層社会の中では、自立農民層以上の階層が浮び、そうした人の生活域、つまり館跡であっても良いと考えられる。建物については26頁で説明したように土居組を用いた建物と考えたい。土壙2号中から貞和三年銘（1347）の板碑が出土しており、それ以降に館機能の停止が示唆される。周辺に墓地が存在したのであろう。

12世紀以前状況は、初頭頃と推定される浅間山B軽石の堆積が認められたのは、溝跡3号（南限大溝）内と、記録写真によるN2～5トレーナーに見える台地東縁と考えられる個所がある外は、順堆積に触れる個所は認められず、大きな土壙など人の大作は、農耕を餘くと少なかったのかもしれない。それに近接した時期としては井戸跡2号から石製骨蔵器の出土があり、2次北区の北半では4基（第4図中の北区に火との遺構略称あり）が検出されている。この石製骨蔵器の分布圏は赤城山南麓に濃い分布があり、榛名山東～南麓部の地域まで分布が見られ、新様相は結合面を除いて自然石面が残されることが多いという（津金沢吉茂「古代の墓制」「群馬県史一通史2」1991）。この新様相に關し、年代は明確になっていないが、筆者は県内の葬制の組合せ觀と須恵器における小形瓶類の製作が少なくなってきた頃、つまり10・11世紀代頃の展開と想定している。井戸跡2号の骨蔵器が記録写真に写されている（写真図版26）石材であったとすれば、そうした加工の少ない骨蔵器と考えられる。北区の一群がこれと類似とは明確にされていないが、古相の精致・大形とも聞いていないので、新しい頃の石製骨蔵器であると思う。十三宝塚遺跡集落の末葉か廃絶頃に、そした火葬墓が設けられたのであろう。集落化については後述したい。

### 第2章 瓦類

瓦類は短期の供給であり、その一括性の高い内容は上野地域の8世紀代の瓦と用法を知るうえで重要であり、次表と第324図を用いて次に要約したい。

葺き方として、男・女の1:4の割り合は接合後の個体の場合で、量の最大値は接合後女瓦数7,591、男瓦1,727点で重量比では女瓦1枚単り3.85kg、男瓦3.29kgとすると女瓦約270枚、男瓦99枚となり、それは最小値となる。葺きうる面積を女瓦の長さ40cm、幅27cmと仮定し、半分弱の瓦相互の重ね合せ部を差し引いて計算すると最大で約400m<sup>2</sup>（接合後女瓦総量）の面積となる。基壇1号上の掘立柱建物跡32（整）号の屋根面積は規模を24.6×19.5～20.18×15.93mとするとき約480～320m<sup>2</sup>と算出され、最大の場合でも基壇1・2号上の建物の部分使用と算出された。それは軒瓦類については絶対量が少なく、接合率の高い点、男・女瓦の接合

瓦類の総量と種類別の割合

瓦種類	接合前数	同%	接合後数	同%	重量(kg)	同%
鐵 瓦	20	0.175	6	0.056	1.85	0.130
字 瓦	13	0.113	○ 11	10.14	2.93	0.206
女格子	1,945	17.028	○ 1,437	13.618	437.96	30.812
女龜目	272	2.381	○ 189	1.791	88.30	6.212
女素文	6,006	52.582	△ 5,964	56.520	512.00	36.021
女刷毛	3	0.026	○ 2	0.018	0.45	0.031
女合計	8,226	72.018	7,592	71.941	1,038.71	73.076
男格子	3	0.026	○ 3	0.028	0.53	0.037
男素文	1,941	16.993	△ 1,723	16.328	326.69	22.984
男有段	1	0.008	○ 1	0.009	0.14	0.009
男合計	1,945	17.027	1,727	16.364	327.36	23.030
道具繩多	40	0.350	○ 35	0.331	2.20	0.154
土管様	10	0.087	○ 10	0.094	0.72	0.050
縫・斜片	1,077	9.429	△ 1,077	10.206	47.60	3.348
縫・不足分	91	0.796	91	0.862		
総計	11,422	99.994	10,552	99.994	1,421.37	99.994

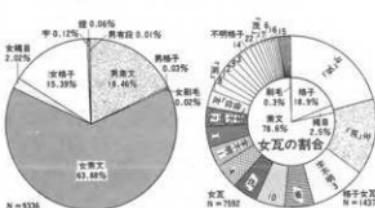
男瓦の格子印種類別の割合

格子種類	接合前数	同%	接合後数	同%	重量(kg)	同%
「雀」型	1	33.33	1	33.33	0.22	41.50
文字不明1型	1	33.33	1	33.33	0.23	43.39
19型	1	33.33	1	33.33	0.08	15.09
格子合計	3	99.99	3	99.99	0.53	99.98

女瓦の格子印種類別の割合

格子種類	接合前数	同%	接合後数	同%	重量(kg)	同%
「佐位」左型	60	3.08	○ 46	3.20	16.20	3.69
「仇」型	115	5.91	○ 68	4.73	29.20	6.66
「九」か型	3	0.15	○ 3	0.20	0.60	0.13
「測」型	31	1.59	○ 23	1.60	8.82	2.01
「測」左型	294	15.11	○ 213	14.82	55.50	12.67
「雀」型	110	5.65	○ 79	5.49	21.27	4.85
「仄」型	12	0.61	○ 12	0.83	2.80	0.63
「反」か型	368	18.92	○ 300	20.87	97.70	22.30
「人」か型	1	0.05	○ 1	0.06	0.17	0.03
文字不明1型	70	3.59	○ 58	4.03	28.40	6.48
文字不明2型	89	4.57	○ 54	3.75	20.07	4.58
文字不明3型	236	12.13	○ 149	10.36	44.94	10.26
文字二字	5	0.25	○ 3	0.20	0.88	0.20
1型	22	1.13	○ 22	1.53	2.60	0.59
2型	28	1.43	○ 21	1.46	7.15	1.63
3型	26	1.33	○ 19	1.32	2.10	0.47
4型	89	4.57	○ 66	4.59	25.43	5.80
5型	9	0.46	○ 7	0.48	0.64	0.14
6型	9	0.46	○ 9	0.62	1.00	0.22
7型	1	0.05	○ 1	0.06	0.34	0.07
8型	25	1.28	○ 23	1.60	5.50	1.25

軒、男・女瓦種類別の割合 女瓦・同格子印種別の割合



▲上図左は有段男瓦、道具瓦（熨斗瓦）、男瓦、不足分を除いた総合計を基にした。その結果、鉢、宇など軒瓦類と男・女の割合は大差があり、一般的な使用は考え難い。男・女瓦の割合はおよそ1:4で上野原分園古墳地跡例（町道）に近似しており、一般的な使用法を考えられるが、全体での程度を基にしていたのは本文参照。

上図左は下表の女瓦格子印別の割合を基に作成。「佐」、「測」左、「反」かなどの標記瓦が多く、文字不明2・3型も多い。

◆左表中の不足分91点は、今回、整理番号を付した瓦番号末尾数と接合後に数えた個体数の不一致数である。○印は接合上、信頼度高い、△は信頼度低いを示す。

◆男瓦の格子印の存在量は極めて少ない。

▼右上の円グラフは下表を基に、個体量の多い順に配列した。その結果、接合前の50点前後以上の格子印種と、それ以下の量との間に数値のひらきがあり、「佐位」左を含め、50点以上の量を当遺跡に供給する目的で製作された主体印種と認めた。他は二次流用材か。

格子種類	接合前数	同%	接合後数	同%	重量(kg)	同%
9型	21	1.07	○ 21	1.46	3.50	0.79
10型	118	6.06	○ 78	5.42	15.90	3.63
11型	79	4.06	○ 57	3.96	18.60	4.24
12型	6	0.30	○ 6	0.41	1.33	0.30
13型	7	0.35	○ 5	0.34	1.32	0.30
14型	21	1.07	○ 16	1.11	3.40	0.77
15型	12	0.61	○ 8	0.55	4.45	1.01
16型	12	0.61	○ 9	0.62	3.99	0.91
17型	11	0.56	○ 11	0.76	0.88	0.20
18型	3	0.15	○ 3	0.20	0.40	0.09
19型	3	0.15	○ 1	0.06	1.71	0.39
20型	4	0.20	○ 4	0.27	0.33	0.07
21型	3	0.15	○ 3	0.20	0.50	0.11
22型	15	0.77	○ 14	0.97	1.90	0.43
23型	3	0.15	○ 3	0.22	0.22	0.05
24型	1	0.05	○ 1	0.06	0.16	0.03
25型	7	0.35	○ 4	0.27	3.60	0.82
格子二種	0	0	○ 0	0	0	0
擁入型	1	0.05	○ 1	0.06	0.15	0.03
不明格子	15	0.77	○ 15	1.04	4.31	0.98
格子合計	1,945	99.80	1,437	99.76	437.96	99.81



第324図 鉛瓦の同范関係と型式別図

合率の高い点からも証左がある。

瓦類の時期は鎌瓦については第324図に示す上野国分寺式の末葉の様式で、およそ775前後の頃とした既推定を行なっている（拙稿「瓦類」「断保遺跡III・蛭沢遺跡」財團法人大江1988）。宇瓦1型も、組瓦として認めてよい種である。女・男については復元された大きさが、女瓦の長さで格子「仇」型が、44cm、同「測」左・格子4・格子不明3型が約42.5cmでそれに次ぎ、格子「反」・「測」左・格子不明1・2型が約40~41cm、繩叩類、格子「反」・格子不明2型が40~38.3cmであった。この大きさは、繩叩類に小形化が認められるほかは、極端な大小差は少なく、8世紀第3四半期頃の形状をとどめている。しかし形状はそうであっても、布目の擦消し、側部面取回数は少ないよう見られ、特に女瓦繩叩は圓化個体のうち25%が全面擦消で、部分が17%であった。側部面取回数も平均で3回を越えるのは格子「測」、「仇」・格子2・14・22型など少数であり、國分境遺跡（前出・木津博明・大江1990）の古様よりも新様相を多分に含んでいる。そのため、瓦類の大半は笠懸窓跡群で造園分寺に向かって生産された中でも、後出様相を含むと全体瓦の概念を捉えておきたい。主体瓦については308頁の付表中のゴチックを用いた類で、残る一群については差し替え瓦と旧材利用の類と推測される。この頃の笠懸窓跡群の操業は公もしくは官の背景がある（拙稿「瓦類の変遷」「天代瓦廬跡」（中之条町教育委員会）1982）と考えている。女瓦の過半を占める郷名瓦の存在はその左証でもある。

瓦類の使用の段階は、基壇1号のN3柱穴から第29図6の出土があり、9世紀代の遺物の出土する柱穴が存在することを踏まえると掘立柱建物跡32-1号の段階からで、礎石使用の段階に至っても使用されていたことは否定的であり、新様の瓦類である一枚作男瓦が疑以て2例認められる外はないので9世紀初頭前後に至った頃には瓦の保全は講じられなかったと解釈され、付近に存在する小窓遺跡には拓影図を見る限りにおいては第10図のように一枚作男瓦が存在するので、供給上、困難であったとは考え難い。

### 第3章 遺跡の性格と構造の機能

遺跡の性格について検討する場合、広大な面積を有する水準以上で調査が行なわれていれば、その遺跡の統合状況から割り出された性格、つまり遺跡の内的総合情報の集約結果を最優先すべきであり、以下にその要約を示す。

**基壇1・2号**—基壇1号は瓦使用の寄棟か入母屋造で、正面を広くとり大形屋根を伴う正面五間の建物と推定され、柱痕は当遺跡最大の径約40cmを測る。当初は瓦使用の掘立柱建物でその後2回以上建替えられ、最終的（9世紀代か）には礎石使用建物となり、長期に亘り、同一機能を果すべく設けられた建物であった。その南面側に、機能停止後の残材整理場所と考えられる使用釘を含む。基壇1号南釘群域（第264図）があり、多量の瓦のほか塑像・瓦塔・三彩陶器片などを認め、機能は仏殿（金堂機能か）と推定される。基壇2号は上成・下成からなる2重基壇を有し、記録・写真類にローム層の記述が見えないことから基壇周囲の地業溝の位置（第48図の破線凹みは土圧のために凹み、地中に溝の存在を示唆か）、もしくは全体な掘込み地業は、相当な形で深かったろうと予測された。さらに凝灰岩を主体材とした壇上積化粧や基壇を高めて建物觀に威容をあたえる効果など、この建物は極めて重視され、高さを必要とした建物であると推定された。さらに、機能停止の使用釘を含む推定残材整理場所に南釘群、北東釘群域があり、各多量の瓦類と北東群からは金銅製の押出仏片を認める。それらの要素により、建物機能は最大の場合、瓦使用の塔を、最少の場合は瓦使用の方形三間堂（塔機能）を推定した。

廻廊跡一発掘調査の所見と異なるが、南・東の2重の棚列を、新・旧建替えにより生じたとする考え方は、

相互対応する櫛列の築造を順当な方法で構築しようとしたら、それはまず不可能という理由から、それを廻廊と考えた。発掘調査の柱穴重複の所見からすれば、東廻廊は重複の掘立柱建物の建替過程の中では古くして構築されたことになっているのに対し、南廻廊は掘立柱重複の過程の中では後出の段階に捉えられている。一般論あるいは合理観からすれば、数10間もある梁行1間建物を別々の時点で構築したとは考え難く、同時に存在していたと考える必要がある。廻廊西側については、掘立柱建物上に低い土盛りを思わせる個所があり、廻廊として検出不充分であり、北側については、北辺土塁の両端および住居跡32号～基壇3号の北側に沿う個所に大きな柱穴があって土塁下に存在するか否かの確認が必要である。そのため調査所見とは異なるが廻廊の存在も考慮する必要がある。廻廊とすれば寺院の施設となる。廻廊の設置理由に関し、東廻廊は類似棟走行の掘立柱建物が北半に複数で長期に亘り重複することに意味が汲み取れる。それは北東掘立建物の占地理由に外郭の堅穴住居跡との地界を成していたであろうことを考えることができ、そのことは機能の内・外部の分立を意味している。廻廊とは本来、全周しうることが前提であるが、当遺跡の場合は、建物配置の計画性（後述）という視点で捉えた場合、掘立柱建物跡2・18号、5・20号など長大な建物跡は、基壇1・2、南門などとほぼ直角・平行の関係にあり、さらに掘立柱建物跡2・18号は廻廊より先行する事が明らかであるので、長大な建物を必要とした最大の結果が廻廊の構築であったと、成立過程を推測することができる。その際、必要性とは考古学上、自生を意味するが、廻廊状態は既成の概念に基づいて構築したと考えられるから、この場合は模倣となる。したがって廻廊の構築状態を想起すれば、全周しうるということが目的であったとするのは2義的で、全周しない特殊な構築状況も想定する必要ある。

基壇3・4（整）号、南門一今回の整理において基壇1号は、方三間建物ではなく、正面を大きく設けた五間建物であると推定した。その結果、南門中軸と基壇1号とは同一中軸線上に並び同一の計画になることが明らかとなり、それにより南門跡が門であることの左証が再度確認され、基壇1号と南門の中軸が、喰互いとなる概報時点の矛盾は解消された。基壇3号については今回の整理では機能を示唆する点は薄弱であった。基壇4（整）号は今回の整理で存在を見捨てず収録した遺構で、第21図を見ると基壇2号と対称的な位置にあり、双塔式のように見える。しかし、西側のトレンチ内（第82図）で検出された地業溝とも思える溝跡の底面は浅く、基壇2号のように深くはないので、同一機能とは思えず、後には掘立柱穴と重複し、削土されたと考えられる点も、機能上、永年に亘り必要だったか否かを示唆している。築成に当たり、採土は近接する土壤3・7号の存在は見出せない。なお土壤3号には8世紀末頃の遺物が入るので年代が下り過ぎるようである。

東北掘立建物群と堅穴住居跡群一東北掘立柱建物群は今回の整理で纏めた掘立柱建物跡31（整）号を加えると空場的空間を囲むように建物が配された状態となり、南東掘立柱建物群の配置と似た形となる。東北掘立柱建物群の主体機能は、各建物が、度数の建替を行ない長期の存続があった点、基壇1・2号を有する内郭との通路に相当する北東築地と東廻廊北端との間が意識されているように考えられる点から、内郭とは直接の関係があったものと推測された。同群の主体建物は掘立柱建物跡6・23号で、同6号は床東柱穴を伴ない、同群中最大規模（100・101頁付表）にある。また、住居跡30・31・37・38号など9世紀前半頃までの古い段階の堅穴住居跡群の一角と建物跡群とが重複することは掘立柱建物群の古い段階の機能の一部が堅穴住居跡が行っていた段階があるものとも考えられ、住居跡31号中に、構築意識の高い井戸跡8号・掘立柱建物跡6・23号が重複し合うことも、その点が示唆される。さらに後出的ではあるが住居跡27・28・29号などの一群が東北掘立柱建物群の裏側に位置するように配され、漆付着の土器や農工具を伴なう遺物類が一部に見られることから管理的立場に従属した人々の住居跡がその中に含まれていると考えたい。そのためこの一

角は内部に対して管理的な機能を果すための施設および「大井」と称された井戸跡8号であると考え（第310図）付近に厨屋の施設を仮想しておきたい。

南東掘立建物群と堅穴住居跡群—南東掘立柱建物群の特徴は、掘立柱建物跡A・B・E・F号など長大な建物を有すること、各建物が、広場的空間を意識して配されていること、基壇1・2号を含む内郭が南前と考えられる配置をとるのに伴ない、それらは南門以南の南限大溝（溝跡3号）に至る広大な空間（広場か）の東側に配されていることなどがある。掘立柱建物群と堅穴住居跡の関係は5世紀頃の住居跡14号、8世紀代墳という（概報Iによる）同5号を除くと、多くが9世紀代の堅穴住居であり、調査所見の南東掘立柱建物跡群が堅穴住居跡を切って存在する点は、今回は、逆の傾向が引出され、多くの場合に南東、掘立柱建物群が堅穴住居跡より先行して存在し9世紀前半に盛期を置きうる状況が生まれた。しかし、掘立柱建物跡C・D号



第325図 各遺構の距離関係図

の柱穴から三彩陶器片が出土（確かなら）していて内郭が荒廃に近づいた時期との関連も想起しておく必要がある。そのため、この一角に存在する掘立柱建物群と堅穴住居跡群とは併存時点があったと考えられ、その点は堅穴住居跡の配置が、ある程度、掘立柱建物を意識したかのように位置することから関連性が窺える。南東掘立柱建物群の存在理由は正確には判らないけれども、前述したように内郭の前面に広がる空間に接しており、南限大溝を渡り、内郭をおとずれた人々と接する機会が多かったであろうことに関連した機能が想

本図は遺跡の全体観を合成したもので、主要遺構と基壇1号の中軸位置との距離関係を示してある。

北限については、坂爪久純「境町〔牛堀〕遺跡について」『群馬文化203号』1985によるほか、同氏が追求されている牛堀と称する古代水路推定位置を考えている。その理由は氏の説明のとおり十三宝塚遺跡の南限大溝は牛堀より分歧させた溝との推定を掲げている。そのことからすれば本遺跡の南北は、基壇1号の中軸線上で390m、東西は中軸より西方の南限大溝が西側へ曲り延びが存在したとして、西側へ約115～120m前後、東側の台地縁辺まで約80mを測り、合計東西幅195～200mとなる。

そうした全規模中、寺の5地は北隅列北東隅位置は南北のはば中第6次調査区点であり、牛堀と南限大溝の南北分半を半似圖としたことはほぼ確実である。さらに細部に至り基壇1号を中心に各主要遺構との距離を求めた場合に基壇2号、南門跡、堀立柱建物跡1号などが、方向性、距離において100、150尺など計画性の存在を示唆する数値が得られた。そのため計画性ありと認みたい。

像に浮ぶ。

南前面一基壇1・2号を含む内郭の正面とは、内郭をおとづれる人々があったとしたら、南側であり、見られる側としては西側もプロフィルとしての侧面の意識があったと考えられる。南限大溝（溝跡3号）と南門との間は遺構が少なく、掘立柱建物跡M号がある外は顯著な遺構は少ない。そのため広場の機能であったと推定しておきたい。なお同M号は掘方が大きい点、重要な機能があったのかもしれない。

四至一厳密な意味での寺域とは2次調査北区の境町教育委員会の報告を待たなければならぬが、同調査区の北接地の牛堀と称する古代水路と古道痕を北限とし、西はその南大溝が屈曲し、牛堀に至る溝までを、南限は南大溝を、東は台地東縁を推定している。四至との関連で各縁迄までの距離を測定し、第325図内に記入してある。四至および全体の計画性について作図の際検討したが基壇1・2号を中心にして、ある程度の計画性は認められた。

小結一以上の内容、および三彩陶器など希少遺物種の存在からは本遺跡の性格は、寺跡であり、内部とした廻廊内が寺院機能を有し、北東掘立柱建物群は管理的な機能および厨房を、南東掘立柱建物群はおとされた人々との接点での機能を推定しておきたい。堅穴住居跡は、広域に恒り墨書き土器「大井」（第310図）の分布があり、一つの井戸に対する共通理念が考えられ、この寺と消長を伴にした人々の住居跡と捉えたい。

寺との性格から、郡名を冠する郡名寺院であったかという点での考え方には、『和名称』に見える佐位郡中に佐位郷があり、付近に存在する小字小斎（古佐位かという）から調査担当であった井上唯雄はこの周辺地域を佐位郷の地に推定（『十三宝塚遺跡発掘調査概報I』1975）し、その説には妥当性がある。確かに墨書き土器中に佐位=左位とした場合に、「左」銘の墨書き土器があり、寺遺構形態は、基本的な伽藍型式に則してはいらないものの、前述のように基本的な機能は有しているので、盛期は佐位郷中の筆頭寺院であったと考えられ、その際、地名称を冠し「佐位寺」と呼ばれた可能性はあるであろう。佐位郡全体の筆頭寺院であったかについては、かつて県下の发掘された寺院跡を検討した結果（拙稿『田端廃寺の推定』『田端遺跡』（財團馬鹿県埋蔵文化財調査事業団1988）に基づけば一郡内における筆頭級に相当している。問題はその盛行状態がどのくらい存続したかであろう。当寺跡の盛期は8世紀代から9世紀前半にかけてあり、前出の小斎には第10図に示した小斎遺跡の瓦類がある。小斎遺跡例は9世紀代瓦を含む後出類を認め、寺格の優位性は小斎遺跡側にあったと推測され、さらに、当寺院の前代の瓦を含むと考えられる上源名遺跡（第10図）では、寺跡を示唆する瓦塔片が採集されており、佐位郡内における筆頭寺院という形が流動的ではなかったかということを感じる。その際、郡名を冠した状態で寺院名を伴い移動すると考えるのは短絡であろうか。

そうした複雑さを感じさせるのは、現状で約120個所を数え、関東地方で最も特異と云える上野地域の特殊性が起因してある。8・9世紀代の西毛地域では前橋市總社町山王庵寺（放光寺）を頂点に、寺院連合組織か展開していたとも解釈される状況がある（拙稿、前出1988）。その状況は同組織圏域の郡内でも公が要因となって、7世紀末から8世紀初頭にかけて成立したと考えられる寺院跡、例えば、古代の多胡郡では吉井町馬庭所在の馬庭東遺跡、古代の片岡郡では高崎市阿久津所在の田端廃寺が各郡の筆頭寺院と推定されるものの、8世紀後半にはそれをしのぐと考えられる寺院が建立され、多くの郡で筆頭級寺院の変貌傾向がある。多野郡鬼石町所在の淨土院淨法寺は別称綠野寺であり、現在に法燈を伝えようした過程の示唆を受ける。こうした上野地域の特殊性を踏まえると、古代史上、問題となる郡名寺院の存在以前に上野地域における寺院構造とその変遷を知ることが必要となる。

## 第4章 遺構の変遷

今回の整理の中で最も古い段階の住居跡と考えられる住居跡は、寺跡内郭に存在する住居跡34号に8世紀後半代の土器群があり、住居跡37号の土器類は新・旧の混在があり不確実で、同37-1・2号には9世紀初頭頃の一群中に8世紀後半の土器類が目立って存在する。このほか『概報1』の時点で指摘された真間期とされた住居跡15号があるほかは、基壇構築時期と考えられる瓦類の8世紀第3四半期に迫る例は薄い。そのため造寺が行われた頃の堅穴住居跡の存在は極めて限られた数しか存在していないことになる。

寺内郭の状況を見ると9世紀前半は基壇1号の五間堂は礎石建物に替えられていたかは、第10図N3ピット4に9世紀後半頃の土器類が、前半頃のN4ピット8・9があり、その出土に信頼があるのであれば、礎石建物への建替えは9世紀中頃以降となる。基壇2号については周辺から9世紀後半頃の第52図12の須恵器壙があるが存続を意味するかは明瞭でない。基壇1号の礎石建物の末期との関連を個体残存量のある土器個体をもってすれば9世紀後半頃までであり、どうもN4ピット出土遺物の信頼度が問われる。9世紀前半は8世紀末から9世紀初頭頃のあるいはその両者を含む例として住居跡36号が内郭にあり、溝跡4号(北東隅溝)は混存があるが古相は8世紀末頃である。初頭に至った内郭部では、住居跡33号が北辺土塁を切って存在し、北辺土塁の構築は早いのか古い。9世紀前半段階では住居跡32・42号が、後半段階では同41・43号があり、両段階を含む同45・46号がある。この住居数状況は各段階に存在していたとしても少なく、常に堅穴住居跡が1棟づつ存在した様な状況を示すものではない。末期は同41・43号が寺内郭に存在する終末住居跡である。

東北掘立柱建物群の一角は、掘立柱建物跡9号の柱穴から9世紀後半頃、9世紀前半頃の遺物をまじえる住居跡31号を埋填して掘立柱建物跡6・23号が設けられており、掘立柱建物群のおよその時期が示唆される。住居跡は37号に8世紀後半頃の土器が含まれ混存様相があるほかは、土器類の主体は9世紀前半頃にある。掘立柱建物群の背後にある一群は住居跡29号から9世紀後半頃の土器類があり、同25・26・27・28号に前半頃の土器が見られ、同39号は10世紀終末に至る土器が含まれている。同39号の場合、時期が離れるので北区側の集落編成が渾んでいる可能性もある。土壤1(整)号は、火葬の遺構であるが9世紀初頭頃の土器類を伴ない、県内の類の中では古出で、それは寺内郭が整然とした段階にある。

東北掘立柱建物群と南東同群とに狹まれた住居跡の一群は、住居跡40号に9世紀前半頃の土器類が、同15号が真間期と説明されたほか、平成の整理時点では土器類の多くを探し出すことができなかった。住居跡形態からすると、住居跡24号が9世紀前半頃、同16・17号が9世紀後半頃の土器が存在する住居跡形態に似る。

南東掘立柱建物群については、整理の際に抽出できた土器の個体量が少なく判然としないが、住居跡5号が遺物の類推によって6世紀代、同14号が床面に炉跡様の焼土と記録写真に石製模造品の勾玉が写されていることから5世代の住居跡と考えられるほか、住居跡2・3・22号に9世紀前半頃の土器類が、同4・8・10・20・21・23号に後半頃の土器類が見られる。この中で住居跡4号には第136図2の土器類があり、写真にも竈内から出土した状態(写真図版14)が写されているので信頼性はあり、時期に関しては後半でも中頃に近い土器類である。この住居跡と重複する掘立柱遺物跡B号との関係は、105頁の説明のとおり住居跡4号の方が後出して見えるため掘立柱建物群の時期を考えるうえでの示唆が得られよう。

以上のとおり、前述の機能の侧面を通じ二たび寺跡との関連の盛期を見ると住居跡数が多いのは9世紀前半で、その頃に隣接県製の須恵器が多くもたらされ、供給は以降も続くが、西国や遠地からの搬入製品も9世紀前半までが盛期で、寺院としての盛期の体裁は、一世紀に満たなかつたと推定される。その後、堂宇が存続していたかは明瞭でないが、集落としての継続性は9世紀後半まで続いてゆく。

## 第5章 古代氏族との関係

先学尾崎喜佐雄は、多面的な活動によって群馬県地域の考古学・古代史に多くの足がかりを残された。氏の代表的な研究の一に赤城神とその信仰があり、上毛野氏族と直接的な繋があるとして捉えた『毛野の国』『古代の日本4』(1970)。しかし今日、赤城神は上毛野地域の古代氏族との係わりの中では、一つの信仰対象となった聖山の一つに過ぎず、上毛野君氏、上毛野氏族との関連は、むしろ梅沢重昭が上毛野地域を代表する筆頭の後期古墳群として捉え(『古墳の終末』『古代の日本』1970)、後に右島和夫がそれらの盟主墓群を上毛野氏と推定(『前橋市總社古墳群の形成過程とその画期』『群馬研史研究22号』1985)している。しかし、尾崎喜佐雄が言及した東毛地域を基盤とする観点と總社古墳群を含む地の具体的な研究は木津博明が言及(『周辺遺跡』『上野国分僧寺・尼寺中間地城3』(『群馬県埋蔵文化財調査事業団』1988))した外は少なく、7世紀代までに見える古代氏族の存在理由や、その総合的な検討は佐伯有清が屯倉と子代・名代の関係で配された(『子代・名代と屯倉』前出:1970)とする解釈以降、研究の進展は遅々とした感がある。

その中で佐位郡中に存在していた檜前部君氏が古代史料上に見える。同氏族は佐伯(前出)によれば「伊勢崎周辺に蟠據した豪族が檜前君あるいは檜前部君であったことは確実である。君の姓をもっていることから上毛野氏と同族であったにちがいない。おそらく六世紀の前半、綿野屯倉が設置された直後に、この地域の豪族は大和朝廷に従属し、檜前部の設定を余儀なくされたのであろう。」としておられる。その地には上毛野地域における初頭の寺院である上植木庵寺が存在し、その建立に当たっては檜前君氏の多大な援助(拙稿『金井庵寺の意義をめぐって』『金井庵寺遺跡』1979)の基に成立し、その周辺に同氏族の基盤が存在したものと推定される。それでは十三宝塚遺跡はだれが背景となって成立したのかという問い合わせに対し、2次調査北区において未報告ではあるが、『群馬県史 通史2』に「上毛野朝臣寶根」銘を有する紡錘車の出土が紹介され、九世紀後半の住居跡からの出土という。この頃に上毛野朝臣を冠するのは改易姓の結果と考えられ、前代の氏族名称は明確にはできないが、具体的な人名を示す史料として重要な存在である。遡ってもう一度、周辺の古墳の分布状況を考えると、古代の佐位郡と目される地域には、100m級の後期前方後円墳の世代的連続性は極めて薄弱で、50m級を含む例と確認されてはいないが群としての単位構成する古墳群が5もしくは6群に分れて存在し、分散、連合的な状況の中で、後に一郡が構成された地域である。そのため9世紀頃までは地域の有力氏族として、檜前君氏の血統は存在していたと見られるから上毛野朝臣寶根が、血縁かは別としても有縁であったことは考えられる。この点については、地域での細かな分析と資料蓄積を必要とし、今後に委ねたい。

### おわりに

今回の整理では2次調査北区成果については境町調査区であり、整理未了のため触れなかった。そのため当遺跡の後半の段階に官衙と変異したとの既説について、否定も肯定もしなかった。少なくとも本報告の対象地域では、そうした点の示唆は薄かった。しかし資料の内容が知れない地区が存在することは不安であり、総合結果は、それを踏まえる必要がある。また編者は発掘調査には参加していないかったので極力、資料理解に努めたつもりである。しかしそれには限界があり、ことに掘立柱建物の新・古の把握などは、現場を知らずしてできるものではなく、遺構の段階別変遷図を読者に提示することができなかったことは残念であった。

本書の作成にあたり、県内の先輩を含め、多くの皆様から教示をいただき、最終場合においては印刷所に多大な協力をいただきました。それについて編者として厚くお礼の気持を持つとともに、本書が、将来にわたり広く活用されることを望みます。

# 写 真 図 版



図1 B型の文様

## 写真図版について

写真図版と、遺物図と照合する際、または今後、記録保存写真を活用する際など、写真図版に関する留意点は下記のとおりである。

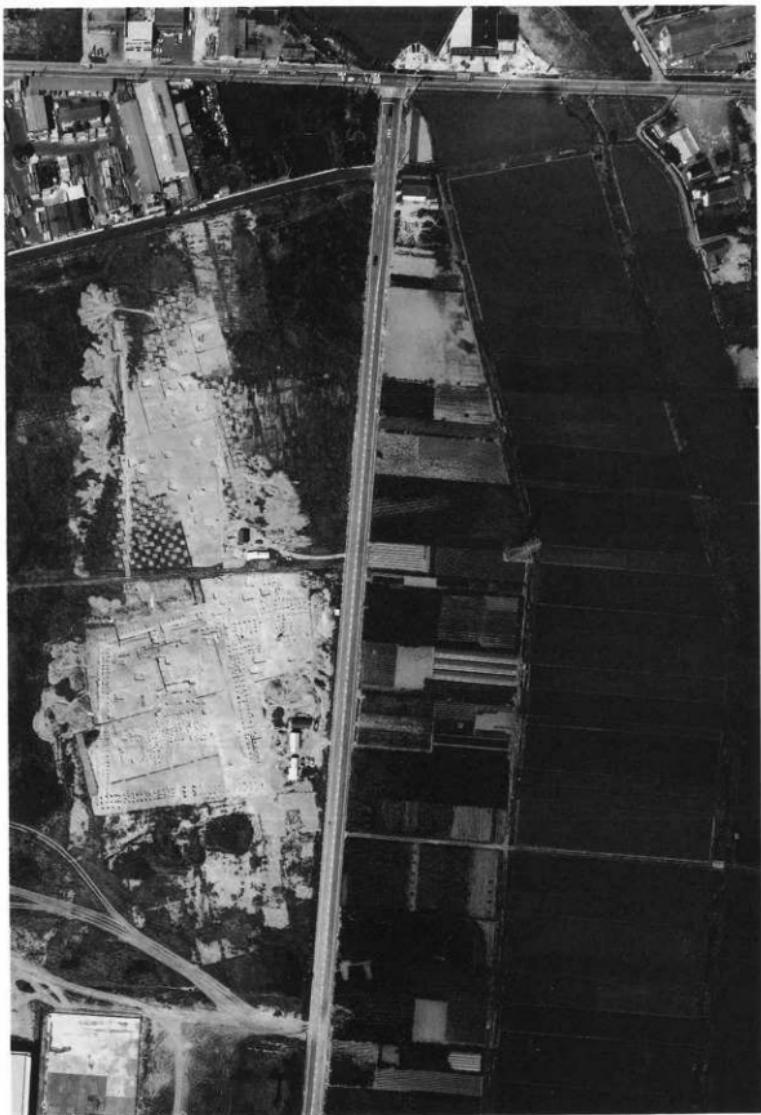
1. 記録保存写真是、1・2次調査の全般を通じ、存在が確認されたが、概報I・IIに使用された写真ネガは、もどかしいでない小間が多く、今回の整理より前の紛失である。
2. 昭和50年代前半以前の頃は、遺構の全体観を記録するために、合成用のパノラマ撮影が多く行なわれた。本報告書も、撮影時の意図を読んでパノラマ合成を多用した。合成写真是そのとおりである、それらについて単一のネガ・小間は存在していないので、今後、資料活用される際は注意されたい。

- |                |             |
|----------------|-------------|
| 写真図版3-1段目右、2段目 | 写真図版4-1下段左  |
| 写真図版3-1・2段目    | 写真図版6-最下段   |
| 写真図版7-最下段      | 写真図版8-1・2段目 |
| 写真図版9-1段       |             |
3. 遺物写真的相異は、小間区分であるが、太郡は、遺物出土の遺構単位別、遺物図版単位別、遺物種別などを示す。
  4. 前太郡で区分された単位の右下(おむね)に、出土遺構、対照遺物図版番号、実測的な確率の場合の確率比などを記し、照合時の便をはかった。確率は土器を1:3、瓦を1:6とし、例外は傍に明記した。
  5. 遺物実測個体数は約1600点であり、遺物図版中にそれらの個体の大半を掲げることができたが、遺物図版中の瓦類260点のうち、紙面と労力の都合上7点のみ掲載に留まつた。未掲載個体について写真是撮影済みで、活用は可能である。また瓦類は紙面作成の都合により、一括して写真図版46~53にまとめて掲載した。
  6. 写真図版内容の順は次のとおりで、遺物類はカラー頁、瓦類を除いて、ほぼ遺物図版順である。

- |  |  |
|--|--|
| 全景 (写真図版1・2)   |  |
| 垂直航空写真近景→近接  |  |
| 遺構 (写真図版3~28)  |  |
| 基壇 (3~5) → 檜列 (6・7) → 振立柱建物跡 (7~13) → 住居跡 (14~25) → 井戸跡 (26) → 溝跡 (27) → 土壙 (28) |  |

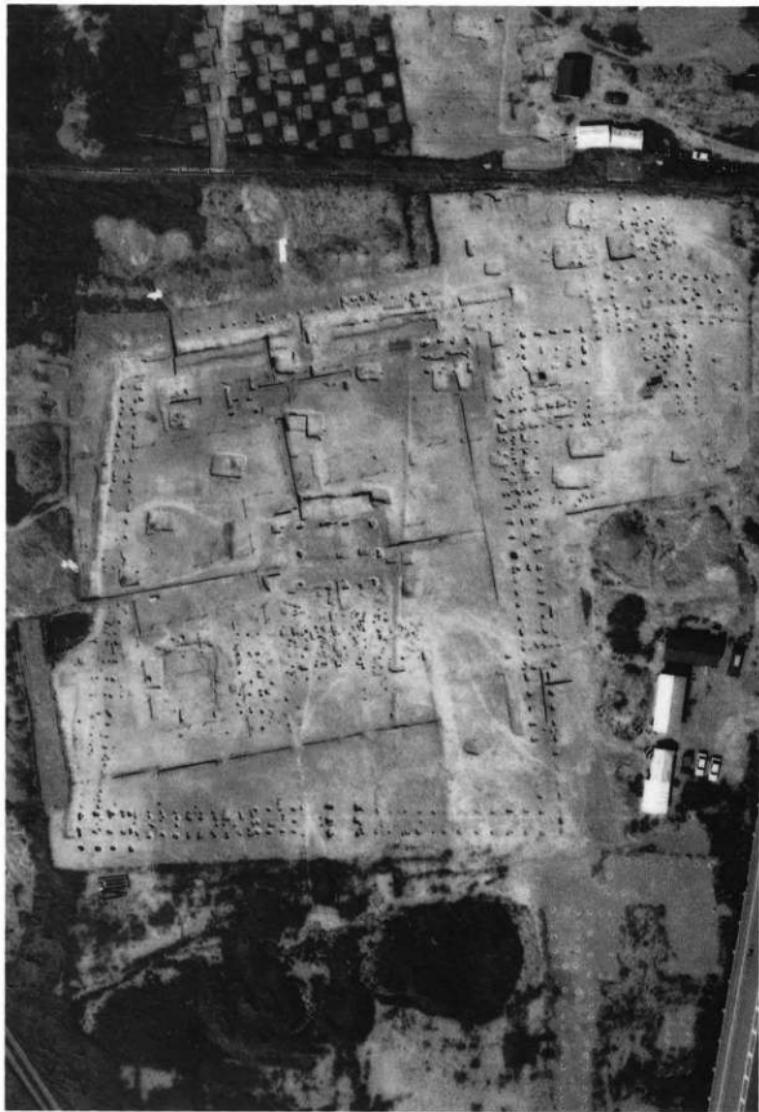
- 遺物
- |  |  |
|--|--|
| 世以降の遺物 (29) → 近代化 (30) → 基壇 (30~31) → 寺域開闢 (32) → 住居跡 (32~42) → 井戸跡 (43) → 溝跡 (43~44) → 金属製品生産遺構開闢 (44) → 磁・瓦字 (45) → 男瓦 (46) → 女瓦 (47~53) → 道具瓦 (53) → 塔像、瓦塔、土師・須恵器技術の共存、古墳時代の須恵器 (54) → 土器の製作地別 (54~56) → 碑、甕 (56) → 三彩陶器 (57~58) → 押出仏、銅製品 (58) → 墨書きのある土器 (59) → 暗窓、針書文様の土器・漆付着・金属生産の開進・砥石 (60) → 鉄器類 (61) → 金属生産開進 (62) |  |
|--|--|

7. 遺構写真図版・遺物写真図版中の補注を多く記入するために遺構種名や写真標題の字数を最少限としたが、略称を多用するのは本意ではない。
8. 航空写真的うち写真図版1・2はアジア航測株式会社製の10インチネガである。写真図版8最下段は、東京電力株式会社の御好意により、送電線巡回のヘリコプターから撮影していただいた小間である。昭和40年代の後半は、まだ航空写真が一般的でなく、東京電力に依頼しての撮影もしばしば行われ、今日から思うと歴史的感がある。



2次調査全景と周辺地形の垂直 東接の谷地形が水田地帯となって延びる状況が見える 上→

写真図版 2



寺跡、区画と北東掘立柱建物跡群

1:800

前掲写真を拡大

上→



基壇 1 号全景 手前に多くの柱穴が見える 南→



基壇 1 号の試掘時点 基壇の東半部が写る 南→



基壇 1 号東半部 地業の東溝が写され、それと重複する溝 5(整)は中世という 南→



基壇 1 号柱穴 S1・栗石 栗石残存はこの個所だけ 東→



基壇 1 号柱穴 S 3 理土が基土に吹込む 南→



基壇 1 号地業の北東溝 基土が溝上に乗る 東→



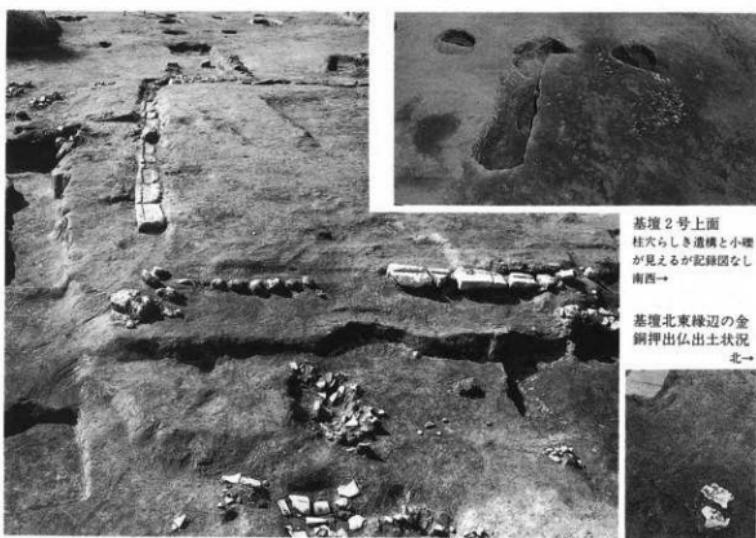
基壇 1 号地業の北西溝 基土が溝上に乗る 東→

写真図版 4



基壇 2号全景 左側が北で、移動していないように見える地覆石が写される

西→



基壇 2号南・東側地覆石列近景 南側は整然と並び、手前に瓦礫が見える

東→

基壇 2号上面  
柱穴らしき遺構と小甕  
が見えるが記録団なし  
南西→

基壇北東縁辺の金  
銅押出仏出土状況  
北→





基壇 2 号南辺下の状況 瓦の出土は異々と言った状況ではない。堆込み地盤は深いらしくローム層見えず 南→



基壇 2 号東辺下の状況 基壇端より遠くまで散在的ではあるが瓦片が見える 基壇上西→



基壇 2 号北辺下の切石 背側に切組あり、2 次感光 東→



基壇 3 号中央部 背後に北辺土塁が見える 南→



基壇 4(整)号 トレンチ左側に存在 北→



基壇 4(整)号 十字トレンチのあたりに存在 南→

写真図版 6



南柵列跡全景 手前に掘立1号が見える 西→



南柵列跡全景 中ほど（上寄り）に南門あり 東→



南柵列跡 列が蛇行して見えるのは重複建物のため 西→



南・西柵列跡との交点 掘立1号が交点上にある 南西→



南柵列と東柵列との交点 交点に建物跡はなく、東柵列は整然と北へ向って延びる 南東→



西柵列跡と溝跡 1号（西溝） 南→



同左 手前の白線の入った柱穴は掘立30(整) 北→



同上 右寄りに基壇 3号と北辺土塁が見える 南西→



北東隅築地跡と北溝（手前） 検出当初の状況 北→



北柵列と溝跡 2号（北溝） 北辺土塁が見える 北西→



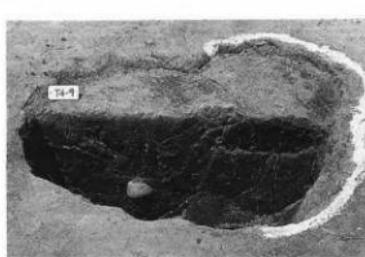
北辺土塁・北溝と西溝の交点 土塁端部が写る 西→



南東掘立柱建物跡群 G～Iの柱筋が並んで見え、左下はDの建替えが写る 北→

写真図版 8





写真図版10



掘立柱建物跡 M 2×3間で後方に柵列が写る 北→



掘立柱建物跡 1 西溝が柵列中央で立上る 西→



掘立柱建物跡 1 柵列柱穴と複雑に重複 北→



掘立柱建物跡 1 中央から上方が柵柱穴 西→



掘立柱建物跡 2 2×2間と推定されていた。奥側 西→



掘立柱建物跡 3 2×3間と推定されていた 北→



掘立柱建物跡 5 2×3間と推定されていた。手前側 南→



掘立柱建物跡 6・23 両建物は柱筋一致 南西→



掘立柱建物跡 6・23 方向性は北東隅築地(奥)近似 東→



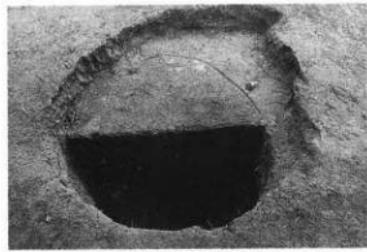
掘立柱建物跡 6 柱穴 N 3 右が新しく掘立 6 南→



掘立柱建物跡 6・23柱穴 住31南北断面にかかる 東→



掘立柱建物跡 7(左)・25(右) 南→



掘立柱建物跡 7 柱穴 S 2 深部は柱抜取痕か 南→



掘立柱建物跡 7 柱穴 N 1 土壤(右)の方が古い 東南→



掘立柱建物跡 8 手前が妻間の2間で、桁は3間 南→

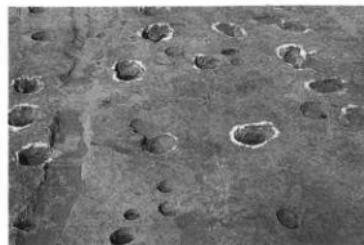


掘立柱建物跡 8 柱穴 N 妻 右寄(北寄)に柱痕 東→

写真図版12



掘立柱建物跡 9・26 両掘立は同規模建替え 南→



掘立柱建物跡 10・27 両掘立は同規模建替え 東→



掘立柱建物跡 11 2×3間で奥側は掘立12 南→



掘立柱建物跡 12 数少ない純柱建物 南→



掘立柱建物跡 14 概報IIでは1×3間 東→



掘立柱建物跡 15・17 両掘立は同規模建替え 南→



掘立柱建物跡 16 下方は溝2(北溝) 南→



掘立柱建物跡 19・20・21 撮影軸は東側に向く 北→



掘立柱建物跡22・28 両掘立は建替、住居は44号 南→



掘立柱建物跡29(整)号 写真では整って見える 北→



掘立柱建物跡30(整)号 白線が指定位置 北→



同左 30号は西櫛列と柱穴を共用しないと無理 北→



掘立柱建物跡31(整)号 N5トレンチ内 南→



掘立柱建物跡南門 新・旧の建替えがある 南→



南門の検出当初 新・旧の建替えがよく判る 南→



南門柱穴東中 版塀のような築土に見える 南→

写真図版14



住居跡 1号全景 遺物類少なく、小穴重複 南→



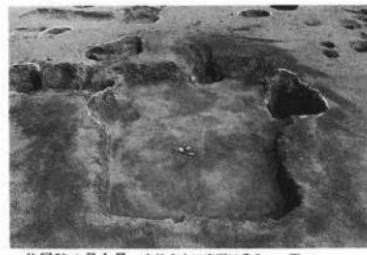
住居跡 1号遺跡 遷前に土師器甕が見える 西→



住居跡 2・3号全景 右側は獨立C号と上がA号 北→



住居跡 2・3号近景 遺物、写真左にわずか写る 西→



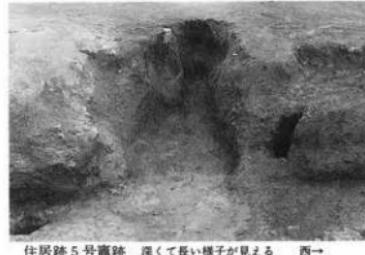
住居跡 4号全景 右柱穴上に床面は乗る 西→



住居跡 4号遺跡 土師器甕が埋えられている 南→



住居跡 5号 右半の遺物は5・6号の両方がある 西→



住居跡 5号遺跡 深くて長い様子が見える 西→



住居跡 5・6・8・9号遺物出土状況 南→



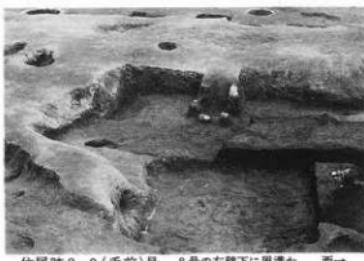
住居跡 5・6・8(左)・9(手前)号掘方 南→



住居跡 7号 上方は掘立 G・Hで軸方向は近似 西南→



住居跡 7号竈跡 右に寄って環類が見える 西→



住居跡 8・9(手前)号 8号の左壁下に周溝か 西→



住居跡 8号竈跡 竈前に環が見える 西→



住居跡 9号 左は5号などの凹み、掘方近し 北→



住居跡 9号竈跡 袖芯の瓦材と右端に貯藏穴か 西→

写真図版16



住居跡10号 わずかながら遺物が見える 北→



住居跡10号竈跡 竈用材が見え、記録に凝灰岩ある 北西→



住居跡11号 遺物類が見え、周溝写る 西→



住居跡11号竈 竈内出土の宇瓦、左が床面側 南→



住居跡12号 新・旧造り替えが見える 南→



住居跡12号竈跡と貯藏穴(下中央) 遺物が見える 南→



住居跡12(右)・22(中)・14(左)号 下南根大溝 南→



住居跡12(左上)・22(右上)・20(手前)号 西→



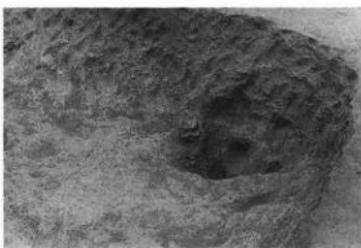
住居跡13号 周囲に小穴が写される 西→



住居跡13号竈跡 右端に貯蔵穴が見える 西→



住居跡14号 炉跡が検出された古墳時代の住居跡 西→



住居跡14号貯蔵穴 わずかながら遺物が見える 南西→



住居跡15号 周囲に小穴が写され、浮いた遺物多い 南西→



住居跡15号竈跡 土師器長甕が見える 南西→



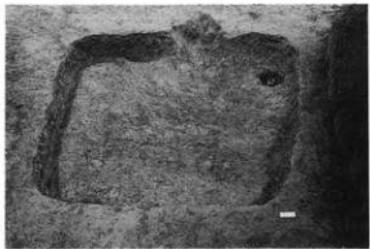
住居跡16号 この後、中央の土壤 8g が調査される 南→



住居跡16号竈跡(右側) 竈前に遺物あり 南→

写真図版18





住居跡20号 部分的に周溝が写され、貯藏穴が見える 西→



住居跡20号竪跡 竪内に环・甕、前方に甕見える 西→



住居跡21号 周溝が見え、周壁左側は土壤重複 南西→



住居跡22号 周溝が見え、前方に近い感あり 北→



住居跡22号竪跡 竪内に遺物小片多くあり 西→



住居跡24号 周溝と2つの窓が見え、中央は井戸6(整) 東→



住居跡24号 床面は掘方状態らしい 西→



住居跡24号 所見によると左側石材は住居堆土中 南西→

写真図版20



写真図版21



住居跡27・28号 28号が古い、27号が新しい 南→



住居跡27・28号竪 竖右側に2住居の貯藏穴見える 西→



住居跡29号 床面上に大石あり。周溝写る 南→



住居跡29号竪跡 奥側に掘立11の柱穴見える 西→



住居跡30号 周溝・中央土壤に掘立14の柱穴見える 西→



住居跡30号竪跡 右端は周壁隅となる 南→



住居跡31号 中央は井戸跡8とその石組 西→



住居跡32号 左側は北辺土塁と重なる 北西→

写真図版22



住居跡32号 土壘の下層を32号が切る 西→



住居跡32号 掘立柱穴と竈は重複し、竈が新か 南東→



住居跡33・47号 床下の掘込が見え、左は北辺土壘 西→



住居跡33号竈跡 竈前に多くの遺物が残される 西→



住居跡33・47号 土壘は33号に切れられ、写真に見える 東→



住居跡33号竈跡 抽に瓦材あり、右上は貯藏穴 北→



住居跡34号 床下の凹凸見え、掘方近しか 西→



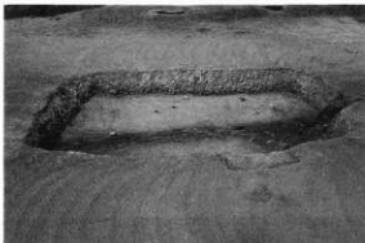
住居跡34号竈跡 壁面は急で、左側小さな中段 南→



住居跡35号 後世の土壤が切り、その埋土は黒い 南→



住居跡36号 浅い貯藏穴と周辺に遺物見える 西→



住居跡36号 細長く見え、この類は比較的古い 南→



住居跡36号 貯跡 左側に小さな中段あり 西→



住居跡37号 半分が低くなり、重複か 西→



住居跡37号 貯跡 左側の中段は掘り過ぎ見える 西→



住居跡38号 もう蓄方の状態か、遺物が浮く 西→



住居跡38号 貯跡 环が中央に置かれてある 西→

写真図版24



住居跡39号 新しい段階に方形気味の盤がある 西→



住居跡39号遺跡 右袖に塊が見える 西→



住居跡40号 右上は重複土壤 南→



住居跡40号遺跡 長い煙道が残されている 西→



住居跡40号 右端は煙道に該用か 南→



住居跡40号 填土中での一括資料の可能性大の一群 西→



住居跡41号 左側の小穴は西櫛列柱穴 南→



住居跡41号遺跡 石の支脚が残されて見える 南→



住居跡42号 金萬生産関連の住居跡でも竈あり 南→



住居跡42号 灶の位置は住居団と対照されたい 北→



住居跡42号 右上の床が高くなり、手前に炉あり 東→



住居跡43号 最大面積の住居跡で掘立と重複 南→



住居跡44号 挖込が深く残るのも特徴 南→



住居跡44号 竈跡 瓦材と貯藏穴が見える 西→



住居跡44号 竈跡 竈前の遺物と、瓦の使用目立つ 北→



住居跡48(整)号 平面形態は住居跡に似る 東→

写真図版26



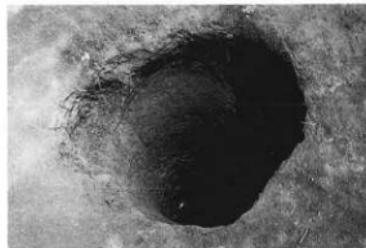
井戸跡 1(整) 漏水が写される 北西→



井戸跡 2(整) 石材が埋土中に見える 南→



井戸跡 6(整) 概報中に記述なく、住24と重複 東→



井戸跡 7 井筒部が直線的に写る 北西→



井戸跡 8 住居31と重複、石組は地表か 西→



井戸跡 8 井筒部は土層断面の最上位まであり 北西→



井戸跡 8 石組は整然としていない 北→



井戸跡 8 漏水が写されて見える 北→



溝跡2(北溝) 北縦列・北辺土壠に挟まれ並走 東→



溝跡3(南限大溝) 直線的な状態が写される 東→



溝跡3 横断面形はU字状を呈する 東→



溝跡3 西傾部で、土層に日軽石層らしき層見える 南→



溝跡3 道東トレンチ内の状態 南東→



溝跡4 北東溝基地間に接し、寄柱(手前)穴見え 北東→



溝跡6 掘立27と重複し、古代遺物多い 南→

写真図版28



土壤1(整・焼土壤) 底面に炭化材が見える 東→



土壤1 埋土上方より土器器环の出土 東→



土壤1 壁の最上部に不自然な小穴見える 西→



土壤2(整) 底面は平らと凹みがあり 東→



土壤2 砂質層はB軽石の堆積か 東→



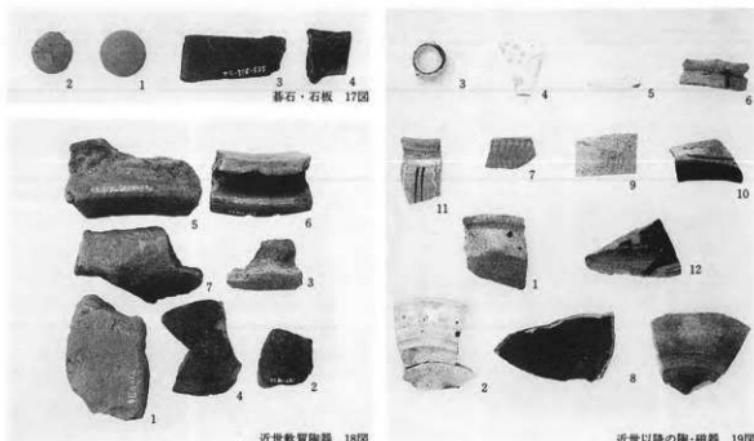
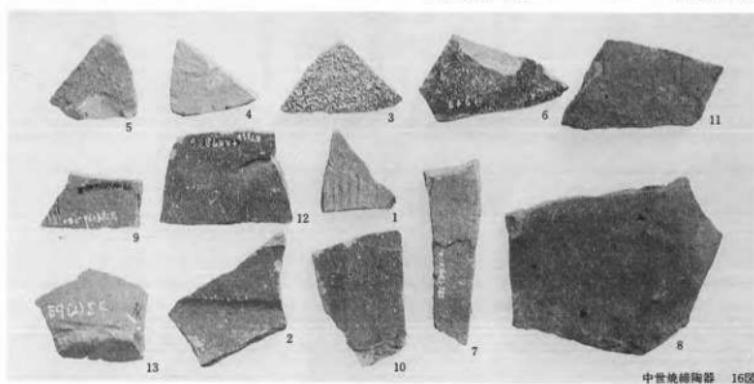
土壤3(整) 左上は切られた住16 北西→



土壤9(整) 地下式坑で板碑が見える 東→



土壤10(整) 突口が見える 西→

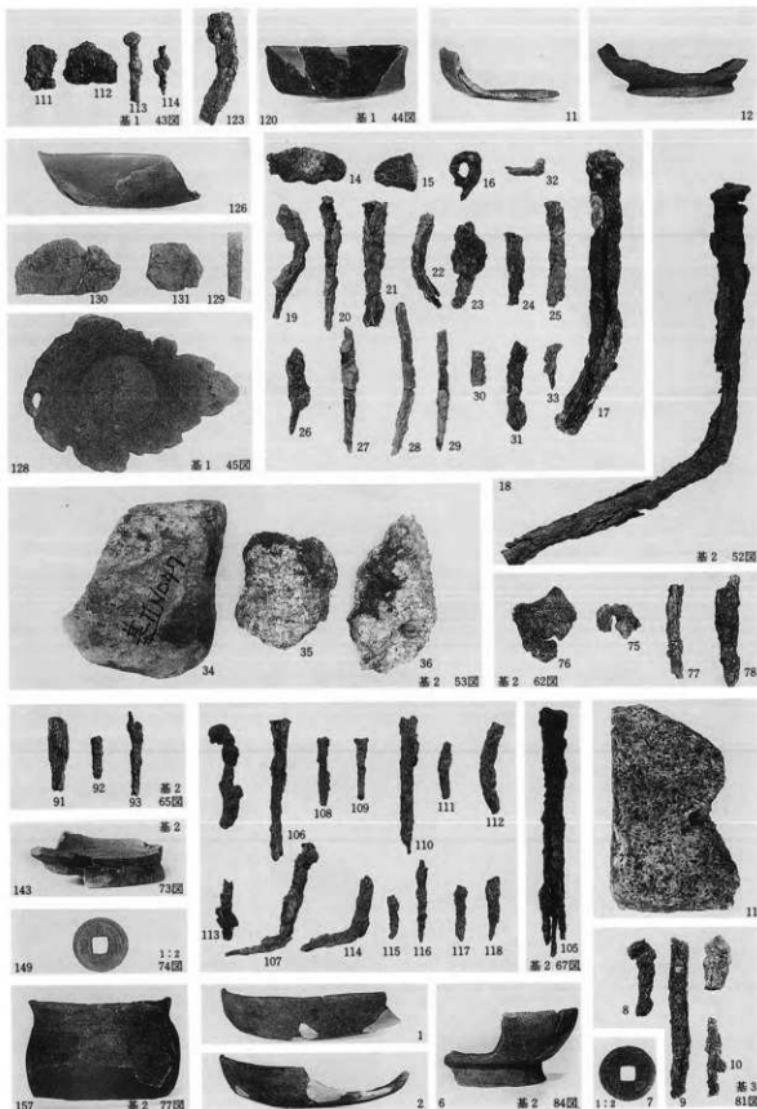


写真図版30



近代瓦類・基壇 1 号の遺物

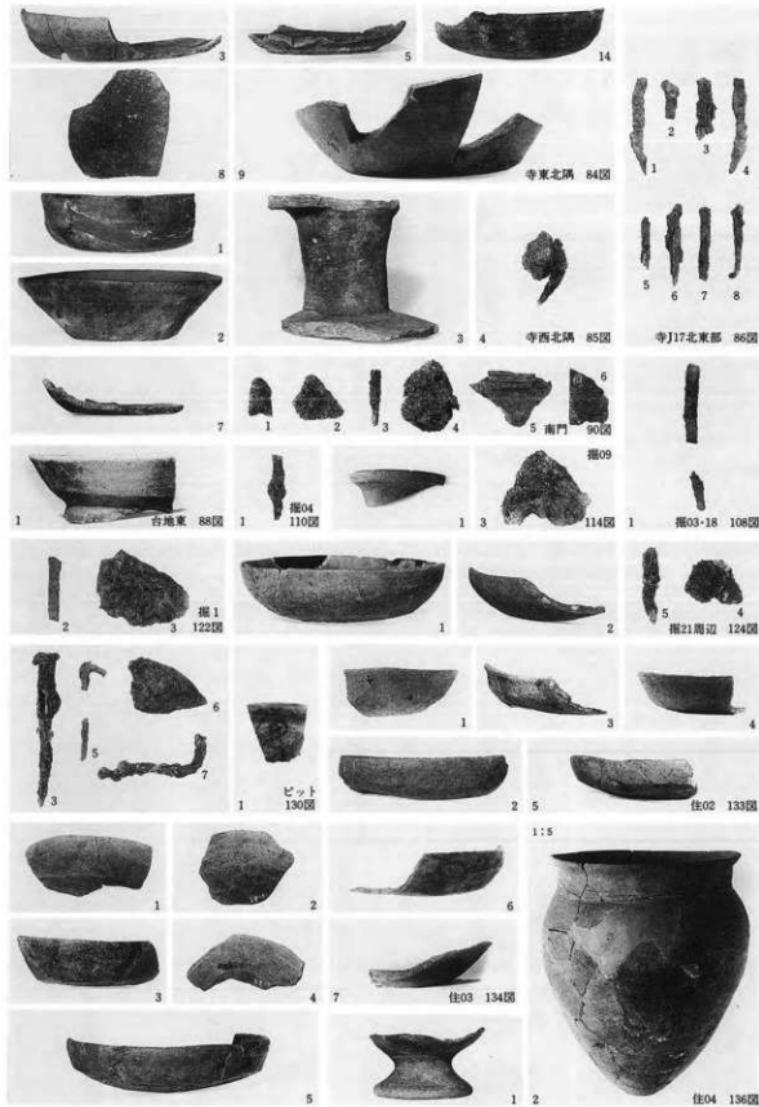
1 : 3



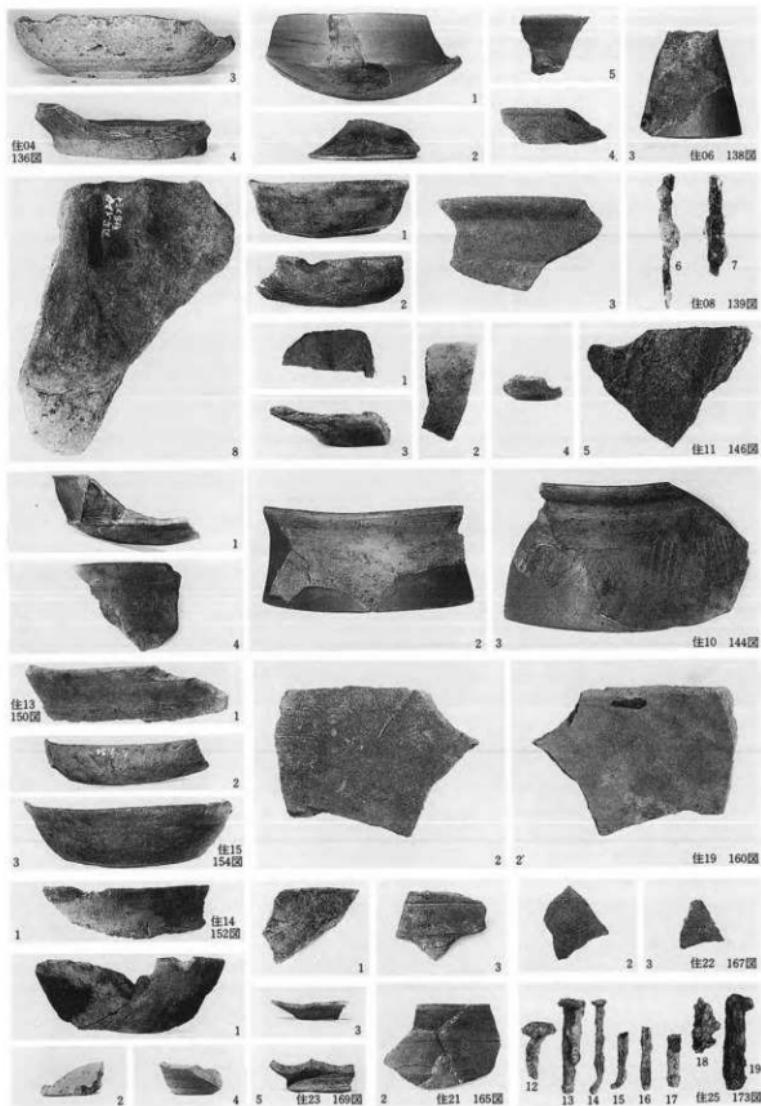
基壇 2・3 号の遺物

1 : 2・1 : 3 (縮率未記入)

写真図版32



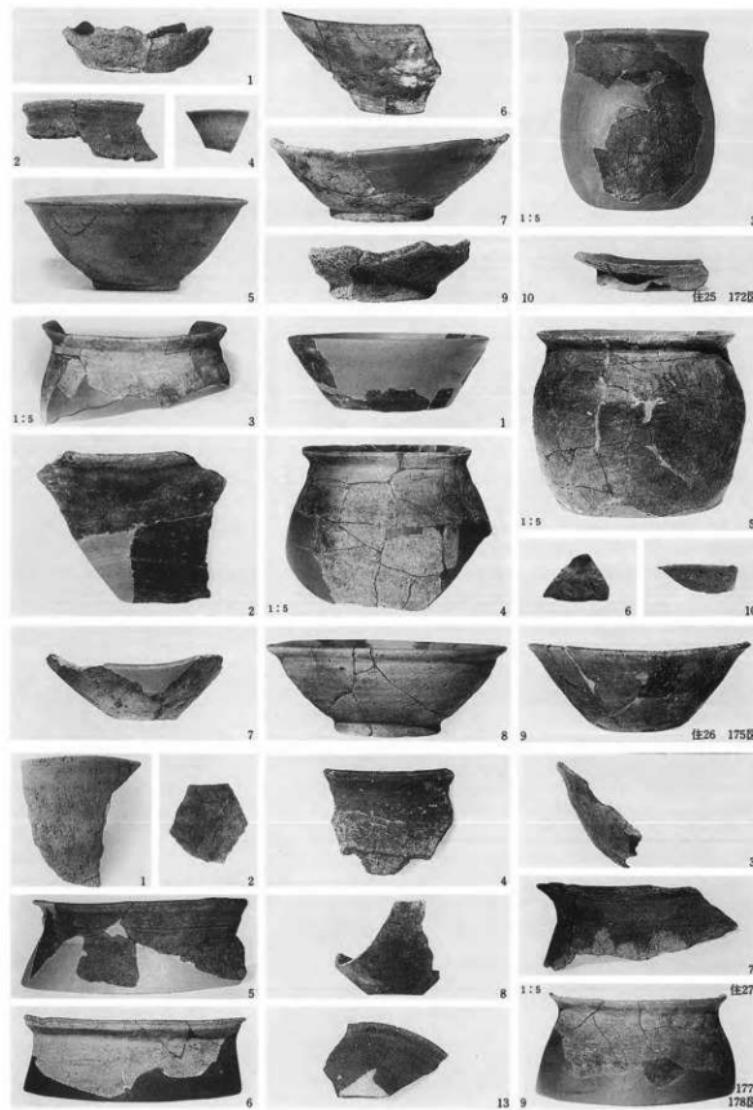
寺北東隅・西北隅、南門、掘立柱建物跡関連、住居跡(02~04号)の遺物 1:3(縮率未記入)・1:5



住居跡の遺物(06~25号)

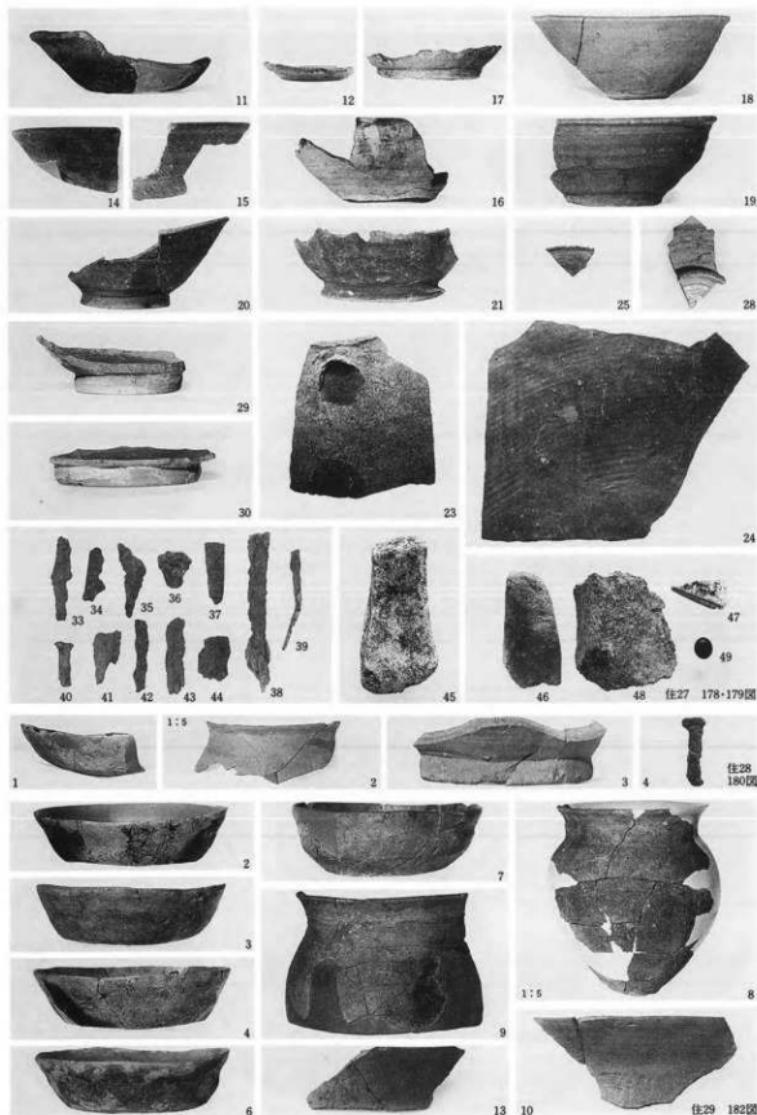
1 : 3 (縮率未記入)・1 : 5

写真図版34



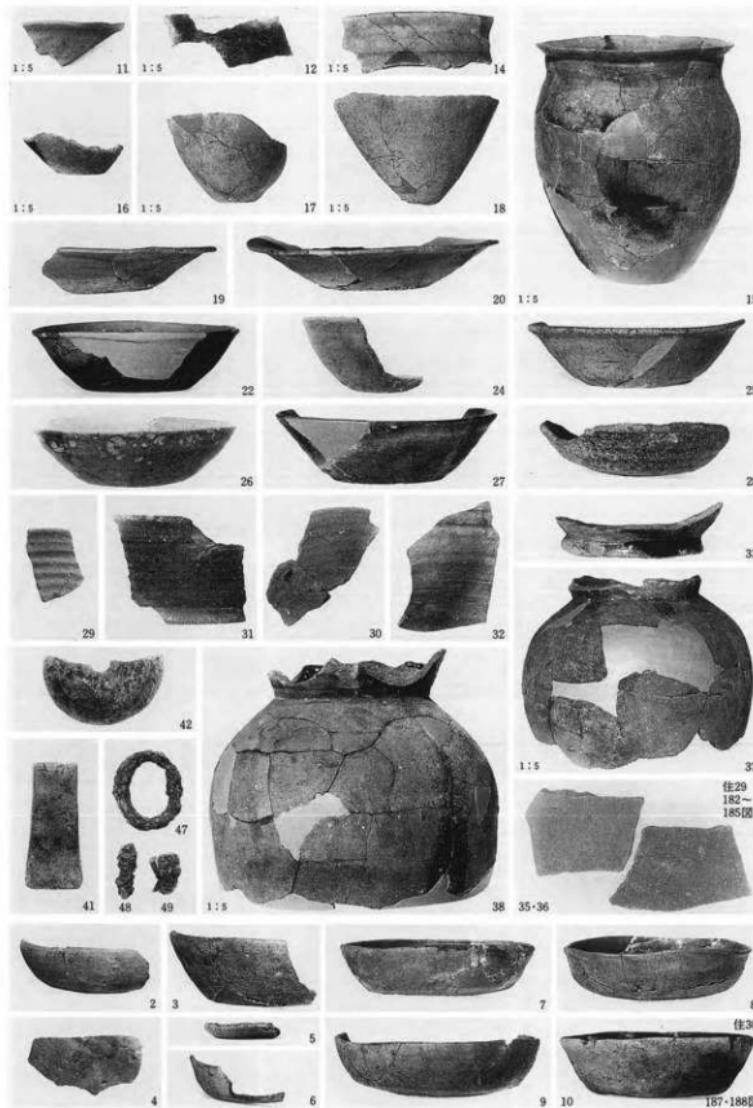
住居跡の遺物(25~27号)

1 : 3 (縮率未記入)・1 : 5

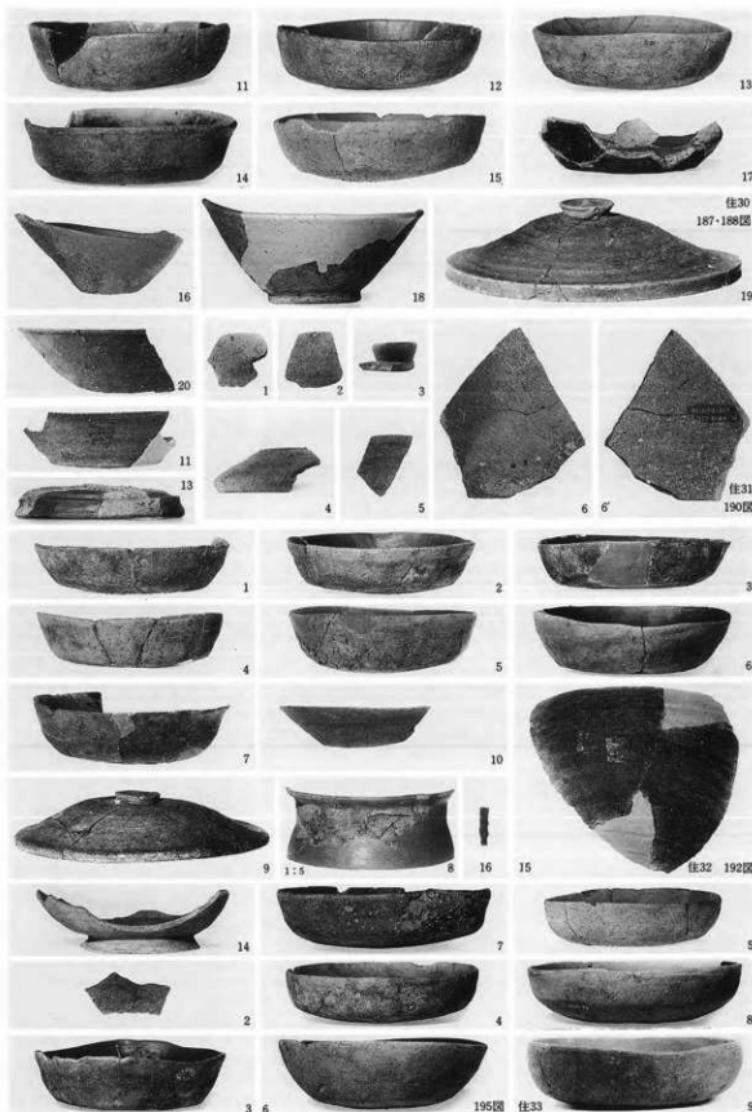


住居跡の遺物(27~29号) 1:3(縮率未記入)・1:5

写真図版36



住居跡の遺物(29・30号) 1:3(縮率未記入)・1:5



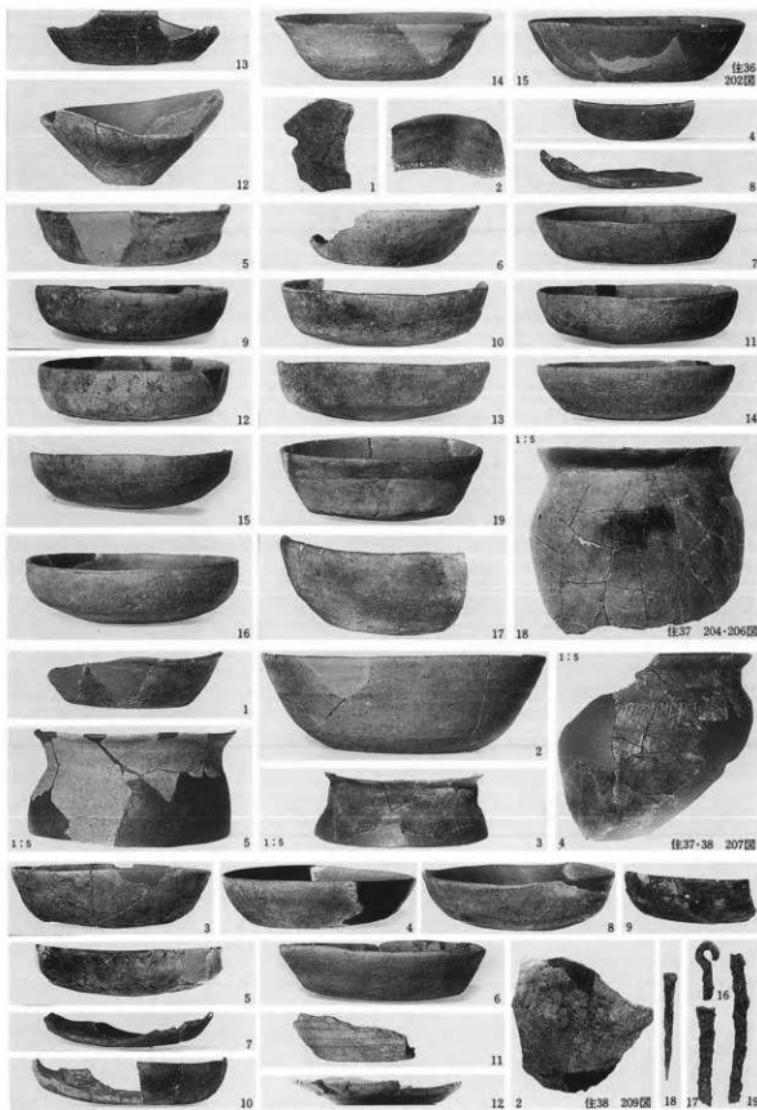
住居跡の遺物(30~33号)

1 : 3 (縮率未記入) · 1 : 5

写真図版38



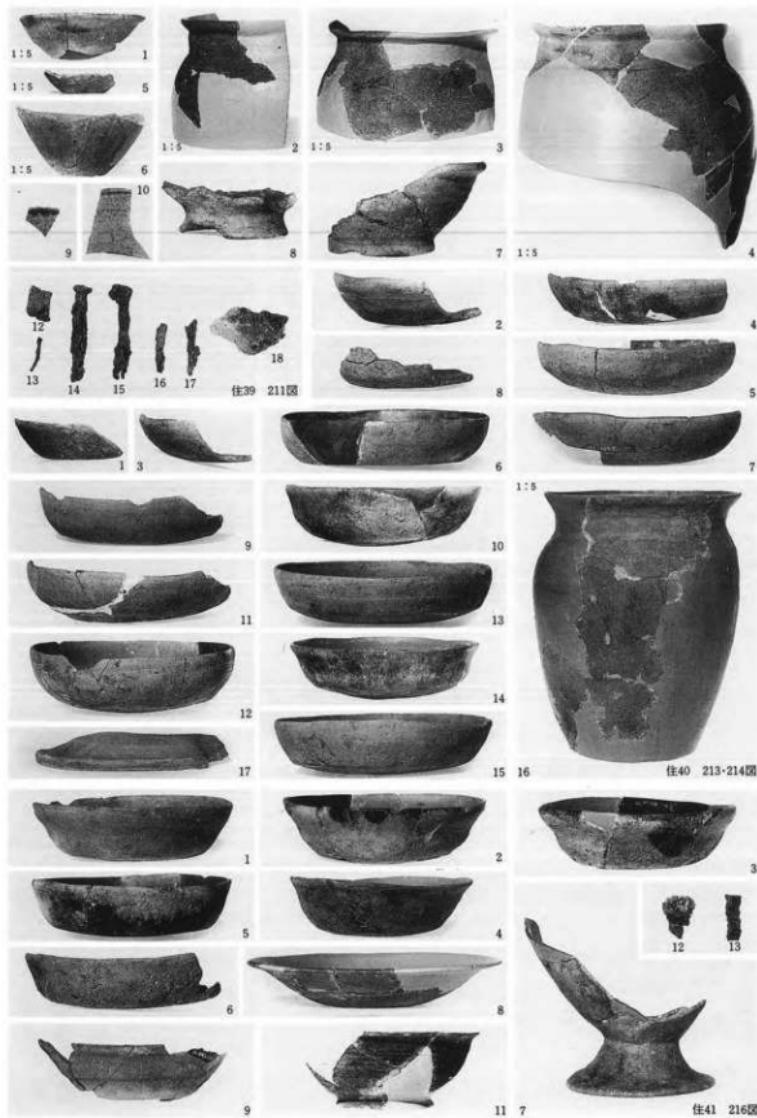
住居跡の遺物(33~36号) 1:3 (縮率未記入)・1:5



住居跡の遺物(36~38号)

1 : 3 (縮率未記入)・1 : 5

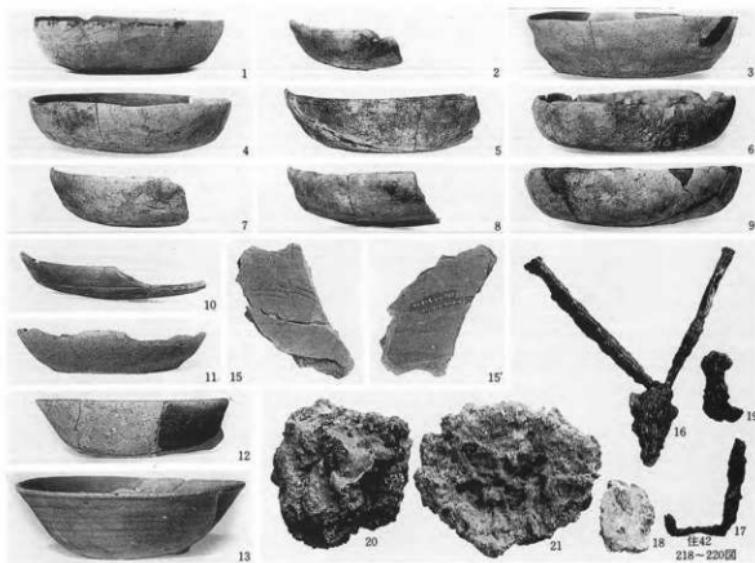
写真図版40



住居跡の遺物(39~40号)

1 : 3 (縮率未記入) · 1 : 5

写真図版41

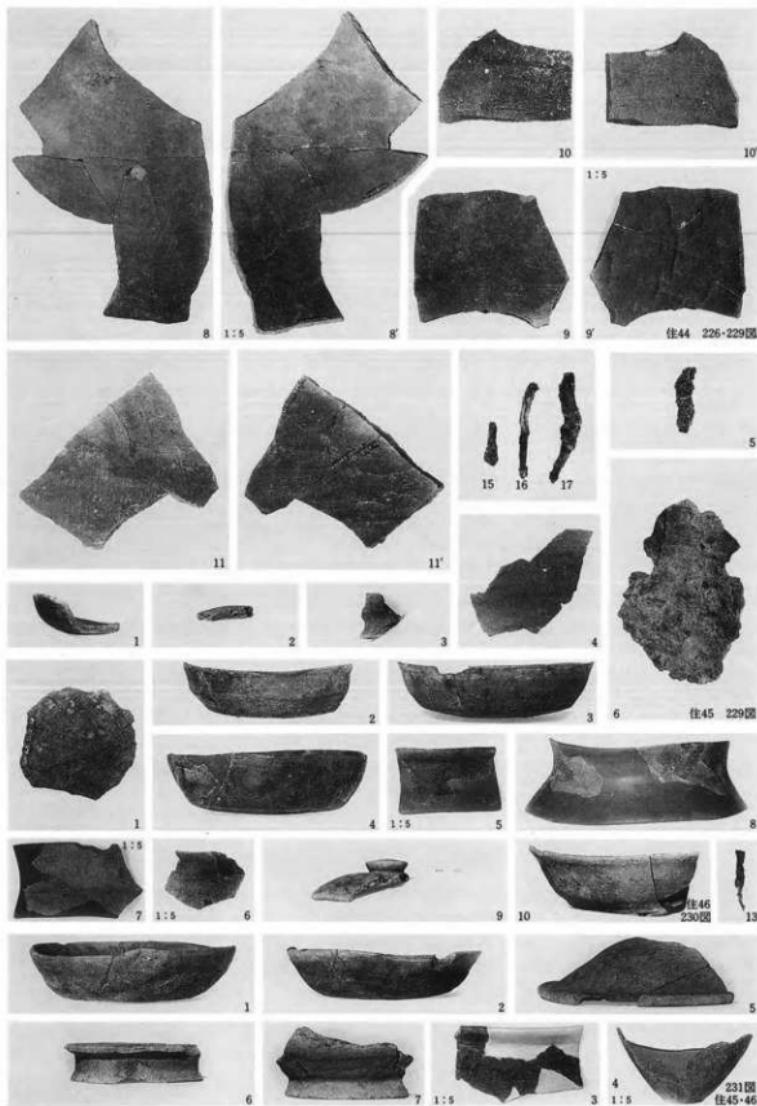


住居跡の遺物(42~44号) 1:3(縮率未記入)・1:5

住44  
226回

住43-223回

写真図版42



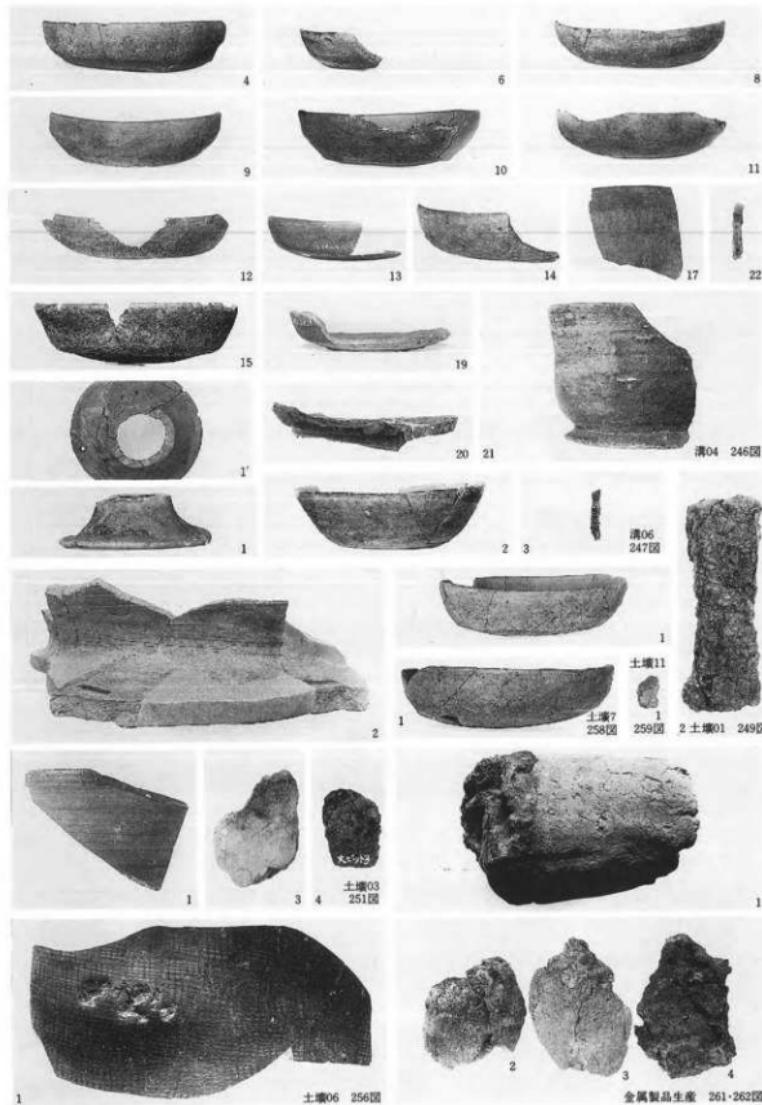
住居跡の遺物(44~46号) 1:3 (縮率未記入)・1:5

写真図版43



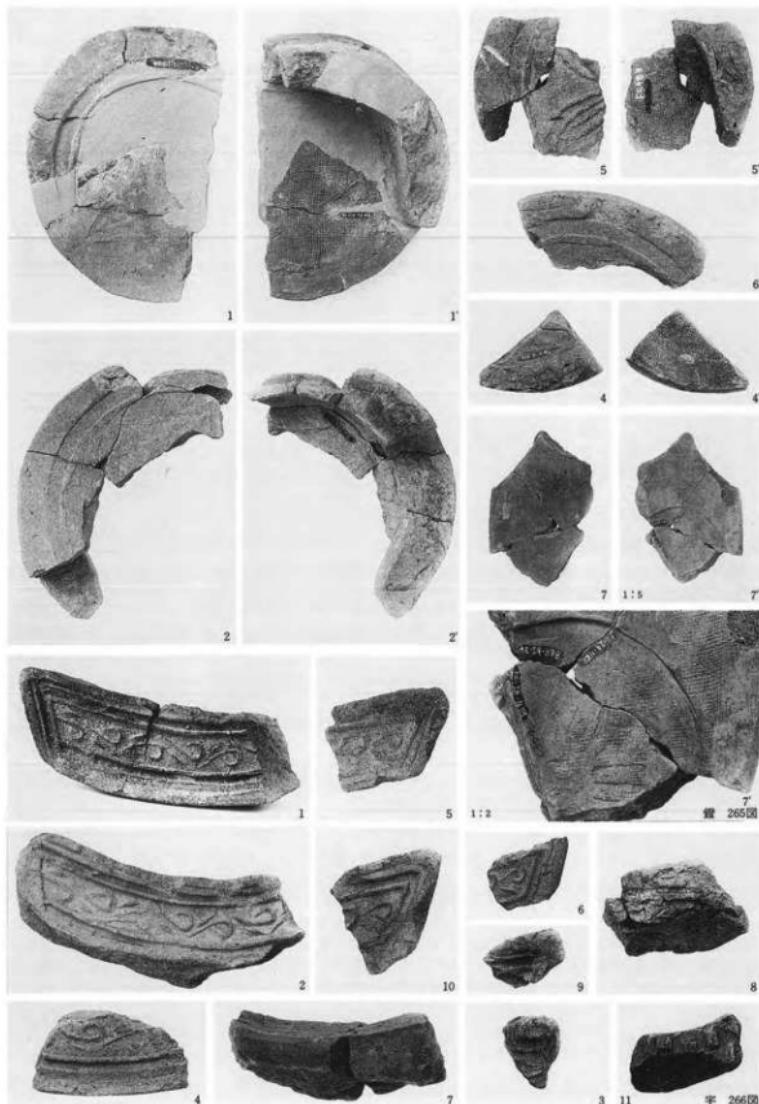
井戸、溝跡の遺物 1 : 3

写真図版44



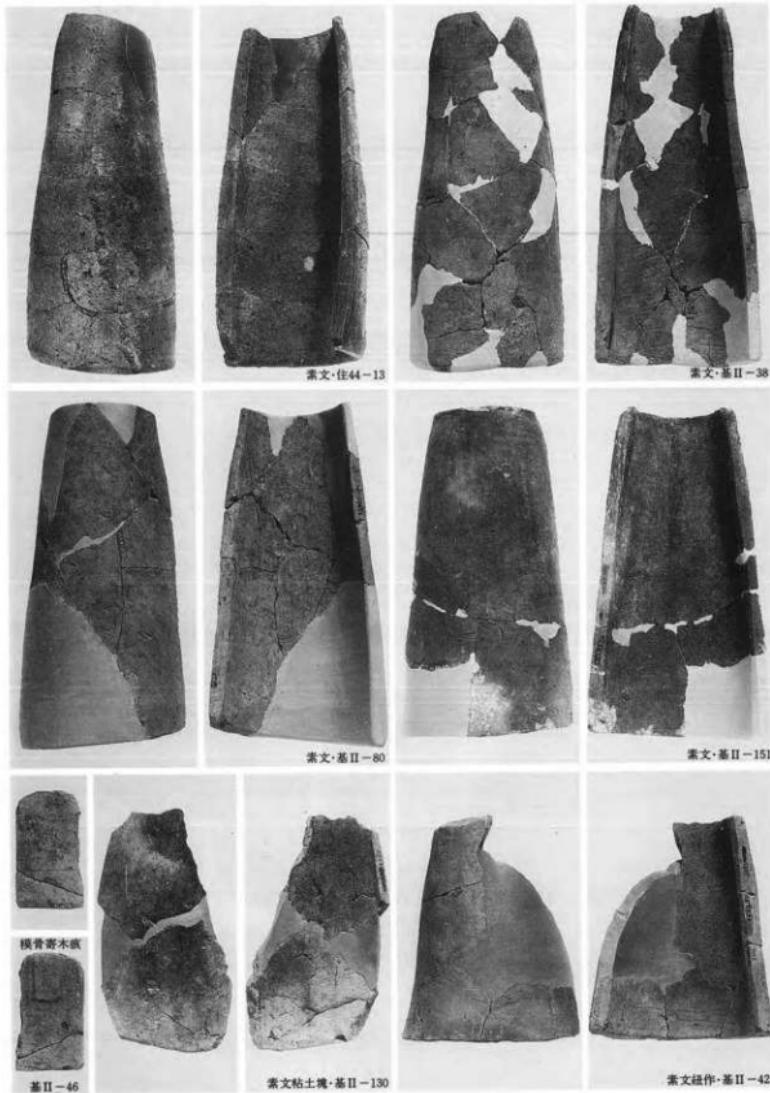
溝跡、土壤、金属製品生産関連の遺物

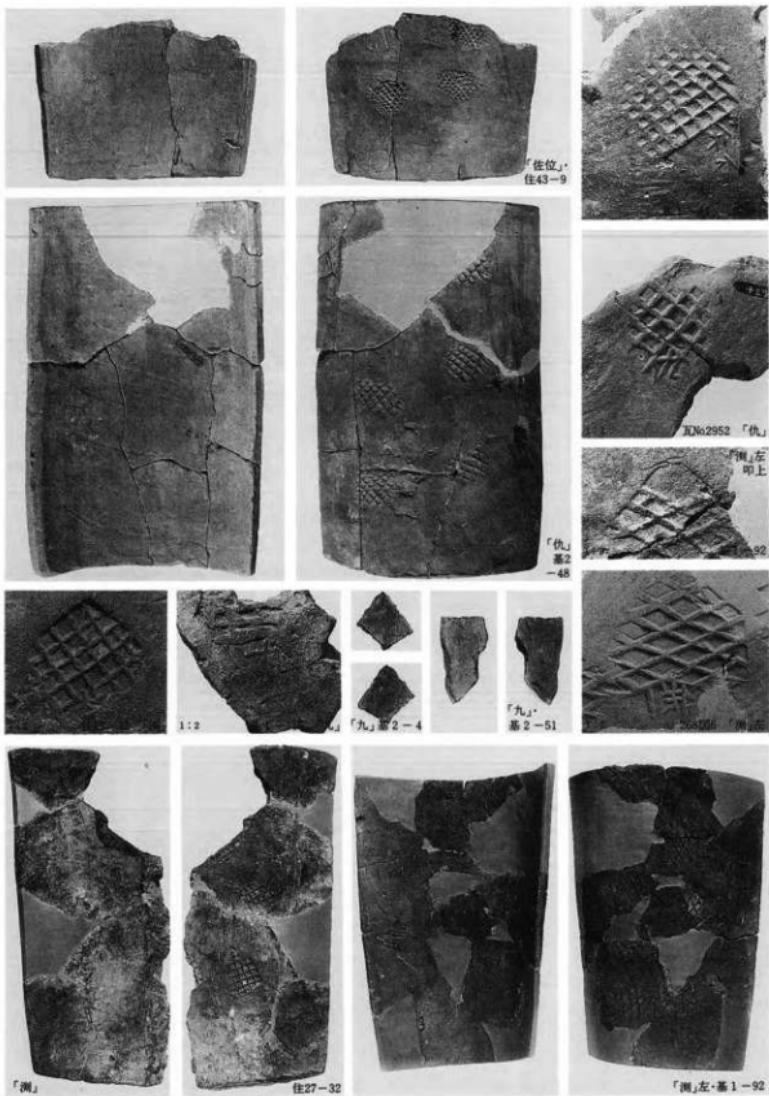
1 : 3



鏡・字瓦 1:2・1:3(縮率未記入)・1:5

写真図版46

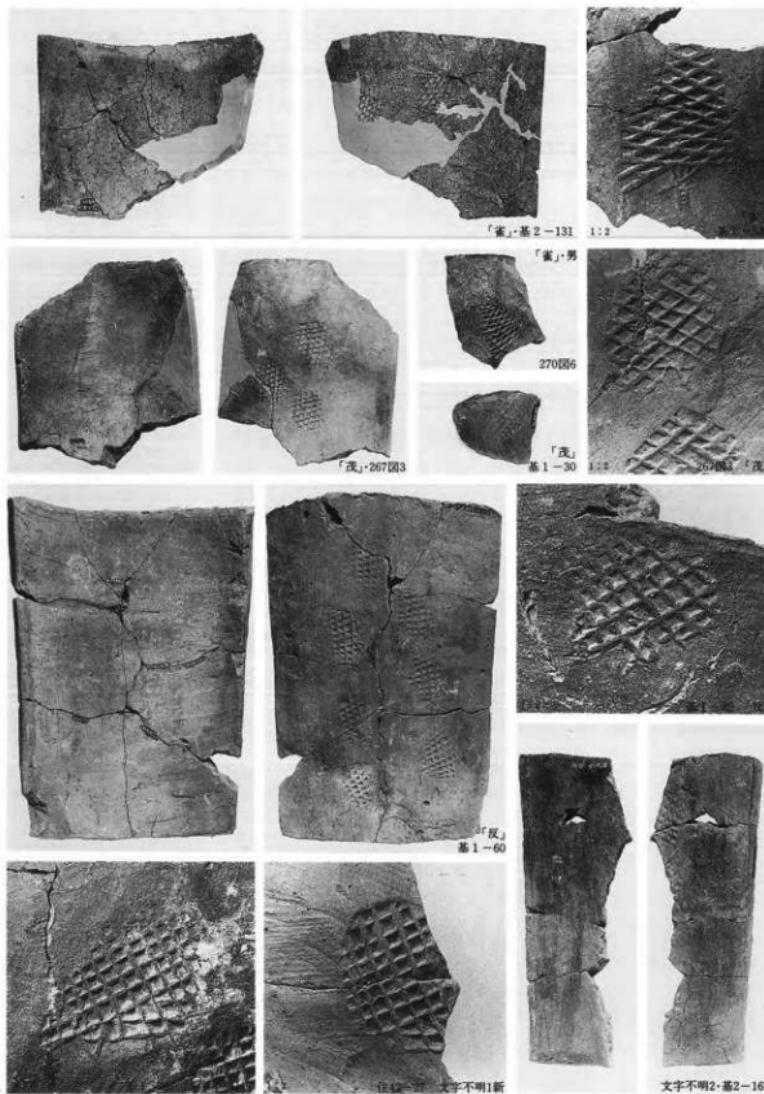




瓦類(女瓦格子叩類、「佐位」、「仇」、「九」、「测」、「测」左)

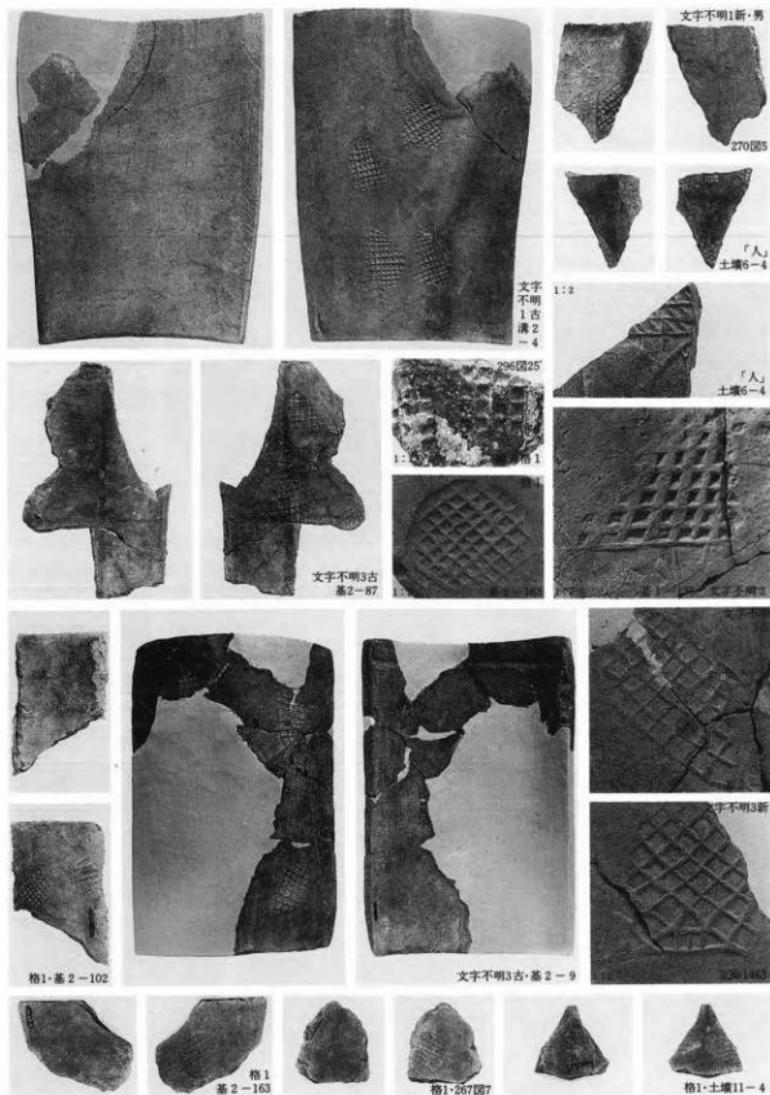
1 : 2 + 1 : 6 (縮率未記入)

写真図版48



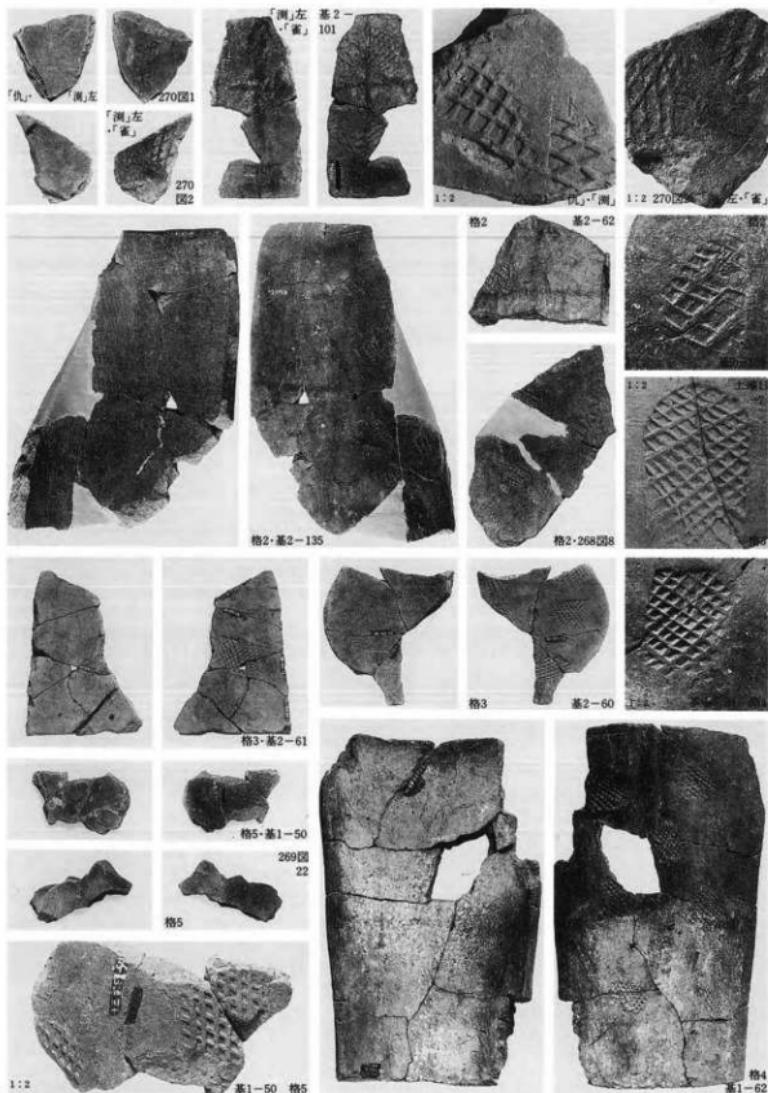
瓦類(女瓦格子叩類、「雀」、「茂」、「反」、文字不明1(古)・1'(新)) 1:2・1:6(縮率未記入)

写真図版49



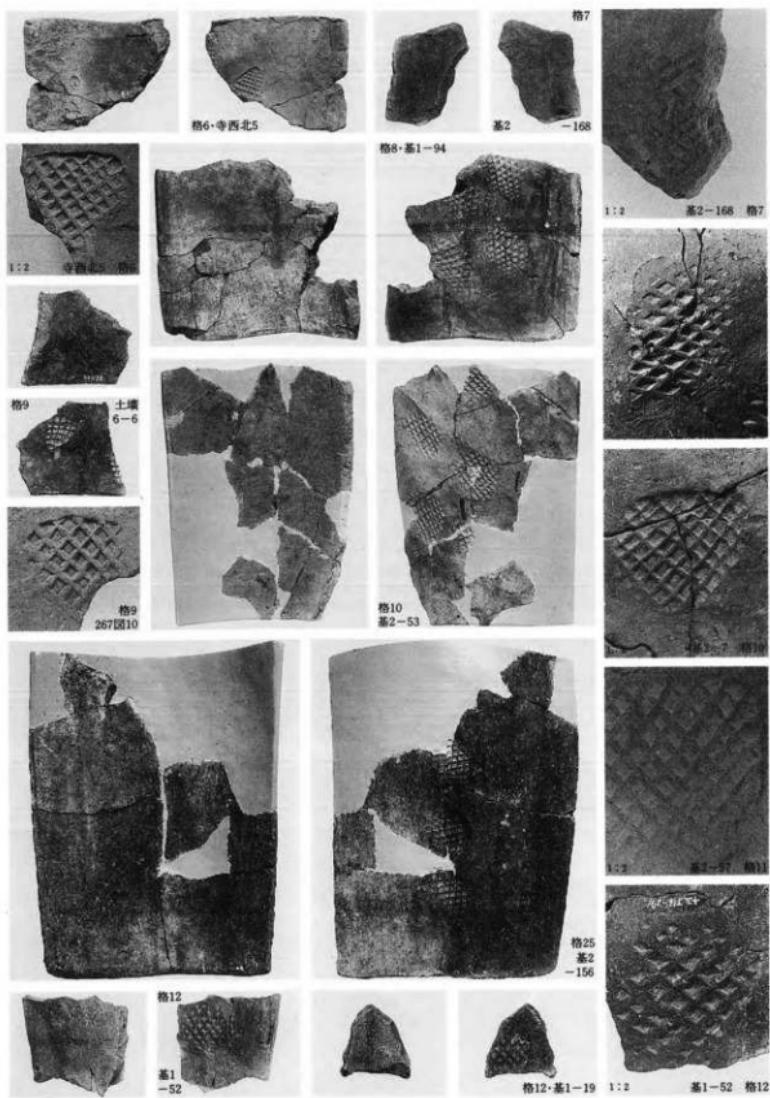
瓦類（男・女格子類、「人」、文字不明1・2・3型、格子1型） 1:2と1:6（縮率未記入）

写真図版50



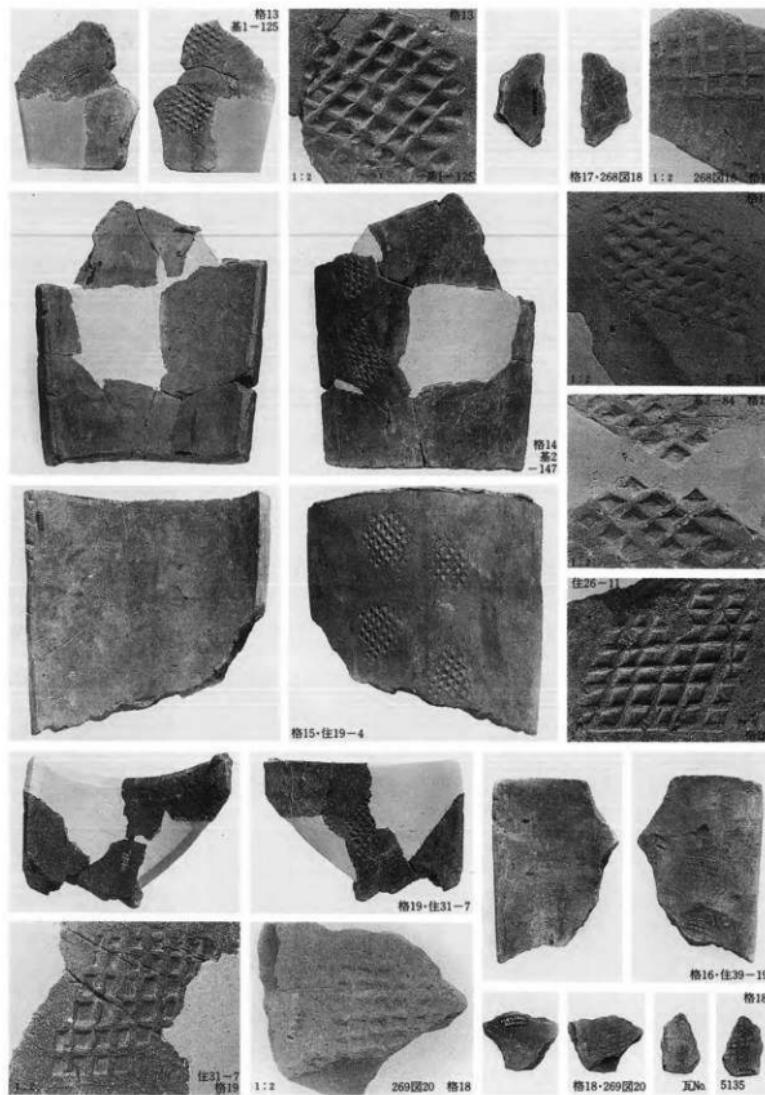
瓦類（女瓦格子印類、2種の格子印、格子印2～5型） 1:2・1:6（縮率未記入）

写真図版51

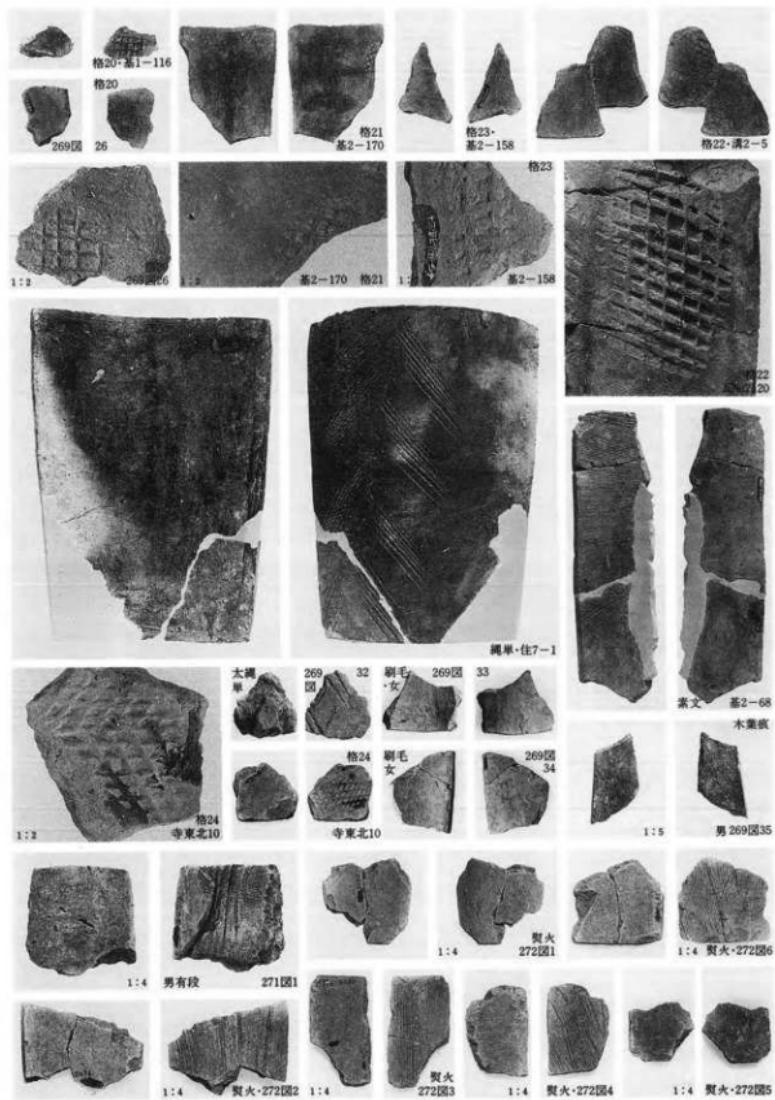


瓦類（女瓦格子叩類、格子叩6～12型） 1:2・1:6 (縮率未記入)

写真図版52



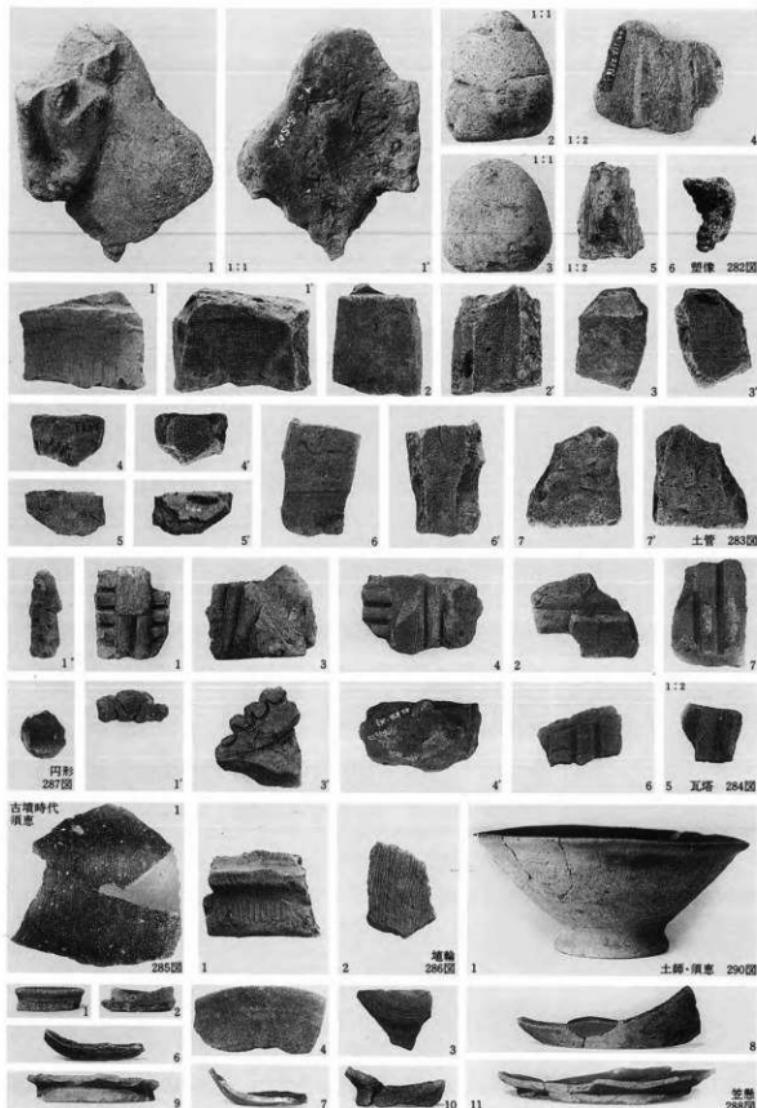
瓦類（女瓦格子印類、格子印13～19型） 1：2・1：6（縮率未記入）



瓦類（女瓦格子印類、格子印20~24型、男瓦有段、熨火瓦）

1:2・1:4・1:5・1:6(縮率未記入)

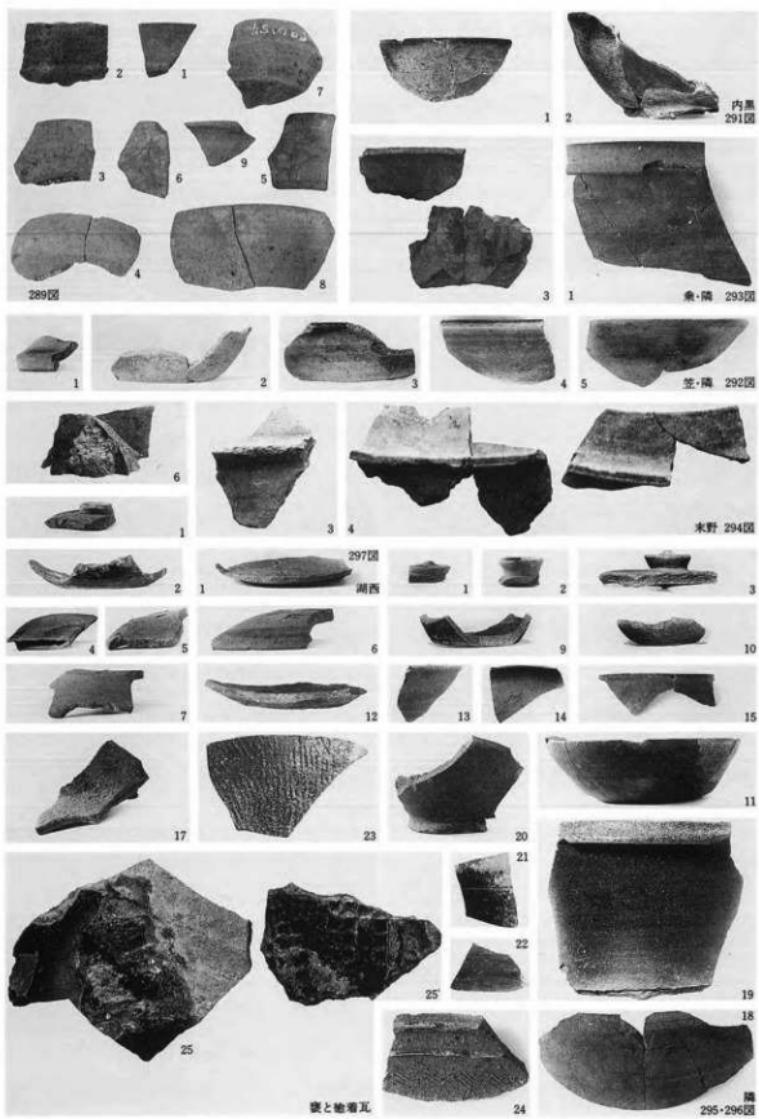
写真図版54



塑像、土管、瓦塔、土師・須恵器、古墳時代須恵器、土器の製作地別

1 : 1 · 1 : 2 · 1 : 3 (縮率未記入)

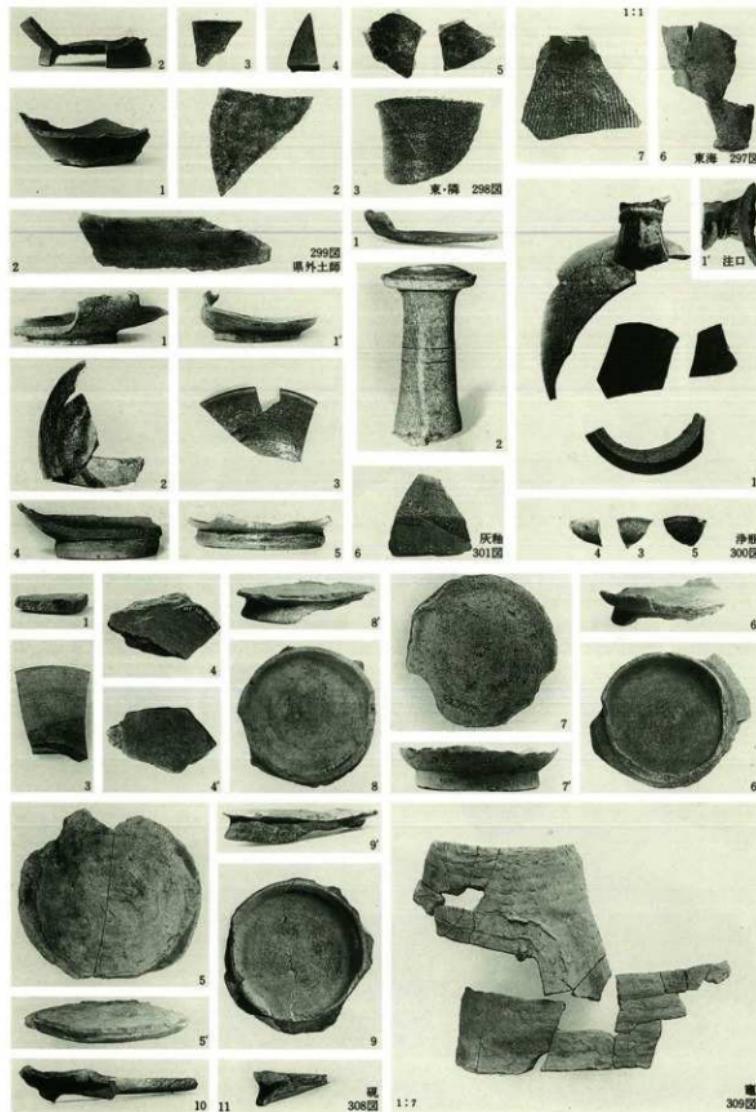
写真図版55



#### 内黒処理の土器、土器の製作地別

1 : 3

写真図版56



撒入須恵器・陶器、硯、甕

1:3 - 1:7 (縮率未記入)



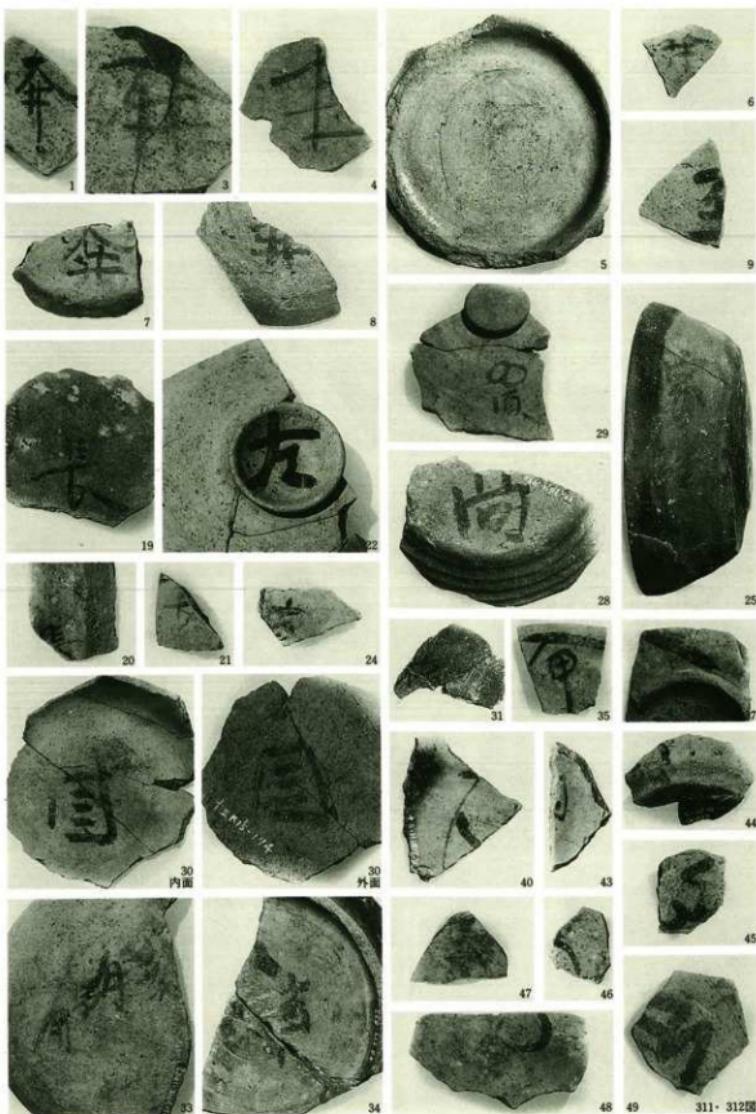
三彩陶器 1 : 3 (上 2段目まで県立歴史博物館常設展示列陳遺物)

写真図版58



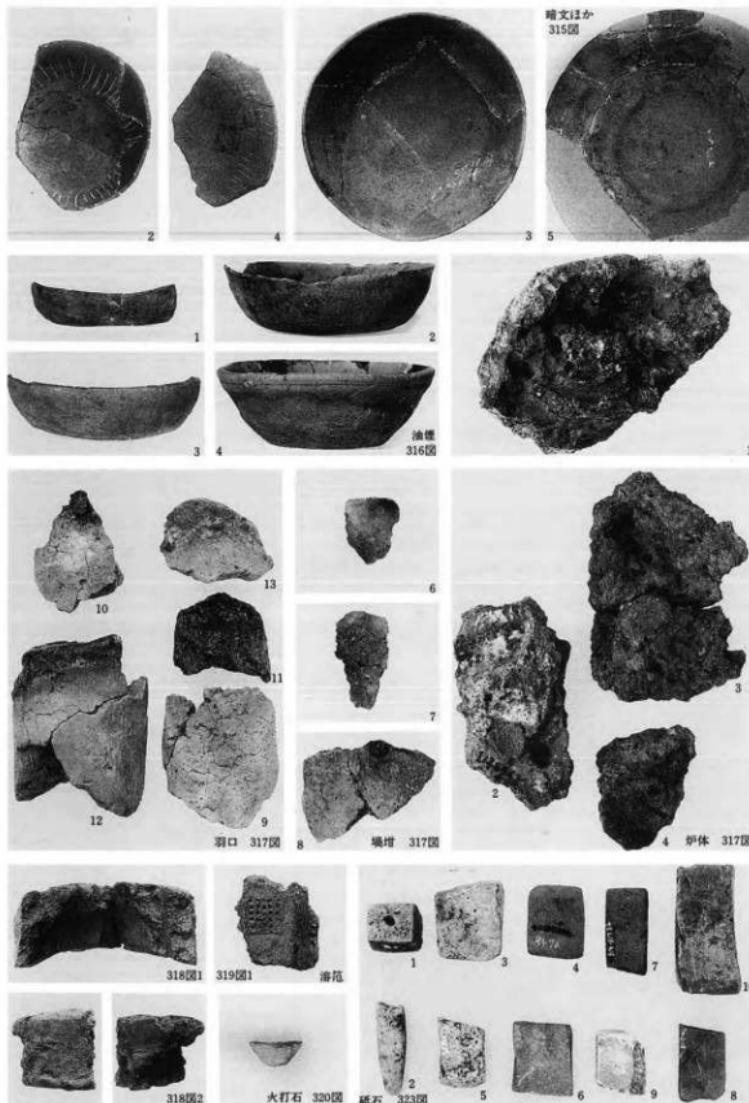
三彩陶器、銅・鉄製品、塑像、甕

1:1・1:2・1:3・1:8・×2



墨書のある土器 1 : 3 (コニカ赤外 750nm)

写真図版60



土器暗文ほか、漆付着・油煙付着土器、金属製品生産関連、火打石、砾石



鉄器類 1 : 2 ~ 1 : 3 (縮率未記入)

写真 図版62



金属製品生産関連 1 : 1

(史跡)  
**十三宝塚遺跡**

—群馬県埋蔵文化財調査事業団  
調査報告書第134集—

平成4年3月25日 印刷  
平成4年3月27日 発行

編集・発行／群馬県教育委員会